山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第137集

山梨県中巨摩郡八田村

大塚遺跡

－八田御勅使南地区拠点工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1997.3

山梨県教育委員会

山梨県土地開発公社

山梨県中巨摩郡八田村

大塚遺跡

－八田御勅使南地区拠点工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1997.3

山梨県教育委員会

山梨県土地開発公社

序

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成７年度（1995）に調査を行なった、大塚遺跡の発掘報告書であります。この調査は山梨県土地開発公社が実施する、八田御勅使南地区拠点工業団地造成事業に先立つものでありまして、対象面積18,800㎡におよぶ広範な地域が発掘されました。本遺跡は御勅使川に接しており、御勅使川扇状地の中心部として従来遺跡の所在の薄い地域ということになっておりました。ところが調査の結果、古墳時代前期の住居6軒、奈良時代から平安時代の住居33軒などが発見され、古くから集落が形成されていたことが分かり、また江戸時代の水田も一部ながら検出でき、扇状地上での水田耕作も確認できました。

このような成果はこれまでの遺跡の立地を考え直す必要をもたらすとともに、御勅使川を中心とした水利の実態も考慮する必要もでてきました。特に御勅使川については現在は遺跡の北側を流れていますが、旧来は遺跡の700mほど南側を走っていたものであり、この流路と本遺跡の関係も興味深いものであります。またこの地域は古代の余郷ないし大井郷、中世の八田御牧などに比定されるところであります。これらの歴史上の問題を考える上で、本遺跡の調査は重要な資料を提供したことにもなります。今後の周辺地域の調査研究に期待したいと思います。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に従事された方々にお礼を申し上げる次第であります。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

例　言

1 本書は、八田御勅使南地区拠点工業団地造成事業に伴い発掘の行なわれた、山梨県中巨摩郡八田村野牛島字大塚に所在する大塚遺跡の調査報告書である。

2 調査は、山梨県教育委員会が山梨県土地開発公社より依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。調査期間は、1995年（平成7）6月1日から同年12月25日までである。

3 本書の執筆・編集は新津　健が行なった。

4 遺物の実測、トレース、および図面仕上げについては石原由美子、斉藤律子、清水真弓の諸氏の協力を得た。

5 鉄滓の分析については川鉄テクノリサーチ株式会社に委託した。

6 本報告書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　例

1 遺構・遺物図面の縮尺は次のとおりである。

発掘区域図 1/2500、全体図 1/600、住居址・柱穴列 1/60、土坑 1/40、溝・水田跡 1/200、出土遺物　土器類 1/4、拓本 1/2、鉄製品 1/3

2 遺構断面中のレベルポイント部分にある数字は標高を表わす。

3 遺構平面図の小穴中の数字は深さを表わす。

4 土器実測図中、須恵器は断面を黒く塗ってある。

目　次

序
例言

第１章　調査の経緯と概要 ---------- 1
　第１節　調査に至る経緯 ---------- 1
　第２節　発掘調査の概要 ---------- 1
　第３節　調査組織 ---------- 3

第２章　地理的環境 ---------- 4
　第１節　遺跡の立地 ---------- 4
　第２節　周辺の遺跡 ---------- 6

第３章　発見された遺構と遺物 ---------- 8
　第１節　Ａ地区の調査 ---------- 8
　（１）住居址　１号～15号 ---------- 8
　（２）柱穴列　１号～３号 ---------- 37
　（３）土坑　１号 ---------- 38
　（４）溝　１号～９号 ---------- 39
　（５）水田址　３面 ---------- 44
　第２節　Ｂ地区の調査 ---------- 46
　（１）住居址　１号～23号 ---------- 46
　（２）土坑　１号～４号 ---------- 77
　（３）溝　１号～12号 ---------- 78
　（４）縄文土器 ---------- 83

第４章　遺物・遺構の検討 ---------- 85
　第１節　古墳時代 ---------- 85
　（１）土器の構成 ---------- 85
　（２）集落の構成 ---------- 93
　第２節　奈良・平安時代 ---------- 96
　（１）土器の編年的位置付け ---------- 96
　（２）住居と集落 ---------- 101
　（３）住居群と水路 ---------- 103
　（４）区画溝について ---------- 104
　（５）Ａ区１号住居址出土の鉄滓について ---------- 106
　第３節　大塚遺跡周辺の旧地形 ---------- 110

挿図目次

第1図　発掘区域図(1/2500)
第2図　遺跡の位置(1/25,000)
第3図　A区1号・2号住居址実測図(1/60)
第4図　A区1号住居址カマド(1/40)
第5図　A区1号・2号住居址出土土器(1/4)
第6図　A区3号住居址実測図(1/60)
第7図　A区3号住居址出土土器(1/4)
第8図　A区3号住居址出土石器(1/4)
第9図　A区3号住居址上層出土土器(1/4)
第10図　A区4号住居址実測図(1/60)
第11図　A区4号住居址出土土器①(1/4)
第12図　A区4号住居址出土土器②(1/4)
第13図　A区4号住居址出土土器③(1/4)
第14図　A区5号住居址実測図(1/60)
第15図　A区5号住居址出土土器(1/4)
第16図　A区6号住居址実測図(1/60)
第17図　A区6号住居址出土土器(1/4)
第18図　A区7号住居址実測図(1/60)
第19図　A区7号住居址カマド(1/40)
第20図　A区8号住居址実測図(1/60)
第21図　A区8号住居址出土土器(1/4)
第22図　A区8号住居址上層出土土器(1/4)
第23図　A区9号住居址実測図(1/60)
第24図　A区9号住居址出土土器①(1/4)
第25図　A区9号住居址出土土器②(1/4)
第26図　A区9号住居址出土土器③(1/4)
第27図　A区10号住居址実測図(1/60)
第28図　A区10号住居址カマド(1/40)
第29図　A区11号住居址実測図(1/60)
第30図　A区11号住居址出土土器(1/4)
第31図　A区12号住居址実測図(1/60)
第32図　A区12号住居址カマド(1/40)
第33図　A区12号住居址出土土器(1/4)
第34図　A区13号住居址実測図(1/60)
第35図　A区14号住居址実測図(1/60)
第36図　A区15号住居址実測図(1/60)
第37図　A区1号柱列・1号溝(1/60)
第38図　A区2号柱列(1/60)
第39図　A区3号柱列(1/60)
第40図　A区1号土坑(1/40)
第41図　A区1号土坑・4号溝他出土土器(1/4)
第42図　A区2号・4号・7号溝実測図(1/200)
第43図　A区3号・5号・6号溝実測図(1/200)
第44図　A区8号・9号溝実測図(1/60)
第45図　A区水田址実測図(1/200・1/100)
第46図　A区・B区出土古銭(1/1)
第47図　A区・B区近世遺物(1/3)
第48図　B区1号住居址実測図(1/60)
第49図　B区1号・2号・4号・5号住居址出土土器(1/4)
第50図　B区2号住居址実測図(1/60)
第51図　B区3号住居址実測図(1/60)
第52図　B区4号住居址実測図(1/60)
第53図　B区5号住居址実測図(1/60)
第54図　B区6号住居址実測図(1/60)
第55図　B区6号住居址カマド(1/40)
第56図　B区6号住居址出土土器(1/4)
第57図　B区7号住居址実測図(1/60)
第58図　B区7号住居址カマド(1/40)
第59図　B区7号住居址出土土器(1/4)
第60図　B区8号住居址実測図(1/60)
第61図　B区8号住居址出土土器(1/4)
第62図　B区9号住居址実測図(1/60)
第63図　B区9号住居址カマド(1/40)
第64図　B区9号住居址出土土器(1/4)
第65図　B区10号住居址実測図(1/60)
第66図　B区11号住居址実測図(1/60)
第67図　B区11号住居址カマド(1/40)
第68図　B区11号住居址出土遺物(1/4)
第69図　B区12号住居址実測図(1/60)
第70図　B区12号住居址出土土器(1/4)
第71図　B区13号住居址実測図(1/60)
第72図　B区13号住居址カマド(1/40)

第73図　B区13号住居址出土遺物(1/4)
第74図　B区14(A・B)住居址実測図(1/60)
第75図　B区14号住居址カマド(1/40)
第76図　B区14号住居址出土土器(1/4)
第77図　B区15号住居址実測図(1/60)
第78図　B区15号住居址カマド(1/40)
第79図　B区15号住居址出土土器(1/4)
第80図　B区16号住居址実測図(1/60)
第81図　B区16号住居址カマド(1/40)
第82図　B区16号住居址出土土器(1/4)
第83図　B区17号住居址実測図(1/60)
第84図　B区17号住居址カマド(1/40)
第85図　B区17号住居址出土土器(1/4)
第86図　B区18号住居址実測図(1/60)
第87図　B区18号住居址出土土器(1/4)
第88図　B区19号住居址実測図(1/60)
第89図　B区19号住居址カマド(1/40)
第90図　B区19号住居址出土土器(1/4)
第91図　B区20号住居址実測図(1/60)
第92図　B区20号住居址カマド(1/40)
第93図　B区20号住居址出土土器(1/4)
第94図　B区21号住居址実測図(1/60)
第95図　B区21号住居址カマド(1/40)
第96図　B区21号住居址出土土器(1/4)
第97図　B区22号住居址実測図(1/60)
第98図　B区22号住居址カマド(1/40)
第99図　B区22号住居址出土遺物(1/4)
第100図　B区23号住居址実測図(1/60)
第101図　B区23号住居址カマド(1/40)
第102図　B区23号住居址出土土器(1/4)
第103図　B区1号・2号・3号土坑(1/40)
第104図　B区6号・7号・12号溝(1/200・1/50) 折り込み
第105図　B区溝・土坑他出土遺物(1/4)
第106図　A区・B区鉄製品、鉄滓実測図(1/3)
第107図　B区縄文晩期土器出土状況(1/20)
第108図　B区縄文晩期土器実測図(1/4)
第109図　B区縄文晩期土器拓本・石器実測図(1/2)
第110図　A区4号住居址土器出土位置図(1/60)
第111図　A区9号住居址土器出土位置図(1/60)
第112図　A区3号住居址土器出土位置図(1/60)
第113図　古墳時代土器分類図(1/8)
第114図　古墳時代の住居群(1/1000)
第115図　奈良・平安時代の集落(1/1600)
第116図　大塚遺跡周辺の旧地形(1／約12,000)
付図1　遺構配置図(1/600)
付図2　B区溝実測図(1/200・1/50)
付図3　奈良.平安時代土器の分類(1/8)

表目次

表1　古墳時代前期土器数量一覧表 ---------- 95
表2　奈良・平安時代土器数量一覧表 ---------- 99
表3　カマドの位置からみた住居軒数 ---------- 103

図版目次

図版1　1 遺跡全景(北東上空)　2 B区全景(北東上空)
図版2　1 A区1号･2号住居址　2 A区1号住居址カマド　3 A区3号住居址
図版3　1 A区3号住居址遺物出土状況　2 A区5号住居址
図版4　1 A区4号住居址　2 A区4号住居址遺物出土状況
図版5　1 A区3号･4号住居址調査風景　2 A区4号住居址遺物出土状況
図版6　1 A区9号住居址　2 A区9号住居址遺物出土状況
図版7　A区9号住居址遺物出土状況
図版8　1 A区8号住居址　2 A区7号住居址　3 A区11号住居址　4 A区10号住居址　5 A区6号住居址
図版9　1 A区12号住居址　2 A区13号住居址　3 A区14号住居址　4 A区15号住居址　5 A区水田址と6号･8号･9号溝
図版10　1 A区1号土坑　2 A区5号溝土層断面　3 A区6号溝　4 A区3号溝
図版11　1 B区1号～4号住居址全景　2 B区1号住居址　3 B区1号住居址カマド　4 B区3号住居址　5 B区4号住居址
図版12　1 B区6号住居址　2 B区7号住居址
図版13　1 B区8号住居址　2 B区6号～8号住居址全景
図版14　1 B区9号住居址　2 同上土器出土状態　3 同上カマド
図版15　1 B区10号住居址と1号溝　2 B区11号･12号住居址･3号溝　3 B区12号住居址　4 B区11号住居址カマド
図版16　1 B区13号住居址　2 B区14号住居址
図版17　1 B区住居群(14号～23号)と区画溝(3号･4号･10号)　2 B区15号住居址
図版18　1 B区16号住居址　2 B区17号住居址
図版19　1 B区19号住居址　2 同上カマド周辺　3 B区18号住居址
図版20　1 B区20号住居址　2 B区22号住居址
図版21　1 B区21号住居址　2 同上遺物出土状況
図版22　1 B区23号住居址　2 同上遺物出土状況
図版23　1 B区区画溝全景　2 B区 区画溝南東端(3号･4号他)　3 B区区画溝東側(4号･8号･10号)
図版24　1 縄文晩期土器出土状況　2 同上接合写真　3 縄文晩期土器片、石器等
図版25　1 A区1号住居址出土土師質土器　2 A区1号住居址出土土器　3 A区2号住居址出土壷片
図版26　1 A区3号住居址出土高坏　2 A区3号住居址出土土器　3 A区3号住居址出土土器片
図版27　1 A区3号住居址出土手焙り形土器　2 A区3号住居址出土石器　3 A区3号住居址上層出土土器
図版28　A区4号住居址出土土器①
図版29　A区4号住居址出土土器②
図版30　A区4号住居址出土土器③
図版31　A区4号住居址出土土器④
図版32　1 A区5号住居址出土土器①　2 A区5号住居址出土土器②　3 5号住居址出土土器③　4 A区6号住居址出土土器

図版33　1 A区8号住居址上層出土須恵器　2 A区8号住居址出土土器

図版34　A区9号住居址出土土器①

図版35　A区9号住居址出土土器②

図版36　A区9号住居址出土土器③

図版37　1 A区11号住居址出土須恵器坏　2 A区11号住居址出土甕　3 A区12号住居址出土坏　4 A区12号住居址出土甕

図版38　1 B区1号住居址出土土器　2 B区6号住居址出土土器　3 B区6号住居址出土土器　4 B区5号住居址出土土器

図版39　1 B区7号住居址出土土器　2 B区7号住居址出土土器　3 B区8号住居址出土土器　4 B区8号住居址出土土器　5 B区9号住居址出土土器

図版40　1 B区9号住居址出土土器　2 B区11号住居址出土土器　3 B区11号住居址出土石器

図版41　1 B区12号住居址出土土器　2 B区13号住居址出土土器　3 B区15号住居址出土土器　4 B区15号住居址出土土器

図版42　1 B区16号住居址出土須恵器　2 B区16号住居址出土須恵器　3 B区20号住 居址出土土器

図版43　B区19号住居址出土土器

図版44　1 B区17号住居址出土土器　2 B区21号住居址出土須恵器　3 B区21号住居址出土土器　4 B区21号住居址出土須恵器

図版45　1～3 B区22号住居址出土土器　4 B区1号土坑出土土器　5 A区1号土坑出土土器

図版46　B区23号住居址出土土器

図版47　1 A区B区出土寛永通宝　2 B区出土鉄製品　3 A区1号住居址出土鉄滓

図版48　鉄滓顕微鏡写真

図版49　A区出土古墳時代前期の土器群(3号・4号・9号住居址)

第1章　調査の経緯と概要

第1節　調査に至る経緯

本遺跡は御勅使川に接した右岸の尾根上に位置するが、平成6年（1994）に山梨県土地開発公社から県教育委員会にこの一帯への工業団地造成計画が伝えられた。この地域には文化財に指定されている治水にかかわる施設が所在していることから、まだ未発見の堤防等が埋没している可能性も考えられたため、山梨県埋蔵文化財センターによる試掘調査が同年12月に実施された。その結果、事業地南端に近い地区から古墳時代および平安時代の住居とみられる落ち込みが発見され、該期の大規模な集落が埋没している可能性が確認できた。遺跡の範囲は、造成工事計画地約15haの内の18,800㎡であり、さらに工事予定地の周囲にまで広がっていることが予測できる。

この試掘調査の成果をもとに、教育委員会と土地開発公社とで協議をすすめた結果、翌平成7年度に本調査を実施することに決定した。

本調査は平成7年（1995）6月1日から同年12月25日まで実施され、平成8年度（1996）に整理・報告書作成事業が行なわれ、報告書の刊行に至った。

[文化財保護法に基づく手続き]

平成7年（1995）4月24日　山梨県教育委員会教育長　発掘通知を文化庁長官に提出
平成7年（1995）10月 6日　文化庁より発掘通知の受理通知
平成8年（1996）1月18日　山梨県教育委員会教育長　遺物発見通知を南甲府署に提出

第2節　発掘調査の概要

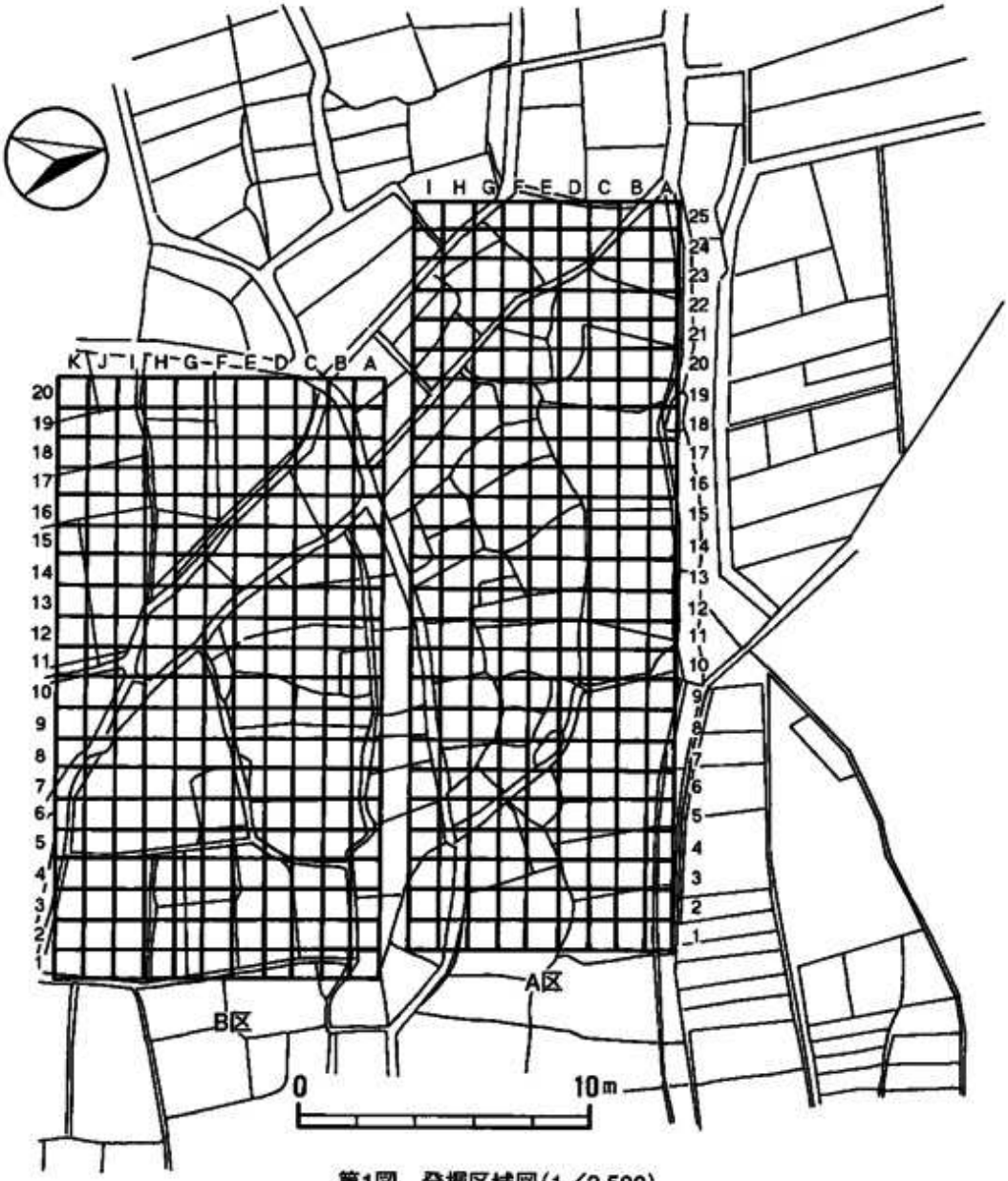
今回調査を行なった面積は18,800㎡であるが、この区域の中央部には浅い谷が走っており、試掘調査の成果ではこの部分には住居は見られないことから、この谷部分を排土置き場とした。この部分を境に北側をA区、南側をB区として調査を進めた（第1図）。

調査はまず重機により排土を行なった後、一辺が10mの方眼を設定し遺構の確認作業や発掘を行なっていった。A区は東西に細長い地形にあることから、方眼は南北にAから1まで9区画、東西に1から25までの区画となった。

B区についても同様に一辺10mの方眼を設定し、南北にAからKまでの11区画、東西に1から20までの区画を設定した。

調査の結果発見された遺構は次のとおりである（付図1 遺構配置図参照）。

[A区]　住居址　古墳時代前期　6軒、奈良～平安時代　9軒
　　柱穴列　3基（古墳～平安時代）
　　土坑　1基（古墳時代前期）
　　溝　7本（古墳～平安時代），2本（江戸時代）
　　水田址　3面（江戸時代）
[B区]　住居址　奈良～平安時代　24軒



第1図　発掘区域図(1／2,500)

土坑　　3基（奈良～平安時代）

溝　　9本（奈良・平安時代），3本（江戸時代）

その他　縄文晩期鉢形土器

第3節　調査組織

調 査 主 体　山梨県教育委員会

調 査 機 関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　新津　健（山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事）
高野政文（山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事）

作業員・整理員　斎藤利男、斎藤直江、秋山とみ、折居きく、深沢　繁、依田友弘、柴田昭二、秋山東、清水澄夫、藤山俶子、奥石和江、千野里美、青木文治、森本通久、井戸明、石川照子、長田宏明、渡辺あけみ、今津　勝、秋山正文、樋口瑠璃子、滝沢かねじ、渡辺俊夫、丹沢政一、清水重雄、樋口久子、広瀬まい、小澤和樹、石原由美子、斉藤律子、清水真弓、

協力者・機関　八田村役場、八田村教育委員会

第2章　地理的環境

第1節　遺跡の立地

本遺跡は中巨摩郡八田村野牛島の小字大塚を中心とした地区にある（第２図１）。八田村は富士川右岸に形成された御勅使川扇状地扇央部から扇端部にかけて広がる行政区画である。遺跡自体は御勅使川扇状地の扇央部より下流域に形成された、西から東に向かって傾斜する尾根状の微高地上に立地する。遺跡部分の標高は330m～335mである。北に隣接して御勅使川が流れており、遺跡の載る尾根はこの御勅使川ないし旧割羽沢川により浸食され３～５ｍの小崖をなしている。この御勅使川は本御勅使ないし北御勅使とも称され、上流部にある「石積み出し」や「将棋頭」が構築された戦国期以降に新しく解析されたもので、旧御勅使川は本遺跡の南方約700mを流れていたと伝えられている。この旧御勅使を一般には前御勅使と呼ぶが、明治21年陸地測量部による２万分の１地図には現在の御勅使川とともに前御勅使の流路もはっきりと記載されている。この前御勅使が完全に水流の機能を終えたのは明治31年の「石縦堤」の完成によるものとされる。現在八田村を東西に縦断する県道竜王芦安線が走る部分がこの前御勅使川の一部にあたっている。

従って、本遺跡に集落が形成されていた奈良・平安時代は、前御勅使川方面が機能していた時代である。しかし後に北御勅使川が掘削されることになる箇所にも小さいながら割羽沢川が流れていたと思われ、この小河川の谷を利用して新しく御勅使川が引き込まれたものと考えられる。これについては４章でふれるが４本確認できた奈良・平安時代の水路が、遺跡の載る尾根を等高線に準じて横断しているが、これら水路の流れる方向が南から北に向かっており、大塚集落内を流れ最終的には割羽沢川が流れる北側の谷に落ちていたものとみられるからである。従って本遺跡は割羽沢川に面した集落であったと考えられる。

また前御勅使川との関係からみると本遺跡は、御勅使川左岸に位置することになり、奈良・平安時代の集落については、倭名抄記載の古代郷名のうちの「余郷」に該当する可能性が考えられる。但し地形上からは、北御勅使川の左岸から北側の韮崎市側については龍岡台地に該当しており、一部が北御勅使川を越えて南側に赤山という台地を形成しているものの、八田村の大半は新旧御勅使川の扇状地に当っている。本来余郷については龍岡台地側を中心とした現韮崎市地区が想定されており、これとは異なった地形にある本遺跡部分を含めるかどうかは今後の課題でもある。大井郷との関連も考えねばならないからである。また、御勅使川の流路についても櫛形町、若草町、白根町、八田村といった広範囲にわたる扇状地上を変遷しており、これら古い流路と遺跡の関係もきわめて重要である。

いずれにしても、本遺跡の立地する御勅使川扇状地にあっては、これまで遺跡の非常に少ない地域という見方がなされていたことは否めない。それというのもこれは日本有数の扇状地であり、江戸時代寛文年間に開削された徳島堰により灌漑が初めて可能になったと伝えられる地域だからである。それが今回の調査により中世以前の集落跡の所在が確認されたことは、大きな意味をもつ。御勅使川扇状地の扇端部に近い櫛形町でも、十五所遺跡や村前東Ａ遺跡など

第2図　遺跡の位置(1／25,000)

から弥生時代の水田跡や平安時代にかけての大集落が発掘された事実を含め、御勅使川扇状地と集落との関係を見直す必要性が生じてきたからである。

この報告書執筆中の平成9年2月にも試掘調査により、本遺跡の東約300mの地点からも中世の遺構遺物が発見され、石橋北屋敷遺跡として本調査の必要性が報告された。今後かような試掘調査の積み重ねにより、扇状地一帯での遺跡の様相が明らかにされることが期待される。

参考文献

宮沢公雄編『将棋頭遺跡・須沢城址』 白根町教育委員会 1989

第2節 周辺の遺跡(第2図)

前項でもふれたように本遺跡(1)は、遺跡の少ないと言われていた扇状地上に位置することから、付近にはこれまで集落遺跡はあまり知られておらなかった。唯一本遺跡の東600mには縄文時代の土器や石器が採集される赤山遺跡(2)がある。この遺跡は、御勅使川の北から続く龍岡台地の末端斜面部分にあたり、扇状地に突出する高台である。また具体的な遺跡は知られていないものの、(3)の箇所には崖線に沿った湧水池のひとつ能蔵池がある。周囲に遺跡の所在が予測される場所である。(4)は中部横断道建設に伴う試掘調査により中世の遺構遺物が発見された石橋北屋敷遺跡である。その他、八田村内には図示範囲には入らないが、平安の土器類が多く散布する舞台遺跡、白根町境には縄文中期から後期の清水坂遺跡がある。これらの遺跡は、釜無川の沖積地を見下ろす御勅使川扇状地の端に位置しており、先の能蔵池のある崖線に続く崖上に立地するものである。さらに扇状地中央に近い白根町上八田下村遺跡(5)では分布調査により縄文土器や土師器が採集されている。

御勅使川を越え、韮崎市に入ると長塚道下遺跡(6)、羽根前遺跡(7)、築地遺跡(8)などが縄文時代から弥生時代の遺跡として分布図に記載されている。これらの遺跡の詳細は不明であるが、この龍岡台地一帯には縄文時代から平安時代にかけての遺跡は多い。第2図からははずれるが縄文中期、古墳時代前期の久保屋敷遺跡、平安時代および中世の甘利氏館跡の一部をなす大輪寺東遺跡などが発掘調査されている。

以上のような集落遺跡に加えて、この御勅使川地域の特色として治水施設がある。前項でふれた「石積み出し」や「将棋頭」などの遺構である。現在は白根将棋頭(9)と韮崎龍岡将棋頭(10)の2ヵ所がよく残っている。このうち白根将棋頭については本来八田村にまで延びていたものである。この2ヵ所の将棋頭は上流の石積み出しと合わせて、御勅使川旧堤防という観点から国史跡の指定に向けての答申がなされている。

以上のように集落遺跡については、龍岡台地以外では御勅使川扇状地の末端付近にしか知られていなかったが、今後の調査により多くの所在が確認される可能性がある。

参考文献

文化庁 『全国遺跡地図』 山梨県 1981
韮崎市誌編纂専門委員会編 『韮崎市誌』上巻 1978
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第1集『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会 1984
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第53集『大輪寺東遺跡』 山梨県教育委員会
宮沢公雄編 『将棋頭遺跡・須沢城址』 白根町教育委員会 1989

第3章　発見された遺構と遺物

第1節　A地区の調査

本地区からは次の遺構が発見された。

住居址　古墳時代前期　6軒（2号～5号、8号、9号）、奈良～平安時代　9軒
柱穴列　3基（古墳～平安時代）
土坑　　1基（古墳時代前期）
溝　　7本（古墳～平安時代）、2本（江戸時代）
水田址　3面（江戸時代）

以下、遺構順に記載する。なお各遺構からの土器出土個数は表1（P95）と表2（P99）にまとめてある。

（1）住居址

1号住居址（第3図、4図）

発掘区の東端に位置し、古墳時代の住居である2号住居址を切っている。遺構確認面は茶褐色のやや礫を含む層で、これに黒褐色土が落ち込んでいる状態であることから、壁の立ち上がり確認がやや難しい。長軸5.1m、短軸4.5mの長方形をなす。カマドは南東隅近くに構築されていることから、主軸は住居の床面中央を向く。袖には石が用いられており崩壊が激しいながら石組の残存はややよい。南袖の芯石上には天井石が一部原状を保ってた。カマド前面を除いて床は堅くない。北壁側の床はやや高めである。周溝はみられなかった。カマド付近から東壁にかけて釜形土器の破片が散乱するとともに、土師質土器2点が出土した。また東壁際から中央にかけての床面から鉄滓が出土した。

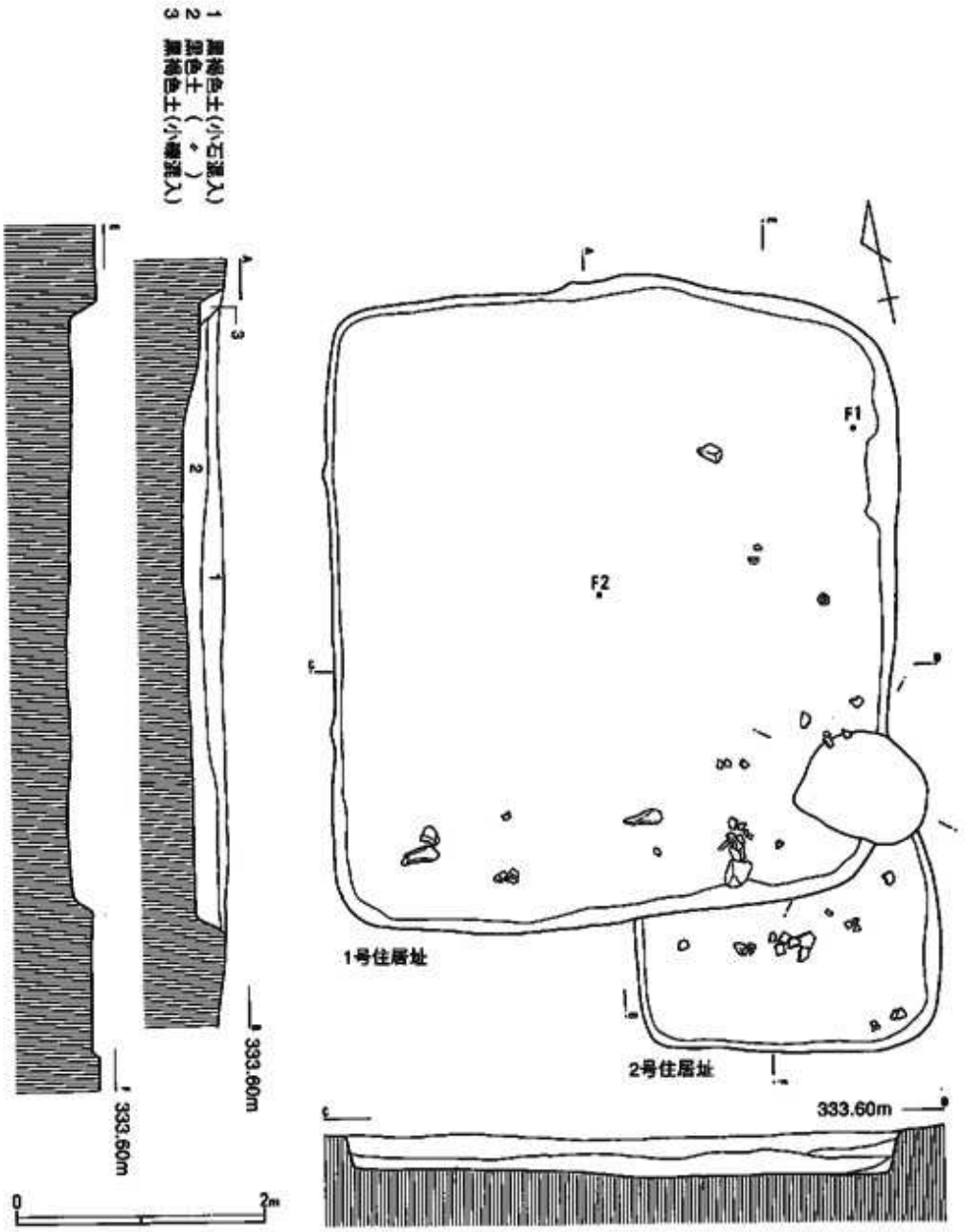
出土遺物（第5図、106図）

第5図1および2は小型の土師質土器。1は口径7.8cm、底径4.2cm、高さ2.3cmのほぼ完形。2は口径9.2cm、底径4.5cm、高さ2.2cmで、口縁の一部を欠く。いずれも胎土に砂粒や金色の雲母が多く含まれる。3は坏であるが、胎土中に金色の雲母や砂粒を多く含み土師質土器のようである。口径15.5cmと推定できる破片。4、5は外面に把手のつく釜形土器であるが、いずれも口縁部破片。3は口径26cm、4は口径37.5cmと推定復元できる。

第106図6、7は鉄滓。椀形滓であり、特に6は8cm×7cm、厚さ1.3cmの中央がやや窪む薄い椀形をなす。第4章でふれるが、精錬鍛冶滓と分析されている。本住居からはフイゴ羽口などの鍛冶遺構に関わる遺物は出土しておらず、また精錬鍛冶滓という大鍛冶に関係する鉄滓であることから、別の場所から持ち込まれたものとみられる。

2号住居址（第3図）

1号住居址に北側半分を切られている。古墳時代前期の遺構であるが、同時期の住居である3号とは15mほど離れている。一辺が2.3mほどの小型の遺構。床面の中央から一括土器が出

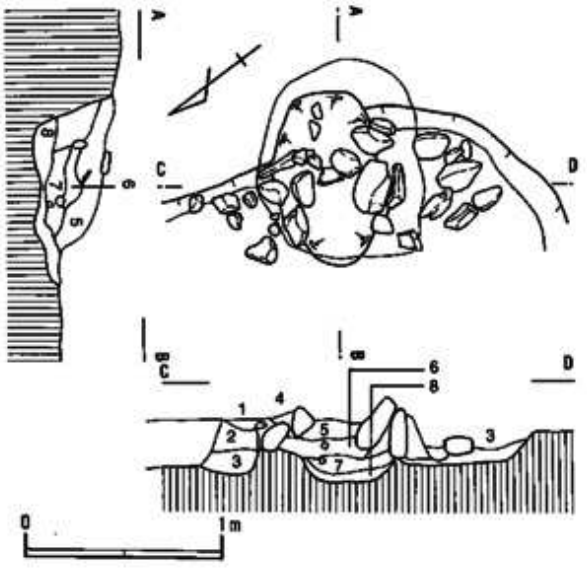


第3図　A区1号・2号住居址実測図(1／60)

土したが、炉は確認できなかった。床面は堅くなく、壁の立ち上がりも10cm程度と浅い。柱穴も発見できなかった。

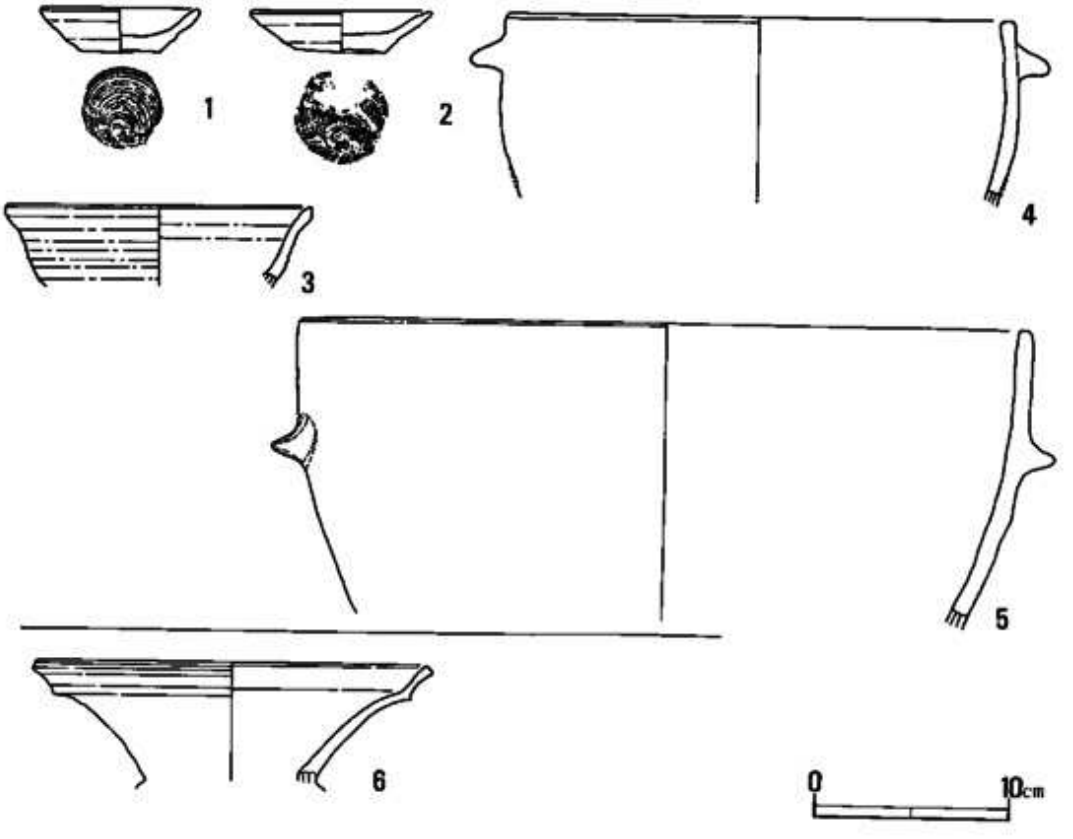
出土土器（第5図）

6は壺形土器の口縁部破片。口径20cmと推定復元できる。有段口縁で、色調は赤褐色。内外面にわずかながら刷毛目が残る。

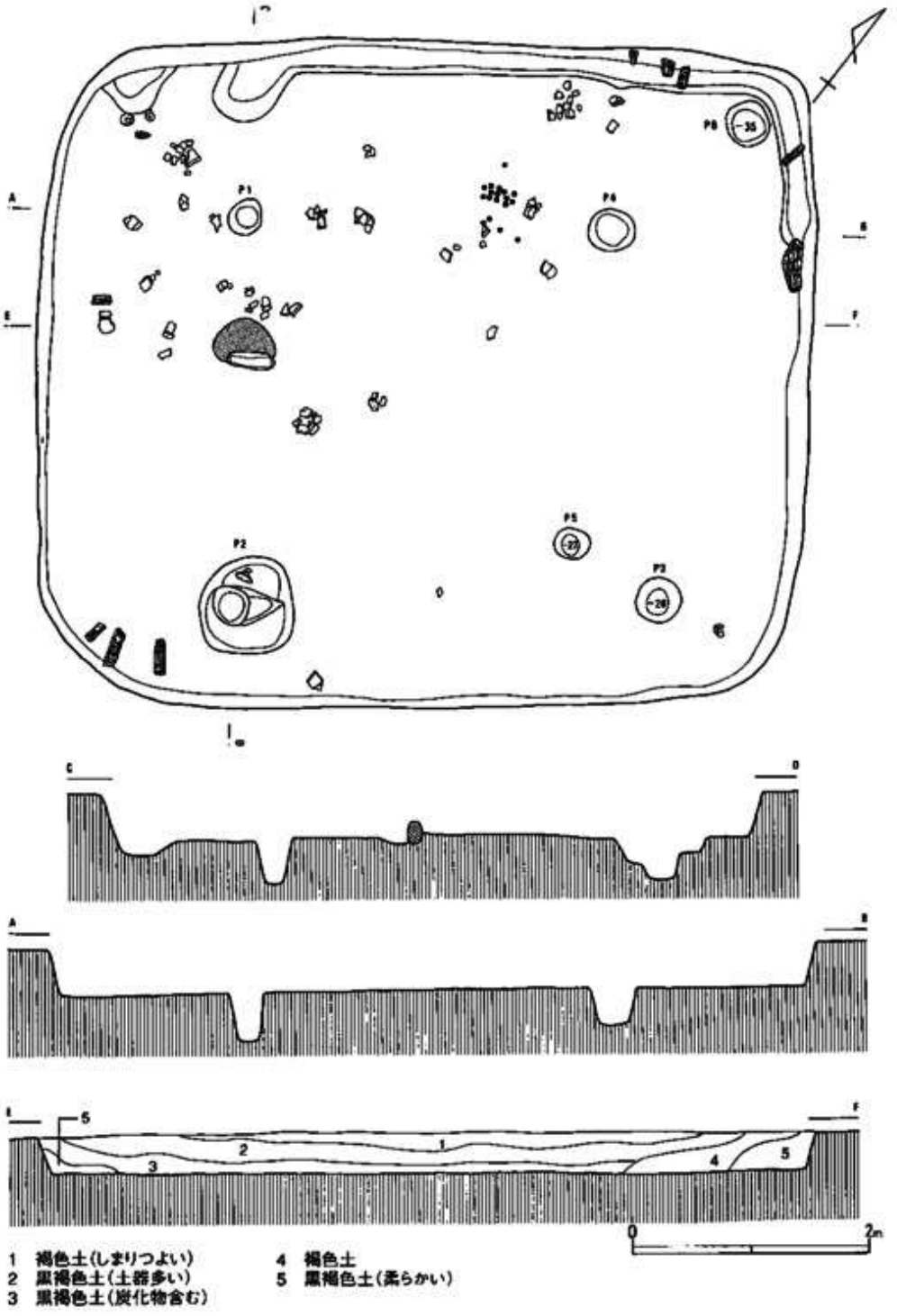


1 黒色土
2 〃 （小石なし）
3 〃 （砂利）
4 褐色土（焼土粒）
5 黒褐色土
6 黒色土
7 焼土
8 砂礫（焼土）

第4図　A区1号住居址カマド（1／40）



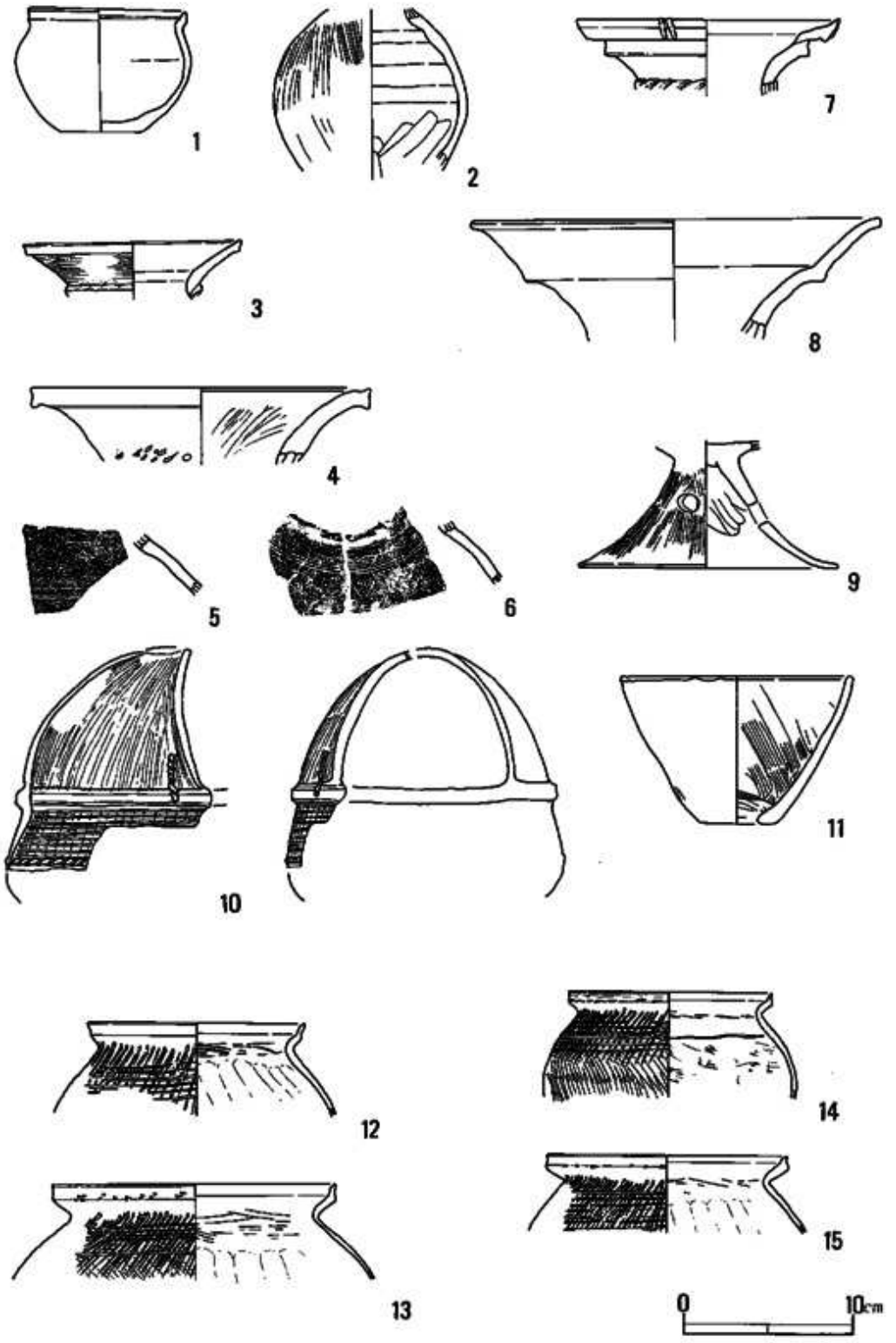
第5図　A区1号・2号住居址出土土器（1／4）



第6図　A区3号住居址実測図(1／60)

3号住居址（第6図）

古墳時代前期の住居で、2号の西15m、4号の東4 mに位置する。長軸6.6m、短軸5.68mの整った隅丸長方形をなす。壁高は30～38cm。4本主柱の住居と思われ、配列がやや不規則



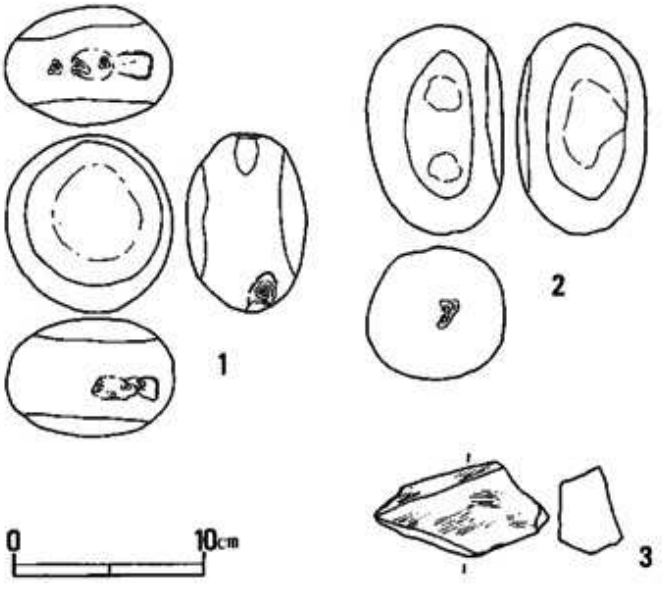
第7図　A区3号住居址出土土器(1／4)

ではあるがP1～P4が主柱とみられる。P2は何度か掘り直されたらしく、小穴が重複する。この部分には柱穴に接して浅い掘込みがあり、ここから高坏脚部が出土した。

炉は長軸上の、P1・P2間にある。50cm×35cmの浅い窪みにわずかながら焼土が堆積し、南側部分に細長い石が置かれている。火災住居らしく焼土や炭が散乱していることから、床や壁の立ち上がりはこれらを目安に検出した。特に南コーナー付近や北西の壁際では炭化材が斜めに立った状態で検出された。周溝は北から西壁にかけてのみ見られる。出土遺物はあまり多くないが、特に北西側半分に目立つ。多くが床より浮いており、特に壁際では高いことから住居の埋没時に廃棄されたものであろう。なお、住居中央部のやや北西壁寄り部分では、調査を始めてすぐの段階で覆土最上部の黒色土中から平安時代の土器片がややまとまって出土した。このような傾向は同じ古墳時代の住居である8号ではより顕著であった。おそらく、古墳時代の住居が埋没した後の窪みに廃棄されたものであろう。

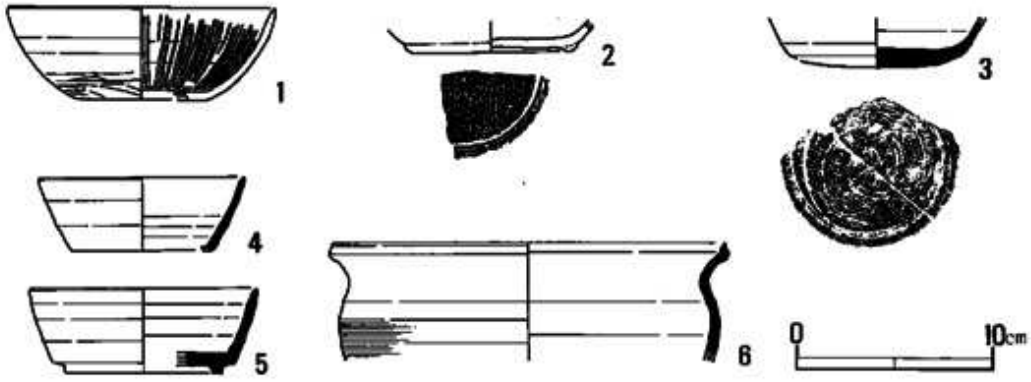
出土遺物（第7図）

1は東隅付近の床面から出土した口径9cmと小型の鉢形土器。ほぼ完形で、S字状口縁である。外面は二次焼成を受けている。2は壁際上部から出土した小型の壺。胴部破片であるが外面はへらで磨かれている。3～6は東海西部方面と関係のある加飾広口壺とみられる破片。3、4共に口縁部には装飾はないが3では頸部に凸帯がめぐる。5と6は肩の部分の破片であり、6には頸部凸帯と平行沈線、5では波状文が加わる。7、8は有段口縁の壺破片であるが7は二重口縁で棒状浮文がみられる。また頸部には有刻凸帯がめぐっており加飾壺に共通する。8は覆土上部から出土したもの。いずれもにぶい橙色をしている。10は南壁際の覆土上部から出土した手焙り形土器の破片。色調はにぶい橙色をなし、前面磨滅が激しい。割れ口部分も磨滅している。9は前述した柱穴P2脇の浅い掘込みから出土した高坏とみられる脚部。孔は3個で、全面磨き良好。にぶい橙色。11は西壁際の床面からやや浮いて出土した甑。底部の多くを欠く。口径13.5cm、高さ8.8cmの小型。内外面に刷毛目がやや残るが、全体に二次焼成を受けたらしく橙色を呈する。12～15はS字状口縁甕の破片。12を除き口縁屈折部に刺突が連続する。肩部の横刷毛目、頸部内面の刷毛目、内部の指状のなで等共通する。



第8図　A区3号住居址出土石器（1／4）

第8図は石製品。1と2は南西壁ほぼ付近から並んで出土したも



第9図　A区3号住居址上層出土土器(1／4)

ので、磨滅痕があることから磨石として使われた石器と思われる。1は砂岩、2は安山岩。3は床面から出土した砥石。各面ともよく使用されている。

［3号住居上層出土土器］（第9図）

3号住居のプランを確認し発掘を始めたところ、北側部分を中心に平安時代の土師器や須恵器破片が出土しはじめた。この時期の住居の可能性ありとし調査を進めたが遺構の範囲はつかめず漸移的に古墳時代の遺物が増えてきた。土層ベルトで確認しても遺構としての落ち込みは確認できなかったことから、3号住居の埋没過程の窪地に廃棄された遺物とみなした。第6図平面図のドットがこの時期の土器である。

1は土師器坏の破片。口径13.7cm、底径6.6cm、器高4.8cmと推測できる。内面暗文、外面ヘラ磨き。橙色の胎土緻密な土器。2は土師器高台坏破片。3～6は須恵器。3は底部破片であるが、底面全面ヘラ調整されている。6は鉢破片。3は、他に比べやや古い段階のものか。

4号住居址（第10図）

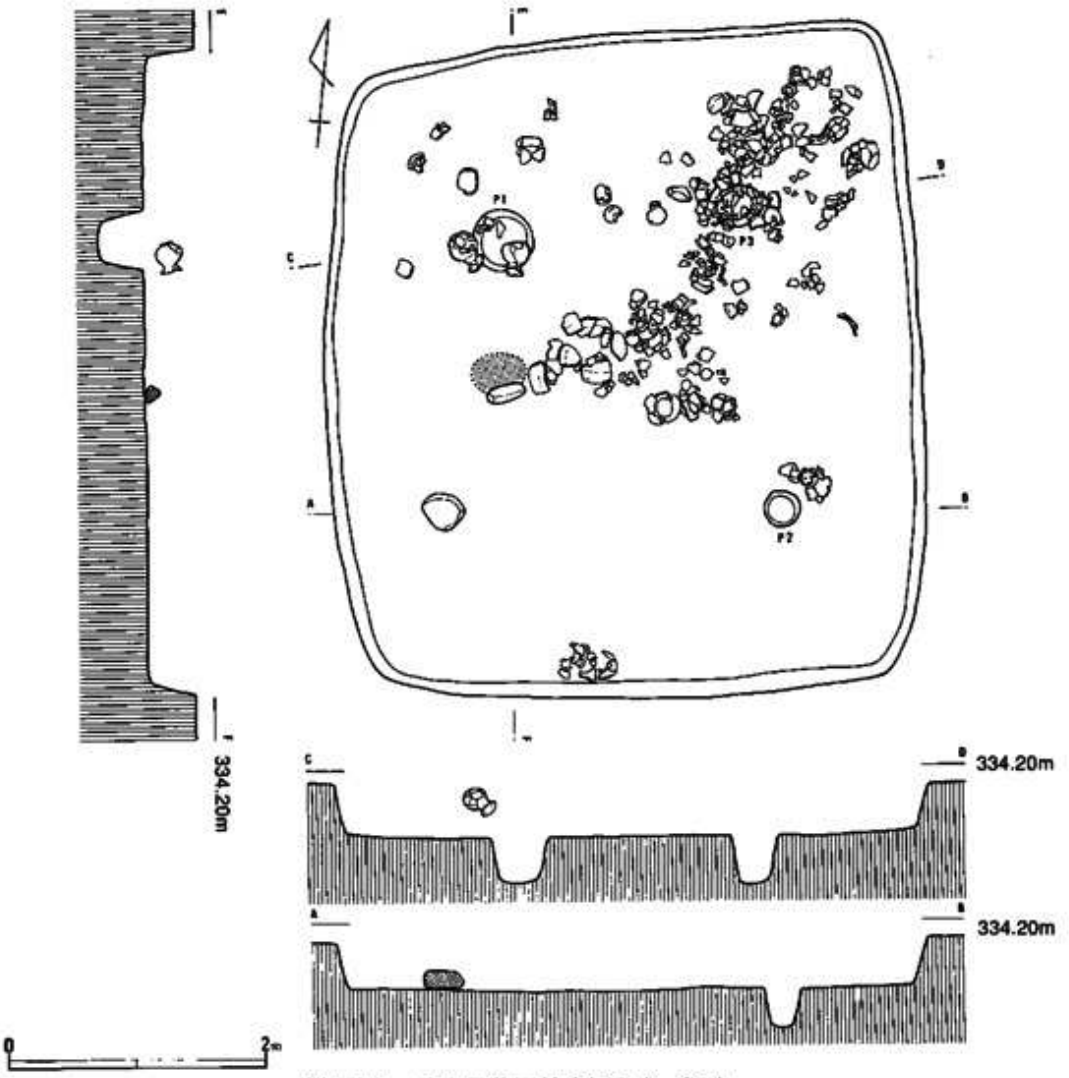
古墳時代前期の住居であり、同じ時期の3号住居の西4ｍに位置する。本址の中央を2号溝が走っているがこれは浅いものであり、覆土上部を撹乱しているに過ぎない。

5.1m×4.6mの隅丸方形に近い形状をなす。柱穴とみられる穴は3個が確認できただけであり、南西側の本来あってしかるべき位置には穴はなく、かわりに平石が置かれていた。配列がやや不規則なものの、この石を柱の基礎とすると、4本主柱の構造ということになる。炉は、この石とP1との中間に作られている。掘込みはほとんどないものの、40cm×30cmの楕円形の範囲にわずかな焼土と炭が残っていた。また3号住居と同じく炉の南辺には長方形の石が据えられていた。周溝はみられないし、床もさほど堅くはない。

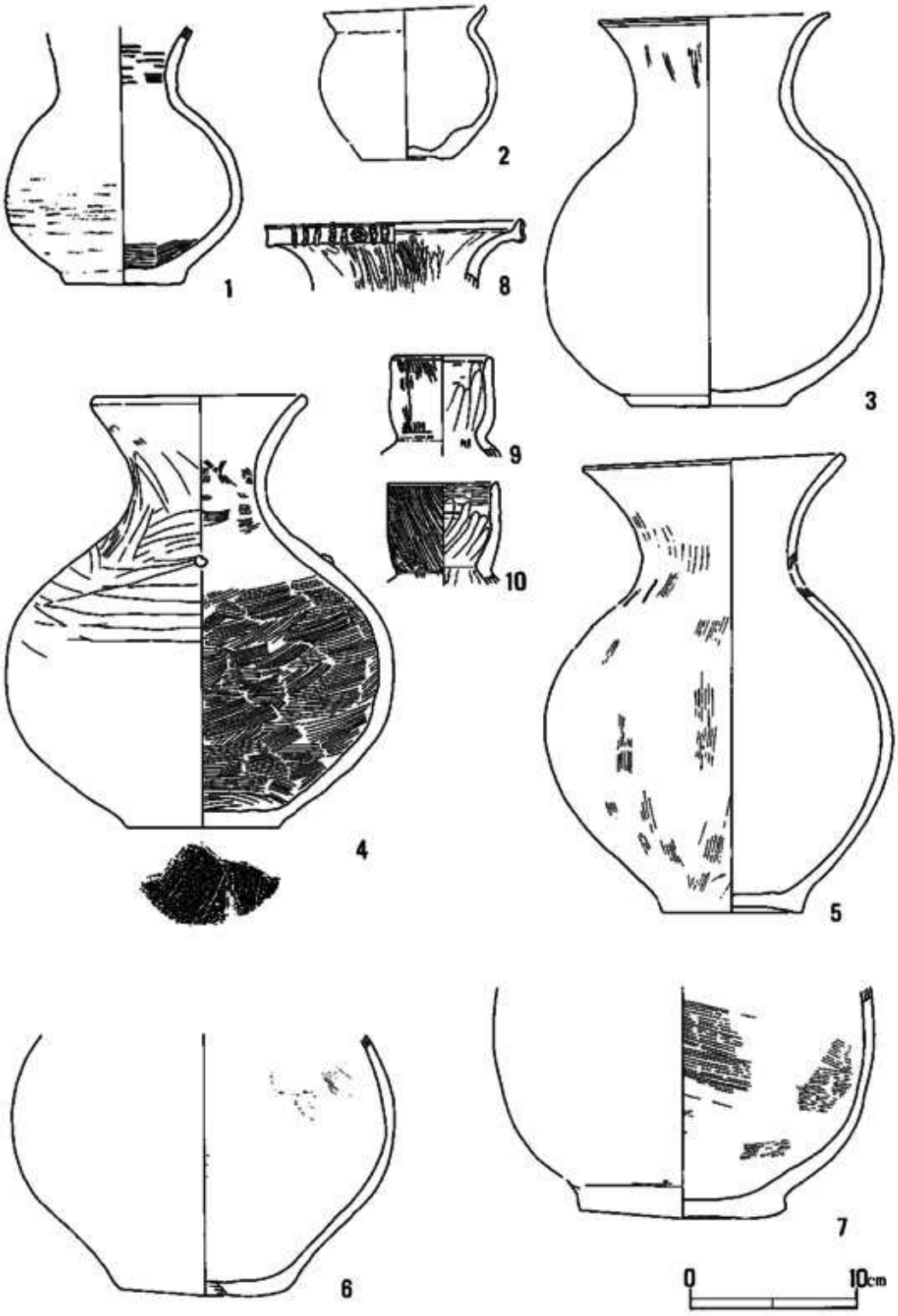
遺物の出土量は非常に多い。特に北東コーナー方向から土器が投げ捨てられたかのように、覆土の堆積傾斜に準じ、流れ込みの状態で出土した。土器は全て破損品であり、ことに台付き甕は破片が多い。これらの土器の下から柱穴P1やP3が検出されたことも含め、住居廃絶後に土器が廃棄されたものとみられる。

出土土器（第11図～13図）

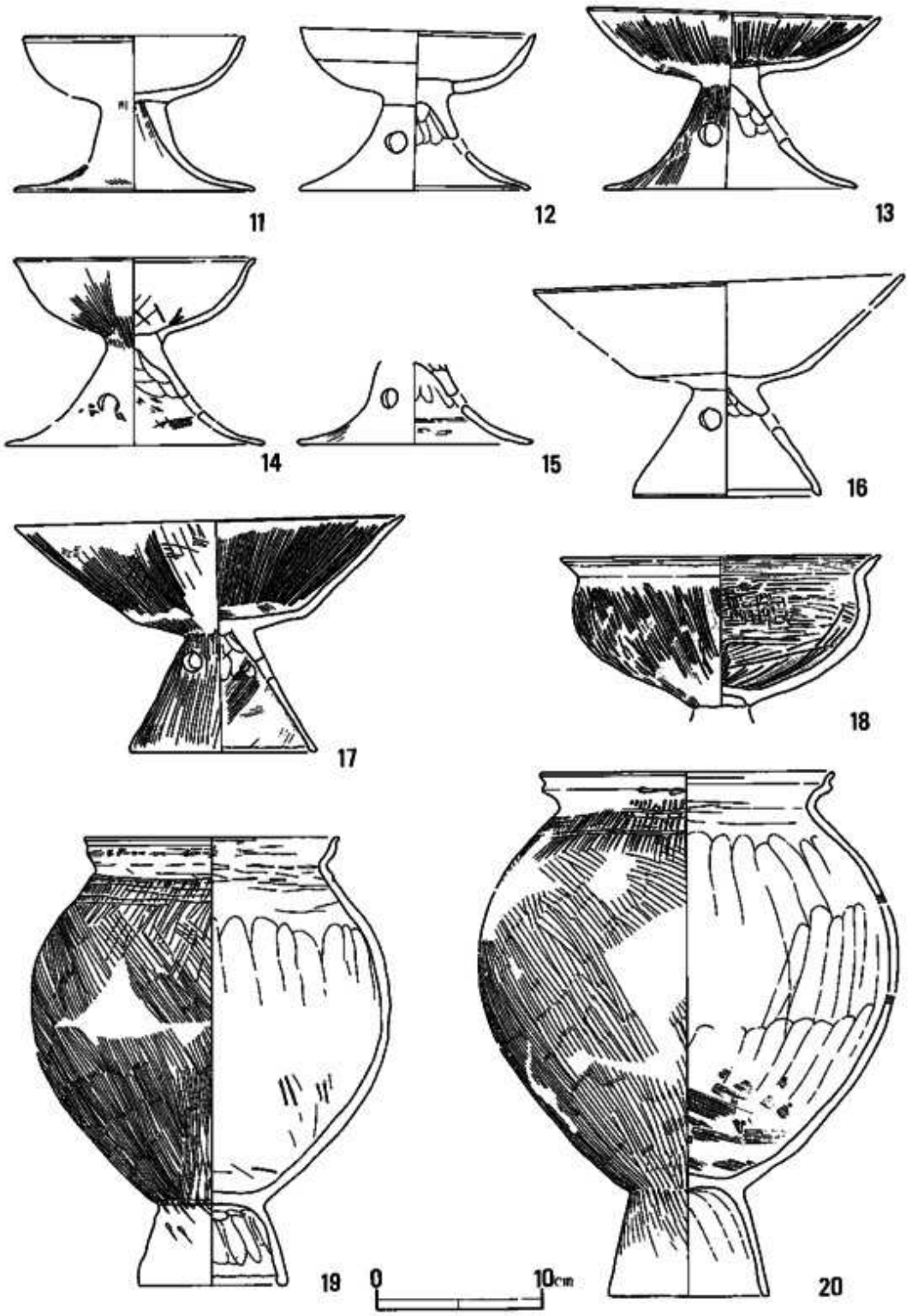
［壺形土器］1はP1とP3との間から出土した口縁部を欠く小型土器。器面は磨滅している。2は口径9.8cm、高さ9cmの広口壺の半欠品。器面は非常に荒れている。3と4とは位置的には柱穴のP1上から出土したものであるが、床面からは10～18cm浮いている。二つ並んだ東側が3の土器である。この3は口縁部と胴部を一部欠くが完形に近いもので、口径13.6cm、高さ23.2cmを測る。頸部に一部みがきの跡が残るが、器面は全体に荒れている。にぶい橙色をなす。4は3にくらべて12.5cmと口径が小さく、かわって胴の強く張る器形。高さは25.8cm。胴の半分ほどを欠くが器面の荒れは少なく、頸部から胴上半にかけてよく磨かれている。肩部に円形貼付が1個みられるが、破損部分にも貼付されていたかもしれない。頸部以下の内面には刷毛目痕が明瞭に残る。色調は赤褐色で、底部には木葉痕あり。5は南壁中央部直下から出土したもの。口縁部および胴の一部を欠く。全面荒れてざらつきがあり、割れ目では磨滅してい



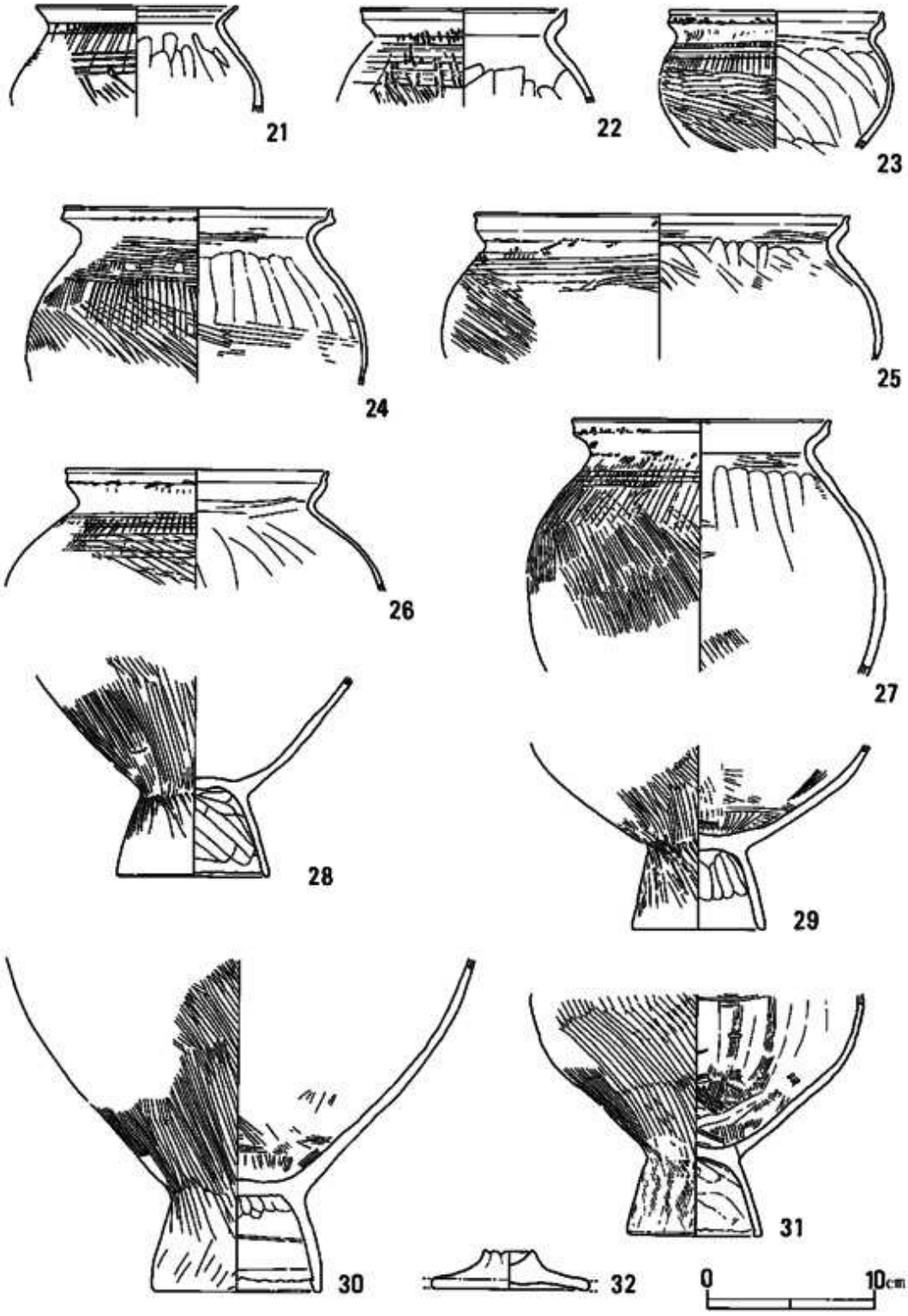
第10図　A区4号住居址実測図（1／60）



第11図　A区4号住居址出土土器①(1／4)



第12図　A区4号住居址出土土器②(1／4)



第13図　A区4号住居址出土土器③(1／4)

る箇所もあるが、部分的にみがきや刷毛目痕が残る。口径15.5cm、高さ27cmを測り、橙色をなす。6と7とは胴下半部破片。6はP1の北側から出土したもので器面は非常にざらついている。7は東壁際の覆土上部から出土。器面は著しく荒れている。

8は二重口縁壺破片。棒状浮文と円形浮文が見られる。9、10はひさご壺の口縁部破片。色調は赤褐色をなしよく磨かれている。内面には刷毛目と指なで痕が残る。

[高坏形土器]脚部や坏部の小破片は多いがこのうち完形に近いものや推定復元できる8点を図示した。11は坏部口縁と脚部裾の大半を欠くが口径13cm、高さ9.3cmと推定できる。脚部に孔は無く、12にくらべて脚の立ち上がりも急である。器面は荒れてざらつく。色調にぶい橙色。、12は口縁および裾の一部を欠くだけで、口径14cm、高さ9.5cmを測る。器面はざらつくが、赤みのある橙色を呈する。脚には孔3個がみられる。11、12ともに北東コーナー近くの土器密集部分から出土。13は坏部径17.4cm、高さ10.5cmと坏部分が偏平で大きい器形の土器。脚部孔は3個。全面よく磨かれており、特に内面はきれいである。土器密集部の中央から出土したもので、坏部と脚裾の一部を欠く。14は坏部の大半と脚部裾を欠くが口径14.5cm、高さ11.2cmと推定復元できる。坏部外面はみがき痕が残る。13の近くから出土したもので赤褐色を呈する。16は口径22cm、高さ12.7cmと坏部の大きい器形。これに反して脚は10.3cmと開きが少なく、11～15の器形とはタイプが異なる。器面は非常に荒れており、接合面も磨滅している。脚の孔は3個。全体に明るい橙色。17も16同様の器形で口径23.4cm、高さ13.8cmとやや大型。孔は3個。柱穴P2の近くから出土。坏部を半分欠くが、全体によく磨かれている。色調にぶい橙色。18は坏部のみの破片。口径19.2cmで椀形をなすものの口縁部はS字に類似する。内外面ともによく磨かれている。

[台付甕形土器] 口縁部や脚部の破片は多いが、器形の分かるものを中心に13点を図示した。全形のわかるものは19、20の2点であるが、各個体とも類似した特徴を持つ。19は口縁部および胴部の一部を欠くのみのほぼ完形の土器。口径15.2cmのS字状口縁で、肩部には横位の沈線が走り、胴部全体には斜め方向の刷毛目痕が残る。S字状口縁の屈折部には刺突による刻目が連続する。内面の整形については、口縁部は横方向のなで、頸部に刷毛目、胴部には縦方向に指頭状のなで痕が残る。色調についてはにぶい橙色を基調とし、胴部には煤が付着し、下半部から脚部は二次焼成による赤褐色を呈している。以上がおおむね台付甕形土器全体に共通する特徴と言える。20は口縁の大半から胴部にかけてを欠損するが口径17.5cmと推定できる。高さも31.5cmあり、19に比べ大型でしかも胴は強く張る。口縁屈折部の刺突は明瞭である。19は最も住居中央部の床面直上から口縁部を下にして潰れた状態で出土したもの。逆に20は北東コーナーに近い覆土上部から出土。21から27まではいずれも口縁部破片。21は単純口縁の土器であるが、他の要素はS字状口縁土器に類する。22、25では口縁屈折部に刺突がみられない。特に22はくずれたS字口縁である。28から31は下半部破片。底部付近には粗い刷毛目が残るのが普通であるが、28ではきれいに整形してある。28、29の脚部は折り返していない。

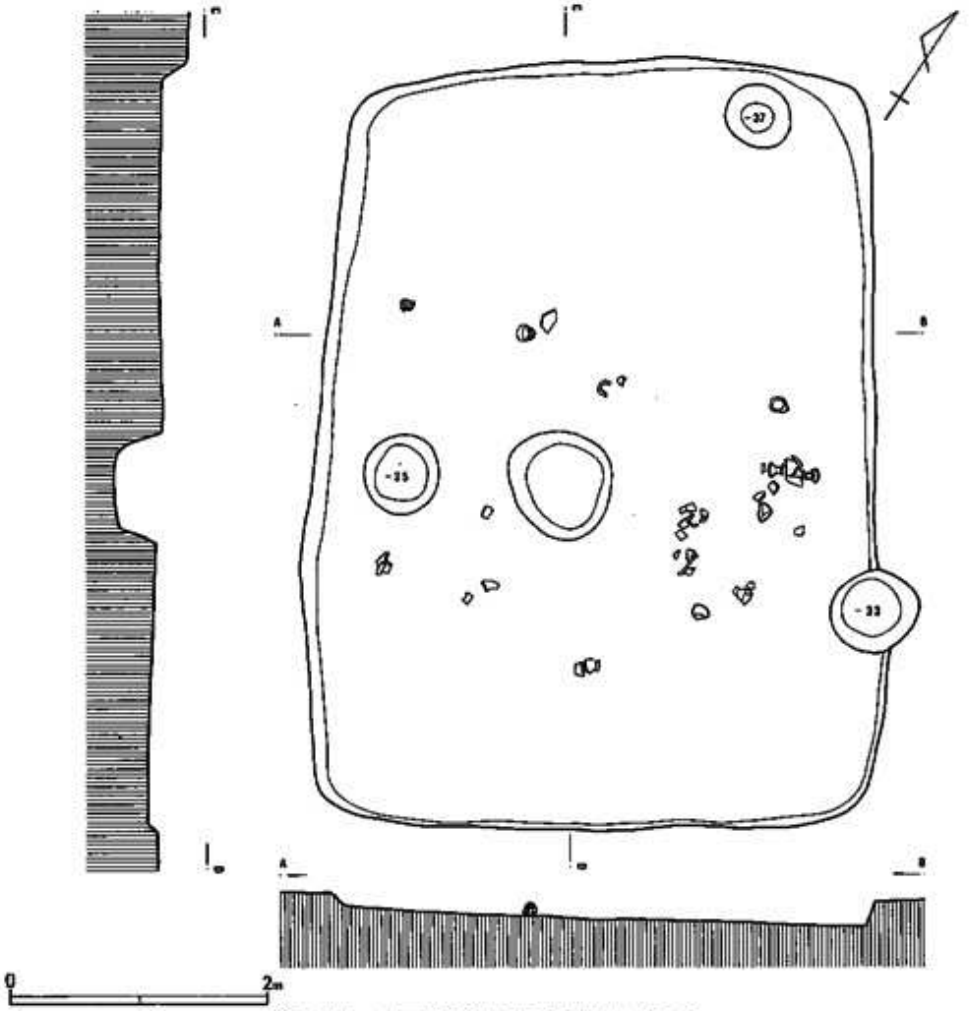
[蓋] 32は蓋とみられる3分の2ほどの破片。外周は割れているが丸く磨り減らしてあり、意図的に調整したようである。

5号住居址（第14図）

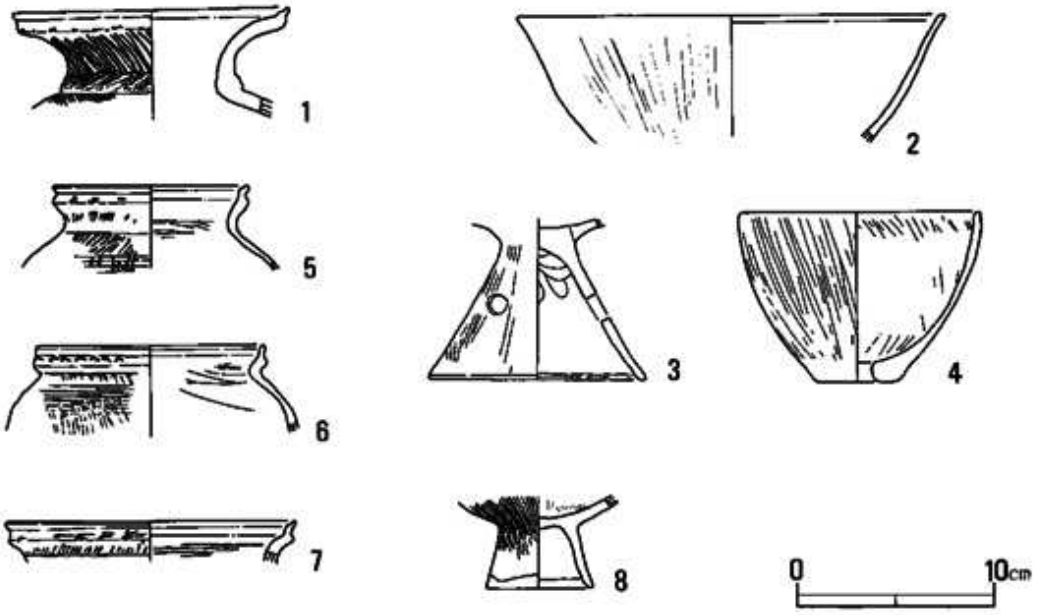
古墳時代前期の住居で、4号住居の西約8mに位置する。遺構上面が削平されたらしく、確認できた掘込みは浅い。5.88m×4.4mの長方形である。床面は堅くなく、炉や明確な配列の柱穴は確認できなかった。出土遺物は少ないが、中央部に近い床面から甑、北西壁付近から高坏脚部が出土した。

出土土器（第15図）

1は加飾広口壷の口縁部破片。赤味の強い橙色で、外面には太い刷毛目が顕著である。二重口縁の下端には櫛歯によるとみられる刺突文が連続するがこれはS字甕の口縁部刺突に類似する。頸部にも同様の刺突のつく凸帯がめぐる。2は高坏の坏部破片。3は高坏脚部破片。孔は3個であろう。磨滅しているが、外面にはみがき痕がわずかに残る。にぶい橙色。4は甑。口径12cm高さ8.7cmの完形。外面全体に刷毛目が残る。にぶい橙色。5～8はS字状口縁台付甕の破片。口縁の屈折部にはいずれも刺突文が連続する。8は脚部であるが、折り返しはつかないものの、輪積み痕が観察できる。



第14図　A区5号住居址実測図（1／60）



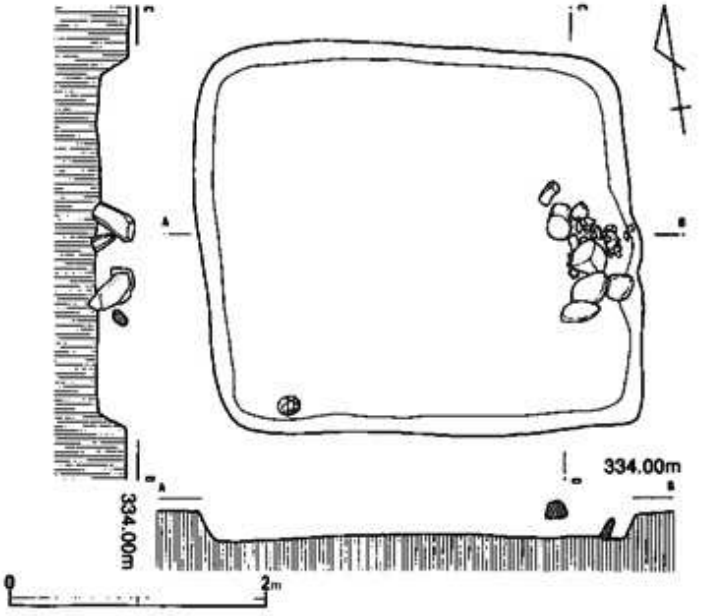
第15図　A区5号住居址出土土器(1／4)

6号住居址（第16図）

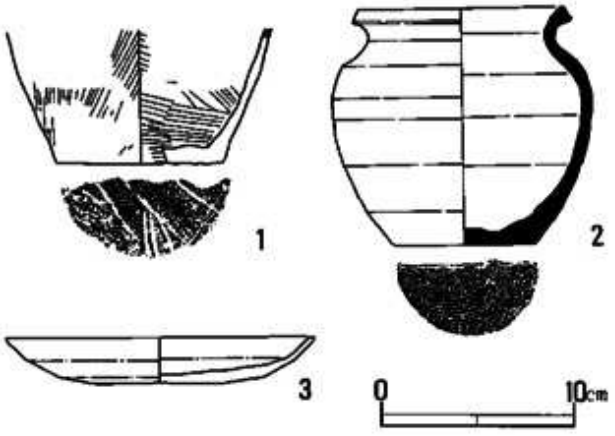
発掘区のほぼ中央に位置するが、この一帯の住居の分布はまばらである。3.4m × 3.0m の長方形をなし、東壁中央にカマドが設けられている。カマドは石組みであるが崩壊しており、特に北側の袖は石数個が残るのみ。燃焼部から甕の破片が出土している。遺構は礫層中に掘込んでおり、床面や壁には小礫が多く露出する。検出面からの深さは20cm程であることから、上部はすでに削平されているものとみられる。柱穴や周溝は検出できなかった。

出土土器（第17図）

1はカマド中から出土した甕の底部付近の破片。赤褐色で金色雲母を多く混入。底面に木葉痕あり。2は南壁の西隅近くから出土した鉢形をした須恵器半欠品。床面からは浮いた状態で



第16図　A区6号住居址実測図(1／60)



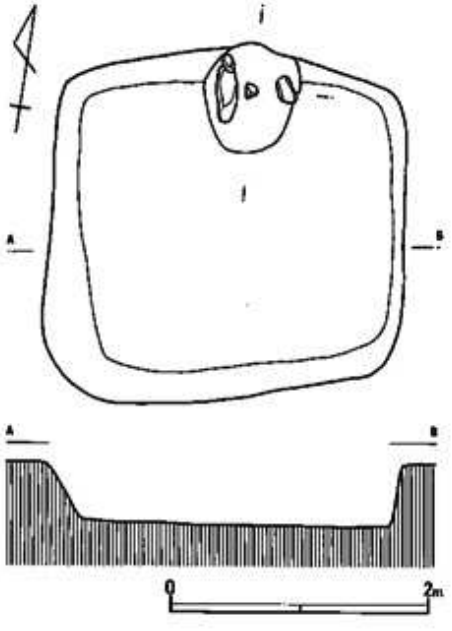
第17図　A区6号住居址出土土器(1／4)

底を上にして出土。3は土師器の皿。細かく割れた破片が接合し、全形3分の1程に復元できたもの。割れ口縁部や器面は磨滅している。やや赤みある橙色で、口径15.7cm、器高2.3cmと推定できる。

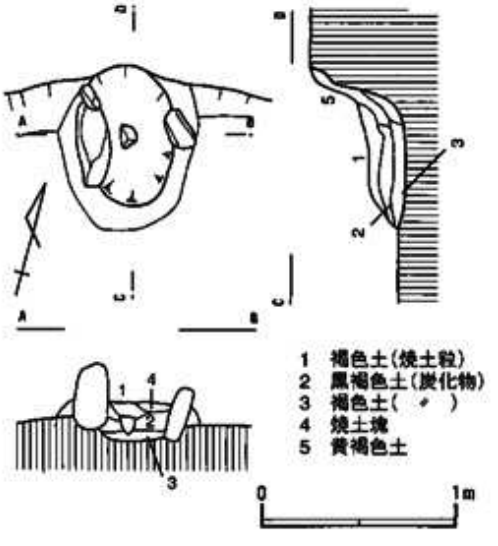
7号住居址（第18図、19図）

6号住居址の東8ｍに位置する、一辺が2.7m程の正方形に近い小型の住居址。遺構検出時に礫層中に円形状の黒色落ち込みが確認でき、この時点では住居とは思われなかったが、調査を進めるうちに北壁にカマドがあることが分かり、住居としたものである。壁高は60～65cmあり、掘込み時の原状をとどめているものと思われる。カマドの石は散乱していないが、左右の袖石が一個づつ残っていたにすぎない。燃焼部の焼土の堆積は少ない。本遺跡における北カマドの例は奈良・平安の住居33軒のうち7軒と少ないが、この内の1軒である。

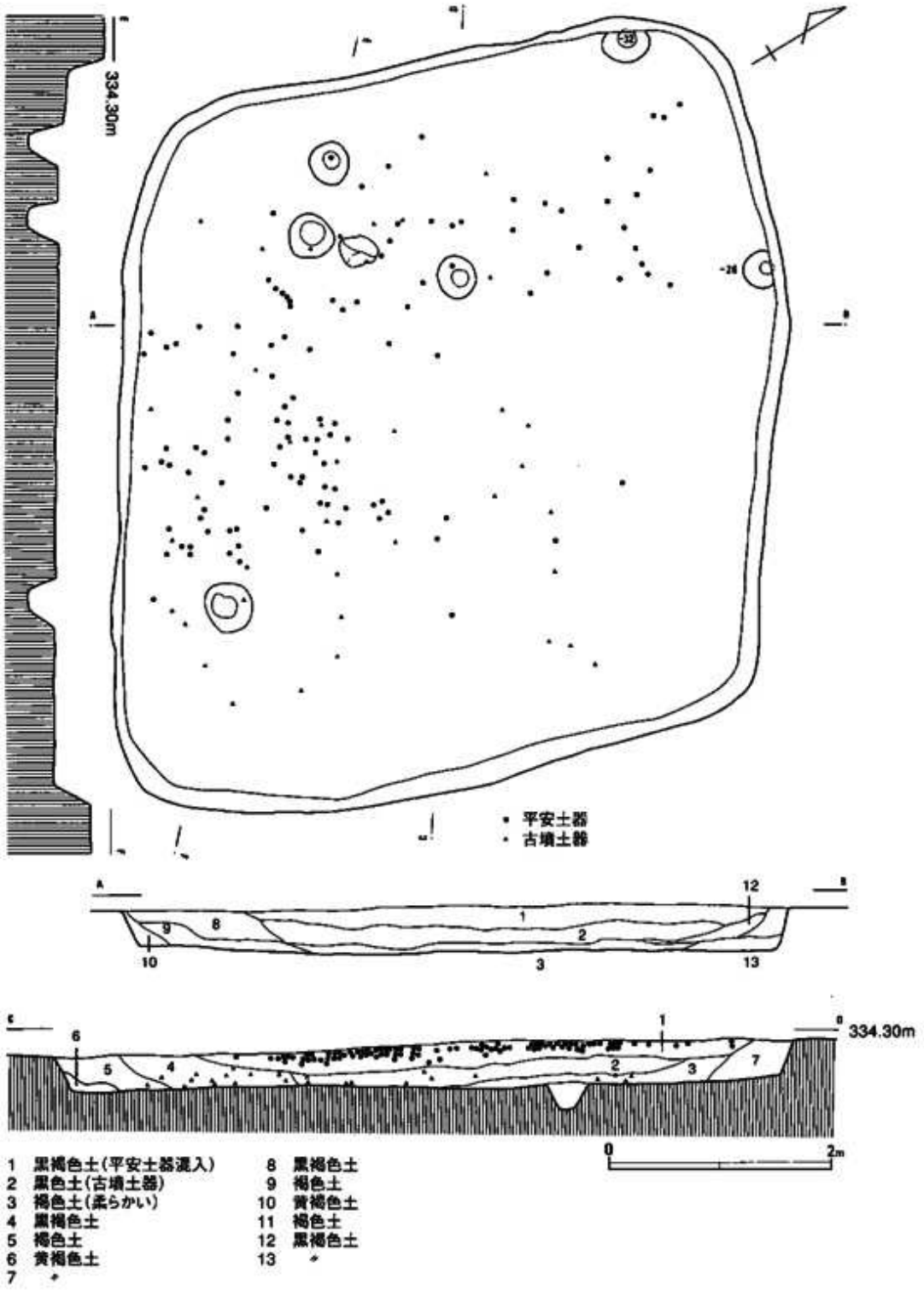
奈良ないし平安時代の住居と思われるが、遺物は土師器の小破片が3点出土しただけである。



第18図　A区7号住居址実測図(1／60)



第19図　A区7号住居址カマド(1／40)

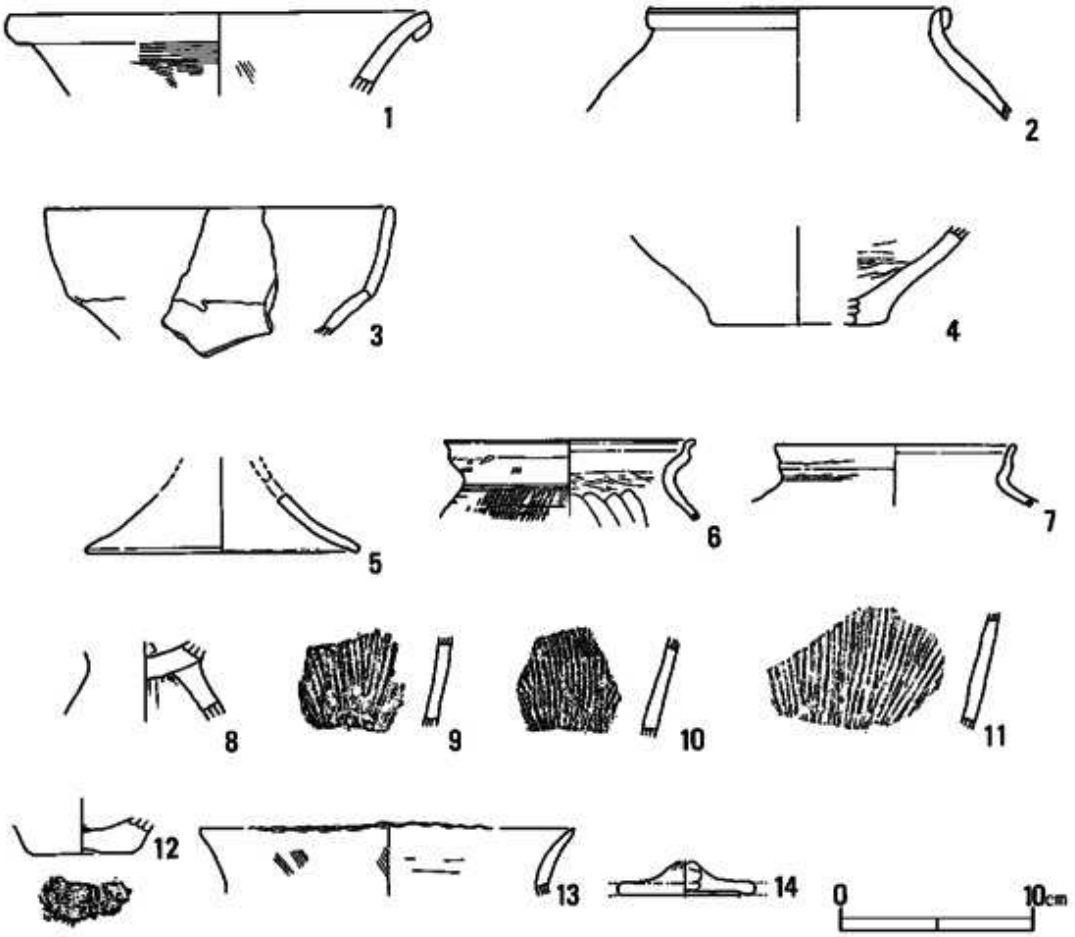


第20図　A区8号住居址実測図(1／60)

8号住居址（第20図）

5号住居址の北2 mに位置する。古墳時代前期の住居であるが、覆土上部からは平安時代の須恵器がややまとまって出土した。遺構検出時には茶褐色土中に黒褐色の長方形の落ち込みが確認されたことから、土層ベルトを残し掘り下げていった。覆土上部の第1層を中心に須恵器破片が多く出土し始めたことから、平安期の遺構として調査を進めた。しかしこれらの遺物は覆土上部および落ち込みの中央部を中心とした範囲であること、カマド等の施設が見られなかったこと、覆土中位の第2層以下は古墳前期の土器に限られること、覆土中に貼り床は見られなかったこと、などから古墳前期の住居の埋没過程の窪みに須恵器等が廃棄されたものとみなした（第20図平断面のドット参照）。このような状況は少量ながら3号住居址でも見られた。なお、本址の場合須恵器の量も多いことから、廃棄に伴う祭祀が行なわれた可能性もあろうか。

覆土壁際と掘込み面の土層とはよく類似しており、壁の立ち上がりは不明瞭であることから、住居プランの確認は難しく長方形ながらやや不整形に掘り上がった。6.6m × 5.9m 程の

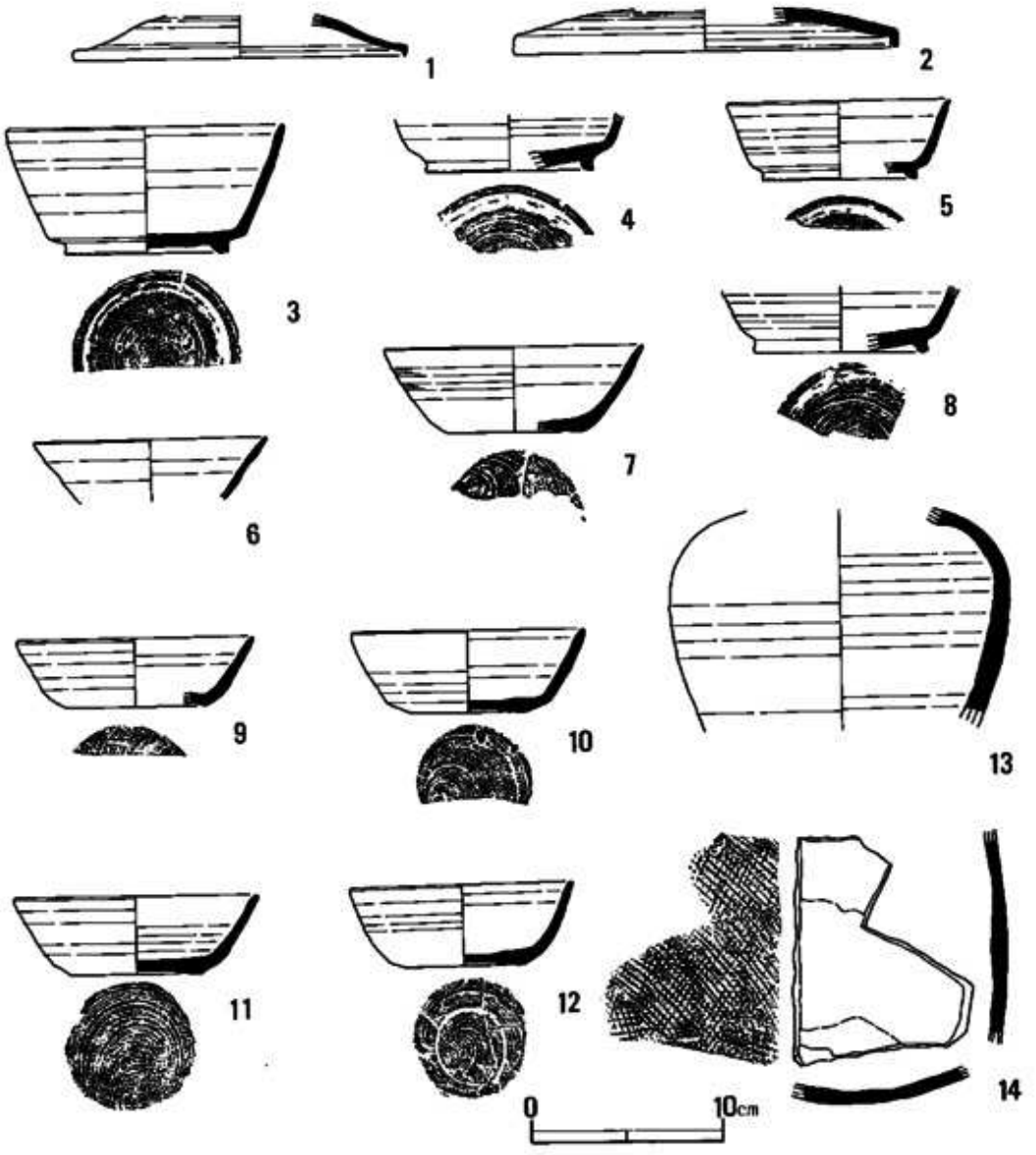


第21図　A区8号住居址出土土器（1／4）

大型の遺構であるが、柱穴の配置は不規則であり、炉とみられる明瞭な施設や周溝はみられないことから、一般の住居とは異なったものなのかもしれない。古墳時代の遺物は床面まで出土するが全て破片であり、この点も他の同時期の住居とは異なる。

出土土器（第21図）

いずれも破片である。1は二重口縁の壺で、器面は荒れているものの外面には刷毛目が残る。2は無頸壺の口縁部。胎土中に粗い砂粒が多い。3は受け口状の壺小破片。4および12は壺の底部破片。5は高坏の脚部破片で、孔が1個認められる。6～11は台付甕の破片。6、7はS字状口縁部で、7は器面が荒れているものの6では刷毛目等の整形痕がよく残る。口縁



第22図　A区8号住居址上層出土土器(1／4)

屈折部にも刻目が連続する。13も台付甕とみられる口縁部破片で、口唇に刻目が残っている。14は蓋とみられる小破片。周囲が磨滅しているが意図的である。

［上層の土器］（第22図）

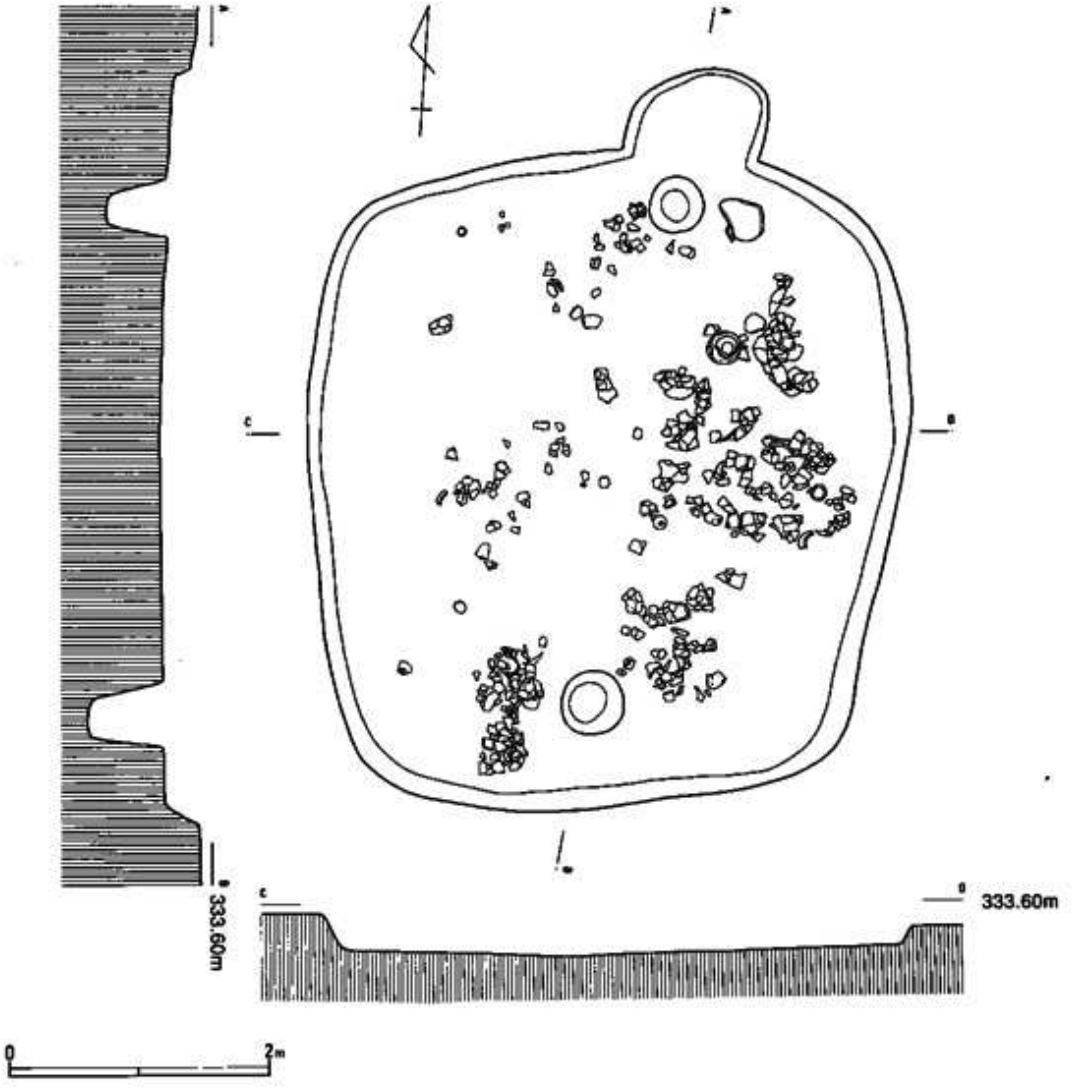
3号住居と同じように、住居埋没途中の窪地に廃棄されたものとみなした。土師器を含むが図示したのは全て須恵器でありいずれも破片。1と2とは蓋、3～5・8は高台坏。特に3は残りが良く半欠品であり、口径14.5cmの大型である。4、5、8とも四分の1程度の破片であるが5は口径11.5cmと推定復元できる。6、7、9～12は坏破片。6を除き丸みのある器形。いずれも回転糸切痕がある。10は半欠品で、口径12.2cm、器高4.2cm、11、12は底部は完全なものの口縁部はほんのわずかしか残っていないがそれぞれ口径12.6cm、11.6cmと復元できる。13は壺の肩部破片で自然釉がかかる。14は甕とみられる胴部破片であるが、内面の中央部分（破線で表現した内側）がやや磨滅しており、転用硯かと思われるもの。

9号住居址（第23図）

8号住居址の北西15mにあり、古墳時代前期の住居としては最も端に位置する。長軸5m、短軸4.5mほどのややゆがんだ隅丸長方形をなす。壁高15cm～30cmと浅いことから上面が削平されているものとみられ、不整形をなすのもその為かと思われる。なお北壁に張り出しがあるが本址に伴うものではないと思われる。しかし浅いことから土層からは新旧の観察ができなかった。床面は中央がやや窪んでいる。炉とみられる施設は発見できなかった。長軸上に小穴が2個検出できたが、これが主柱穴と見られる。出土土器は非常に多いが、これらは床面から5～10cm浮いた状態で出土している。

出土土器（第24図～26図）

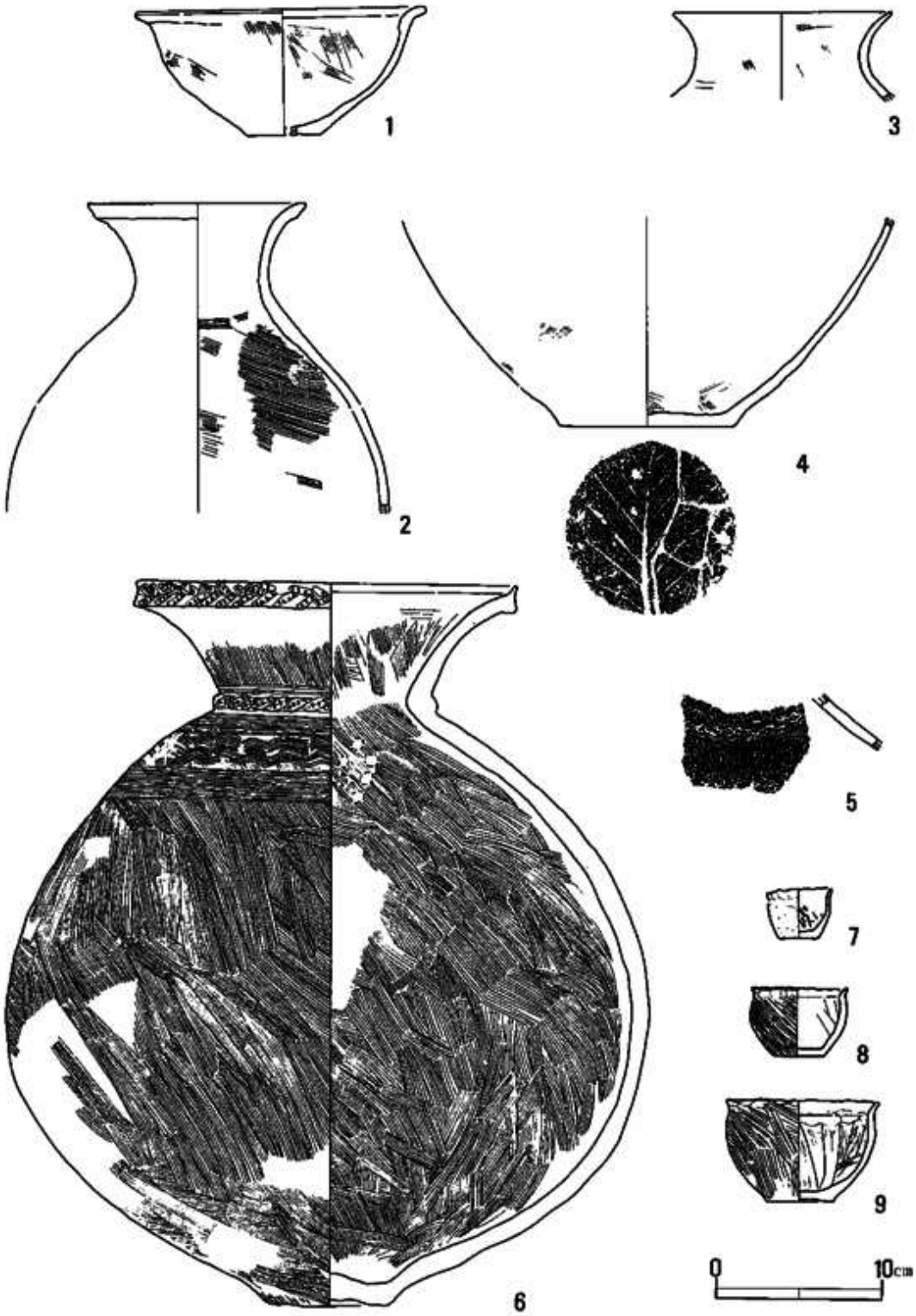
1は鉢形土器の半欠品。口径17.4cm、高さ7.5cmと推定できる。底は蛇の目状に周囲が高い。内外面に刷毛目が少し残る。色調にぶい橙色。2～6は壺形土器。2は口縁の大半と下半分を欠く破片。頸が非常につぼまり、口のやや短い器形。内面には刷毛目が残る。外面はよく磨かれていたとみられるが、荒れておりざらつきがある。色はやや赤みのある橙色。3は口縁の4分の1程の破片。器面は荒れ磨滅している。4は下半分の破片。外面に一部刷毛目が残るものの全体によく磨かれている。底部木葉痕。内面灰色、外面くすんだ橙色。5は肩部の破片。結節縄文がめぐる。6は口径22.9cm、器高42.9cmの大型の壺。住居内北東部分の土器溜まりから口縁部を下に、その東側に胴部以下が散乱して出土したもので、胴の一部を欠く。球形に近い胴部、強く括れた頸部、外反する口縁、小さな底部などを特徴とする。二重口縁部にはヘラないし刷毛状工具を斜めに突き刺したような刺突が連続する。二重口縁以下に続く口縁上部はヘラで横方向によく磨かれ、口縁下部から頸部にかけては縦に刷毛目が残る。頸部には刻目の付く凸帯が1本めぐる。肩部には平行沈線、波状沈線、平行沈線の順で施文される。そのほか全面に刷毛目が残る。底部は周囲が高く中央が窪んでおり、鉢型土器の1や9に共通する。色調は赤ないし黒味を帯びた橙色。7～9は大きさは異なるものの類似した椀状の器形の土器。まず9は、住居中央の土器溜まりから逆位で出土。底は1や6と同じく周囲が高い。内外に刷



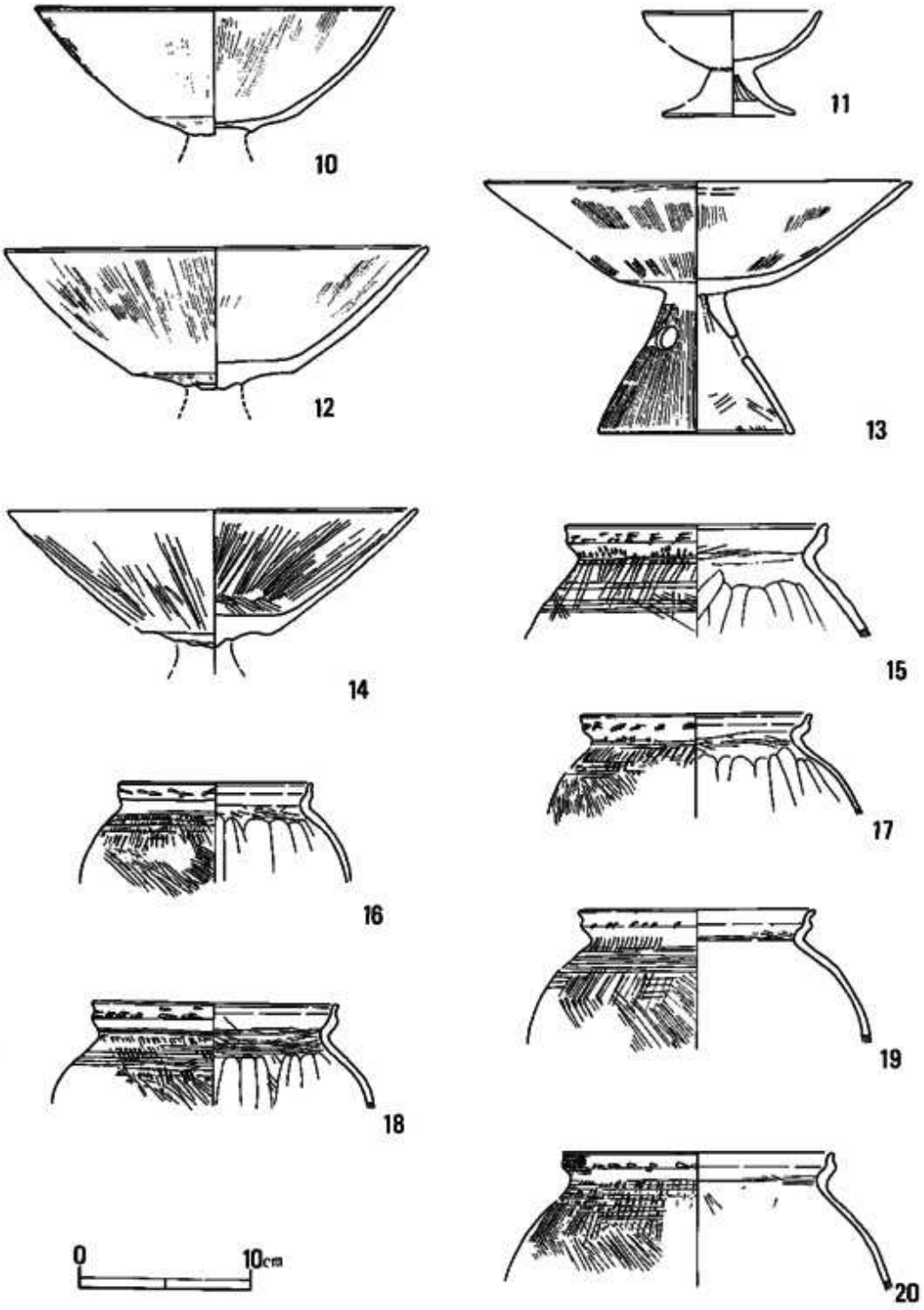
第23図　A区9号住居址実測図(1／60)

毛目痕が著しいが、内面には縦方向に指で成形したとみられる跡が残る。また口縁の外反部分も指で成形してある。色調はにぶい橙色。略完形で口径9cm、器高6.1cm。7と8はミニチュア土器で、器形は9によく似ている。特に7は手づくねの口径3.8cm、高さ3cmと超小型で、内外に指頭痕が残る。内面はわずかにヘラで調整してある。8は外面刷毛目で口径5.4cm、高さ4cm。いずれも略完形で、色調はにぶい橙色であるが8はやや赤味が強い。

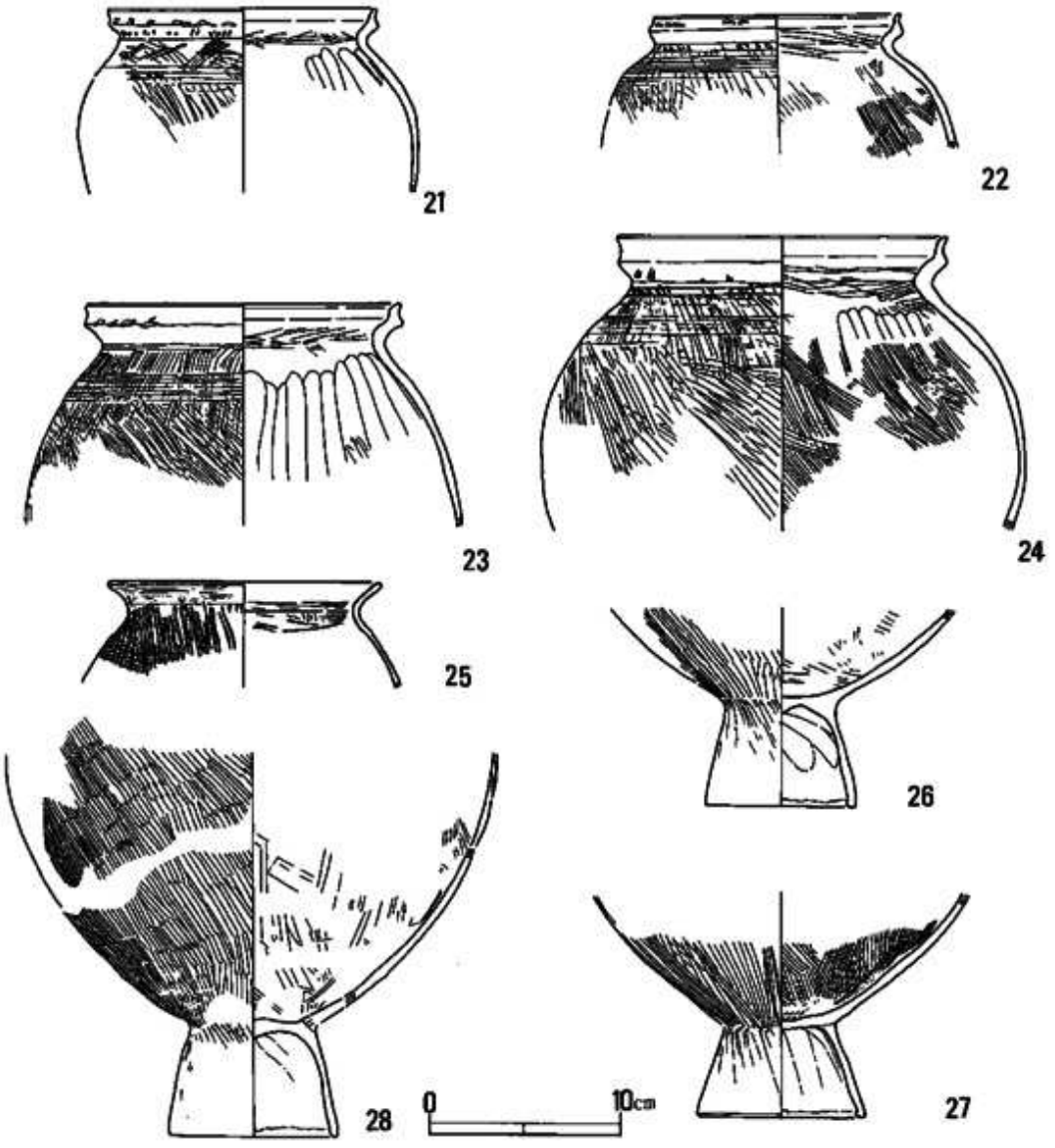
10～14は高坏形土器。10、12、14は坏部のみの破片。口径はそれぞれ20.7cm、24.5cm、23.8cmを測る。10が湾曲する器形であるのに対して14は直線的、12が中間タイプである。内外ともによく磨かれている。10がにぶい橙色、12、14が赤褐色。13はほぼ全形がわかる器形で、口径24.5cm、高さ14.5cm。11は全面よくヘラ磨きされており、赤褐色である。脚部に3孔がある。11は口縁を半分程欠く口径10.3cm、高さ6.1cmの小型の高坏。くすんだ橙色。



第24図　A区9号住居址出土土器①(1／4)

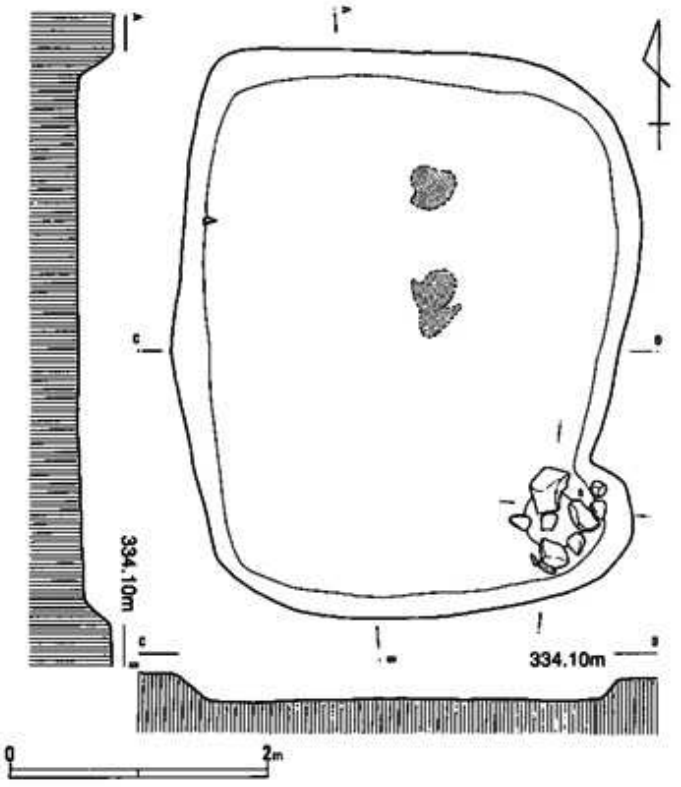


第25図　A区9号住居址出土土器②(1／4)

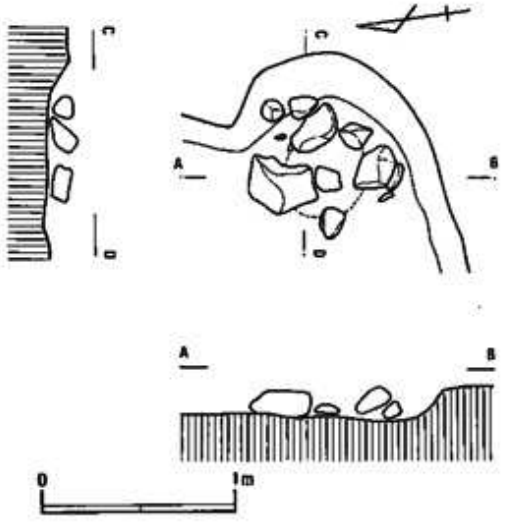


第26図　A区9号住居址出土土器③(1／4)

15～28は台坏甕の破片。完全に復元できたものはなく、特に胴部中位の破損が激しいことから、口縁を中心とした上部と脚部を中心とした下部の接合が難しい。15～24は上部破片で、S字状口縁をなすもの。いずれも肩部には斜め方向の刷毛目の上に、平行沈線がめぐっている。また口縁の屈折部には刺突や押し引き状の刻目ないし沈線が連続するのが普通であるが、24にはそれが見られない。内面には刷毛目や指によるものと思われる縦方向の整形痕が残っている。口径については大小があり、16が最小で11.2cm、24が最大で17cmと推定できる。25は同じ台付甕ながらS字状口縁ではないもの。肩外面の横刷毛目もないが、内面頸部には刷毛目がみられる。26から28は下半部の破片。色調はにぶい橙色を基調とするが、18は灰色味が強く、



第27図　A区10号住居址実測図(1／60)

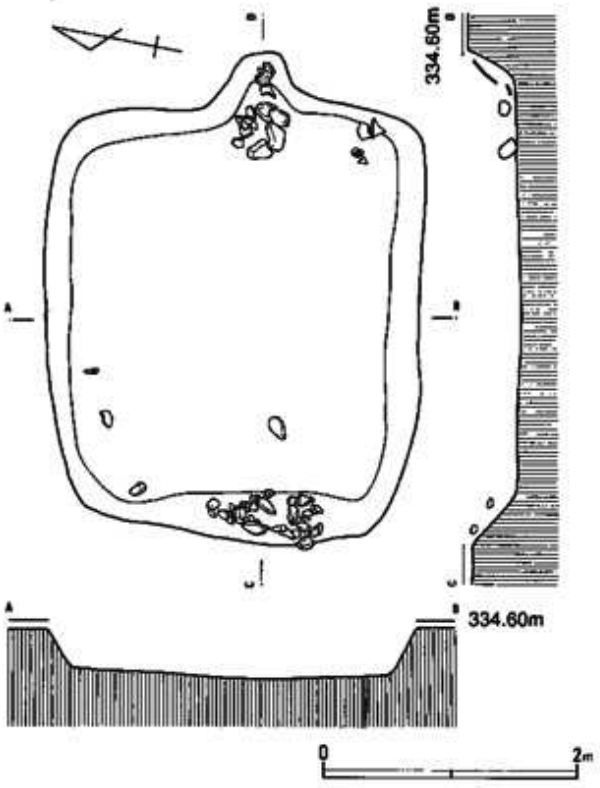


第28図　A区10号住居址カマド(1／40)

17は赤味が強い。

10号住居址（第27図、28図）

発掘区の最も中央に位置し、付近には住居はなく、最も近い6号住居まででも26m離れている。4.32m×3.5mの隅丸長方形の形状で、南東隅付近にカマドが設けられている。壁高15cm～25cmと浅いことから上部が削平されているものとみられる。カマドは石組であるが崩壊が激しい。燃焼部とみられる部分に焼土が少しながら見られた。床面中央は堅いがやや凹凸があり、壁際がやや深い。また中央付近には焼土が2ヵ所に見られた。柱穴や周溝は確認できなかった。出土遺物は、壁際から須恵器破片が1点出土したにすぎない。



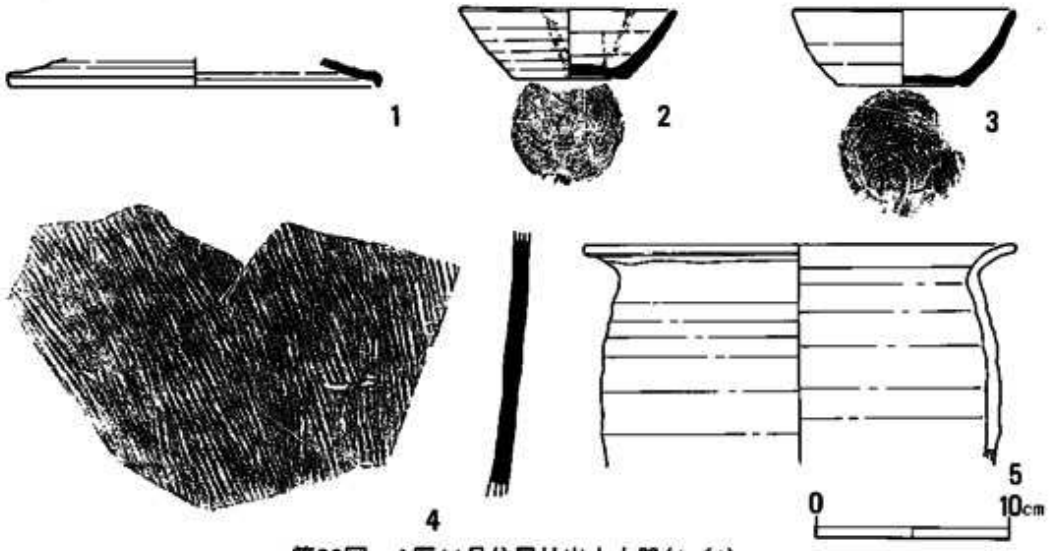
第29図　A区11号住居址実測図(1／60)

11号住居址（第29図）

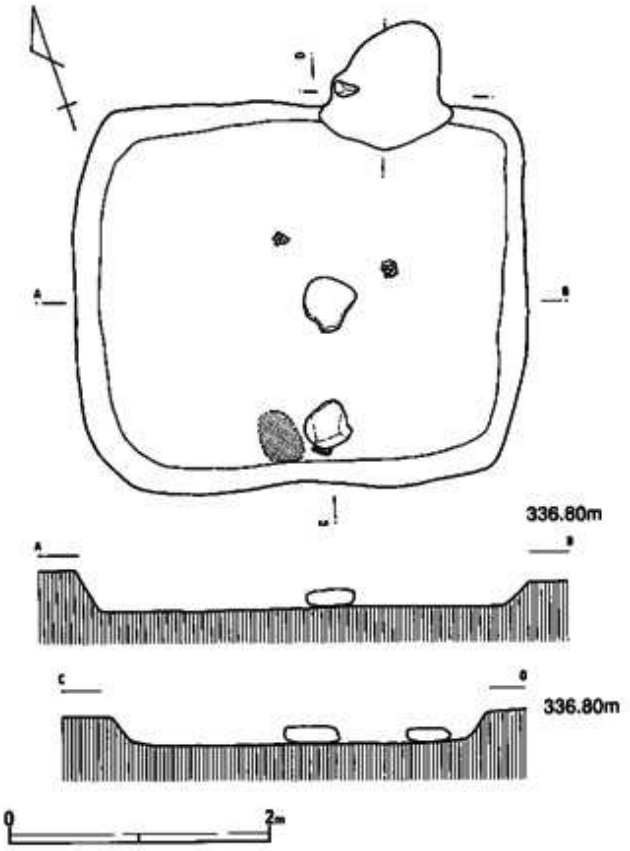
古墳時代の住居址9号の南約4mに位置するが、奈良・平安期の住居である7号からは16m ほど離れている。3.3m × 2.9m の隅丸長方形の住居で、確認面からの深さは35cm から40cm である。カマドは東壁のほぼ中央部に位置しているが、石組みは崩れて散乱している。煙道部から須恵器の大きい破片（第30図4）が壁の傾斜に沿った状態で出土した。また燃焼部からは土師器の甕破片（第30図5）が出土した。床面はやや凹凸があり、柱穴や周溝は確認できなかった。南東隅付近から須恵器の坏2点が出土した。

出土土器（第30図）

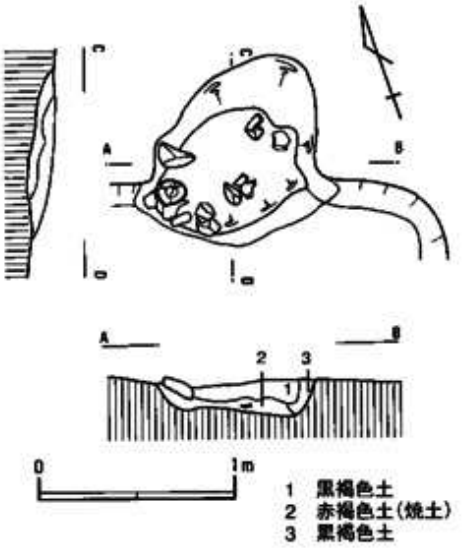
1は覆土から出土した蓋の破片。2と3は住居南東隅から出土した須恵器坏。2は口縁の一部を欠くが口径11cm、高さ3.6cm を測る。胎土に白色粒子を混入し、色調は赤褐色から灰色。3は2よりやや丸みがあり、底径のやや広い器形。4分の1ほどを欠くが口径11.3cm と復元できる。高さは3.8cm。くすんだ黄褐色で、胎土に白色や茶色の粒子を含む。4はカマド煙道から出土した須恵器甕の



第30図　A区11号住居址出土土器(1／4)



第31図　A区12号住居址実測図(1／60)



第32図　A区12号住居址カマド(1／40)

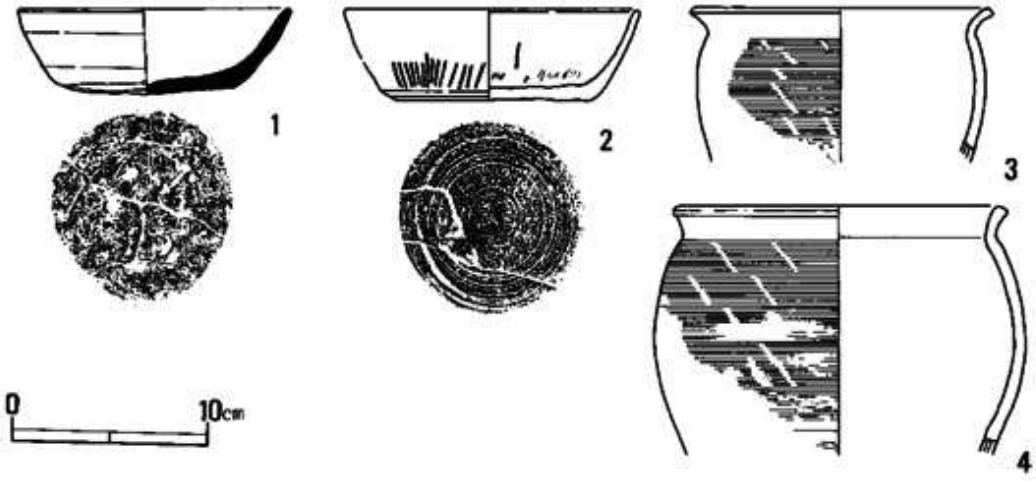
破片。5はカマド燃焼部から出土した土師器甕破片。

12号住居址（第31図、32図）

発掘区の西端近くに位置する。この一画には12号から15号住居がややまとまっているが、10号住居までの群とは離れている。3.45m×2.95mの方形に近い隅丸の住居。壁高は東壁で20cm、西壁で30cmである。床面は平坦で、中央と南壁際に平石が据えられていた。これらの石の表面は磨滅しており、作業台のような用いられ方をしたのかもしれない。南壁際の石近くには炭化材と焼土が確認された。床面から柱穴や周溝は検出できなかった。カマドは北壁の東寄りに設けられている。壁から60cmほど外側に掘込まれ煙道となっている。焚口部は住居内にあるものの、燃焼部は壁の外側にあたる。石組みはほとんど残っておらず燃焼部に焼土粒の混じる土層が堆積している程度。左袖部分から第31図1、2、4が、燃焼部奥から3の甕が出土した。

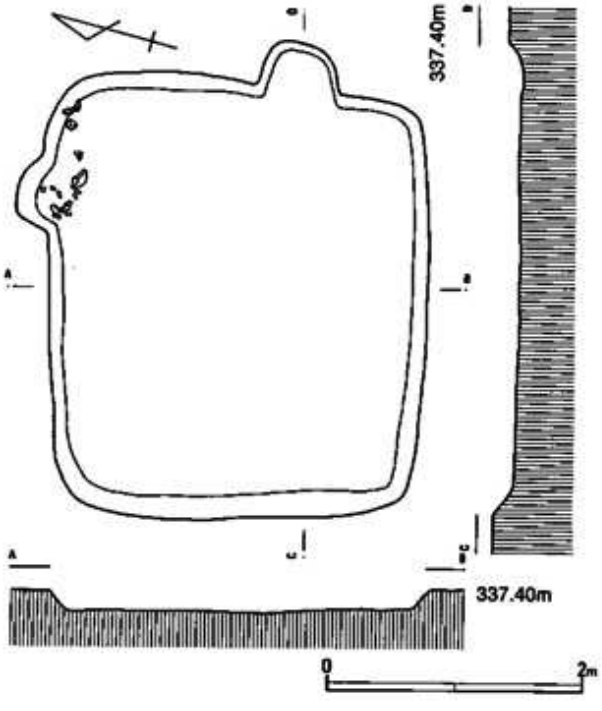
出土土器（第33図）

いずれもカマド内から出土したもの。1は須恵器坏。口縁の一部を欠くが口径13.8cm、高さ4.4cmを測る。底部周辺ヘラ削りされており、やや丸底気味。茶色味の強い灰色をしており、胎土には黒い砂粒が多い。2は1の近くから出土した土師器盤状坏。口縁の大半を欠くが口径



第33図　A区12号住居址出土土器(1／4)

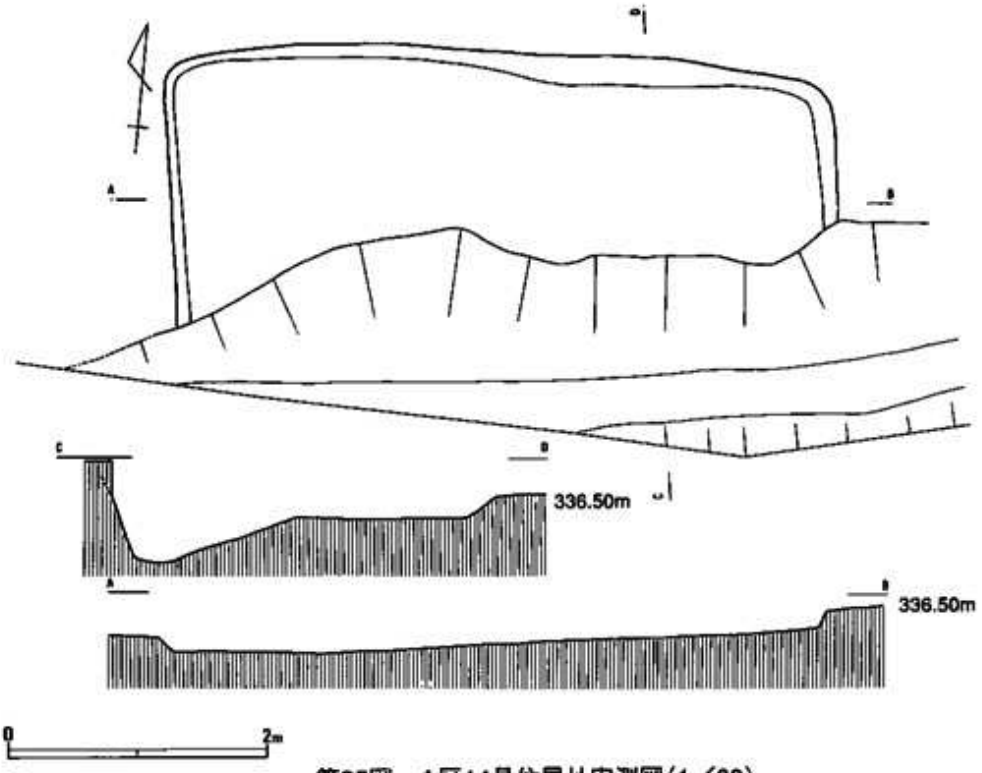
15.2cm と推測できる。底径10cm、器高4.6cm。黄褐色を呈し、胎土に赤色粒子を含む。外面および内面の下部にかすかにではあるが暗文が認められる。底部は回転ヘラ調整。3は燃焼部奥から出土した甕の小破片。4は1と重なって出土した甕破片。3、4ともに胴の張る器形で、全面にロクロ整形の櫛目がよく残る。色調赤褐色。



第34図　A区13号住居址実測図(1／60)

13号住居址（第34図）

発掘区の最も西端に位置する住居址。3.4m×2.9m の長方形で、深さ15cm程と浅いことから壁上部は削平されているものとみられる。カマドとみられる跡は東壁と北壁との2ヵ所にみられるが、いずれも燃焼部とみられる箇所にわずかな焼土がみられた程度である。石組みも残っていないが、北側ではわずかに礫が散乱していた。柱穴、周溝も全くない。土器は北カマド前面を中心に破片が出土したが図化できるものはなかった。ロクロ整形の甕胴部破片が中心であった。



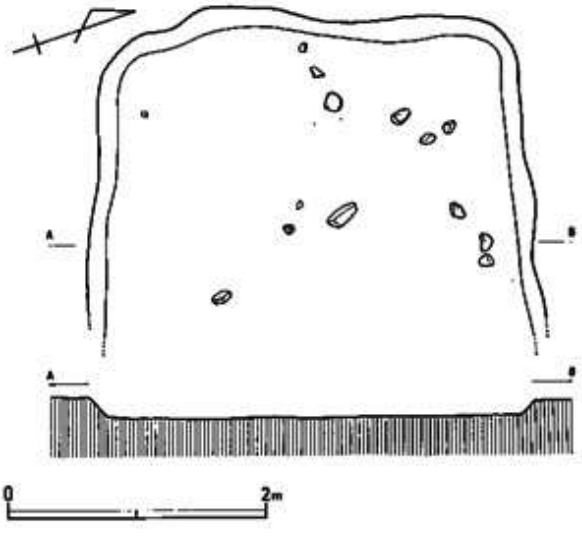
第35図　A区14号住居址実測図(1／60)

14号住居址（第35図）

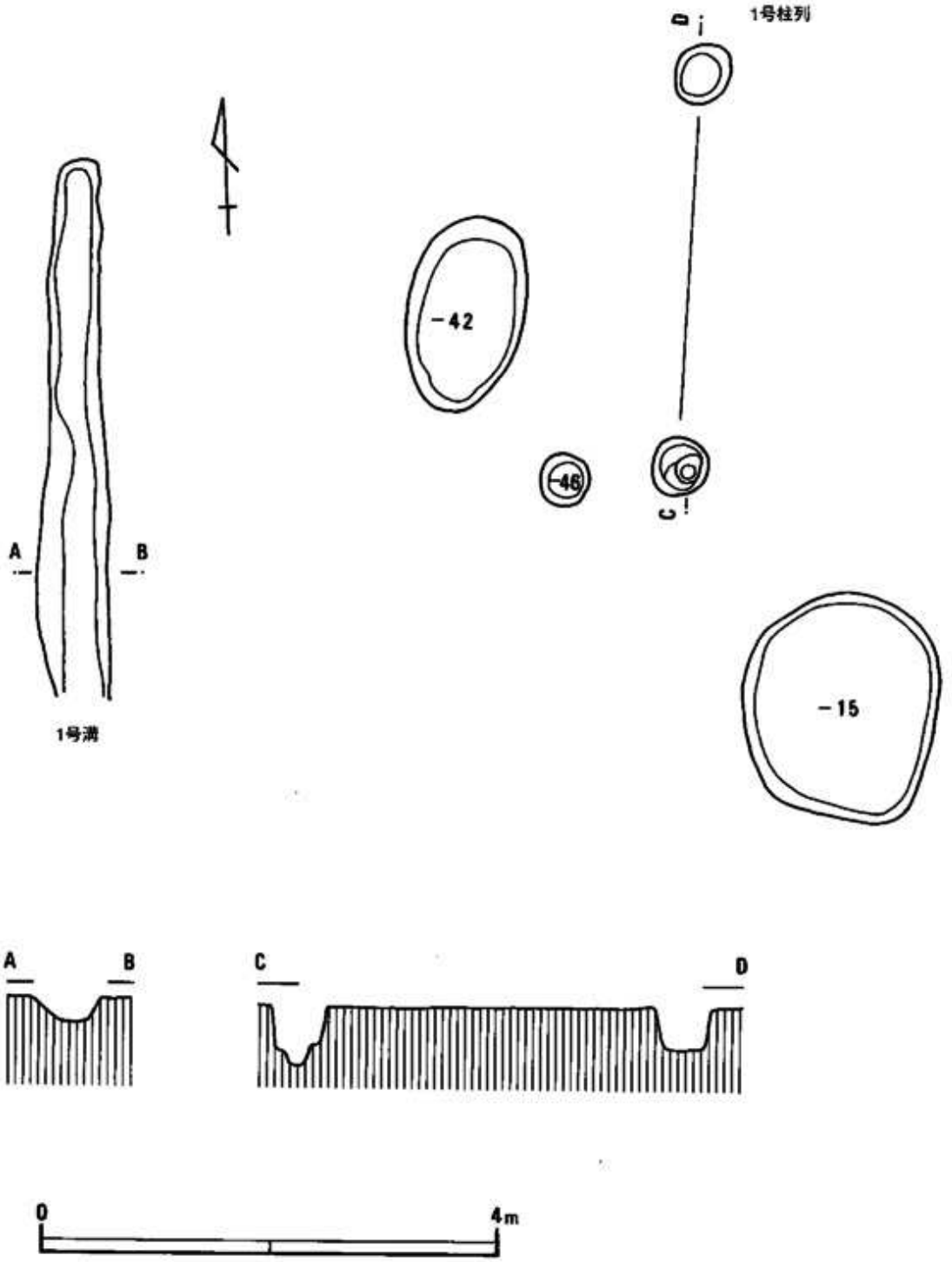
12号住居址の南東約16mに位置し、3号溝に切られている。3号溝の確認中に黒色の落ち込みがみつかったことから、住居の可能性ありとして調査を進めた。しかし、調査範囲の中ではカマド等の施設は発見されず、床面も堅くなく、遺物も全く出土しなかった。疑問があるが住居の可能性ある遺構として報告しておく。北辺5.1m、深さ15cmを測る。

15号住居址（第36図）

13号住居址の南東6 mに位置する。この一帯の掘込み面は礫が多く露出しており、このなかにわずかながら黒褐色の落ち込みが確認できた。しかし落



第36図　A区15号住居址実測図(1／60)

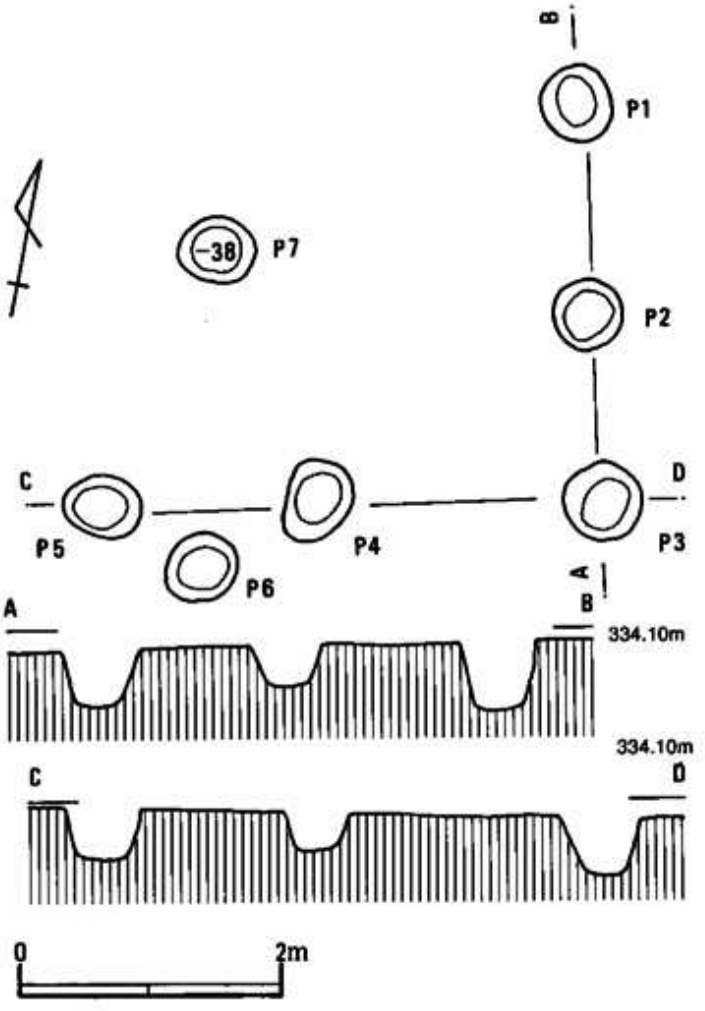


第37図　A区1号柱列・1号溝(1／60)

ち込みは浅く、特に東側の壁は削平されており、検出できなかった。中心軸3.4mほどの方形に近い平面形であろうか。床面には石が散乱していたが、カマドの位置は分からなかった。ロクロ整形甕破片を中心に土器細片が少量出土したが、図化の可能なものはない。

（2）柱穴列

3群が確認された。建物址のような配列にはないが、各小穴の覆土はしまりある黒褐色土であり、住居群と一体の遺構と思われる。出土遺物はなく、時代は不明であるが、古墳時代の住居区に集中することからこの時代の可能性がある。



第38図　A区2号柱列（1／60）

1号柱列（第37図）

1号および2号住居址の南5mに位置し、すぐ西には1号溝がある。直径40～50cm、深さ40～60cmの小穴3個からなるが、特に断面図に表わした2個の穴については、黒色のしまった覆土であり、集落を構成する何らかの施設と思われる。出土遺物はない。

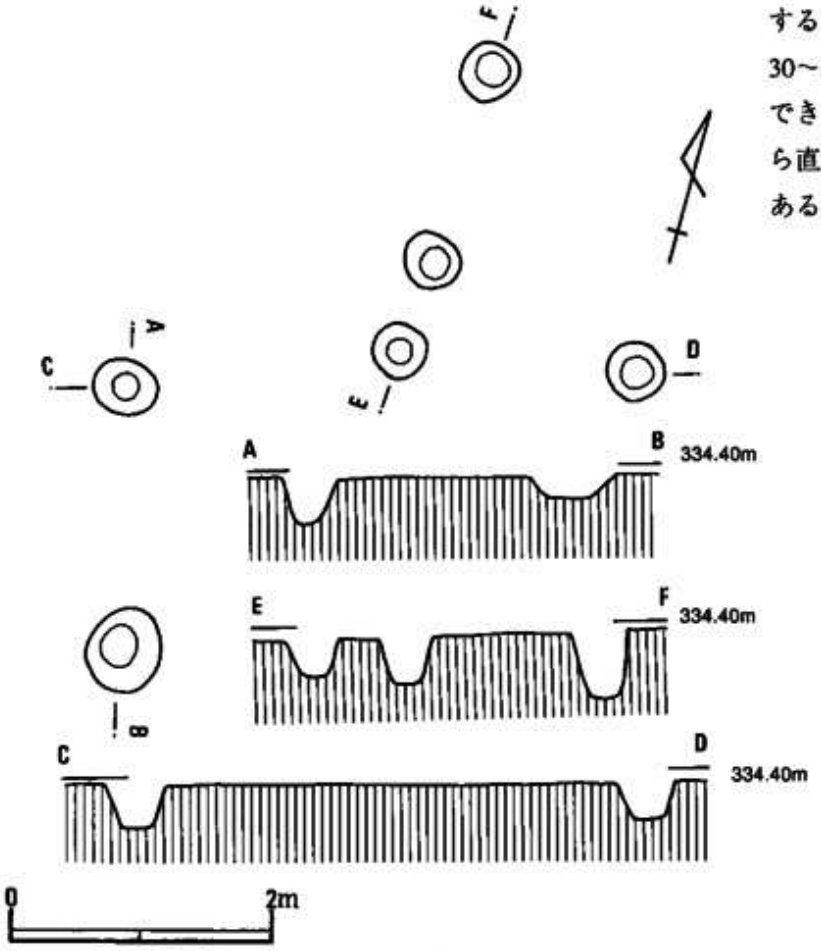
2号柱列（第38図）

5号住居址の東に接して位置する。直径40～60cm、深さ35～50cmの小穴7個が発見されたが、このうちのP1～P5の5個がL字状に規則的に並ぶ。遺構確認中に黒色のしっかりした落ち込みが並んでいる様子であったので、建物跡かと思い精査を続けたが、これ以上の穴は発見できなかった。ただし配列状況から柱列址とした。出土遺物なし。

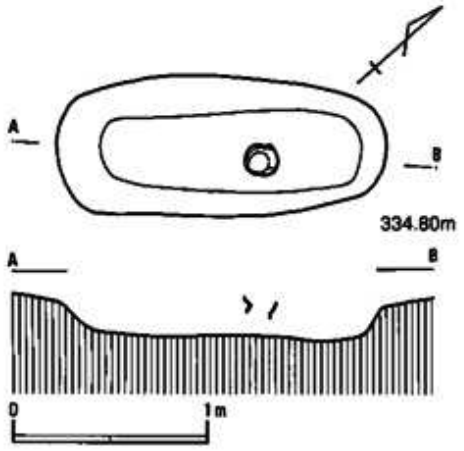
3号柱列（第39図）

9号住居址の南4mに位置

する。直径40～60cm、深さ30～50cmの小穴6個が確認できた。配列は不規則ながら直線的にまとまる部分もある。遺物なし。



第39図　A区3号柱列(1／60)



第40図　A区1号土坑(1／40)

（3）土坑

1号土坑（第40図）

古墳時代の住居群からは離れたB－10区に位置し、北東4ｍには奈良時代の6号住居址がある。170cm×72cm、深さ20cmを測る長円形の土坑。主軸はN－43°－Eと南北より東に振れている。長軸上やや北寄りの覆土中から甕形土器（第41図1）が逆位で出土した。これは下半部を欠くもので、頸部のゆるくくびれる器形。胴部外面には縦方向にうっすらと刷毛目が残る。口縁内面には横方向の刷毛目。口径16.2cmで、色調は濃い茶褐色。土器からみて古墳時代前期の遺構とみられる。

第41図　A区1号土坑・4号溝他出土土器(1／4)

（4）溝

9本が発掘された。時期は古墳時代から江戸時代まである。

古墳時代～奈良・平安時代	1号、2号、4号
奈良・平安時代～中世(?)	3号、5号～7号
江戸後期	8号、9号

1号溝（第37図）

1号住居址や1号柱列の近くに位置する。長さ5ｍ程が確認されたに過ぎないが、北から南に走り、末端は現在の水田に造成された段差で削平されてしまったものとみられる。幅35cm～60cm、深さ20cm程で、覆土は1号柱列と同様のしまった黒褐色土である。遺物なし。

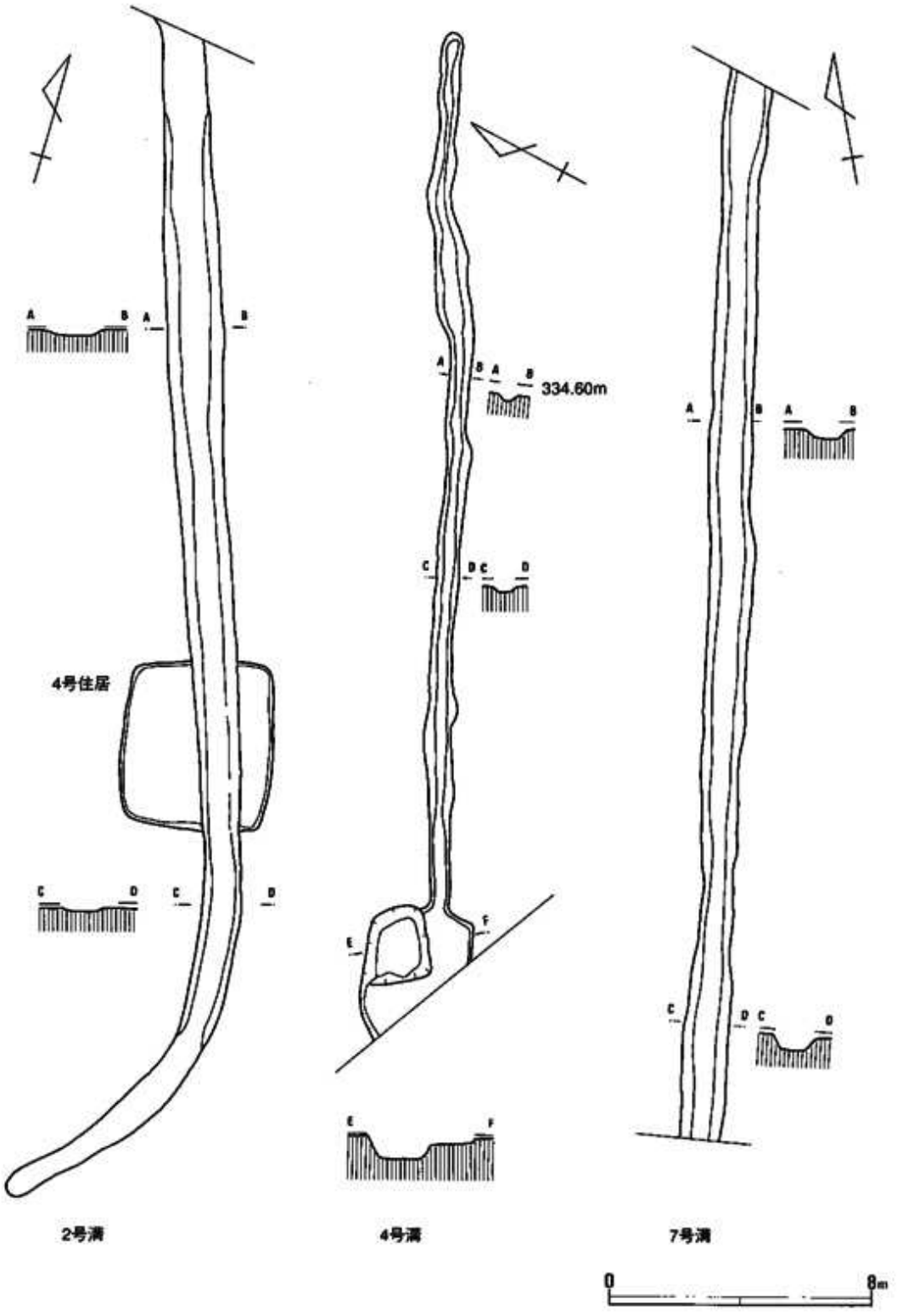
2号溝（第42図）

古墳時代の住居群内を北から南にカーブしながら走る溝で、4号住居の覆土を切っている。長さ40m程度が確認された。ただし深さは15cmから20cmと浅いことから、上部は削平されてしまったものとみられる。底面には酸化層がみられることから、水路であることは確実であるが、南側末端では消滅してしまう。北から南に流れており、レベル差は30cm程。本来はA区とB区の間の浅い谷に流れ込んでいたものとみられる。北側は調査区外に延びる。幅1mから1.6m。覆土中から古墳時代や平安時代の土器小破片が少量出土。

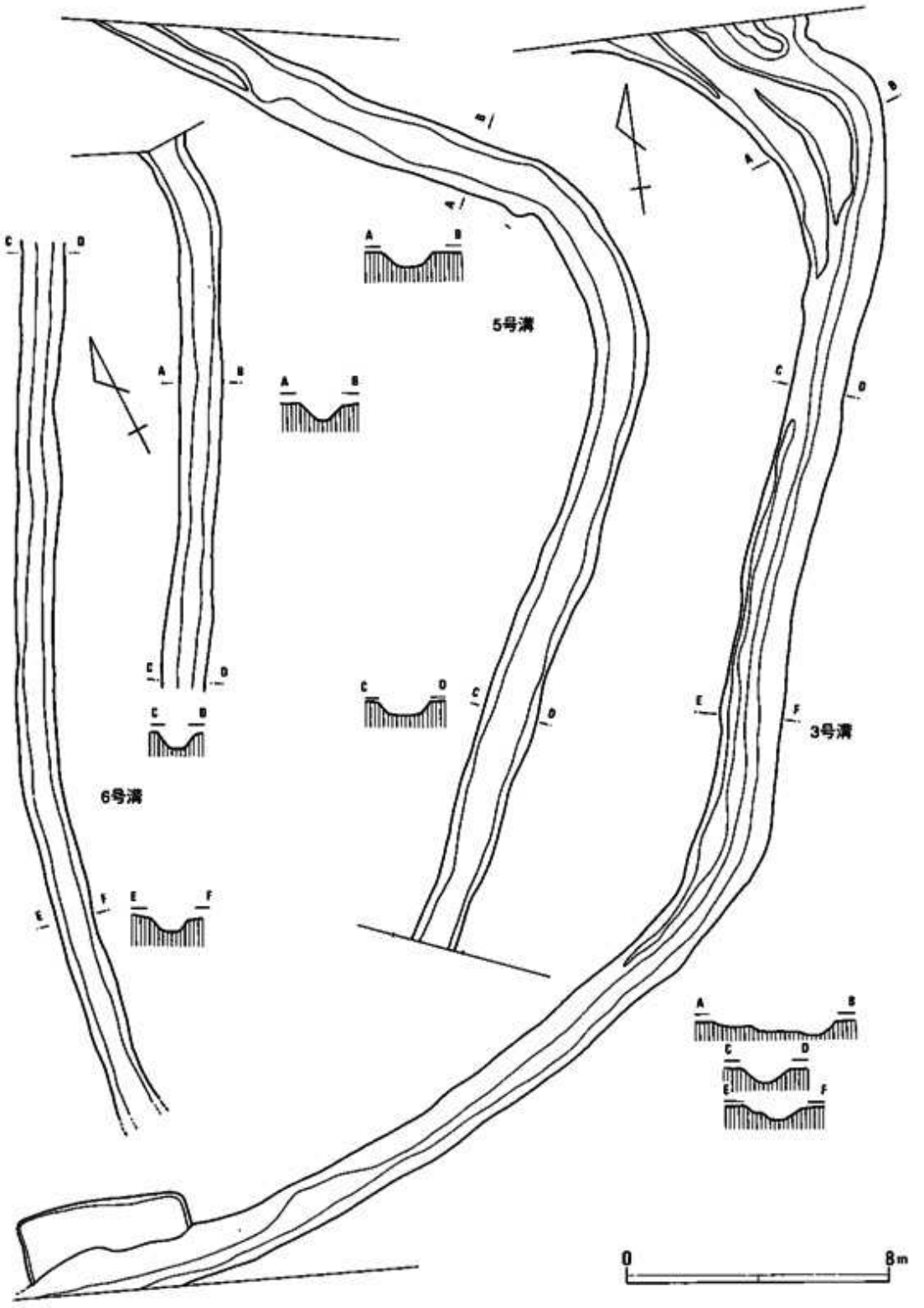
3号溝（第43図）

5号溝と6号溝との間に位置する。住居群とは離れているが、南西側で14号住居址を切っている。発掘区の外側にさらに延びており、一部が調査できたにすぎない。溝底のレベル差は10cm程度とわずかではあるが、南から北に傾斜しており、この方向に水が流れていたことが分かる。この溝は中央部分で大きく東に湾曲して流れており、尾根の等高線に沿って溝が掘られたものと考えられる。幅1.4～1.8m、深さ40cmの規模であるが、北側屈曲部では4ｍ程の幅に水流の跡が広がっている。

覆土中位以下には砂利が堆積しており、相当の水量が流れた時期もあったと思われる。北側のカーブ箇所では溝幅が広がっており、水流の位置が変化しながら流れていたことが分かる。溝の時期については、出土遺物が土師器の小破片であること、6号溝は江戸後期の水田下に延



第42図　A区2号・4号・7号溝実測図(1／200)



第43図　A区3号・5号・6号溝実測図(1／200)

びていること、などから平安時代に開削されその後も一定期間機能していた水路ということができよう。性格の似た3、5、6、7号溝の4本に共通する時期と機能の溝とみられる。ただしこの4本の溝の構築時期については相前後するものであろう。ちなみに3号溝は14号住居址を切っており、14号よりは新しいことになるが、この住居の時期は不明である。

なお4本の溝に共通して、南から流れてきた水は最終的には北側の谷に落ちていたものとみられる。この谷は戦国期に新たに開削された御勅使川ではなく、古くからある割羽沢川の流路であったと考えられる。

4号溝（第42図）

東側住居群内を、他の溝とは異なり西から東に走っている溝。西と東との底面のレベル差は30cm余りである。西端に3.2m×4m以上の隅丸長方形状の落ち込みがあり、その東辺から幅50cm～1m、深さ20cm程度の溝が続いている。長方形状の落ち込み内には黒色土とともに拳大の礫が多く入っており、底にいくに従って地山層との区別が困難であった。最も深い箇所で70cm近かったが、底面は凹凸がある。溝中には黒色土が堆積していたが、砂や砂利は認められなかった。周辺には礫も多かった。覆土中から古墳時代や奈良・平安時代の土器小片が少量ながら出土した。第41図2は須恵器坏破片。

5号溝（第43図）

3号溝の東約20mに位置する。幅1.4m～1.8m、深さ40～50cmと3号溝に類似する。北側と南側との底面のレベル差は8cm程である。北流してきた溝は、3号と同様に途中から北西に急カーブするが、やはり等高線に準じているからであろう。覆土中には砂利が堆積している。

6号溝（第43図、付図1）

3号溝の西約25mに位置する。発掘区の南端では江戸後期の水田跡の下に位置しており、完全には調査しなかった。奈良時代の住居である12号址が西80cm程に位置する。

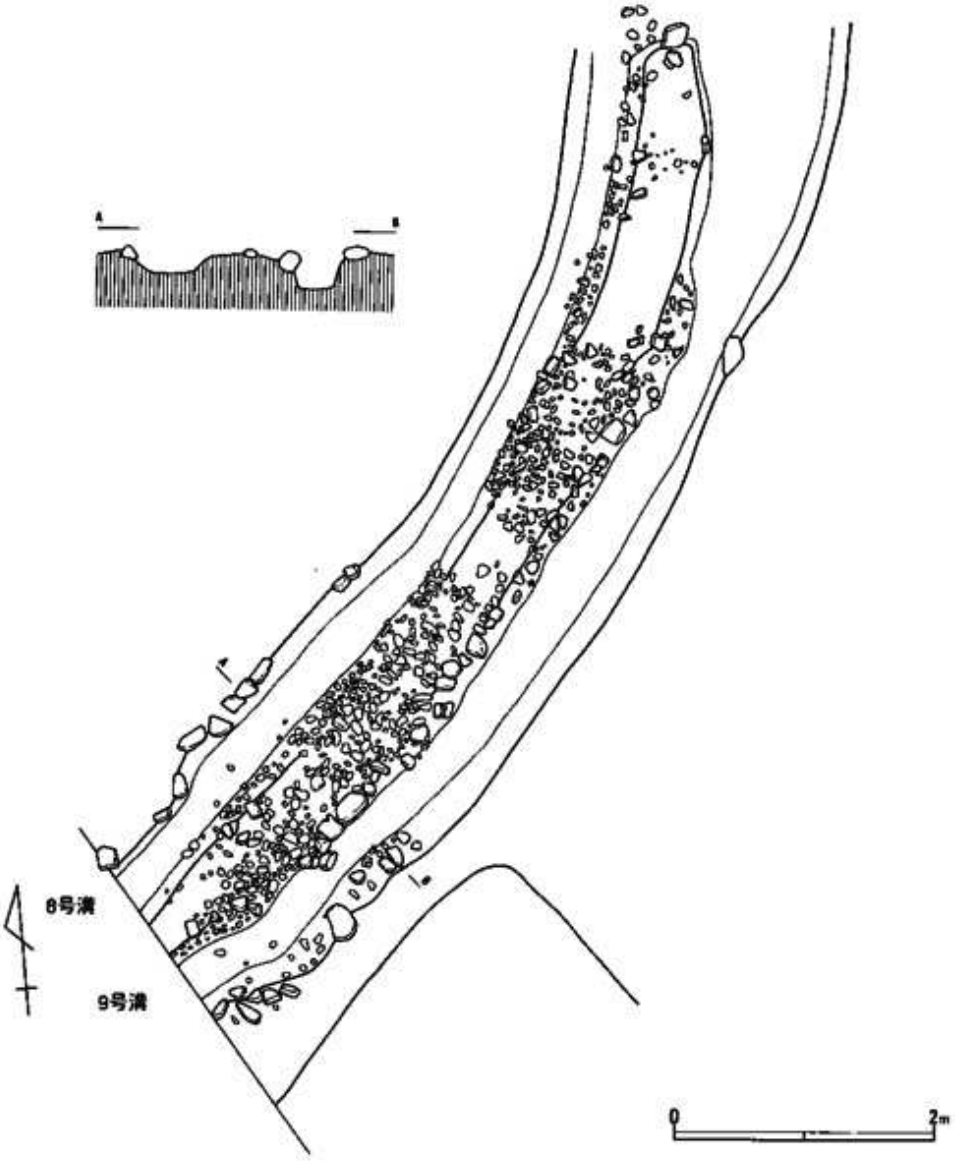
幅1.2m～1.4m、深さ40cm～50cmの溝で、覆土下部には砂利が堆積している。南側と北側のレベル差は40cm程である。

7号溝（第42図）

3号、5号、6号溝とは離れた東側住居群内にある溝。底部付近には細かい砂利が堆積しており水が流れたことは確かである。南側と北側との底のレベル差は8cmである。幅1m～1.4m、深さ30～40cm。

8号溝、9号溝（第44図）

発掘区南西端に位置し、層位からみても水田址と一体になった江戸後期の水路で、2本が平行して走っている。水の流れる方向は北東から南西であり、本御勅使川水系から取水した水田



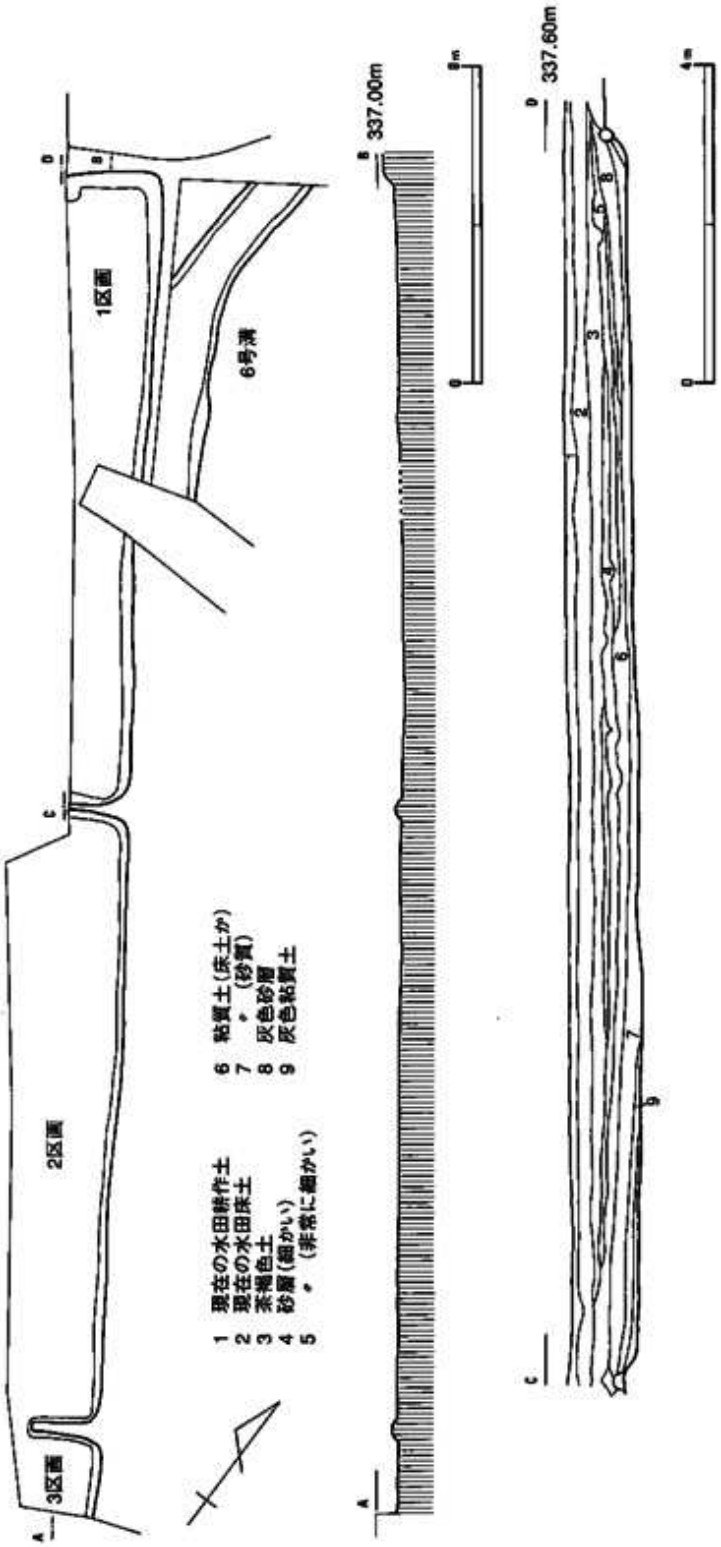
第44図　A区8号・9号溝実測図(1／60)

用水路と思われる。この2本の中間は低い土手になっており、石が突固められたような状況である。8号は幅50～60cm、深さ15cm、9号は幅50～80cm、深さ25cmほどである。

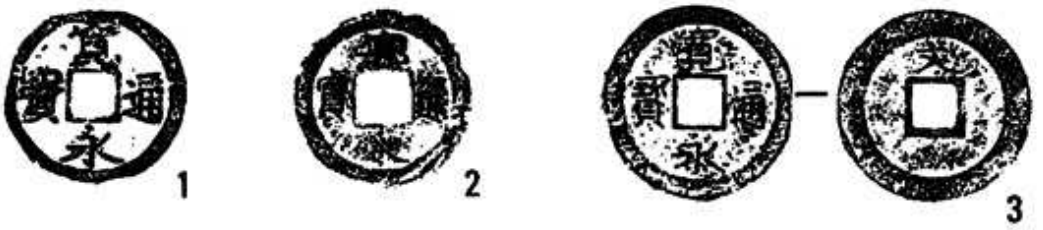
9溝に続く東側の石列から、寛永通宝1枚（第46図1）が出土した。他にも染め付け磁器小破片が数点ある。なお、第46図3の寛永通宝は古墳時代の住居が密集するB－6区の遺構確認中に出土したものである。

（5）水田址（第45図）

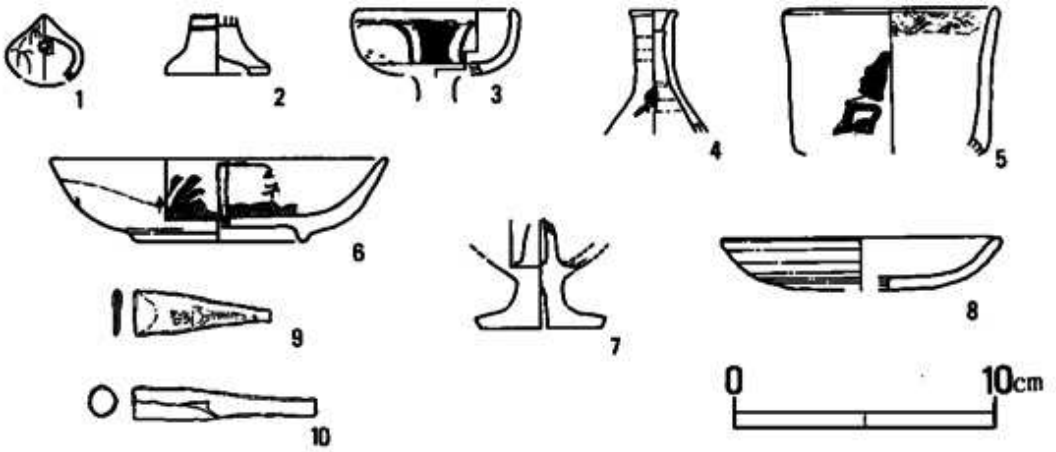
発掘区の南西隅から水田址3面が検出できた。ただし西側に現在の主水路が走っていることから拡張はできず、わずかな面が調査できたにすぎない。水田は灰色の砂質粘土中に作られており、内部には非常に細かい青色砂が堆積していた。北側から1区画、2区画、3区画と名付けた。いずれも水田の東辺が調査された程度であるが、1区画の東辺は16m、2区画の東辺は15.7mを測る。3区画はコーナー付近が調査されたにすぎない。1区画砂層中から江戸後期とみられる染め付け磁器破片が1点出土（第47図2）。仏飯器の破片であろう。また水田下には6号溝が走っており、水田と6号溝との間層からは内耳土器破片や陶器が少量出土した。中世のものとみられ、この時期の水田もあった可能性がある。



第45図　A区水田址実測図（1／200・1／100）



第46図　A区・B区出土古銭(1／1)



第47図　A区・B区近世遺物(1／3)

第2節　B地区の調査

本地区からは次の遺構が発見された。

住居址　24軒（奈良～平安時代）
土坑　3基（奈良～平安時代）
溝　9本（奈良・平安時代），3本（江戸時代）
縄文晩期鉢形土器　1

以下、遺構順に記載する。

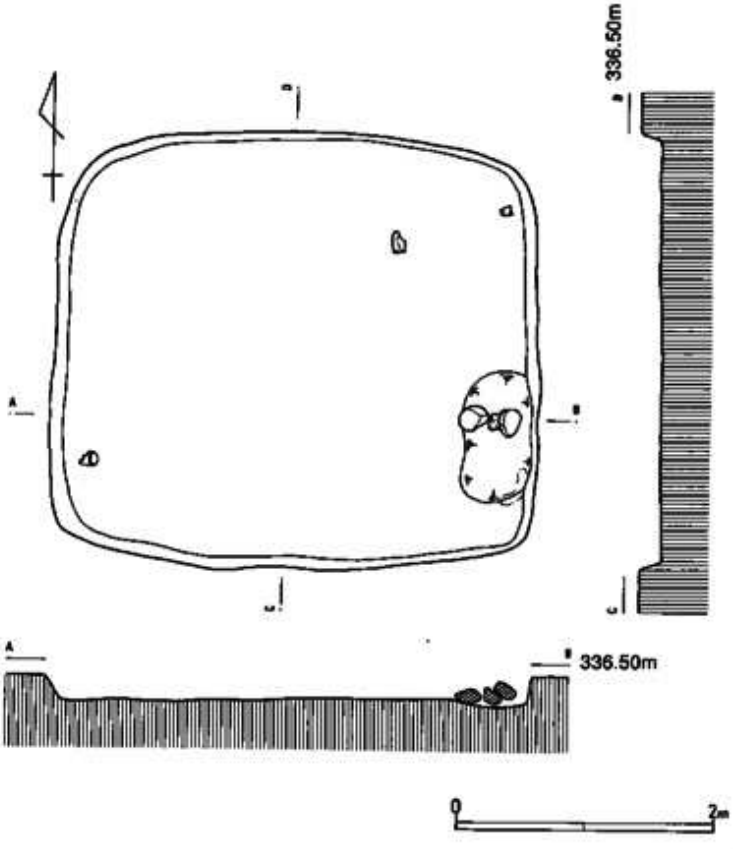
（1）住居址

1号住居址（第48図）

発掘区西にまとまる一群の住居の一つで、西壁側で2号住居址と近接する。東西軸3.75m、南北軸3.3mの隅丸長方形の住居で、壁高15cm～20cmと浅いことから上面が削平されているものとみられる。東壁の南コーナーよりにカマドがあるが、浅い掘込みと石3個が確認されただけである。床面はやや凹凸あり、あまり堅くない。床面に接して須恵器が4点出土した。柱穴や周溝はない。

出土土器（第49図1～3）

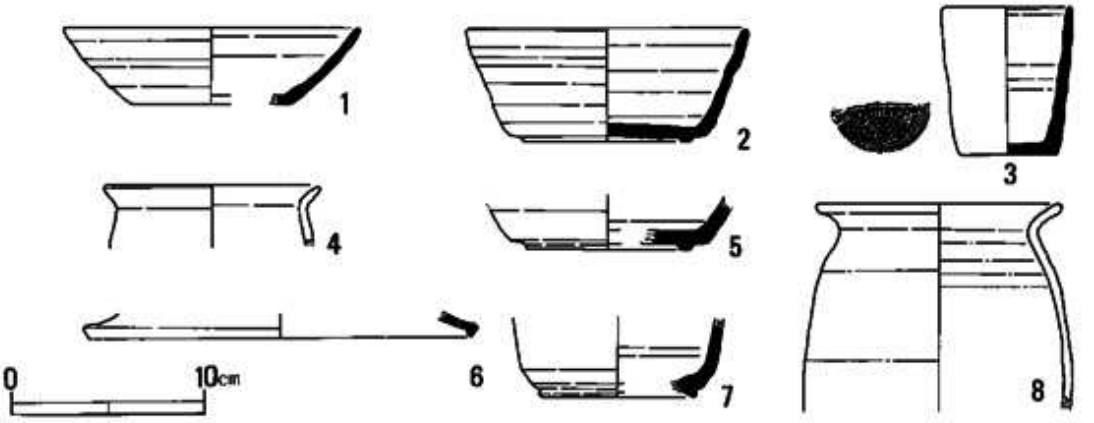
1は4分の1程の須恵器坏破片。2は南西隅付近の床面から出土した、高台坏破片。器高は5.8cmであり、口径は14.2cmと推定できる。底部中央には回転糸切り痕が残るが、周辺はヘラで削られている。胎土に細かい白色粒子を混入する。3は北東コーナーの床面から出土したコップ形をした須恵器の2分の1破片。口径6.5cm、器高7.5cm。底面には回転糸切り痕。



第48図　B区1号住居址実測図（1／60）

2号住居址（第50図）

1号住居址の西に近接する。遺構の大半は南西側の調査区域外に延びることか



第49図　B区1号(1～3)・2号(4)・4号(5)・5号(6～8)住居址出土土器(1／4)

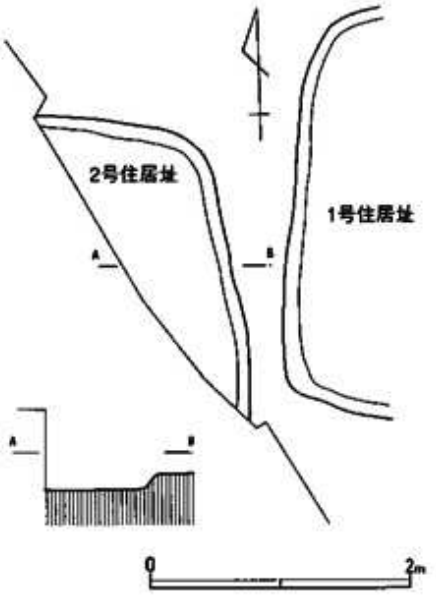
ら、北東隅が調査できたにすぎない。土器も覆土から小破片が出土しただけである。

出土土器（第49図4）

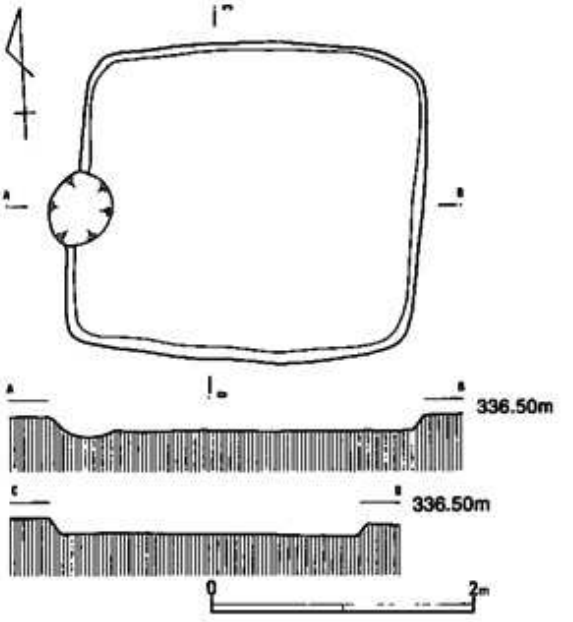
4は小型の甕の口縁部小破片。口径10.8cmと推定できる。色調赤褐色で、胎土には金色の雲母を含む。内面にのみうっすらと刷毛目状の痕が残る。

3号住居址（第51図）

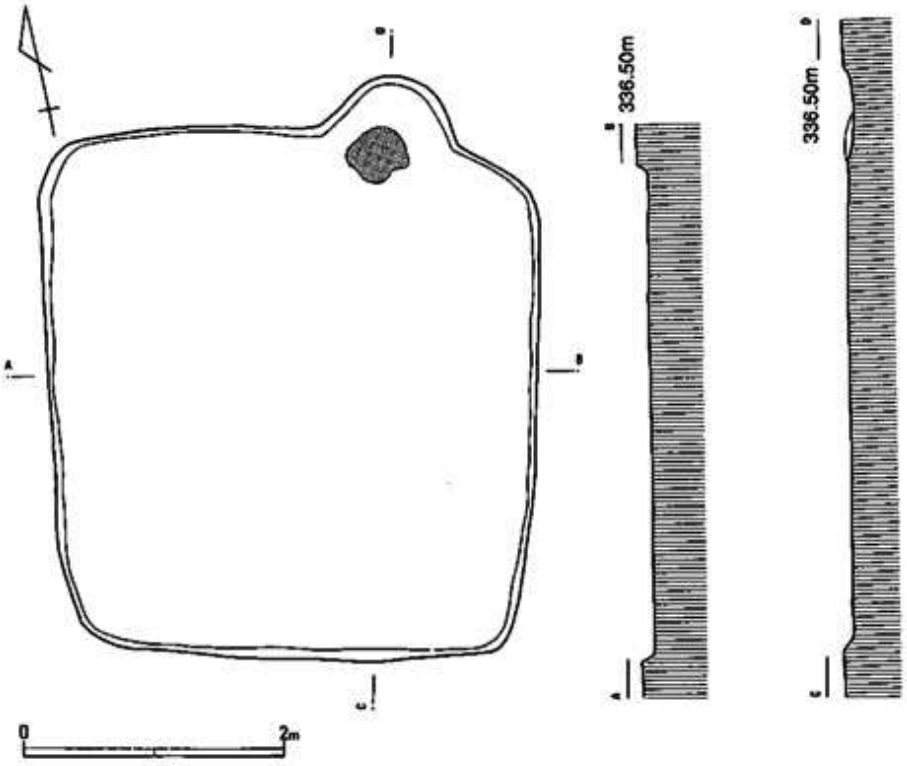
1号住居址の北10mに位置する。2.65m×2.45mを測る小型の長方形の住居址。やはり上面は削平されており、検出面から床面までは13cm程と浅い。カマドは西壁中央に位置していたと思われ、この部分が窪んで焼土が少し見られた。柱穴や周溝はない。遺物については鉄製品1点が出土した以外は、土器小片が数点みられた程度。



第50図　B区2号住居址実測図(1／60)



第51図　B区3号住居址実測図(1／60)



第52図　B区4号住居址実測図(1／60)

出土遺物

第106図5は床面から出土した鉄製品。幅6mm、厚さ3mm程の細い鉄板を中央で折曲げた、毛抜き状の製品。先端は欠けているが両端とも内側に曲がりかかっている。

土器には図示できるようなものはなかったが、赤褐色をして金色の雲母を含む刷毛目のついた甕破片が出土している。

4号住居址（第52図）

3号住居址の東1ｍに位置する。住居上面はほとんど削平されており、すぐに床面およびカマド燃焼部とみられる焼土が現われた。4.05m×3.8mの長方形状のプランと思われる。北壁の南東コーナー寄りにカマドが設けられていたとみられる。柱穴や他の施設は発見できなかった。

出土土器

第49図5はカマドとみられる焼土中から出土した須恵器高台坏破片。底面はよく整形され、この部分では糸切り痕は残っていない。

5号住居址（第53図）

1号から4号までの一群と5号から8号までの一群とはやや離れているが、この5号と4号

との距離は約20mである。本址はカマドとみられる焼土の堆積した浅い落ち込みから判断したものである。確認面のしみ状のひろがりから北カマドを持つ住居の残存とみなした。焼土部分から須恵器破片や甕破片が少量出土した。

出土土器（第49図6～8）

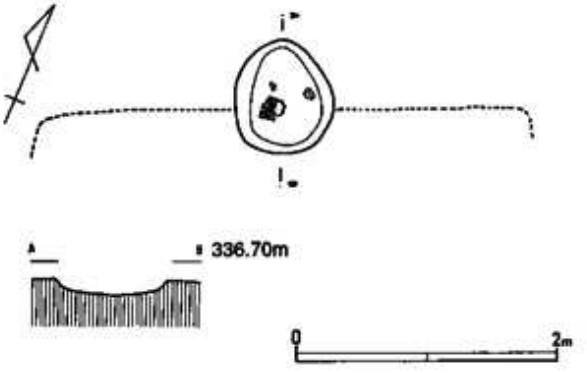
6は須恵器蓋小破片。磨滅が激しい。7は須恵器高台坏破片。底部付近はヘラで削られ丸みがある。8はロクロ整形甕の破片。

6号住居址（第54図、55図）

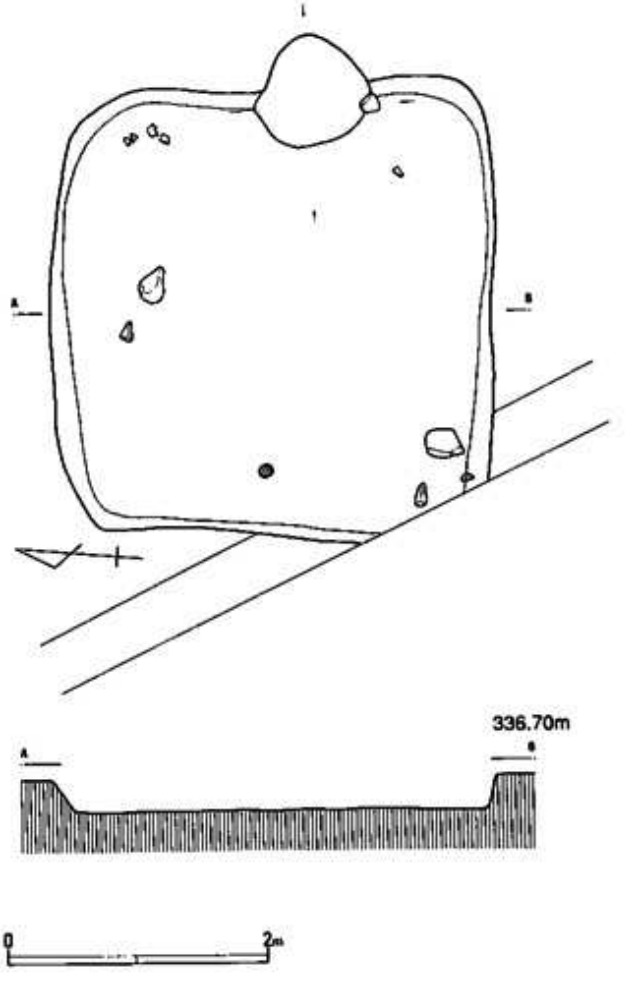
5号の北西4mに位置し7号と並んでいる。東西軸3.55m、南北軸3.4mとほぼ方形の住居。南西隅は道路際まで延びており発掘できなかった。壁高は25cm程。カマドは東壁中央のやや南よりに位置する。右袖には芯の石が1個残っていたが、他には認められなかった。燃焼部最下層には焼土が厚く残っている。柱穴やその他の施設は見あたらなかった。

出土土器（第56図）

1は西壁中部付近から床面より4cmほど浮いて出土した須恵器長頸壺の頸部分破片。自然釉がかかり、胎土に白色粒子を含む。2は覆土から出土した須恵器鉢形土器の口縁部4分の1破片。口縁内面はわずかに立ち上がる。白色粒子を含む。3～5は須恵器甕の破片。3は口縁で白味の強い色調。6は口径10.8cm、器高4cm程と推測される土師器坏。底径は5.8cm。橙色をなし内面暗文、外面

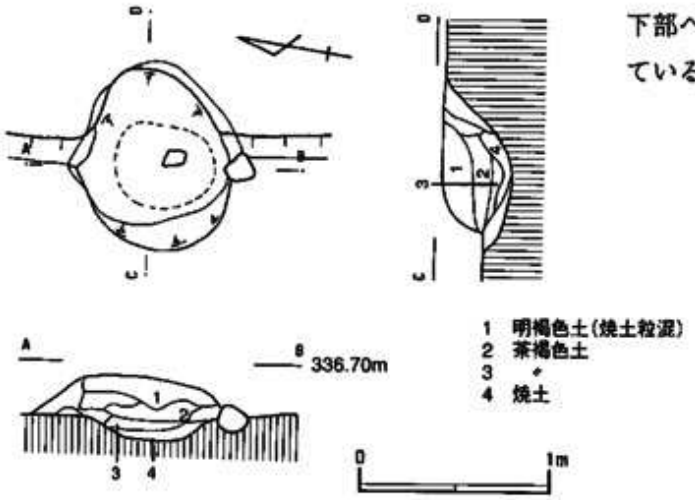


第53図　B区5号住居址実測図(1／60)

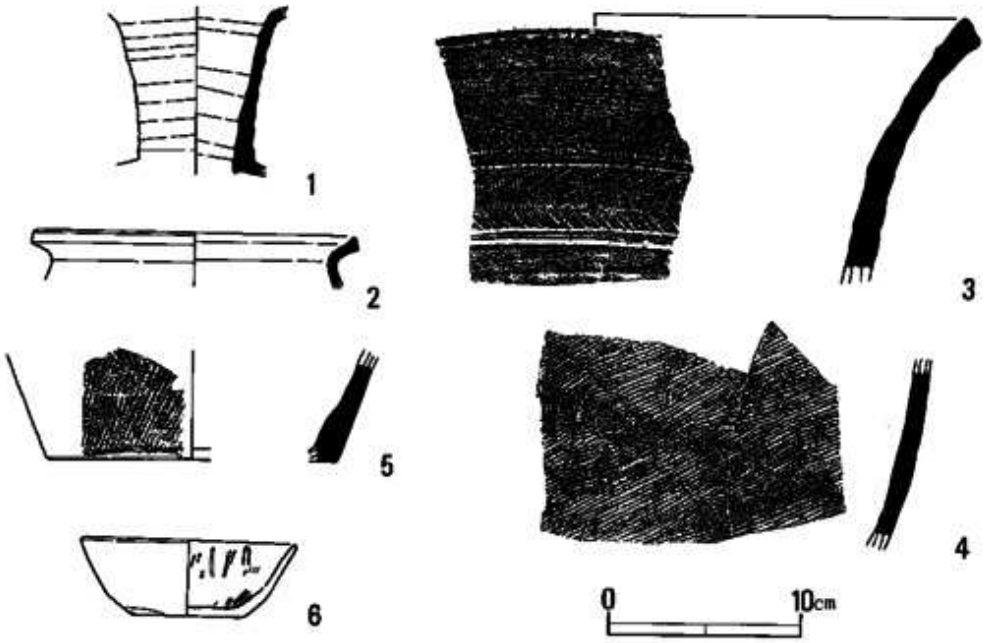


第54図　B区6号住居址実測図(1／60)

下部ヘラ削り痕あり。底も良く整形されている。



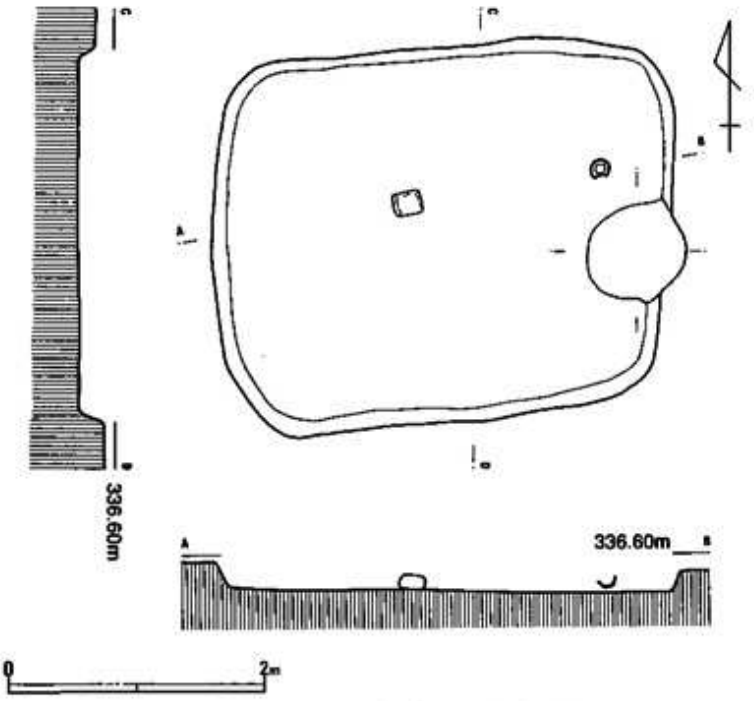
第55図　B区6号住居址カマド(1／40)



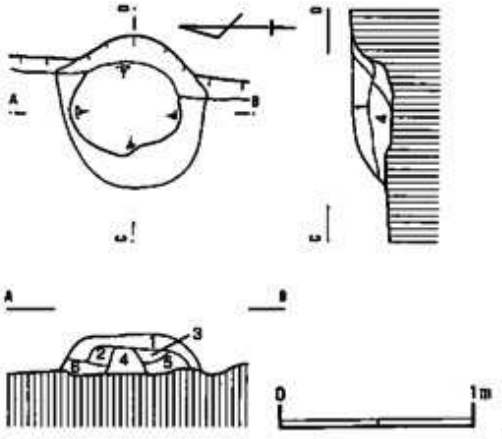
第56図　B区6号住居址出土土器(1／4)

7号住居址（第57図、58図）

6号住居址の北1.5mに軸を同じにして並んでいる。東西軸3.5m、南北軸2.9mの隅丸長方形の住居。壁高は20cm程度が残る。東壁のやや南東隅寄りにカマドが設けられている。カマドには石は残っておらず、また燃焼部の掘込みも少ない。燃焼部の焼け具合は少ないが、1層には焼土粒が多く含まれる。床面は平坦でしまり強く、検出は容易であった。柱穴等の施設は見当たらなかったが、床面中央部のやや北壁寄りに平石が据えられていた。カマドの北側では床面からやや浮いて第59図2の土師器坏が出土した。



第57図　B区7号住居址実測図(1／60)



第58図　B区7号住居址カマド(1／40)

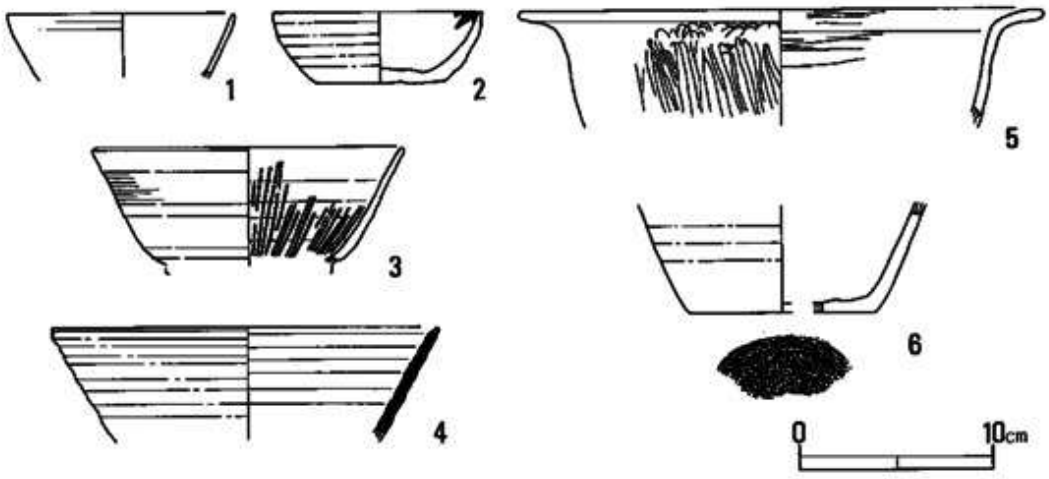
1　褐色土(焼土粒)　4　黒褐色土(　〃　)
2　黒褐色土(　〃　)　5　〃
3　褐色土(　〃　)　6　明褐色土

出土土器（第59図）

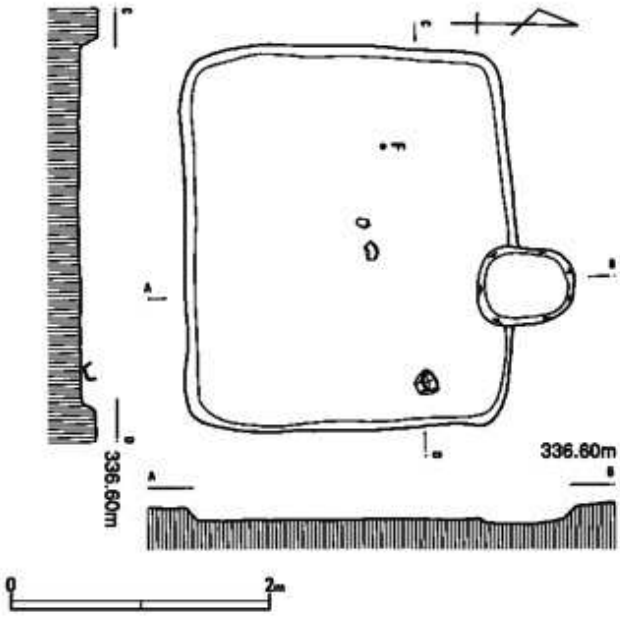
1は土師器坏の口縁部破片。口径11.3cmと推定できる甲斐型坏であるが、器面は荒れており調整痕は観察できない。にぶい橙色。2は丸みのある器型の坏。口縁の一部を欠くだけで、口径10.8cm、底径6.5cm、器高3.7cmを測る。外面にはロクロ成形痕が残るが、底面には糸切り痕は残っていない。口縁部には煤が付着。色調は黄色味のつよい橙色。3は土師器高台付きの坏破片。外面ロクロ成形痕、内面縦方向の暗文。口縁部がやや外反する器形。推定口径15.8cm。色調はにぶい橙色。4はカマドから出土した須恵器破片。おそらく高台坏であろう。5もカマドから出土した甕小破片。内外面刷毛目の残る茶褐色の土器。金色雲母混入。6はロクロ整形の甕の底部破片。回転糸切り痕が残り、黒褐色を呈する。

8号住居址（第60図）

7号住居址の北2mに位置する。東西軸2.95m、南北軸2.55mの東西にややながい長方形の住居。北壁のやや東寄りにカマドが設けられている。壁高10～15cmと浅く、カマドも焼土が表われていたことから、住居の上部はすでに削平されてしまったものであろう。カマドは焼土と浅い掘込みが確認できただけで、残存状況は悪い。床面は平坦でしまりあり、確認は容易であった。床面より3～5cm浮いて土器類と鉄製品が出土した。柱穴や周溝は確認できなかった。



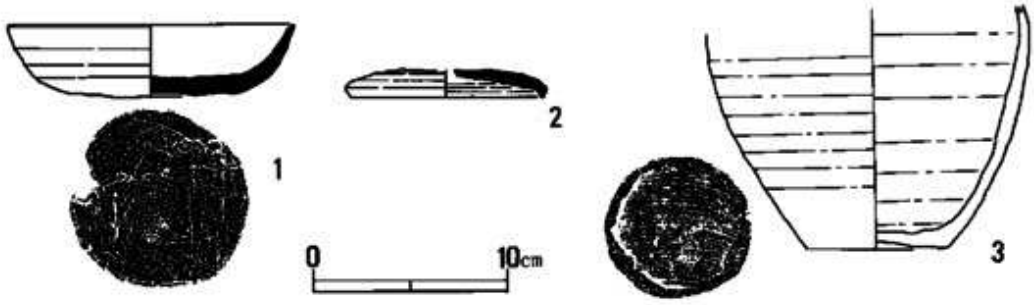
第59図　B区7号住居址出土土器(1／4)



第60図　B区8号住居址実測図(1／60)

出土遺物（第61図、106図）

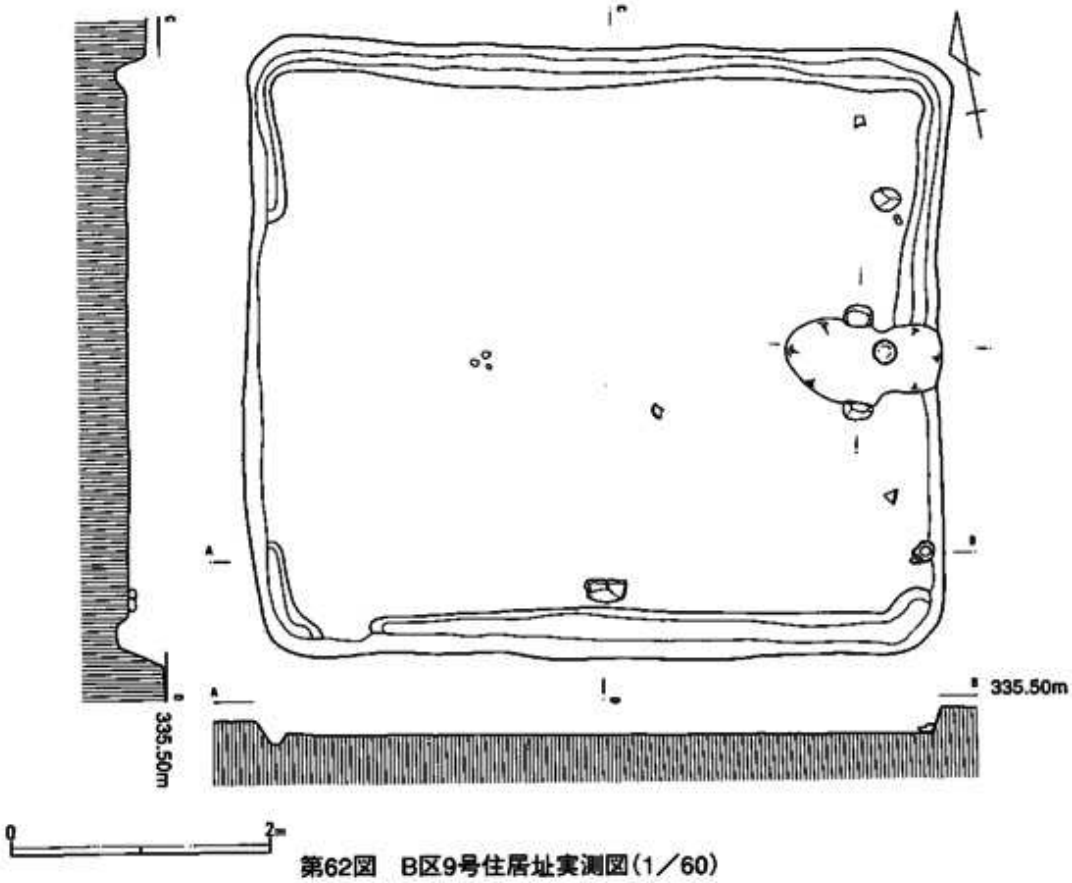
第61図1は床面ほぼ中央から出土した。口縁の多くを欠くが口径14.5cmと復元できる須恵器坏。底面中央に回転糸切り痕が残るが、周囲はヘラで削られ整形されている。器高3.7cmと丸底気味の浅い器形である。胎土に白色粒子を含む。2は須恵器蓋破片。端が内湾する器形で口径9.8cmと推測できる小型品。3は北東隅近くから出土したロクロ整形による土師器甕の破片。底面には静止糸切りとみられる痕が残る。胎土に砂粒を多く含みざらつく。色調は赤褐色。第106図3は鉄製品。中程の断面が長方形をなす、長さ10.3cmの棒状の製品であるが腐食が激しい。鏃であろうか。



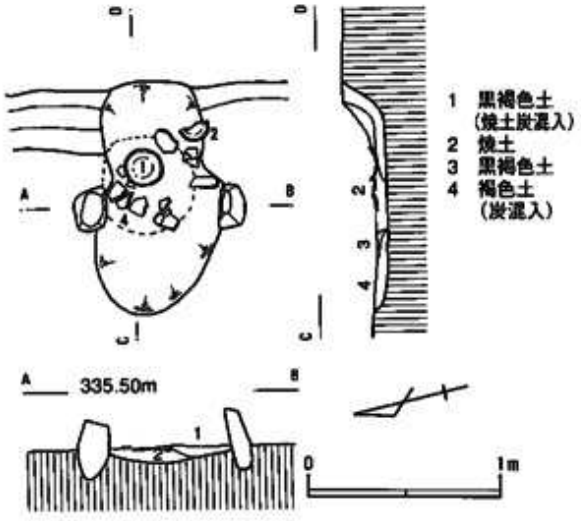
第61図　B区8号住居址出土土器(1／4)

9号住居址（第62図、63図）

1号から4号の一群とは26m程離れた東側に位置する。東西辺5.4m、南北辺4.7mと東西にやや長い長方形をなす。本遺跡では大型の部類に入る規模。壁高は西壁で10cm、東壁で20cm。東壁のほぼ中央にカマドが位置する。床面から壁にかけて1.2m×60cmの範囲で焚口から燃焼部さらには煙道へと掘込まれている。煙道部の壁への掘込みは少ない。両袖のそれぞれ中央部付近には石が埋め込まれており、袖芯に石が用いられていたことが分かるが、他の袖石



第62図　B区9号住居址実測図(1／60)

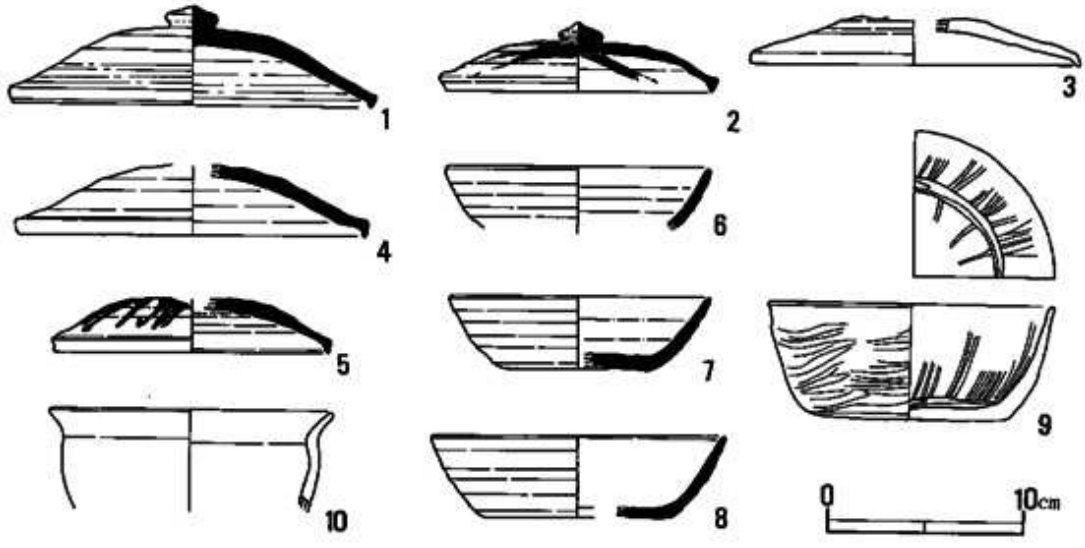


第63図　B区9号住居址カマド(1／40)

は残っていない。燃焼部とみられる焼土の堆積の上から、第64図1の須恵器完形蓋が内側を上に向けて平らな状態で出土した。カマド廃棄の祭祀に伴うものであろうか。その前面からは破片であるが同図4の蓋が、また煙道側からは同図2の蓋が出土した。床面はやや凹凸あるものの堅い。柱穴は確認できなかったが、西壁および東壁の半分を除いて周溝がめぐる。また南壁際中央部には床面に接して平石が置かれていた。入り口施設かもしれない。遺物はカマド内以外にも、南東コーナー付近の壁と床面に接して土師器坏(第64図9)が出土した。

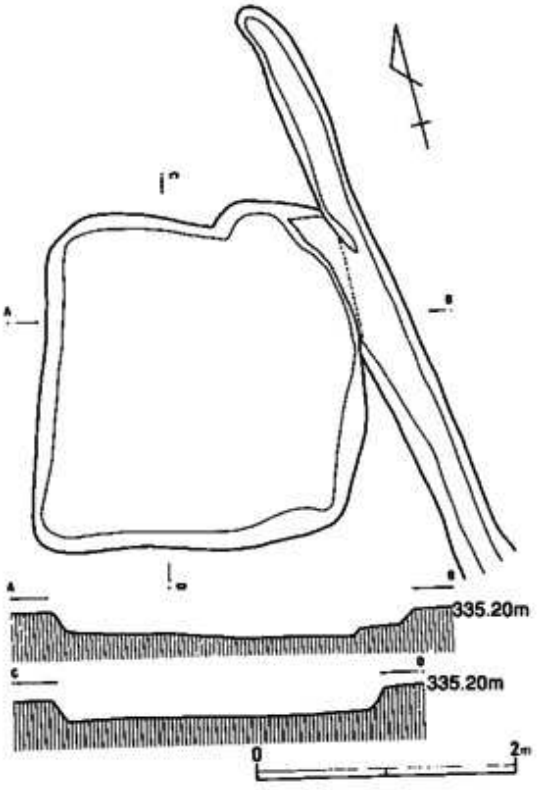
出土土器(第64図)

1、2、4は先述したカマドから出土した須恵器蓋。特に1は燃焼部に逆さまで置かれていた完形品。口径18.4cm、器高5cm。内外面には重ね焼したとされる痕が円形に残る。内面10.5cm、外面では17.3cmの直径であり、この大きさの坏が重ね焼されたのであろう。全体に色調は赤味がかった灰色で、胎土に白色粒子を多く含む。2は縁部を少し欠く。口径13.8cm、器高3.5cmの小型。内外面に火襷と重ね焼の痕が見られる。4は3分の1、5は4分の1破片であるが、大きさはそれぞれ1と2とに類する。3は土師器の蓋で4分の1程の破片。口径17cm程度であろう。6~8は須恵器坏で1/3から1/4の破片。いずれも口径に対して器高が低く



第64図　B区9号住居址出土土器(1／4)

平らな感じのする器形。7は口径13.5cm、高さ3.8cmと推定でき、底面は回転糸切り痕が残るものの周囲は丸みを帯びて整形されている。8は口径15.2cm、器高4.2cmと推定されるもので、底面の糸切痕は平らに整形されている。色調は明るい黄土色。9は住居南東隅近くから出土した土師器坏。4分の1程を欠く。口径14.5cm、底径10cm、器高6cm。底部にやや丸みのある箱形に近い器形。外面横方向のヘラ磨き、内面縦方向の暗文がみられる。みこみ部分にもわずかながら放射状に認められる。またみこみと体部との境は明瞭である。底面はヘラで削られ整形されているが、磨きは周囲にわずかながら認められる程度。色調は明るい橙色で、胎土の赤色粒子は少量。10は土師器小型甕の小破片。胎土には小石も多い。外面赤褐色。



第65図　B区10号住居址実測図(1／60)

10号住居址（第65図）

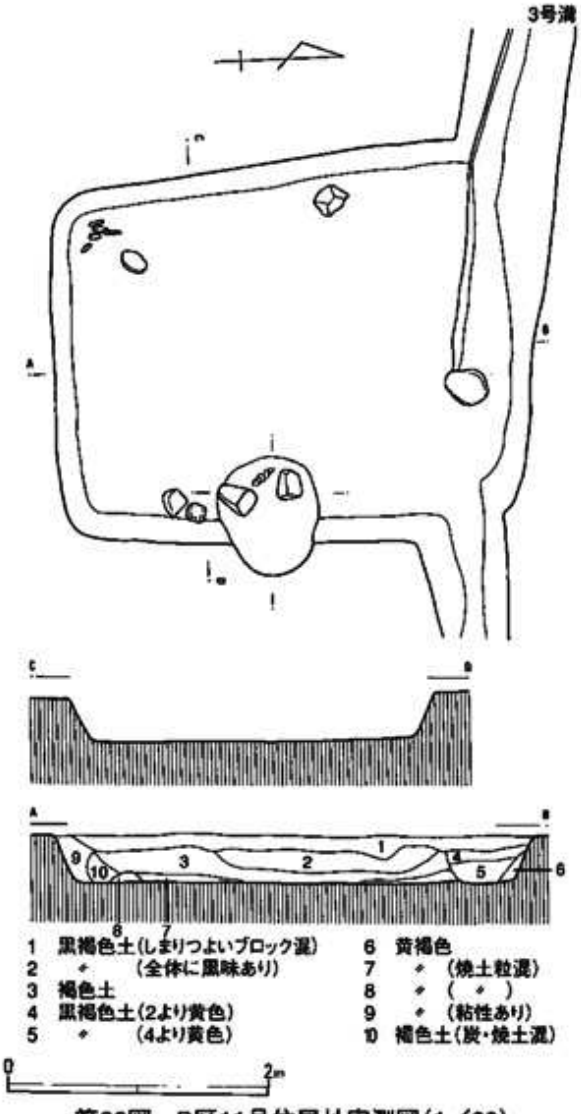
9号住居址の北東10mに位置する。一辺が2.5mほどの方形を呈する遺構であり、東コーナー付近を1号溝に切られている。カマドはなく、床面も平らではなく特に西から東にかけてはやや傾斜している。柱穴や周溝もみられない。遺物も全く出土しなかった。他の住居と同じ黒褐色土の落ち込んだ方形遺構であることは確実であり、住居であるかどうかは疑問があるが、ここでは住居として番号を付けた。

11号住居址（第66図、67図）

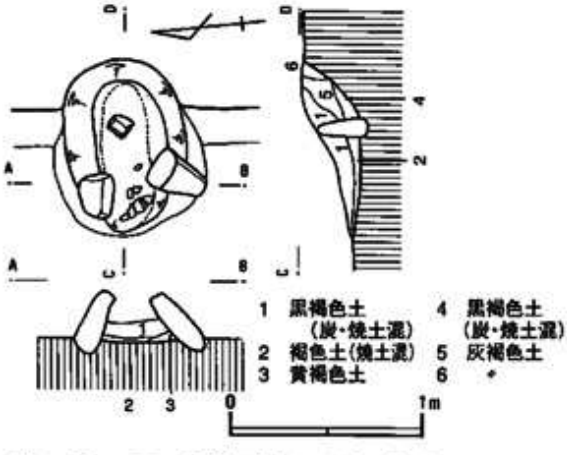
発掘区中央部に5軒まとまっているが、そのうちの1軒である。北壁を3号溝に切られている。東西3m、南北3.5m程度の南北に長い長方形をなす。壁高は50cm。東壁の中央にカマドが設けられている。両袖に袖石が1個ずつ据えられているがいずれも燃焼部側に傾いている。燃焼部の奥には支脚とみられる石が立っている。床面は平坦で堅い。覆土の観察から3号溝が新しいことが確認できた。柱穴、周溝なし。南西コーナーの床面に長円状の石が6個まとまって出土した（第68図6～11）。他に床面からやや浮いて土師器坏や甕破片が出土。

出土遺物（第68図）

1～3は土師器坏。いずれも4分の1程度の破片。1は口径10.3cm、底径5.4cm、高さ4.3cmと復元できる。外面下半、底面ともにヘラ削り。2は口縁部を欠くが内面に暗文が少し残る。3



第66図　B区11号住居址実測図(1／60)



第67図　B区11号住居址カマド(1／40)

も口径11cm、底径5.8cm、器高4.3cmと推測できる。いずれも赤色粒子を含み、赤褐色ないし橙色。4は甕の口縁部破片。内外に刷毛目の残る茶褐色の土器。胎土に黒や金色の雲母を含む。5はロクロ整形の甕の底部破片。胎土に小石や石英、長石などの白色粒子を多く含む。なお図示できなかったがカマド中からもロクロ整形甕の胴部破片が出土した。

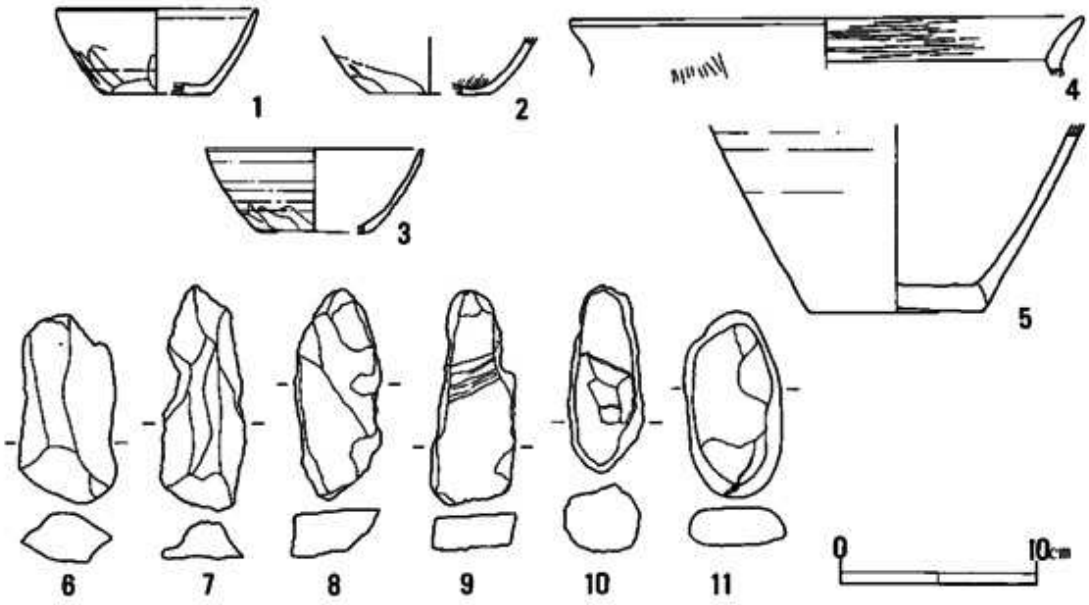
6～11は石。長さ9.5cmから11.5cm、幅3.9cmから5cmの細長い自然石。特に際だった磨滅痕も見られないが、筵編石器かもしれない。6と11は砂岩であることから、全体に角は丸みを帯びている。重さは次のとおり。6（150g）、7（111g）、8（203g）、9（178g）、10（154g）、11（166g）。

12号住居址（第69図）

11号住居址の東4mに位置する。東壁の外約20cmには4号土坑がある。東西3.2m、南北3.4mの正方形に近い形状であるが、削平されたらしく壁高10cmと浅いことから壁の立ち上がりが明確にはとらえられなかった。東壁の北寄りに石や土器が散乱しており、ここがカマドであった可能性がある。床面はやや凹凸がある。柱穴等の施設はみられない。

出土土器（第70図）

1～3ともにカマドとみられる石の脇から出土した。1と2は土師器坏。いずれも一部を欠くのみで、1は口径10.3cm、底径5.5cm、高さ4.4cm。外面ヘラ削りで、底部もきれいに調整済み。内面にはわずかに暗文が残るようであるが不明瞭。2は口径11cm、底径5.7cm、高さ4.3cm。外面ヘラ削り。内面やや荒れており暗文は

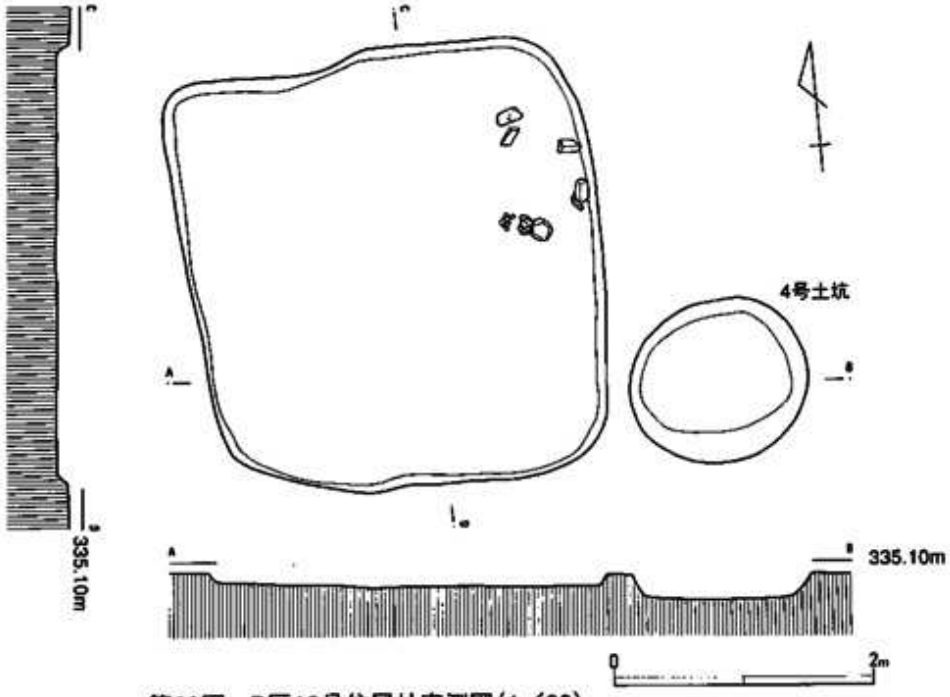


第68図　B区11号住居址出土遺物(1／4)

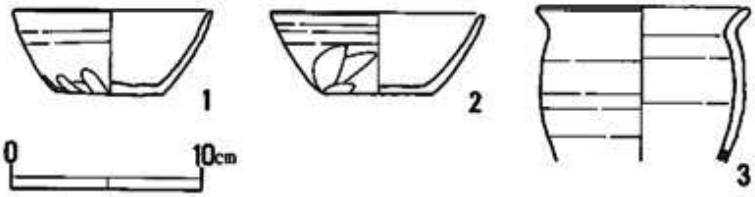
みられない。赤みのある橙色。3は口径10.5cmと推定できる小型甕の上部破片。ロクロ整形とみられる、茶褐色をした土器。

13号住居址（第71図、72図）

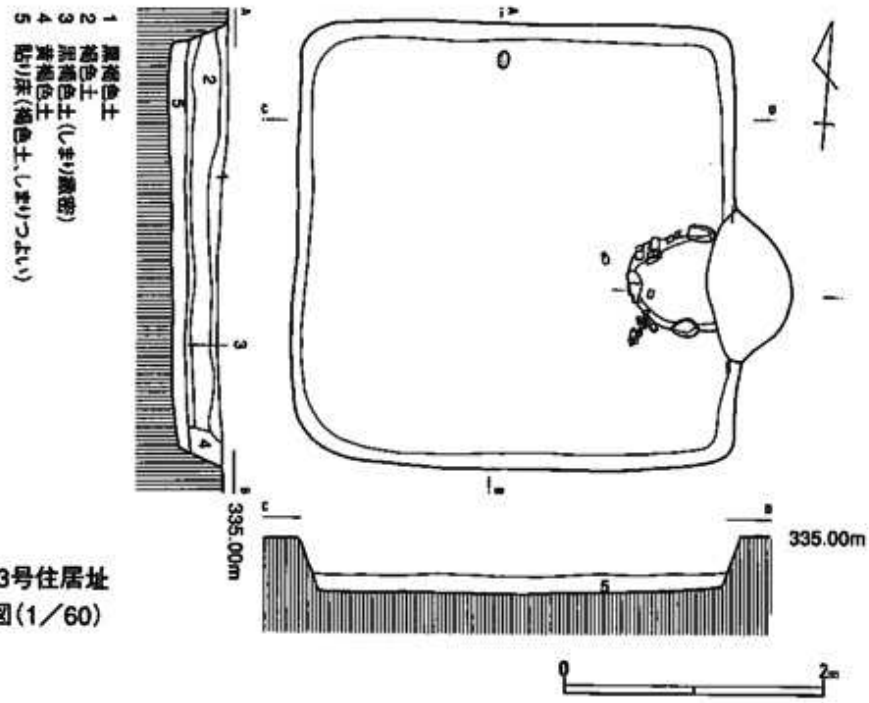
11号住居址の南10mに位置する。東西軸3.45m、南北軸3.4mの正方形を呈する。カマド



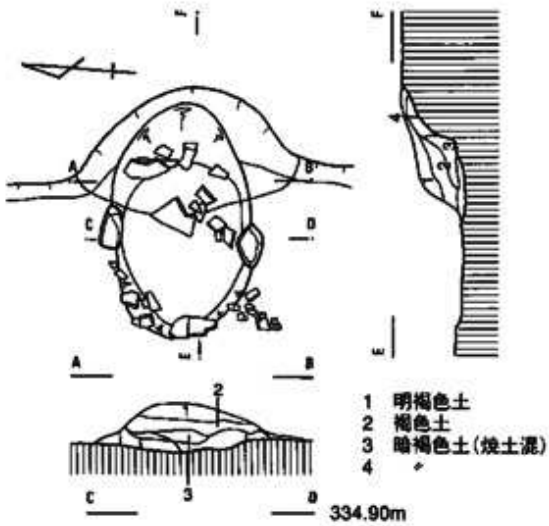
第69図　B区12号住居址実測図(1／60)

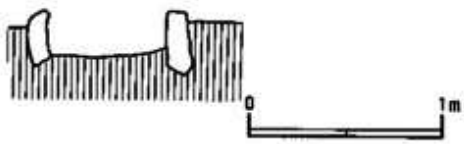


第70図　B区12号住居址
出土土器(1／4)

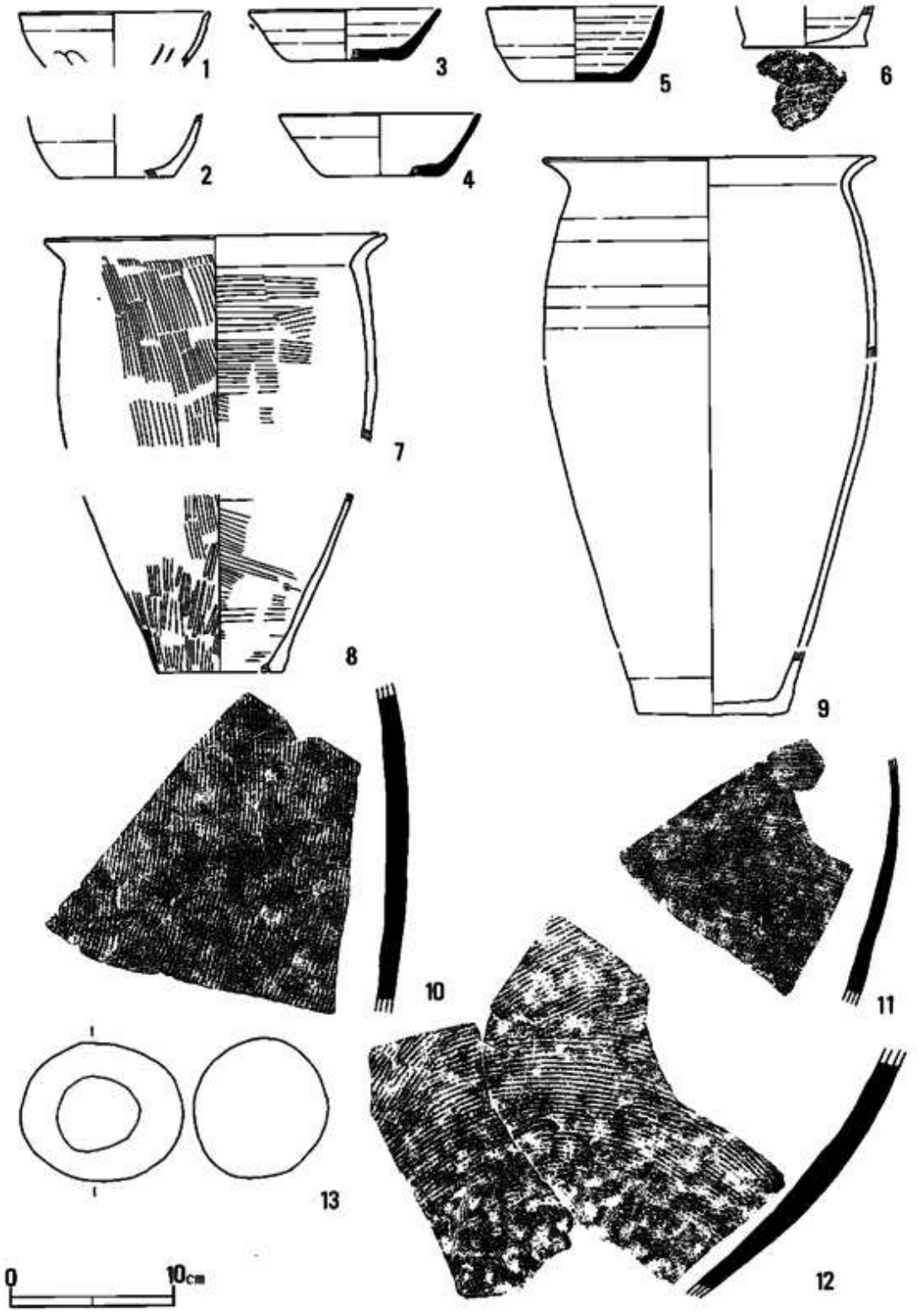


第71図　B区13号住居址
実測図(1／60)





第72図　B区13号住居址
カマド(1／40)



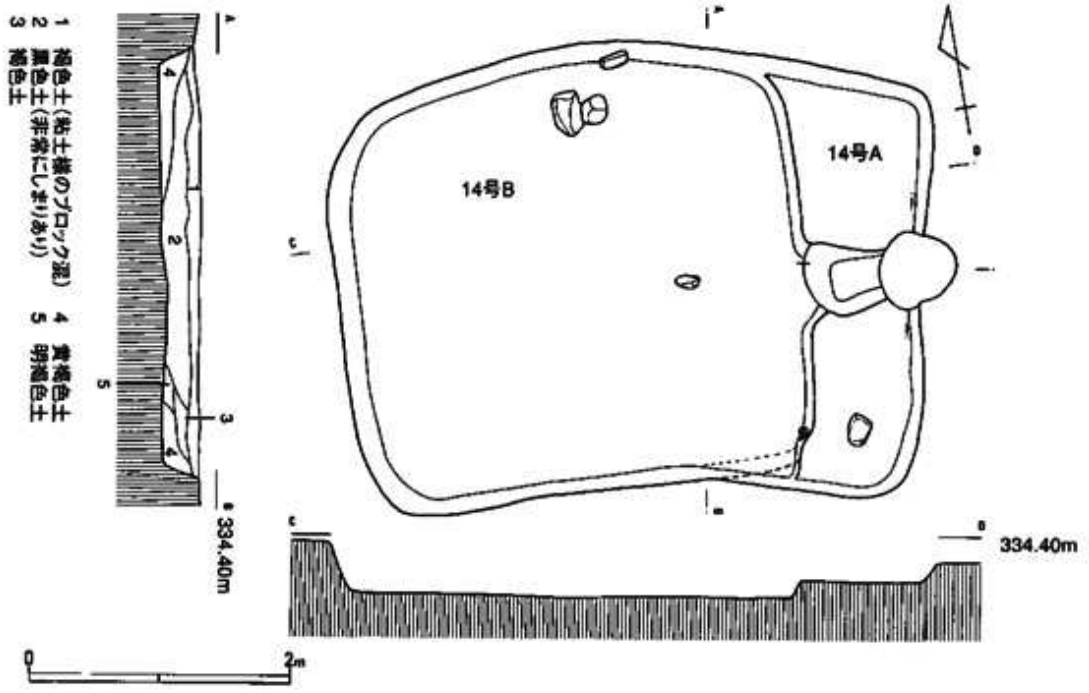
第73図　B区13号住居址出土遺物(1／4)

は東壁のほぼ中央に位置する。遺構確認面から30cmほど下げた箇所で堅い褐色土の面が検出できたことから床面としたが、最後にこの面を剥がしたところ貼り床であることがわかった。さらに15cm下がったところが掘り方面であり、同時に貼り床より古い段階の床が確認できた。カマドは共通すると思われ、両袖部分にはそれぞれ1個づつの石が据えられている。本来は石組みであったとみられる。燃焼部から煙道部にかけて須恵器甕の大破片（第73図12）や甲斐型甕破片（7、8）などが出土した。柱穴や周溝はない。

出土遺物（第73図）

1と2は土師器坏破片。1は口縁部4分の1の破片で、外面ヘラ削り、内面わずかに暗文がみられる。2は貼り床下から出土したもの。器面が磨滅しているためよく観察できないが外面はヘラ削りと思われる。内面不明。3～5は須恵器坏。3と5はカマドの脇から出土したもので3分の1ほどの破片。3は浅く、5は内湾気味のやや深い器形。4は貼り床下から出土したもので口縁の大半を欠く。3点とも焼成は悪く特に4と5は土師器の色相。6～9は土師器甕。6は貼り床下から出土したもの。胎土に金色雲母を多く含み赤褐色をする甲斐型甕に似るが、底部には糸切り痕が残り、内外に刷毛目はみられない。7、8はカマドから出土した甕破片。内外刷毛目、赤褐色を呈し金色の雲母を含む。9もカマドから出土したロクロ整形の甕。口縁部と底部の破片があり、同一個体とみて推定復元した。胎土に石英とみられる粒子を多く含むざらつきある器面で、にぶい橙色をなす。10～12は須恵器甕の破片。

13は北壁際の貼り床面から出土した多孔質の輝石安山岩丸石。

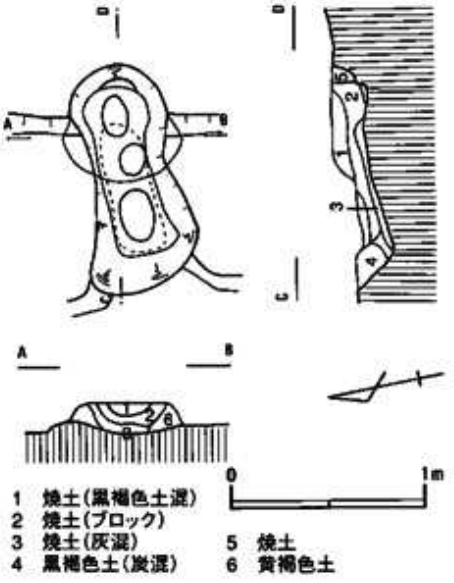


第74図　B区14号（A・B）住居址実測図（1／60）

14号住居址（第74図、75図）

発掘区東端に集中する一群の一つ。2軒の切り合からなり、切られているものを14号A、新しいものを14号Bとした。14号Aは南北3.2m、東西は3m程と推測できる。壁高は20cmほどで、西側の半分以上をBにより切られている。カマドは東壁の中央部に位置する。焚口部が東西に長く、また焼土の集中箇所が3ヵ所みられたことからB号住居のカマドもA号の延長に設けられたものと見なした。

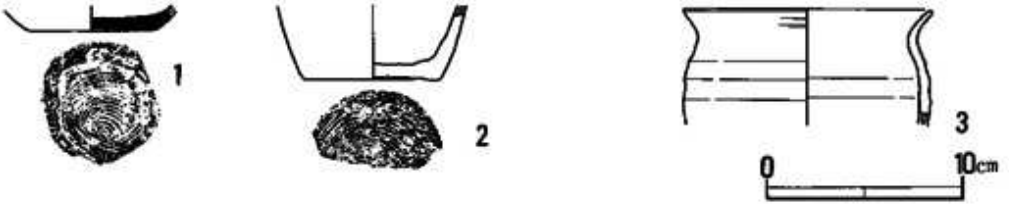
14号Bは東西3.65m、南北3.3mの規模。深さはA号よりあり西壁側で40cmを測る。床は堅くなく、柱穴や周溝も見られなかった。



第75図　B区14号住居址カマド(1／40)

出土土器（第76図）

1と3が14号Aのカマドの南側の床面上5cmほどから出土。1は須恵器坏破片。3はロクロ整形小型甕の口縁部小破片。赤褐色で胎土に石英等の粒子多い。2は14号Bの南隅壁際から出土したロクロ整形甕の底部破片。糸切り痕が残る黒褐色の土器。

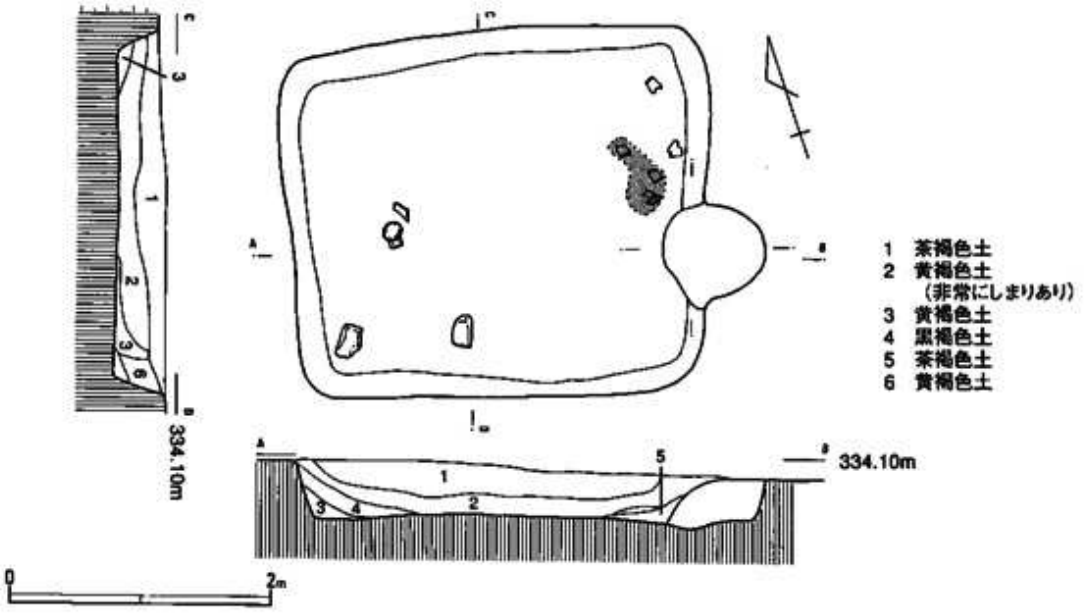


第76図　B区14号住居址出土土器(1／4)

15号住居址（第77図、78図）

発掘区東端に集中する一群の中央部に位置する。南西10mには14号、北10mには16号がある。約3.3m×2.8mの南北にやや長い長方形をなし、壁高は35cm～45cmである。カマドは東壁の南隅方向にやや寄った箇所に作られている。燃焼部の掘込みは浅く、袖や天井に用いられたような石は残っていなかった。カマド全体に壁外への掘込みは多く、燃焼部中央も壁直下あたりに該当し、煙道は壁より40cm程外側になる。燃焼部から煙道にかけての部分から土師器甕や須恵器蓋破片が出土した。周溝や柱穴は確認できなかった。ただ、南壁側の床面に密着して平石が1個置かれていた。また南西隅にも同様の石が見つかった。

覆土上層には遺構確認面と同種の茶褐色土が堆積しており、遺構確認に手間取ったが、本来の住居掘込み面に近いレベルで遺構を確認したものと考えている。従って壁高45cmという深さは、当時とあまり変わっていないものとみられる。

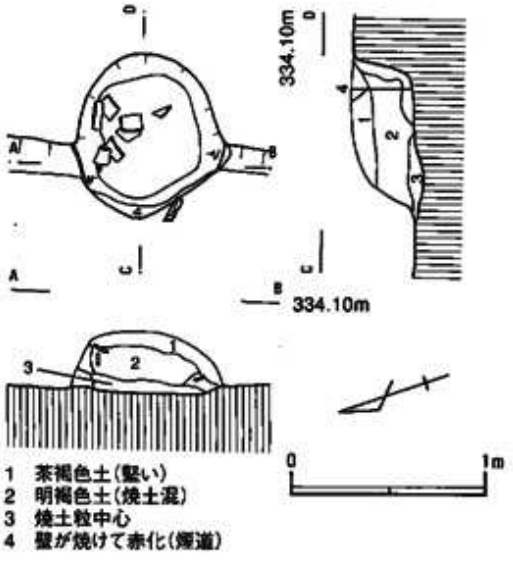


第77図　B区15号住居址実測図(1／60)

出土遺物は少なかったが、カマド内および北側から破片が、西壁近くの床面から須恵器甕底部破片が出土した。

出土土器（第79図）

1と2は須恵器蓋破片。3は土師器甕口縁部破片。口径20cmと推定できる小型甕であろう。胎土に石英、長石などの白粒子を多く含むにぶい橙色の色調。4は須恵器で凸帯壷のような器種の破片であろう。

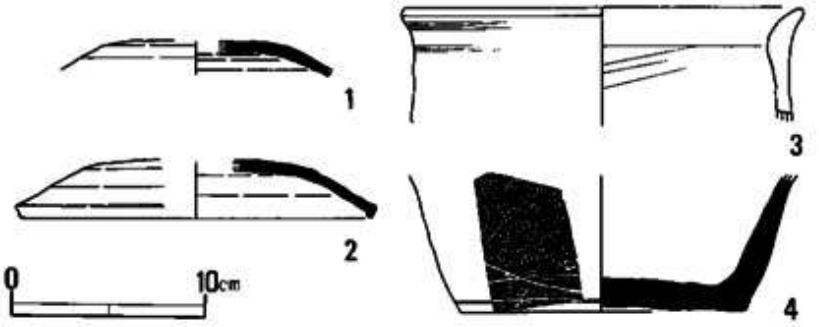


第78図　B区15号住居址カマド(1／40)

16号住居址（第80図、81図）

15号住居址の北10mに位置する。また東2mには17号、北4 mには18号がある。南北3.56m、東西3.9mの長方形を成す住居で、壁高は20～30cmを測る。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。カマドの壁外への掘込みは約45cmと張り出しており、この中央に焼土が堆積し燃焼部であることが分かるが、焚口部の手前（床面側）にも浅い窪みがあり焼土が少し堆積していた（第81図）。袖石は見られなかったが、焚口部の手前に天井石のような長い石が1個残っていた。燃焼部を中心に土師器甕破片が出土した。

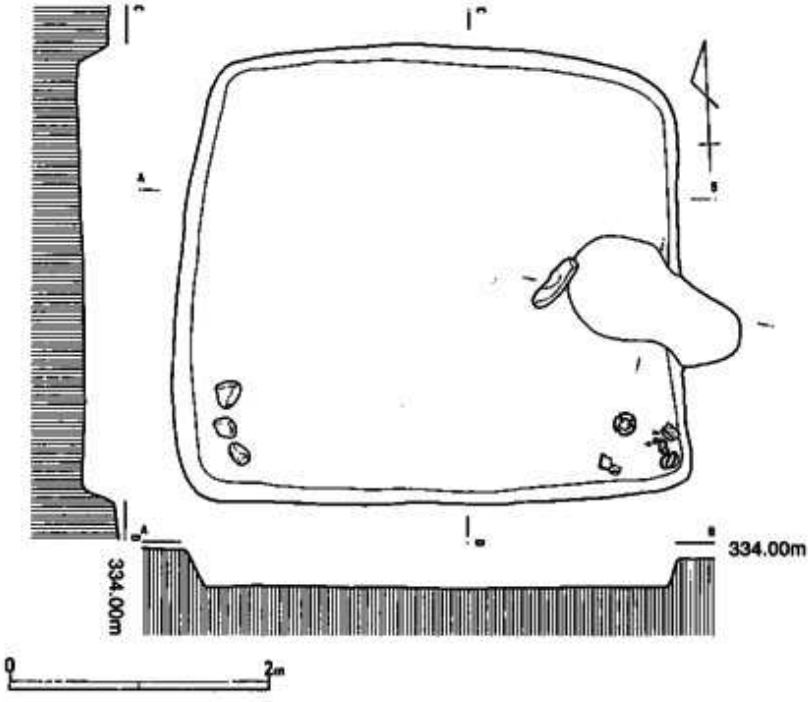
住居床面は部分的に、地山層の自然礫が顔を出している。また床面南西コーナーには大きめの石が3個あった。柱穴、周溝はみられなかった。土器はやや多く、特に住居の南東隅からは須恵器坏3個、蓋1個、それに土師器甕破片がまとまって出土した。



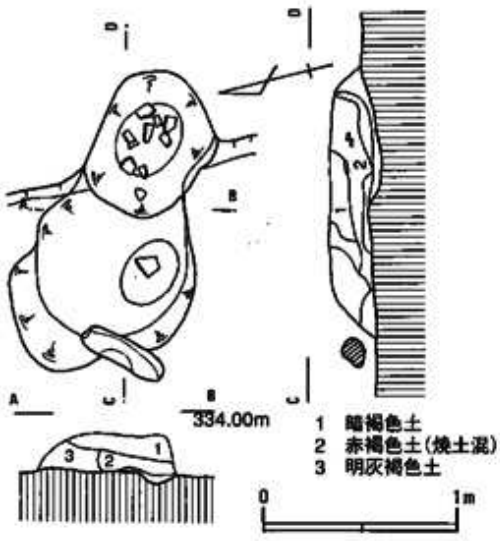
第79図　B区15号住居址出土土器(1／4)

出土土器（第82図）

1は南東隅のやや床面中央寄りから出土した須恵器蓋。内面を上にして皿状になって出土。口縁部を一部欠く。口径15.3cm、高さ3.7cmで、天井部はヘラ削りされている。2～6は須恵器坏。2は底部破片。3～5は南東隅の一群。3は最もコーナーから横になって出土した坏。口縁の一部を欠くのみで、口径12.4cm、器高4cmを測る。底中央には糸切り痕が残るが周囲はヘラ削りされており、底径を測る稜線は削られ丸みを帯びている。青灰色をするが火襷が残る。4は4分の1を欠くが3の下に重なって出土したもの。一部カマド内出土の破片と接合。口径13.2cm、高さ4cm。底部は3と同じく糸切りの周囲をヘラ削りで仕上げられており、一層丸みを持つ。色調や胎土も3とよく似ている。5は3・4の横から出土したもので口縁を一部欠く。口径12.4cm、器高4cmで、底部糸切り、周囲ヘラ削り。器形は3や4に類するが、色調は白みが強く胎土もざらつく。火襷が顕著。6も口縁の一部を欠くが、口径11.8cm、高さ4.5cmを測る。底部は回転糸切りのままで、周囲はやや削られているものの3～5のようなヘラ削りは行なわれていない。色調は青灰色で胎土も3～5と類似する。深みのある器形。

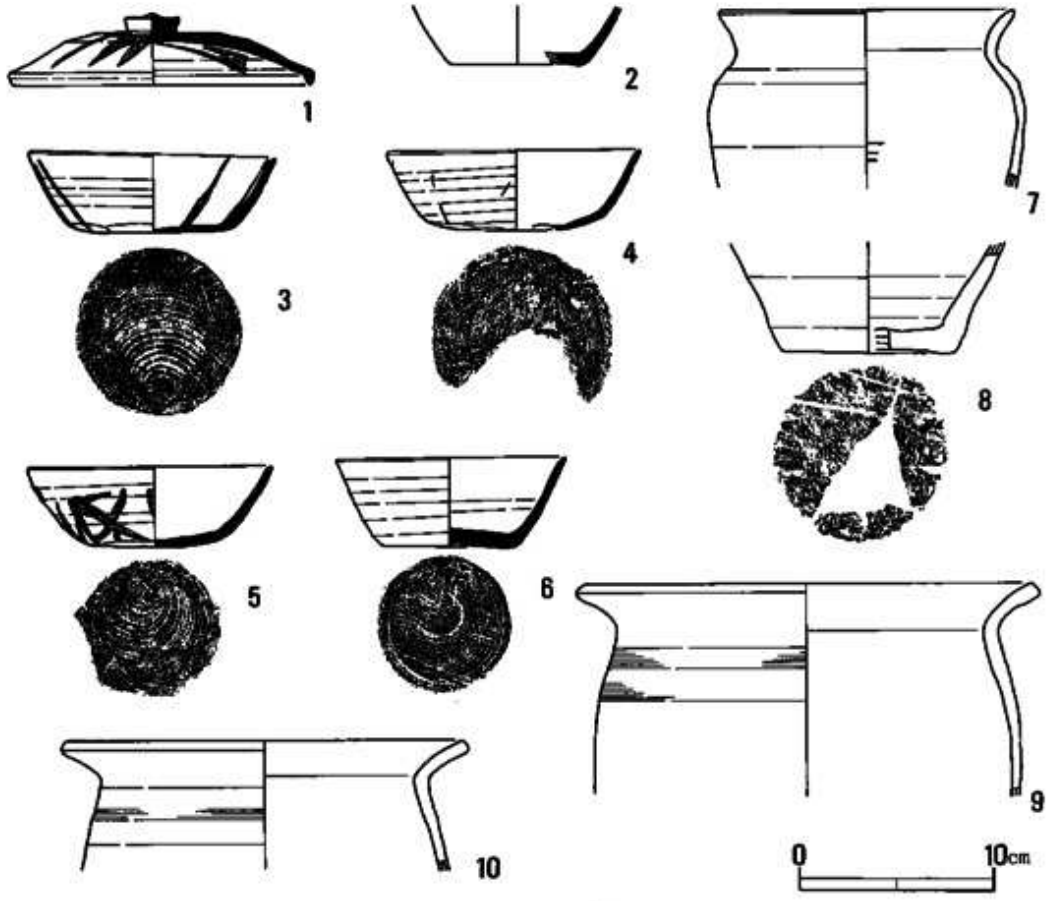


第80図　B区16号住居址実測図(1／60)



第81図　B区16号住居址カマド(1／40)

7は小型甕の口縁部破片。3などの坏群からやや離れた南壁際から8の一部とともに出土した。茶褐色を呈するロクロ整形の甕で、肩の部分はヘラで削られている。口径15cmと推定できる。8は7とともに出土した底部であるが、一部はカマド中出土破片と接合した。底に回転糸切り痕と沈線状の圧痕がみられる。器壁の厚さからみて、7とは異なった長胴大型の甕であろう。9と10も長胴の甕破片。胎土に白色の粒子や小石を多く含み、黄色味のある色調。



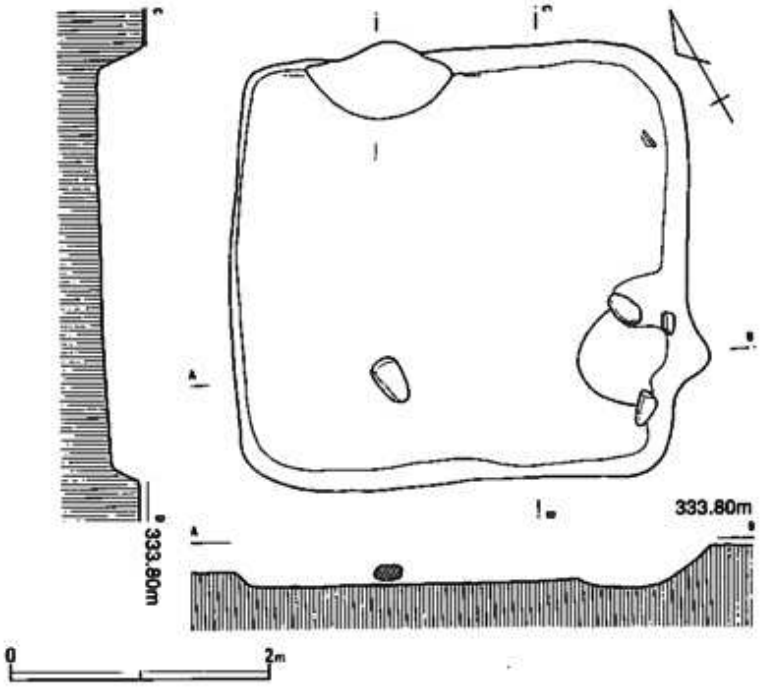
第82図　B区16号住居址出土土器(1／4)

17号住居址（第83図、84図）

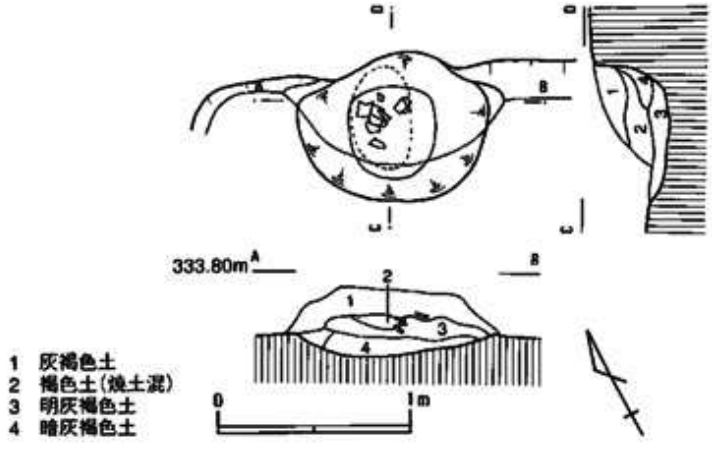
16号住居址の東2ｍに位置する。さらに北2ｍには19号住居址がある。本址は試掘調査により発見されていたものである。3.5m×3.3mの正方形に近い形状で、壁高は20～35cmを測る。N－117°－Eと住居の主軸がこれほど東に振れている住居は他にない。カマドは東壁と北壁との2ヵ所にみられた。東カマドは両袖の芯石が左右それぞれ1個ずつ立っていたが、北カマドには石は残っていない。燃焼部の残りは北カマドのほうがよく、甕破片も出土した。柱穴や周溝はない。

出土土器（第85図）

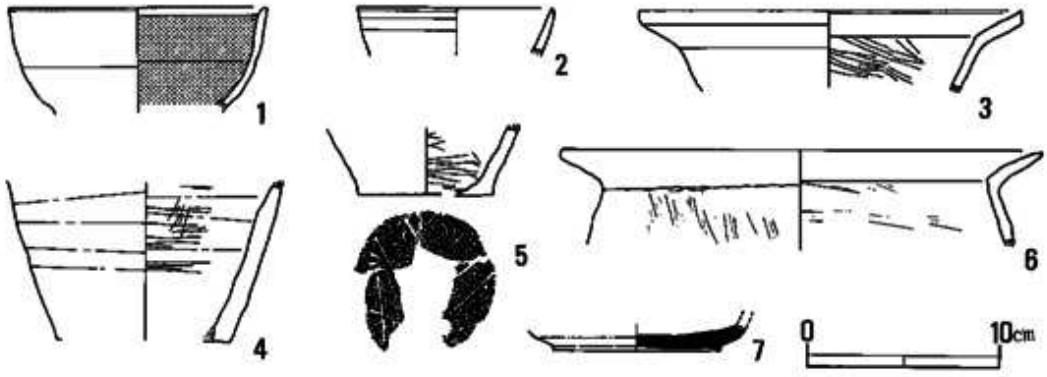
出土したものはいずれも小破片で、特に坏は4分の1以下の破片であることから、口径の推定にはやや無理がある。1は内黒坏、2は甲斐型坏の小破片。3は鉢形土器の口縁部破片で、内面には刷毛目が残るが外面には認められない。赤褐色で胎土に金色の雲母を含む。4はロクロ整形甕で、わずかに残る底部には糸切り痕あり。5と6は甲斐型甕で、5には木葉痕あり。6は薄くて外傾する口縁部を特徴とするもので、内外ともに刷毛目痕が見られる。赤褐色で、金色の雲母混入。7は須恵器高台坏底部破片。色調茶褐色。



第83図　B区17号住居址実測図（1／60）



第84図　B区17号住居址カマド（1／40）



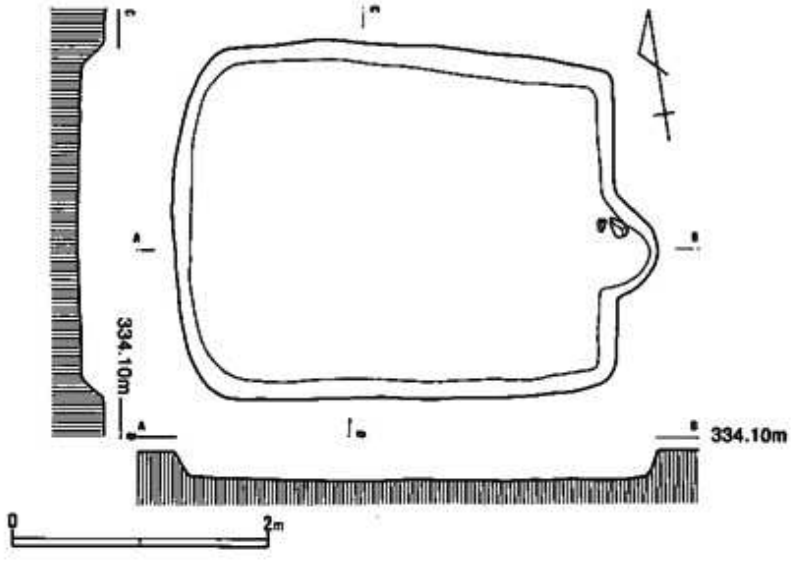
第85図　B区17号住居址出土土器(1／4)

18号住居址（第86図）

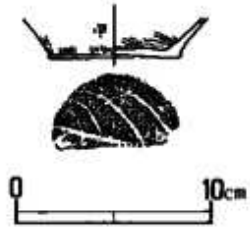
16号住居址の北4 mに位置する。東西3.4m、南北2.7mの長方形の住居。壁高は20cmと低く、床面も堅くない。カマドは東壁に設けられているが、焼土がわずかに認められただけで、石組み等は左袖奥の石1個だけであった。燃焼部の窪みは無いが、煙道は壁より30cmほど張り出している。柱穴や周溝はない。出土遺物は非常に少ない。

出土土器（第87図）

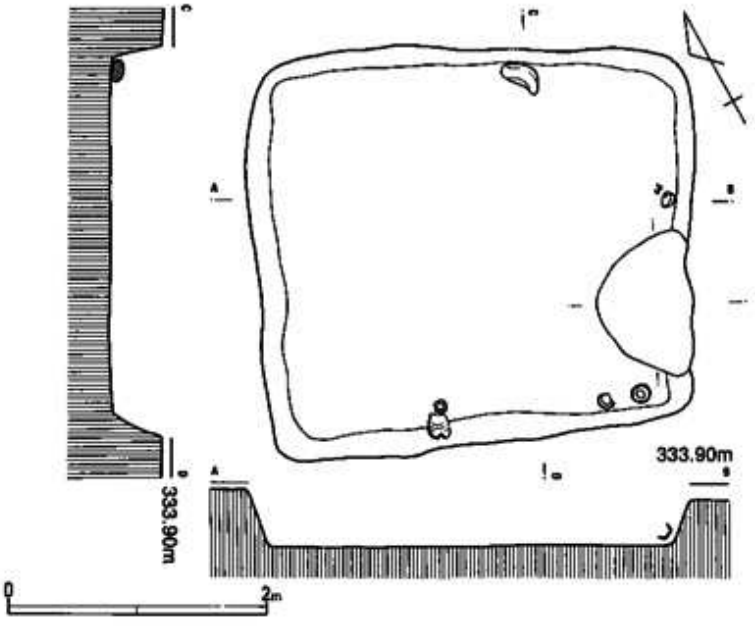
甕の底部破片。内外面に細かい刷毛目が付くが、特に外面の刷毛目は消されかかっている。底には木葉痕。器壁は薄く、胎土に金色の雲母を含まないことと合わせて、甲斐型甕とは異なっている。



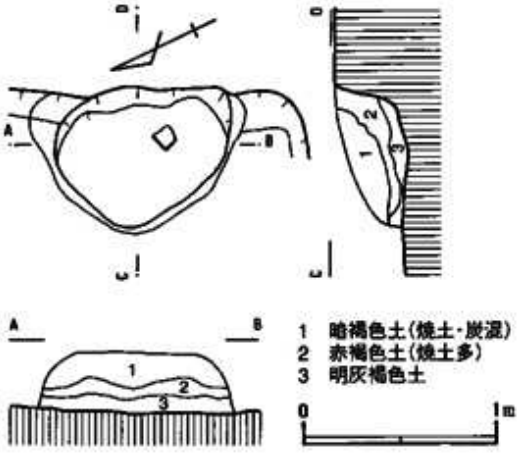
第86図　B区18号住居址実測図(1／60)



第87図　B区18号住居址
出土土器(1／4)



第88図　B区19号住居址実測図(1／60)



第89図　B区19号住居址カマド(1／40)

19号住居址

（第88図、89図）

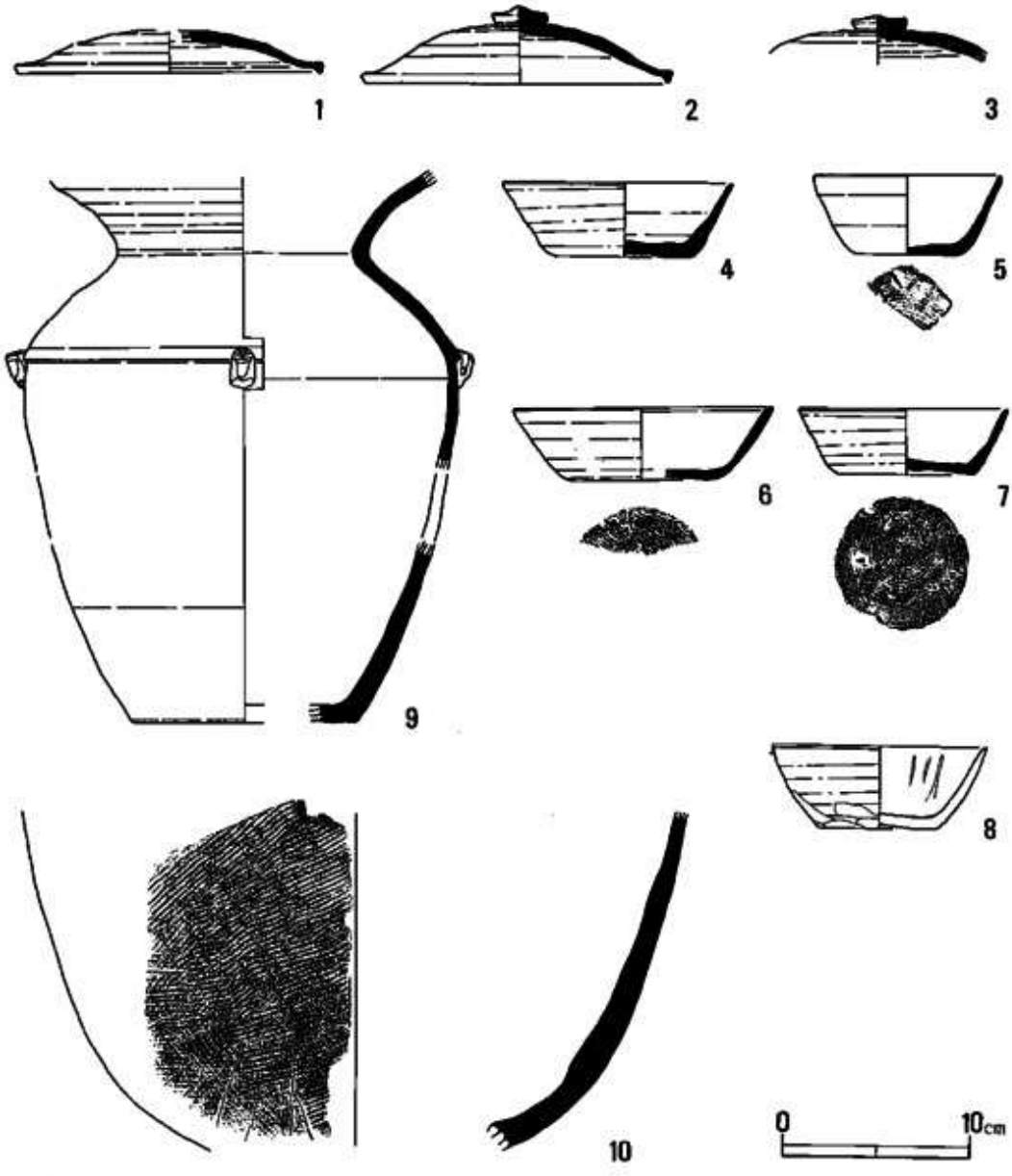
１８号住居址とともに発掘区の北東端に位置する。西３ｍに18号、南３ｍに17号がある。

東西軸3.5ｍ、南北軸3.1ｍの長方形をなし、壁高は35cm～45cm。東壁の南隅近くにカマドが作られている。煙道は壁外にはほとんど張り出しておらず、燃焼部の床面への掘込みも浅い。石組みも残っていなかった。

遺構検出面からの掘込みは深く、床面には地山礫が露出するが検出は容易であった。柱穴や周溝はない。南コーナーから南壁に沿った箇所、それにカマド北側から土器類が出土した。

出土土器（第90図）

１～３は須恵器の蓋。完形はなくいずれも推定復元。２は口径16.4cm、高さ4cmとみられる。２と３とがカマド出土。４～７は須恵器坏。４は南壁中央部付近から10の大破片とともに出土した坏。口縁を３分の１ほど欠くが、口径12.3cm、底径7.3cm、高さ3.9cm。底面は糸切り後調整されており、痕跡はわずかに残るのみ。明るい灰色を呈し、ざらつきがある。５は覆土から出土した小破片。やや深みのある器形。６は南隅近くから７とともに出土した半欠品。口径13.8cm、高さ3.8cmと推定できる偏平な感じの器形。大きめな白色粒子を含む。７は南隅から正位の状態で床面からやや浮いて出土した、ほぼ完形品。口径11cm、底径7.2cm、器高3.5cmのやや小ぶりの土器。細かい白色粒子を多く含み、ざらつきがある器壁。明るい灰色。８はカマドの北の壁際から横になった状態で出土した土師器坏。口径11.3cm、底径6cm、高さ4.3cm。外面および底部回転糸切りの周囲をヘラ削り。内面暗文わずかに観察できる。赤褐色を呈し、胎土に赤色粒子を含む。

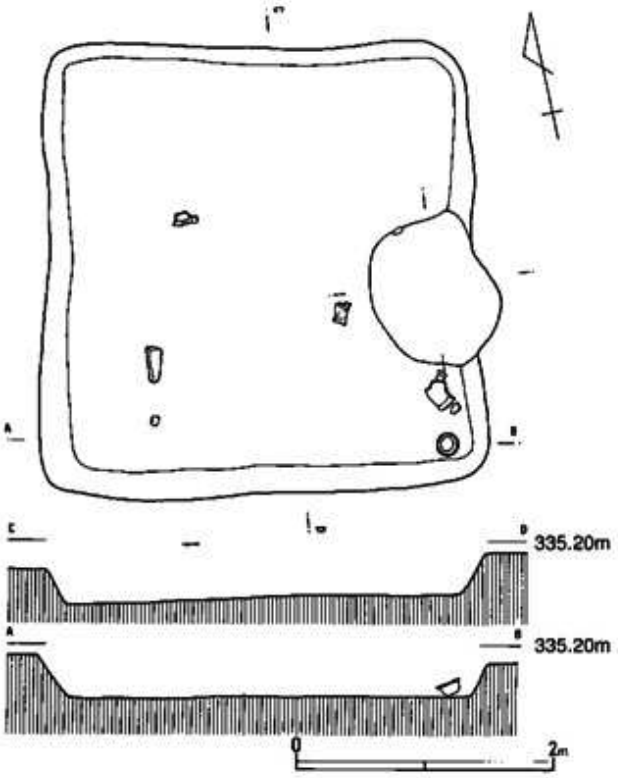


第90図　B区19号住居址出土土器(1／4)

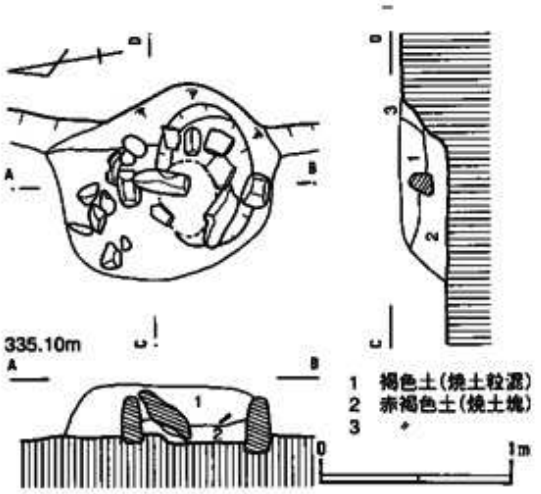
9は須恵器の凸帯壺。覆土から出土した小破片が接合したものの推定復元。10は南壁に立っていた須恵器甕の胴部破片。

20号住居址（第91図、92図）

発掘区の中央に位置するがこの辺りは住居の分布密度は薄く、南東14mに21号、北西22mに9号住居址が離れてある。



第91図　B区20号住居址実測図(1／60)



第92図　B区20号住居址カマド(1／40)

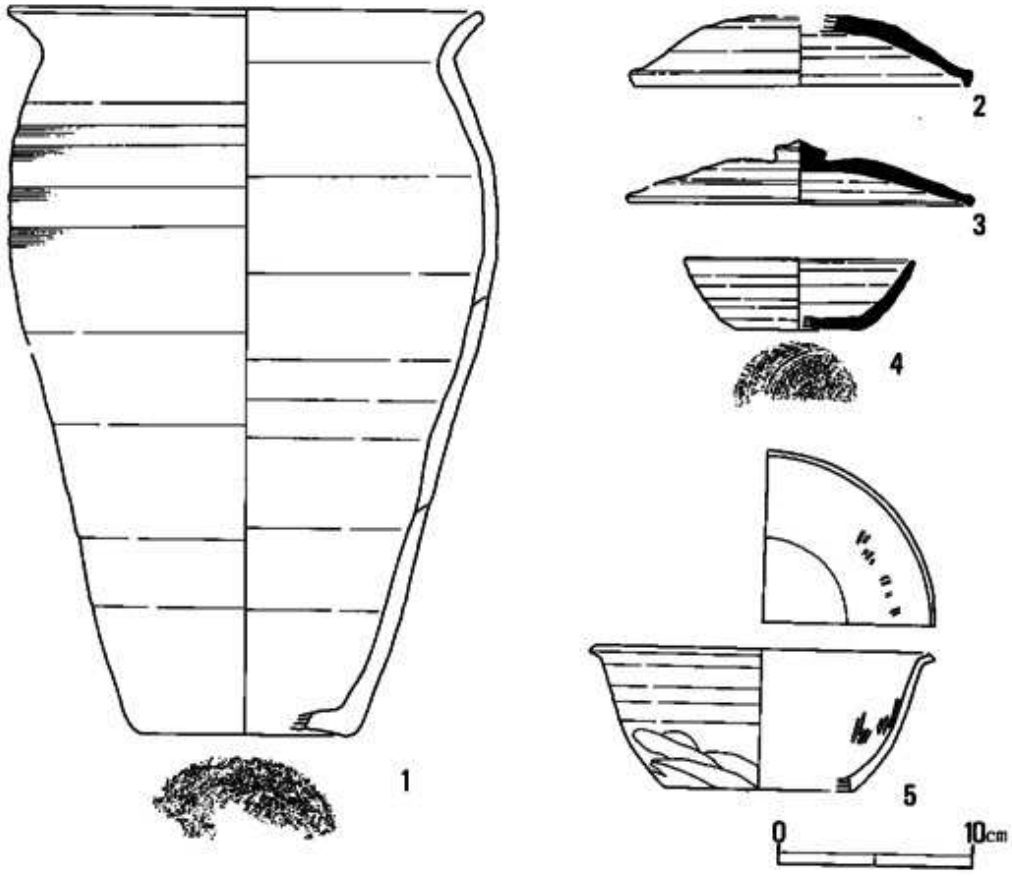
一辺が約3.4mの正方形の住居で、壁高は約30cm。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は壁外に約20cm張り出している。燃焼部の掘込みは浅いが、本来は石組みのカマドであったらしく、両袖の奥には1個ずつ芯石が埋設されており、この上に天井石とみられる石も一部ながら残っていた。ほかにも石が多く散乱していた。

床面は地山の礫が少しばかり露出しやや平坦ではない。柱穴や周溝はみられなかった。カマドの南側や前面、およびカマド中から土器類が出土した。

出土土器（第93図）

1は土師器甕である。カマド右袖石際、燃焼部北端、カマド南外側の壁際、カマド焚口前面、住居中央やや西寄り等から出土した破片が接合したもの。胴下半の半分を欠く。口径24cm、器高37cmを測るロクロ整形の長甕で、肩から胴部にかけては回転ヘラ削りの跡がよく残る。これからみるとヘラの幅は5cm程度である。底面やや窪んでおり糸切り痕がかすかに残る。にぶい橙色から赤褐色の土器。

2と3は須恵器蓋。2は覆土から出土した4分の1ほどの破片。胎土に白色粒子が多い。2は南コーナー付近の1の口縁部破片と5の坏との間から出土したもので、縁の大部分を欠く。口径17.5cm、高さ3.3cmと推定できる。にぶい橙色をした須恵器である。4は、3の蓋や1の甕破片とともに出土した須恵器坏の半欠品。浅くやや丸みのある器形で、口径11.7cm、高さ3.6cmと推測できる。5は住居南隅から出土した坏系鉢と称される土師器である。底面を欠く。口径17.3cm、高さ7.1cmで、底径は9.5cm程度と推定できる。胴下半部はヘラ削り、内面にはわずかながら暗文が観察できる。口唇部には段がつき、稜をなしている。胎土は



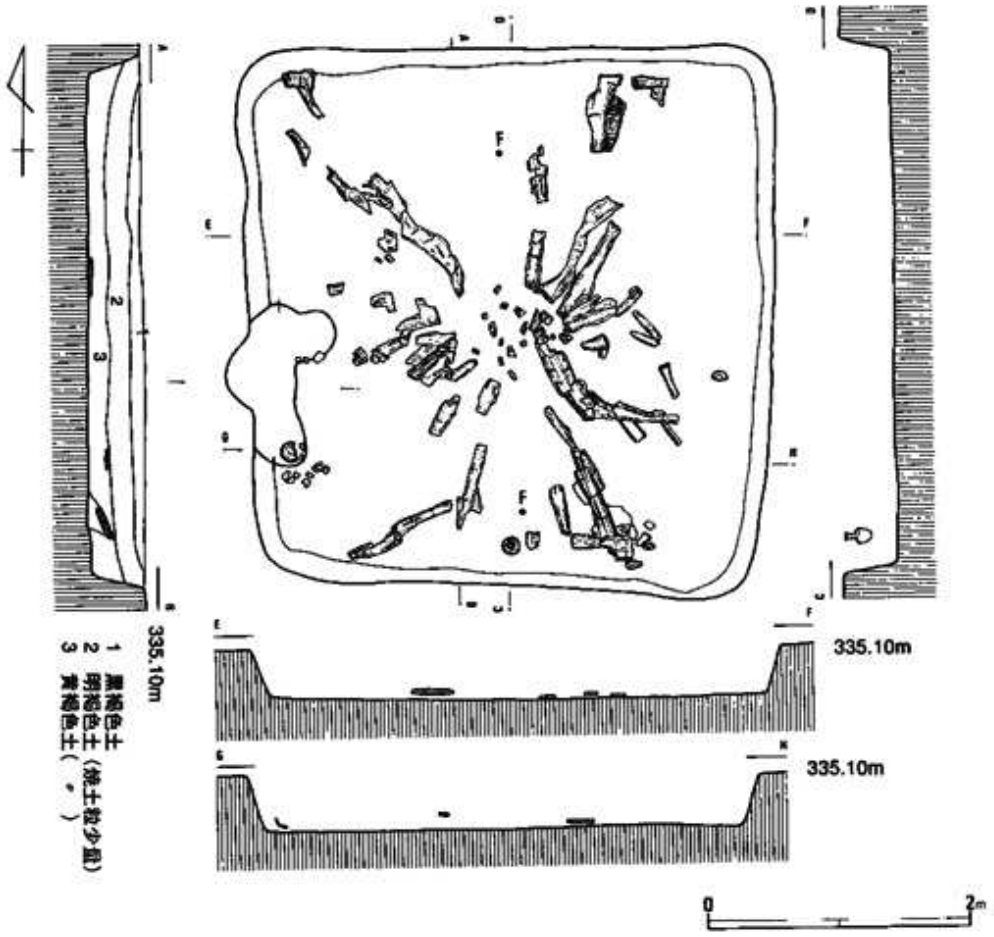
第93図　B区20号住居址出土土器(1／4)

精選されており緻密で、赤色粒子を少し含む。色調はにぶい橙色から赤褐色。

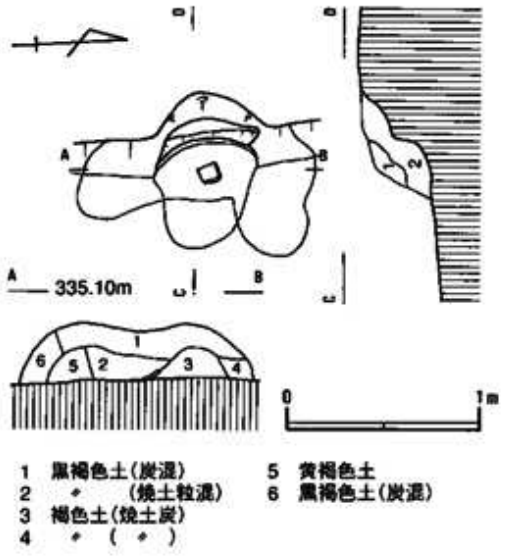
21号住居址（第94図、95図）

発掘区のほぼ中央に位置する。この中央を取り囲むかのように溝1号・3号・4号が走っているが、この方形区画内にあるのは本址と20号住居址だけである。

東西、南北軸ともに4.1mの正方形をなすが、西辺が約3.9mであるのに対して東辺は4.2mとやや長い。カマドは西壁のやや南寄りにあるが、本遺跡の住居で西カマドは本址の他にB区3号とB区23号の3軒しかない。煙道は20cm程壁外に張り出すものの、焚口や燃焼部の掘込みはほとんどない。石組は見られなかったが、両袖ともにしまりの強い黄褐色土が用いられていた。本住居は火災を受けており、覆土中位以下からは炭化材や炭化粒が多く検出されている。特に床面直上からは長さ50cm以上、1mを越えるような炭化材が出土した。これらは住居中央部から各壁に放射状に広がっているような状況であった。また茅が集まったような炭化物も見られた。出土遺物は多く、カマド周辺だけでなく住居全体から出土している。



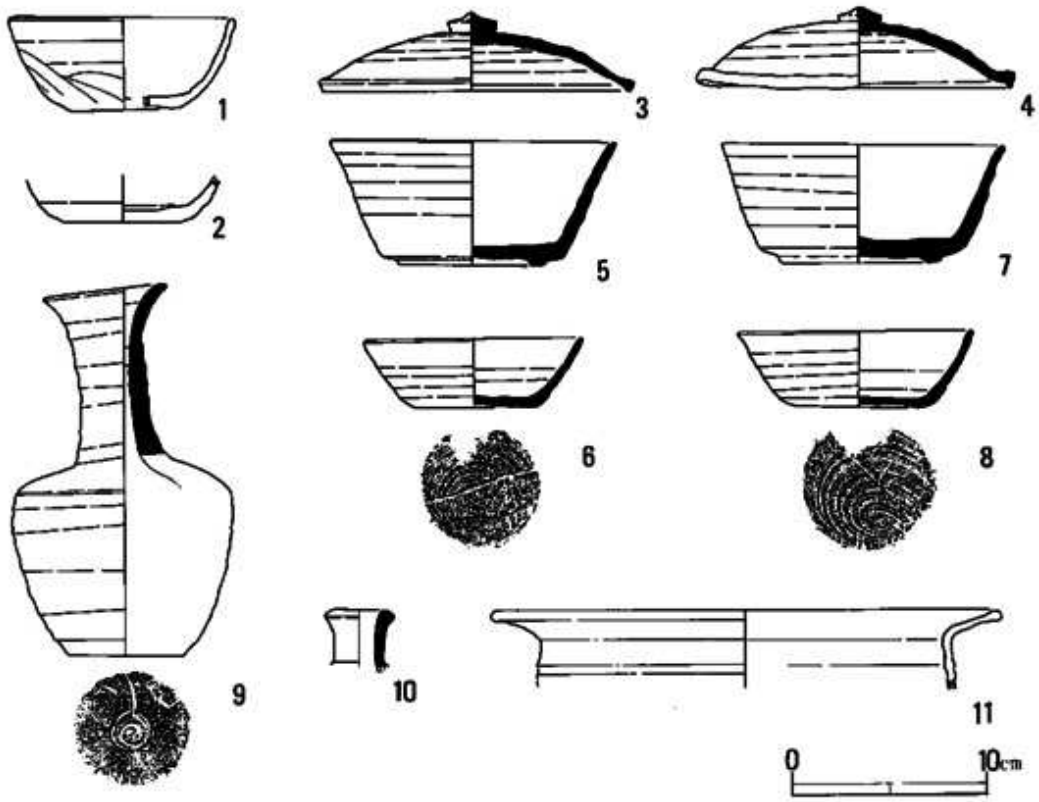
第94図　B区21号住居址実測図(1／60)



第95図　B区21号住居址カマド(1／40)

出土遺物（第96図、106図）

第96図1と2は土師器坏。1はカマド左袖の前床から出土。底部の多くを欠く。丸みの強い器形であり、体部下半にはヘラ削り痕あり。内面暗文はかすかに残るようではあるが図示できなかった。胎土に赤色粒子をわずかに含む、赤褐色の土器。口径11.4cm、高さ4.8cmで、底径は5.5cmと復元できる。2は黒褐色の坏破片。胴下部にわずかなヘラ削り。底面はきれいに整形され、糸切り痕はみられない。3と4とはともにカマド左袖部分から出土した須恵器蓋。口縁部を3分の1欠くが内側を上にして出土。4はその南側から破片で出土したもの。いずれも丸みを帯びた器形



第96図　B区21号住居址出土土器(1／4)

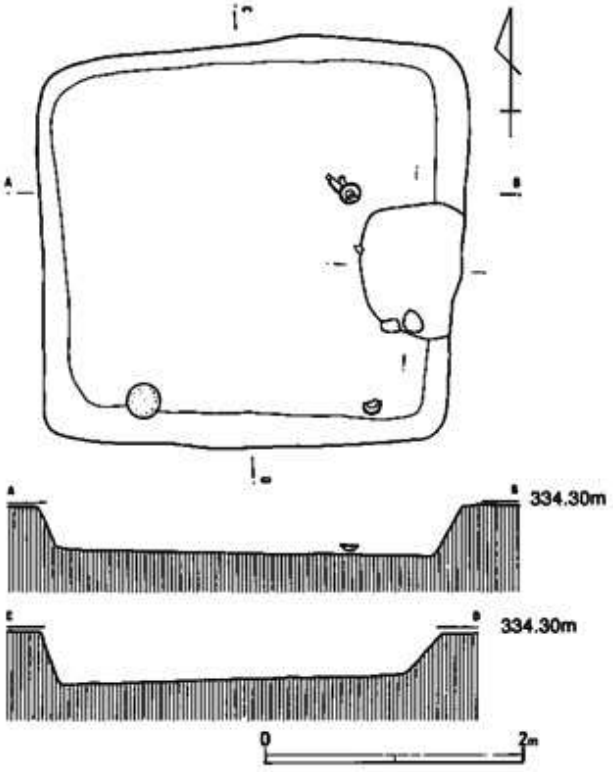
で4はゆがみが激しいが、両者ともに口径16cm、高さ4 cm。5と7とは高台坏須恵器。5はカマドの北側床面から出土した3分の1破片。7は床面中央の炭化材の間の床面から出土したほぼ完形品。口径14.4cm、器高6.2cmを測る。いずれも赤みの強い色調。6、8は須恵器坏。両者ともによく似た作りで、底部糸切り痕がそのままであるが、底と体部の接合部分はやや丸みがある。6は口縁部を多く欠くが口径11.3cmと推定できる。底径6.3cm、器高3.5cmと浅めの器形。8も口縁の多くを欠くが口径11.8cm、底径6.6cm、器高3.8cmを測る。8は東壁際の床面直上から出土したもの。

9は須恵器長頸壺。南壁際の中央付近から正位の状態で出土。床面より18cmほど上から出土し、遺構検出面直下に口縁がある。口縁部を半分ほど欠くのみ。口径6cm、高さ19cmである。10も須恵器壺の口縁部破片。11は土師器甕の口縁部破片。ロクロ整形甕であり、にぶい橙色。

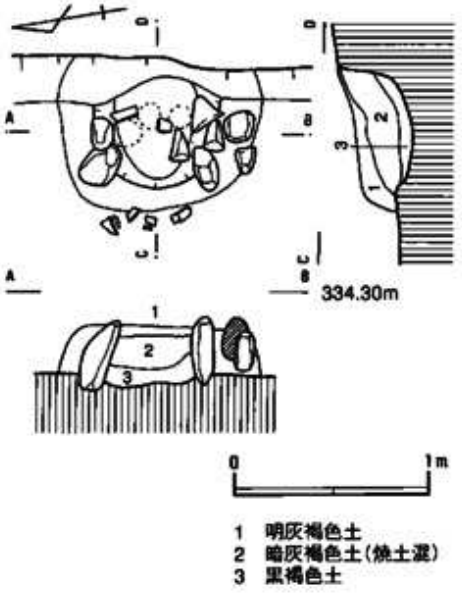
第106図2と4とが本址出土の鉄製品。2は刀子でほぼ完形。4は直径4～5 cmの軸状の製品で、片方が欠損している。紡錘車の軸か。

22号住居址（第97図、98図）

発掘区の最も東端に位置する。西6 mに23号住居址がある。東西軸3.3m、南北軸3.1m、



第97図　B区22号住居址実測図(1／60)

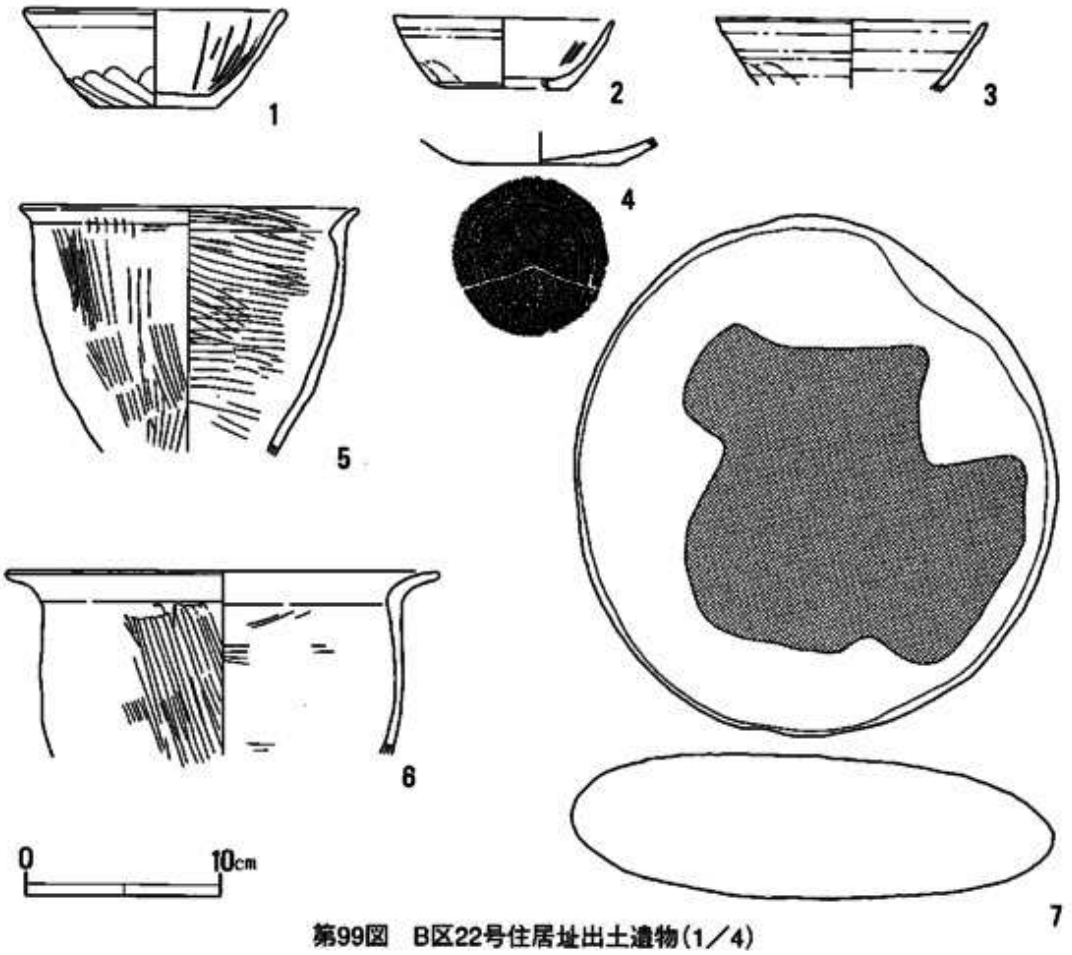


第98図　B区22号住居址カマド(1／40)

壁高35～40cmの正方形に近い形状の住居。東壁中央のやや南寄りにカマドが位置する。石組みのカマドで、両袖の石はよく残っている。燃焼部は壁際にあたり、床面を13cmほど掘り下げてあるが、煙道はほとんど壁外まではのびていない。燃焼部や焚口部の前面から甕破片や鉢破片などが出土した。床面や壁には地山の自然礫が多く露出している。特に南壁側は著しい。そのためか壁の傾斜はゆるやかである。柱穴や周溝は見られなかった。床面からの遺物は少なく、南隅近くから土師器坏が出土した。また南壁際の西寄り部分からは、床面から浮いて平らな丸石が出土した。

出土遺物（第96図、106図）

1～3は土師器坏。1は住居の南隅近くから床面よりやや浮いて出土した3分の1を欠く個体。口径13cm、器高5cmと復元でき、底径は6cmである。やや玉縁状口縁をなし、外面ヘラ削り、内面暗文あり。底部はよく整形され糸切りは残らない。黄色味のある橙色で胎土に赤色粒子含む。2と3はいずれも口縁部小破片。ともに玉縁ではなく、2は丸みのある器形で外面にはヘラ削り、内面には暗文がわずかに観察できる。3は外面にヘラ削り痕がわずかに残るのみ。いずれも赤褐色。4はカマドの前面床直上から出土した底部のみの破片で、割れ口は磨滅し丸くなっている。底面は回転糸切り痕を回転ヘラ削りで調整してある。鉢形土器の破片であろうか。にぶい橙色。5はカマド燃焼部から出土した小型甕。3分の1ほどの破片。口縁部は薄く外反する。6もカマドから出土した大型甕の小破片。口縁は5よりも長くて薄く外反。



第99図　B区22号住居址出土遺物(1／4)

5、6ともに内外面刷毛目で、金色の雲母を含み色調茶褐色。

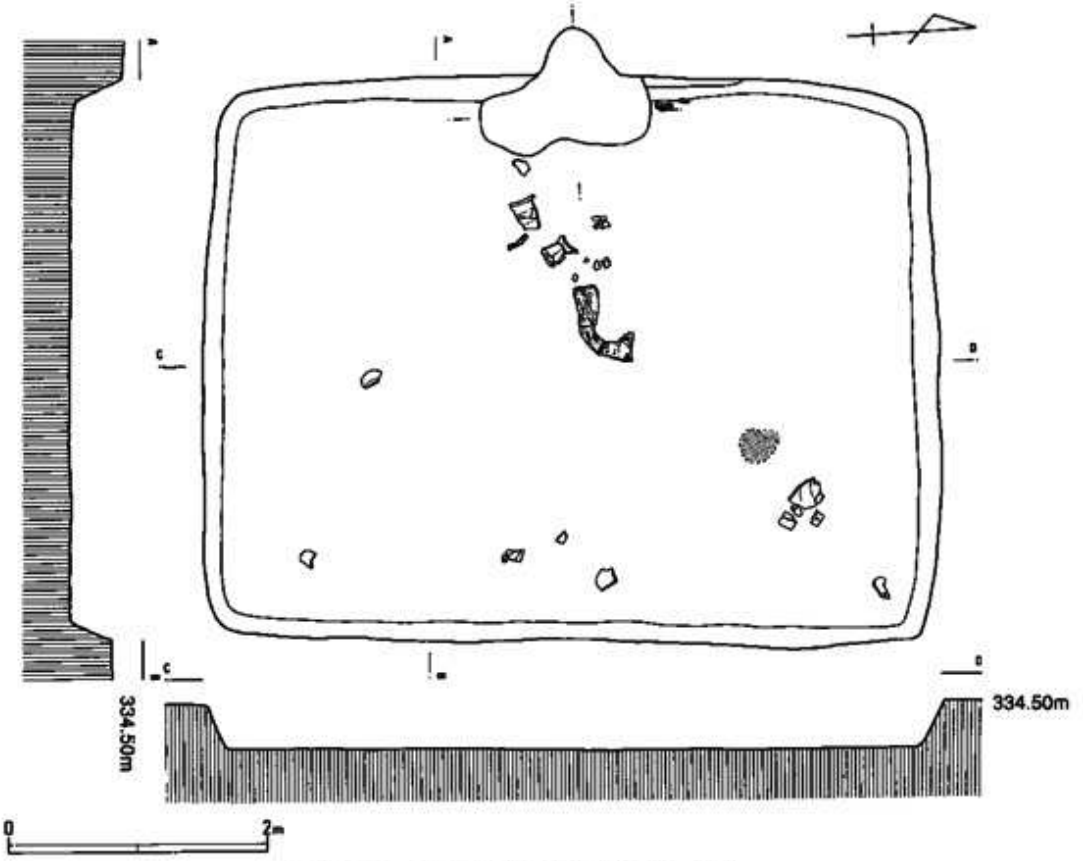
7は南壁際から出土した偏平な丸石。直径25cm、厚さ7.2cmの安山岩で河原の転石を持ってきたものとみられる。平坦面は人為的に磨滅しているようである。

第106図1は床面近くから出土した鉄製品。刀子の破片であろう。

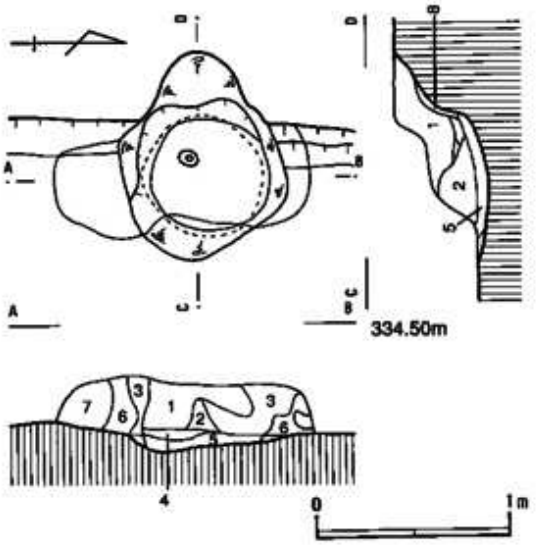
23号住居址（第100図、101図）

発掘区の東端に位置し、北4mには14号住居、東6mには22号住居がある。南北軸5.7m、東西軸4.3mの南北に長い整った形状の長方形をなす。壁高は35cmを測る。覆土上面の層は赤みを帯びた褐色土でしまっており、遺構の掘込み面と類似した土層であったことから当初は住居があるとは思われなかった。サブトレンチにより遺構の存在が確認できたもので、カマドらしい焼土が見つかったことから住居として掘り進めたものである。

カマドは西壁のほぼ中央部に位置する。燃焼部は径70cmほどの窪みであり、焼土が堆積している。煙道は壁外に35cmほど延びている。両袖や天井に石組みは残っていなかったが、燃焼部中央に支脚とみられる柱状の石が据えられていた。カマドの近くや床面の中央部に炭化物や炭化材がみられたり、焼土が残っていたりしたが、火災を受けた可能性もある。



第100図　B区23号住居址実測図(1／60)

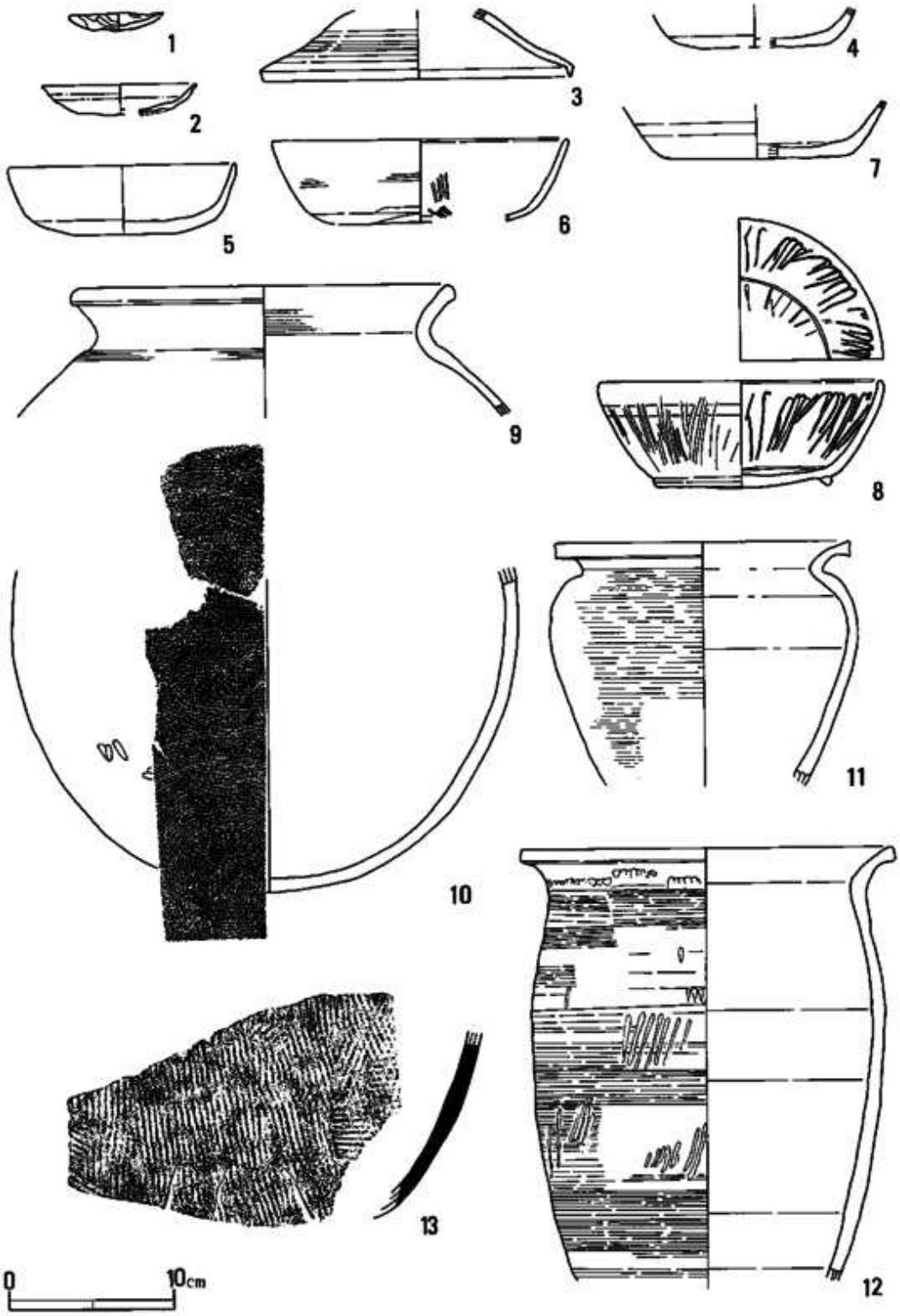


第101図　B区23号住居址カマド（1／40）

本遺跡では大型の部類にはいる住居であるが、柱穴や周溝は確認できなかった。

出土土器（第102図）

1はカマド中から出土した手づくねのミニチュア土器。指頭痕が多くつく。2もカマドから出土した口径4.5cm、高さ1cmほどと推測できる小型の皿。ロクロで成形されている。3は土師器の蓋。4分の1程の破片であるが、口径18.7cmと推定できる。橙色で胎土に赤色粒子含む。4～7は土師器盤状坏。4は底部破片。5は口縁部を半分以上欠くが口径13.5cmと復元できる。器高は4cm。底部周囲がヘラで削られ丸みがある。赤みの強い橙色で胎土は非常にざらつく。住居東壁際の床面直上から出土。6は3分の1程の破片。口径17.8cm、器高4.9cm



第102図　B区23号住居址出土土器(1／4)

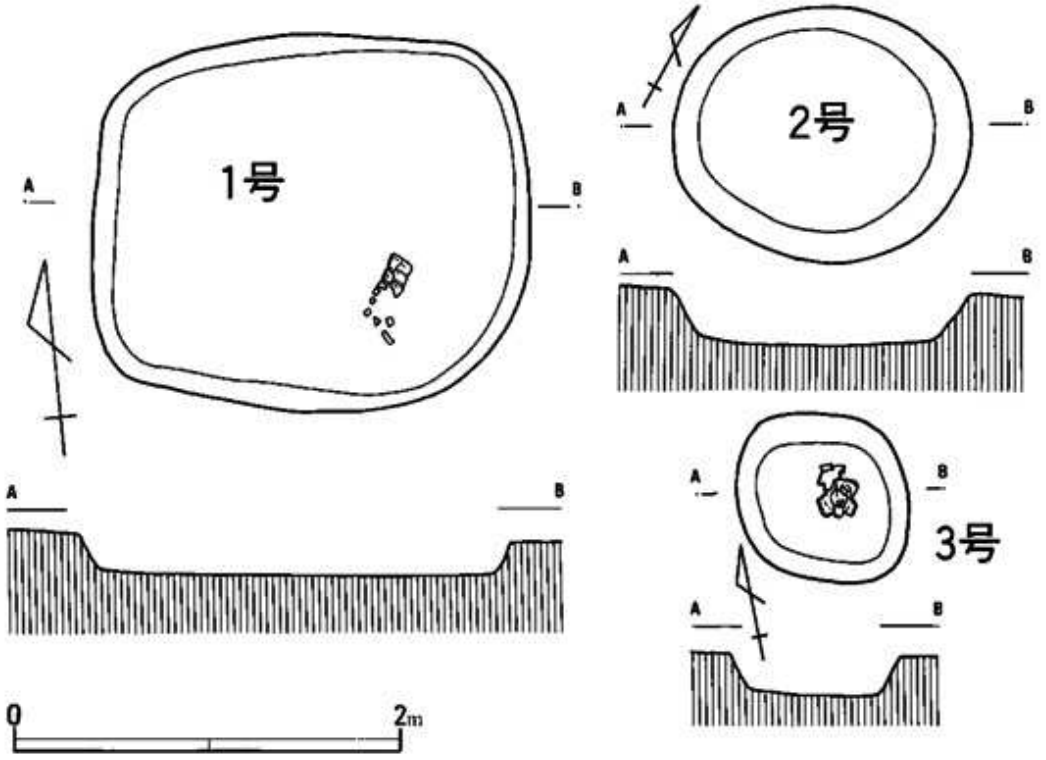
と推定できる。底部ヘラ削り、外面横ヘラ磨き、内面暗文がわずかに残る。胎土は緻密で色調は黄色味ある橙。7は底部破片。4、5、7は6と異なり胎土が荒くざらつく。8はカマド燃焼部から出土した土師器の高台坏。口縁の半分以上を欠くが、口径16.8cmと推定できる。高さは6.3cm。明るい黄褐色を呈し、外面ヘラ磨き、内面から見込み部には暗文。底面は丸みがあり、付け高台。

9は甕の口縁部小破片。口縁部は丸みがあり、頸部に稜が付く。胴は球胴状になるものと見られる。赤褐色を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。10は胴下半の破片。住居北東隅近くの床面直上から出土した。丸底と見られ、同心円状に削り痕が残る。部分的にたたき目がある。にぶい黄橙色。11は土師器の小型甕の2分の1であるが、口縁部の様子は須恵器に似る。胴部には回転ヘラ削りによるとみられる細かい調整痕が明瞭。色調は黄色味のつよい褐色。12はカマド前面の床面から出土した長胴の甕2分の1破片。口径22.3cmと推定できる。胴部は回転ヘラ削り痕が明瞭に残り、たたき目がその上に加えられる部分もある。色調はにぶい橙色。13は須恵器甕破片。

（2）土坑

1号土坑（第103図）

発掘区の南側、8号溝と10号溝とに挟まれた所に位置する。2.2m×1.9mの隅丸長方形を



第103図　B区1号・2号・3号土坑（1／40）

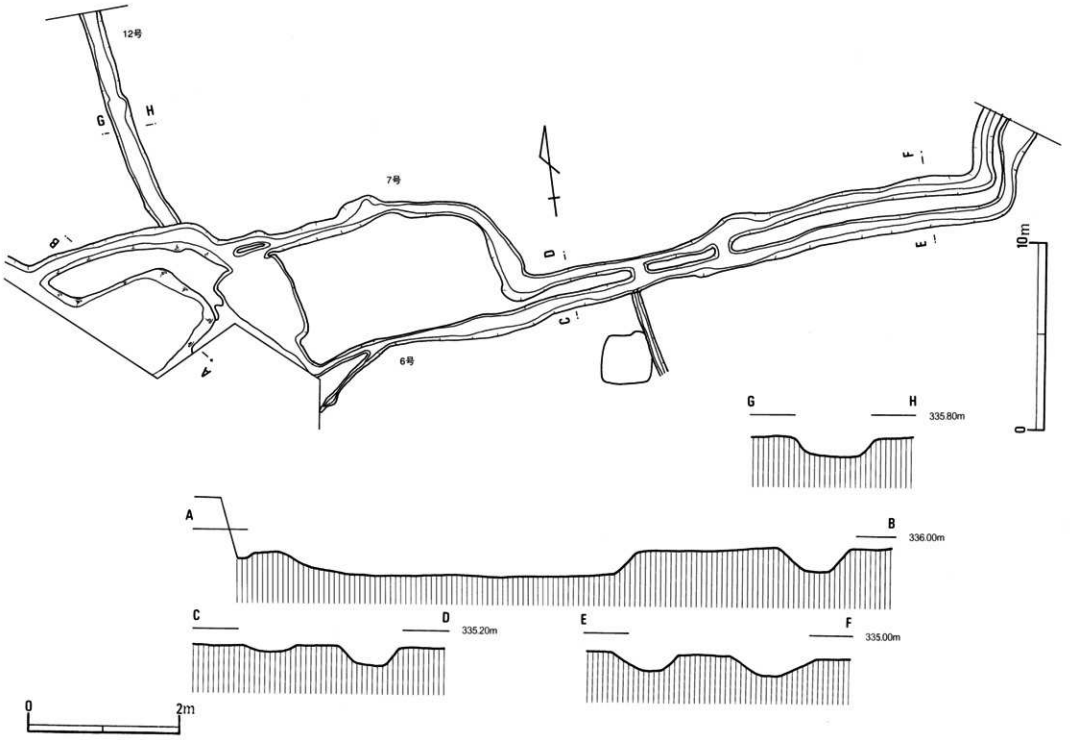
なす。深さ20cmと浅い。底面は堅くないが平坦で、甕の破片がまとまっていた。
出土土器（第105図4、5）
4は口縁の一部を欠く土師器坏。口径11cm、底径5.5cm、高さ5cm。胎土緻密で黄色味ある橙色。外面ヘラ削り、内面暗文わずかに残る。5は木葉痕ある内外面刷毛目の残る甕破片。ほかにも接合はしないが胴部破片が出土している。

2号土坑（第103図）
3号溝と8号溝との中間に位置する。1.5m×1.3mの略円形の土坑。深さは28cmと浅い。出土遺物はない。

3号土坑（第103図）
23号住居址の煙道の西50cmに位置する。1m×85cmの不整円形の小さい土坑。深さは20cm。中から甕の破片が出土したが脆いものがおおく接合しない。第105図6に図示したものはそのうちの口縁部4分の1程の破片。口径21cmと推定できる長胴の甕であろう。肩部以下に回転ヘラ削りとみられる細かい平行線がつく。色調は橙色でしっかりした焼きであるが、破損面は脆い。時期は23号住居址と共通する。

4号土坑（第69図）
12号住居址の東20cmに位置する。1.4m×1.25mの略円形の土坑。深さは20cm。出土遺物はない。

（3）溝
溝は12本が確認されたが、時期については奈良・平安時代（1号～5号、8～11号）と江戸時代（6号、7号、12号）とがある。さらにこれらの溝は集落内を区画している溝（1号、3号、4号、8号、10号）と水路（2号、5号～7号、9号、11号、12号）とに分けることができる。以下まとまりを持った順に記載する。
[区画溝]
1号、3号、4号、8号、10号（付図2）
これらは全てつながったものであり、発掘区の中央部分に位置し、南北から東西へと方形を描くかのような形で検出されたが、北辺と東辺は地区外にも延びることから確認できなかった。溝の覆土は褐色土を中心としており、砂や砂利の堆積は見られなかったし、底面が酸化しているような状況も確認できなかったことから、水路のような水にかかわる施設とは考えられない。特に8号や4号の覆土はしまりが強く、色調も地山層に似ていることから、平面では分からず、掘りながらプランを確認するような状況であった。この溝の性格については検討を要するが、ここでは区画の溝として取り扱った。
このうちまず発見できたのが1号と3号である。この2本の溝は直角に曲がる1本の溝で



第104図　B区6号・7号・12号溝（1／200・1／50）

あったが、ちょうどコーナー部分が2号溝に切られていたことから、当初異なった2本の溝として調査を進めた。結果的に2号溝を掘り上げた際、コーナー部分が2号溝の底よりも深く残っており、つながった溝であることが分かった。その後3号溝を東に向けて調査している折り、一部壁がとぎれ北の方向に別の溝が延びることが分かり、これを4号溝とした。4号溝の北端は急に浅くなり、完全に終了している。またこの4号には8号および10号も合流している。最終的な全形は、南北40m、東西80m以上に及び、東西の途中に4号溝や8号溝がはいることから、内部がさらに区画されていたことが考えられる。ちなみに1号、3号、4号で区画された範囲は東西58m、南北46mである。また4号溝は途中で直角に曲がり、8号溝へと続き、ここに内側の小区画が形成されている。8号の西端は浅くなり、完全に収束する。

溝の幅は1号・3号が40cmから80cmとやや狭く、4号が狭い部分で40～50cm、広い部分で1m～1.4m、8号では1m～1.5mと広い。遺構検出面からの深さは30cm～40cmである。10号は5cm程度と浅いが黒みの強い覆土であったことから容易に確認できた。他とは異なった性格かもしれない。出土遺物は少なく、3号および8号から土器類が数点出土した程度である。

住居群との関係については、1号、3号、4号で区画された部分とその東側の区画とでは住居数に大きな違いがあり、とくに前者の区画内には20号住居と21号住居だけである。

住居と溝との同時性を検討する必要があるが、区画溝の時期については出土した須恵器は平安時代の前半期であり、住居との切り合い関係では10号住居や11号住居を切っていることからこれよりも新しいことになる。特に11号住居は大塚遺跡4段階とされるもので、9世紀前半の時期であり、これより新しいと言うことができる。

出土土器（第105図1～3）

いずれも須恵器で、1は蓋の小破片。2、3ともに坏の口縁部破片。1と2が3号溝、3が8号溝出土。

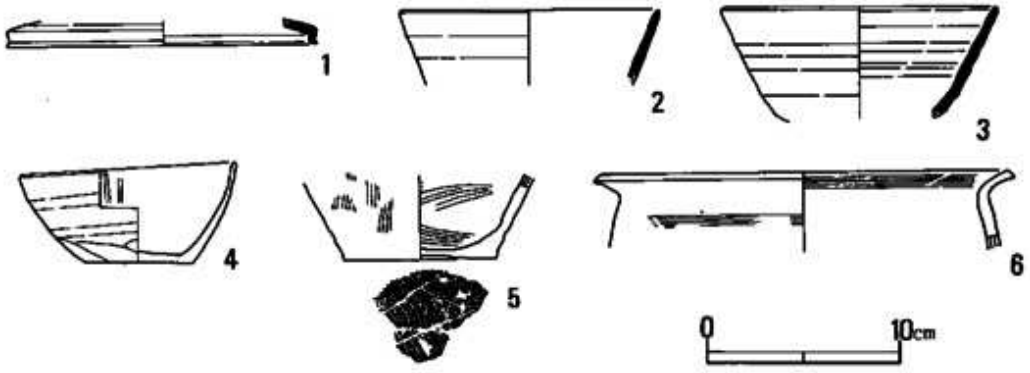
[水路]（付図2・第104図）

まず住居群に近い時期の溝としては2号、5号、8号、9号、11号（付図2）がある。これらの覆土には細かい砂が堆積していたとともに、底面が酸化していたことから水が流れた施設であると判断した。特に2号には河原にあるものと同じ「銀砂」が厚く堆積していた。

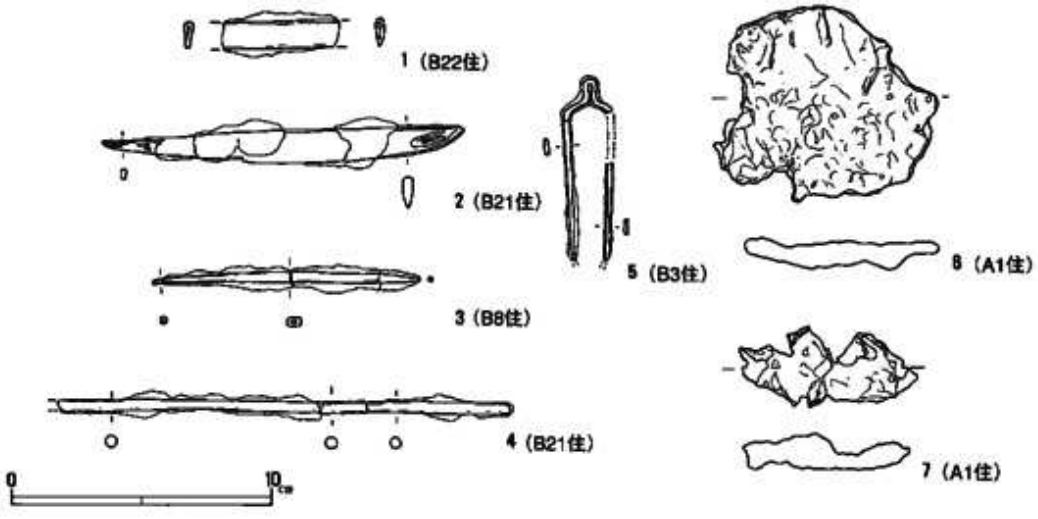
この2号は発掘区の北西から南東に流れる現在の水路と平行して走るもので、南側は発掘区外に延びている。1号および3号溝より新しいものであるが、それらより浅いことから2号の底には1号と3号とが確認できる。遺物はない。

5号、9号、11号はとぎれてはいるが本来は1条の水路であったとみられる。集落の北東から南西に流れるものである。深さは10cmから15cmと浅いが底面は酸化し、細かい砂が堆積していたことから水路であったことは確かであろう。浅いことから上面は削平されてしまったものとみられる。遺物はない。

6号、7号、12号は江戸時代の遺物を出土する水路（第104図）で、特に6号と7号は現在の水路の下に重複していたものである。この2本は地形の傾斜に沿って西から東に流れるも



第105図　B区溝・土坑他出土遺物(1／4)



第106図　A区・B区鉄製品、鉄滓実測図(1／3)

ので、上流部には直径7～8 mの不整円形状の窪地があった。壁の立ち上がりがゆるやかなことから、溜池状の小さな池であったのかもしれない。

出土遺物（第46図、47図）

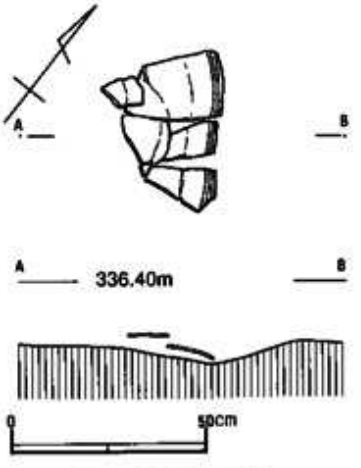
第46図2は7号溝から出土した寛永通宝。非常に磨滅している。第47図1も7号から出土した土鈴。他に7号からは3、4の磁器が出土。3は仏飯器破片で赤絵付け。4は染め付けの小瓶破片。5と6が6号溝出土。5は染め付け湯飲み茶碗の破片。6は染め付け皿破片。その他12号溝の周辺から出土したものに7～10がある。7、8は灯火具であるが7は鉄釉ひょうそく。8は鉄釉灯明皿の破片。9、10は煙管のすい口。

（4）縄文土器（第107図～109図）

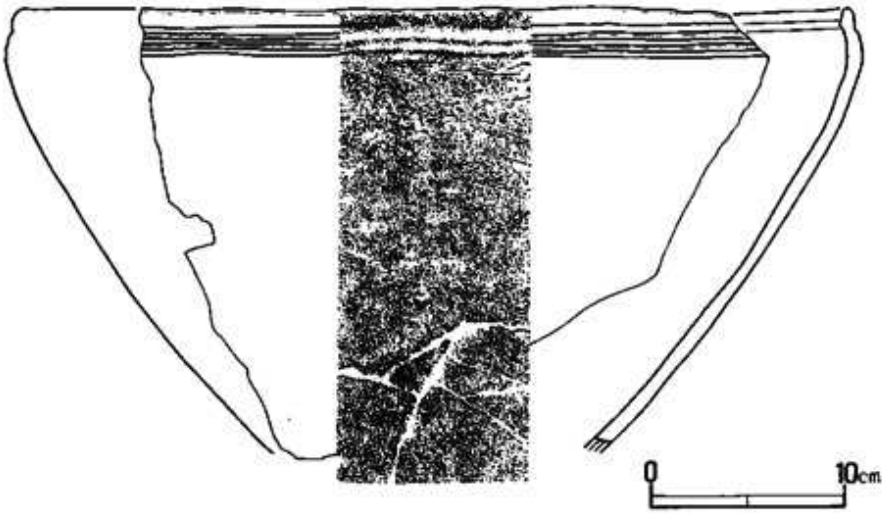
発掘区の西端に近いF－14区から縄文晩期の土器が出土した（第107図）。第108図に示した鉢形土器がこれであり、底部を欠く全体の3分の1ほどの破片が、表を上にして出土したものである。晩期後半の浮線文土器の一群であり、口縁部に3条の沈線がめぐるが、この沈線は隆線の効果を表わすかのような削り取りの沈線である。口縁内面にも削り取りによる隆線が1条めぐる。砂粒を多く含む黒褐色～茶褐色の土器で、断面部がやや磨滅しているものの、上流から流れてきたものとは思われず、他の破片とともに元の位置のままであろう。遺構の存在も考え精査したが特に発見できなかった。土器のあった部分についても、いくぶん窪むだけで埋設したような状況ではなかった。

なお、この鉢形土器付近からは小破片も含め30片ほどが出土したが、このうちの状況のよい口縁部5点を第109図に示した。1、2は鉢形土器、3～5は深鉢形土器の破片と思われ、浮線文土器の一群をなすものである。いずれも胎土に砂粒を多く含みざらつきがある。

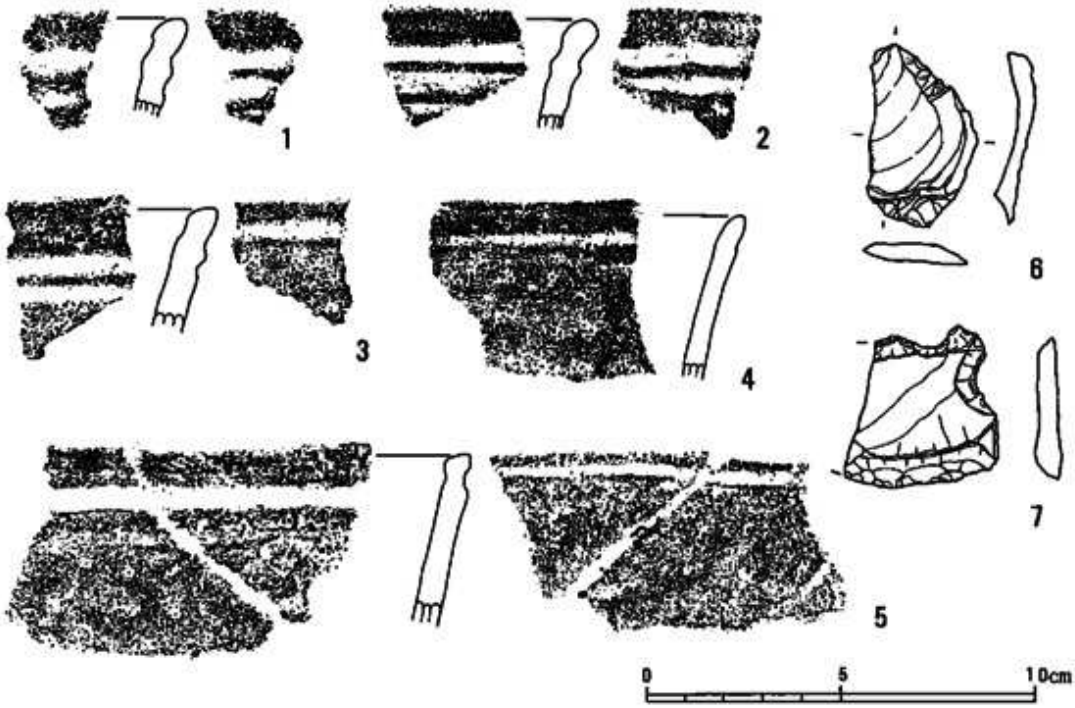
第109図6はB13号住居址のカマドから出土した黒曜石剥片。7はA4号住居址覆土から出土した圭質頁岩製の石匙破片。



第107図　B区縄文晩期土器出土状況（1／20）



第108図　B区縄文晩期土器実測図（1／4）



第109図　B区縄文晩期土器拓本・石器実測図(1／2)

第4章　遺物と遺構の検討

第1節　古墳時代

（1）土器の構成

本遺跡から発見された古墳時代前期の住居は6軒であり、この遺構を中心に多くの土器が出土した。これらの土器類はいくつかの時間差はあるものの一括ととらえられるものも多く、ここでは土器群の構成と時間的な位置付けについて検討してみる。特に4号住居と9号住居から一括廃棄されたような状態で多くの土器が出土しており、これについて概観する。なお編年上の位置付けについては小林健二氏のご教示を得た。

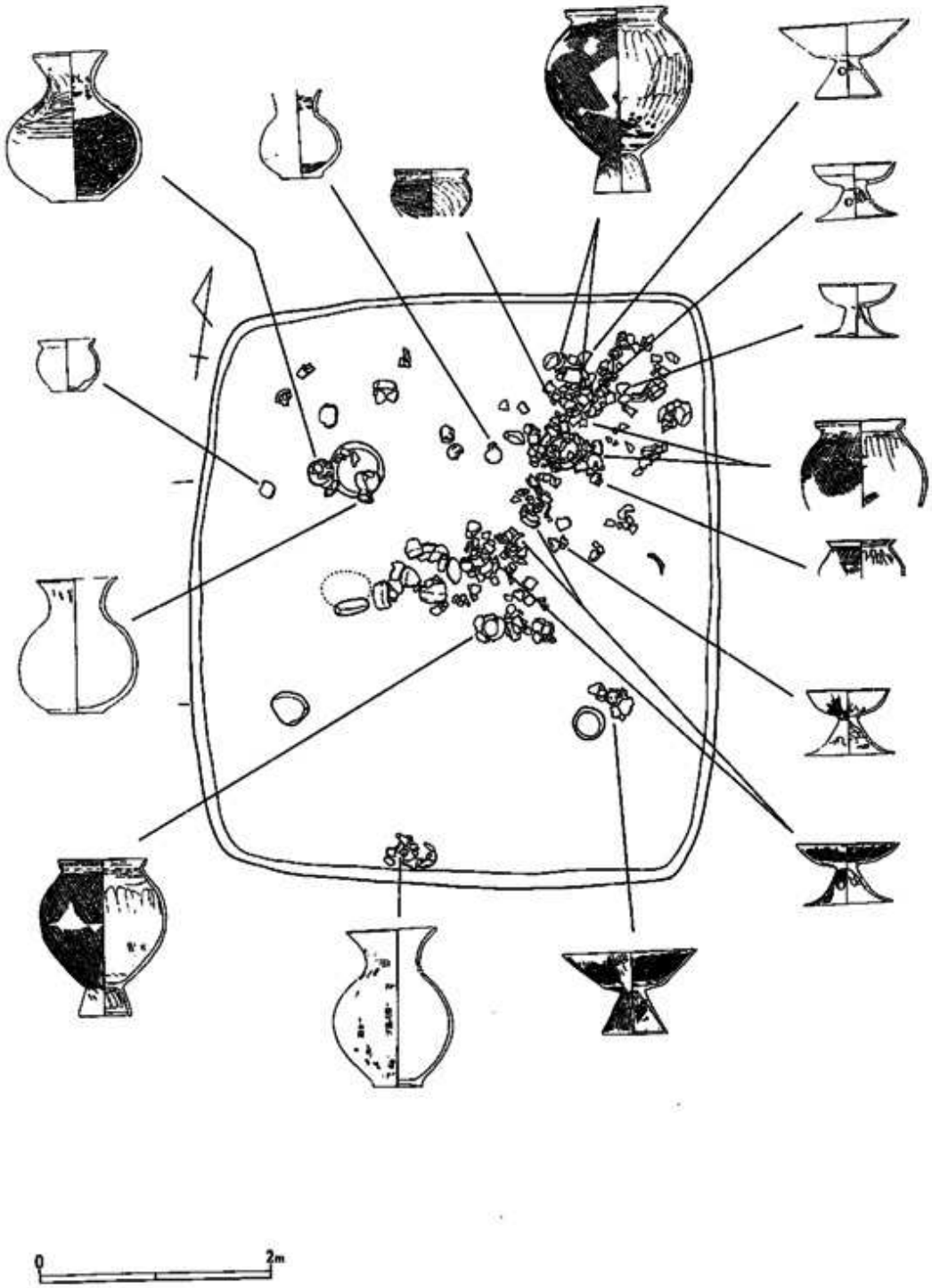
1　土器の出土状態

［4号住居］

第110図にみるように、住居内の北東コーナーから床面中央にかけて土器が多く分布する。この部分では倒立したり横向きになったりした破片が、足の踏み場もない程散乱している。壁側から出土する土器の方が床面より高く浮いていることから、特に北東コーナーから廃棄され、それが埋没中の住居中央に散乱した状況である。また北西側には完形に近い壷が2個体床面から10cmほど浮いて出土しており、これも覆土の傾斜に沿って転がったような状態である。このような状況から、住居の埋没過程において主に北側方向から土器が廃棄されたものと考えられる。しかも住居の覆土自体が厚くなく、土器の重なりもそう激しくないことからこれらの土器は短期間の内に一括して投げ込まれたものとみられる。従って、ここから出土した土器群がこの4号住居で使用されたものではないとみた方が自然であるが、少なくとも廃棄時期は同一であるとみられ、この点では同じ時期の土器セットとみて良いと思われる。

問題はこれら多量の土器群がどこで使用され、どうしてここに廃棄されたかである。4号住居から出土した個体の量がどの位かは正確には分からないが、各器種ごとに口縁や底部の数量を数えてみたのが表1（P95）である。この表の数値は、大小にかかわらず、また同一個体の可能性もありうることも無視して口縁と底部ないし脚部を数えたものであり、実際の個体数とは異なったものであろうが、おおまかな個数をつかもうとしたものである。これによると、4号住居出土の数量は、壷5、小型壷3、ひさご壷5、S字口縁甕111、甕3、高坏26、蓋1という数値になる。S字甕と高坏の数量が多い傾向がでるが、第12、13図に図示できたような器形の分かる個体でも高坏7個、S字甕13個があり、1軒の住居での使用数とするには多すぎるような感がある。やはり、集落単位での廃棄行為ということができようか。

第11図～13図から見る器種ごとの土器の特徴としては、壷では単純口縁の壷（3～5）が主体となる。装飾要素の少ないもので、これに小型壷（1）と広口壷（2）それにひさご壷（9、10）が加わる。高坏は小型で湾状の坏がのり、裾広がりの脚部を特徴とするもの（11～15）、有稜坏と伏椀状の脚から成る（16、17）の二種がある。S字甕は口縁屈折部の刻目ないし押し引き状の刻みを特徴とし、これに肩部の横刷毛目、内面頸部の刷毛目、内面の指なで等が加わる。全形の分かるものは少ないが19、20のように、肩が余り張らないやや縦長の整っ



第110図　A区4号住居址土器出土位置図(1／60)

た器形である。脚部は伏椀状をなし、内面に折り返しの付かないもの（20）と折り返すもの（19）との二種がある。21のように口縁がS字にならないものも見られる。

先述したようにこれらの器種は同時期の一括とみられるものである。

［9号住居］

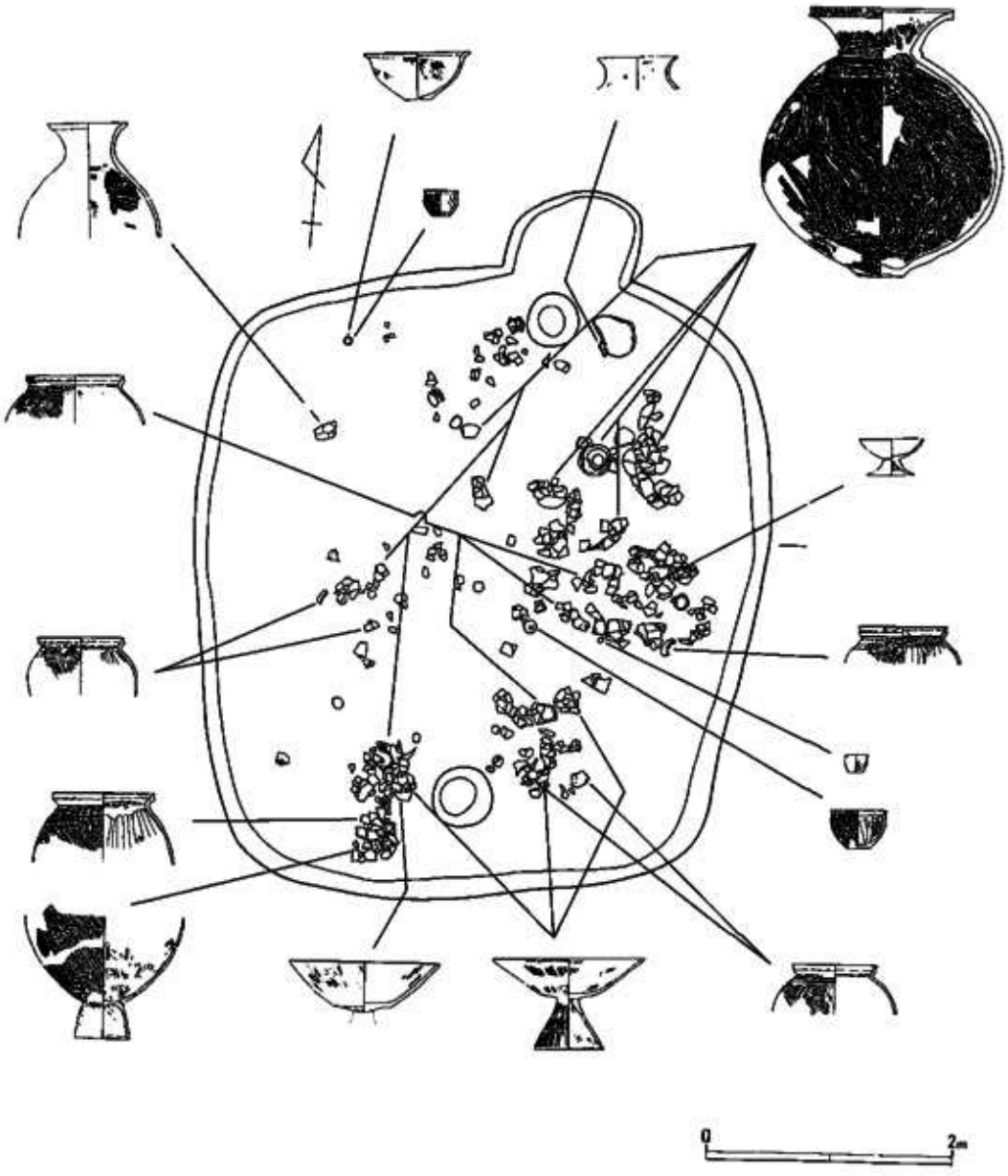
表1では、壷6、小型壷1、S字甕（口縁部）72、高坏（脚部と完形）25、鉢3、ミニチュア2点を数えることができる。この9号もまた4号と同様に多くの土器が廃棄されたような状況で出土している。覆土が30cmと薄いことから明瞭ではないが、床面中央で3cm程浮き、壁際ではそれよりも10cm以上浮いた状態で出土しており、住居の埋没途中で廃棄されたものであろう。ただ4号とは異なり、西側を除いた三方向の壁際の土器が床面から高く浮いており、これらの方向から投げ入れられたものとみられる。このうち器形の分かる大型の加飾広口壷（註1）の接合資料は住居北東コーナーから南西コーナーに向けて帯状に延びるような散布状況であった（第111図）。そのほか高坏でも広く破片が散乱していたものもあった。表1の個体数資料に加え第24～26図に示した復元可能個体数でも、鉢1、壷4、高坏5、S字甕12という数字も、4号と同様に1軒での1時期使用の個体数とは思われず、集落として用いたものと考えたい。ただしここからは手捏ねのミニチュア土器1点、これによく似た小型鉢2点が出土している。これらは口縁の一部が欠けるだけのもので、土器廃棄の祭祀が行なわれたのかもしれない。あるいは、集落内での祭祀行為後にこれらの土器が一括廃棄されたこともありうる。

これらの器種の特徴を概観する。壷には第24図の単純口縁（3）、二重口縁（2）、広口加飾壷（6）などバラエティに富む。特に加飾壷の破片は他に3号と5号からも出土している。大量に出土している高坏とS字甕は4号住居例とよく類似している。特に有稜の高坏の形状は全く同じ。S字甕については全形のわかるものはないものの、口縁屈折部の刻目、肩部の横刷毛目、内面の刷毛目や指調整痕など共通している。これにミニチュア土器などが加わりセットをなすものと思われ、時期の上からも4号住居出土の一群と共通するものとみられる。

［3号、5号住居］

4号や9号に比べて3号、5号は遺物が少ない。特に大型で整った形状の3号住居では思った以上に少ない土器であり、まとまった廃棄行為が行なわれなかったことを意味する。ただし表1からみると、4号や9号と比較して壷や高坏の口縁部あるいは脚破片数には余り差がなく、S字甕の量に圧倒的な差があることがわかる。日常煮沸具としての甕の使用頻度とそれに伴う破損率の高さが多くの廃棄量となることは十分考えられるところでもあるが、それ以上に煮沸をともなう生業と一括廃棄の時節性といったこともかかわってくるのではなかろうか。

なお、少ない遺物ながら住居埋没過程での廃棄が行なわれたことは、土器の多寡とは関係なく確認できる。3号住居でも床面ないし直上から出土したものは南東コーナーのS字鉢（第7図1）と柱穴付近から出土した高坏脚部（9）だけであり、壁際から出土した甑（11）、壷（2）、手焙土器（10）を除いては、他から廃棄されたものであろう（第112図）。特に有段口

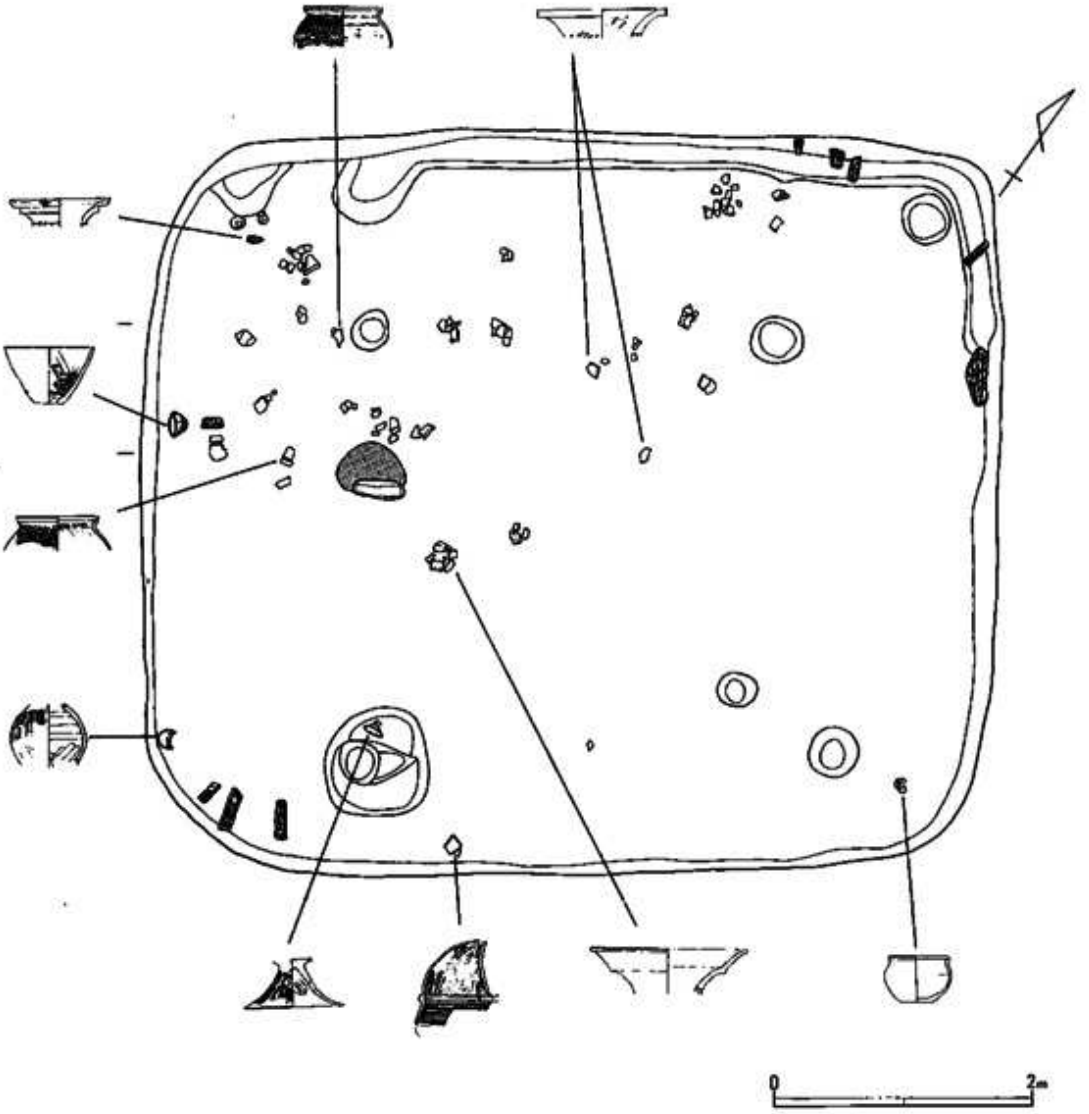


第111図　A区9号住居址土器出土位置図(1／60)

縁壷破片（第７図８）は住居の中央部付近であるにもかかわらず１のＳ字鉢よりも26cm上層から出土していることは、住居が相当埋没していた時点で廃棄されたものとみられ、時間差があろう。

５号住居は上部が削平されており土器の量は一層少ない。床面からは甑が出土しているが、高坏脚部および加飾広口壷破片なども数cmから５cm程度浮いていたものである。

以上、出土状況にふれたが住居床面から出土し、完全にその住居で使用していた土器を抽出することは難しく、この意味から一括廃棄ないし廃棄時期の同一性をつかむことが重要となろう。この点４号と９号のような大量廃棄がそれほど長い時間をかけて行なわれたものではな



第112図　A区3住居址土器出土位置図(1／60)

いと思われ、同一時期のセットとしてとらえて問題ないと思われる。同様に、3号および5号の土器についても特にS字甕や加飾壺の存在から4号や9号の土器の持つ特徴と類似しており、同時に集落を構成する住居群であったと考えたい。しかし、2号住居については規模も小さく出土遺物も限られることから他の住居とは異なった性格の遺構なのかもしれない。時期的には後述するが有段口縁壺が新しい様相のものであり、3号住居上層から出土した有段口縁壺と合わせて新しい時期の集落も形成されていた可能性が指摘できよう。

2　器種の特徴と構成

本遺跡から出土した土器について器種ごとにその特徴を概観する。これについては第113図に分類した。表1とともに参照されたい。

壷①　広口壷　点数は少ないが4号住居から器形がわかるものが出土。表1では小型壷に含めカウントした。

壷②　小型壷であり、これも多くない。3号および4号からの出土がある。

壷③　二重口縁のものとしたが、8-3のような受け口状も含めた。

壷④　単純口縁の壷。4号から3点がまとまっている。装飾性は少なく、刷毛目調整が主であるが、4-4では円形貼付が残る。

壷⑤　ひさご壷であるが、全て破片である。住居では4号と3号から出土。

壷⑥　加飾広口壷と称される類似のものをこの群にした。9-6は全形がわかる。ほかにも3号から2点、5号から1点が出土した。頸部の刺突隆帯や肩部の櫛描き文を特徴とする。3-4はわずかな破片ながら口縁部から本類とみた。また5-1は口縁下端に櫛の刺突が連続し、S字状口縁台付甕の口縁屈折部の刻目と共通する。3-3は有段口縁の様相にあるが、頸部の刺突隆帯は本類の特徴である。

壷⑦　有段口縁の土器で、2号と3号住居からの出土に限られる。前述したように3-8は覆土上層からの出土。

高坏①　坏部が椀状をなし、裾が富士山形に広がる。形のわかるものでは4号と9号とにまとまっている。

高坏②　坏部が深く口縁がS字状をなす。4-18 1点である。

高坏③　①より大型で坏は開き、下部に稜がつく。脚部は4-16を典型とするように伏椀状。

台付甕①　台付甕とみられる口縁部破片であるが、この種は非常に少ない。

台付甕②　他の状況は③と同じであるが、口縁がS字状をなさない。4-21と9-25がある。9-25は外面肩部横刷毛目がないが、内面頸部には刷毛目があることから、時期的には共通しようか。

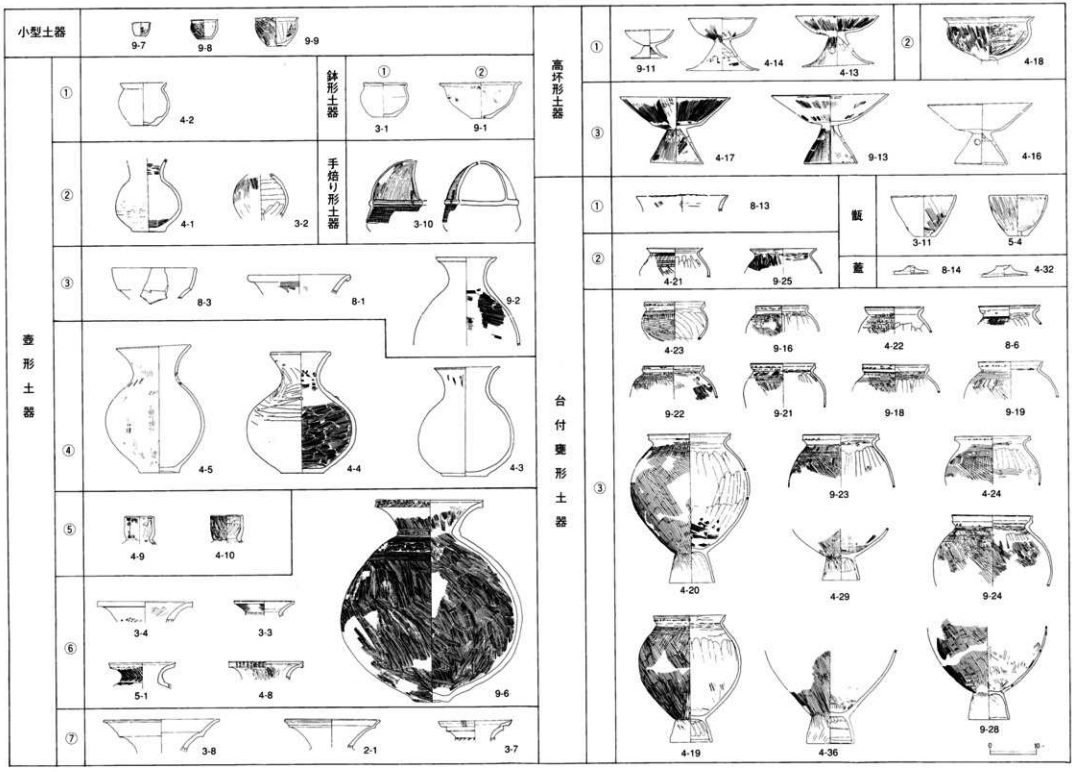
台付甕③　S字状口縁のもの。口縁屈折部の刺突や刻目、肩部横刷毛目、内面頸部の刷毛目、指なで、等を特徴とする。さらにS字状口縁の立ち具合では細く垂直に立ち上がるもの（4-23）、やや傾斜するもの（9-21）、強く開くもの（4-20）などの違いがあり、脚部では内面折り返しのもの（4-19）と単純のもの（4-20）とがある。これらの個性が時間差によるものかどうかは広く検討が必要であるが、多くは4号と9号から出土した一括廃棄としたものである。

鉢①　3号から出土したS字状口縁の鉢。

鉢②　9-1から出土したものがある。

以上の器種に、甑、ミニチュア土器、蓋、手焙り形土器などが伴うものである。

さて、これらの土器の特徴について中山誠二氏、小林健二氏らの研究（註2）を参考にすると、特に台付甕③としたS字甕の特徴は赤塚次郎氏が設定したS字甕Aに類した特徴を持つ



第113図　古墳時代土器分類図（1／8）（土器番号の内、最初のNoは住居址番号、次は各住居内のNo）

もので、小林氏の分類した山梨編年２ｂ期に該当する。手焙り形土器や特徴的な壷⑥も東海西部地域にみられる加飾壷の系統にあるもので、ひさご壷と合わせて古段階の組み合わせとみることが可能である。しかし高坏③については脚部は古い様相なれど坏部形態については、赤塚氏の濃尾平野編年（註３）では廻間Ⅱ式からⅢ式のものに類似している。４号住居や９号住居の例からみて台付甕③と高坏①～③が共伴することは確かと思われ、この点からも山梨におけるＳ字甕Ａ段階の特徴を有する一群にも時間差があるように思われる。この時間差が、かつて小林健二氏が分析した在来甕とＳ字甕の比率（註４）にもかかわるものとみられる。大塚遺跡からはＳ字甕以外の台坏甕①は非常に少なかったからである（表１参照）。

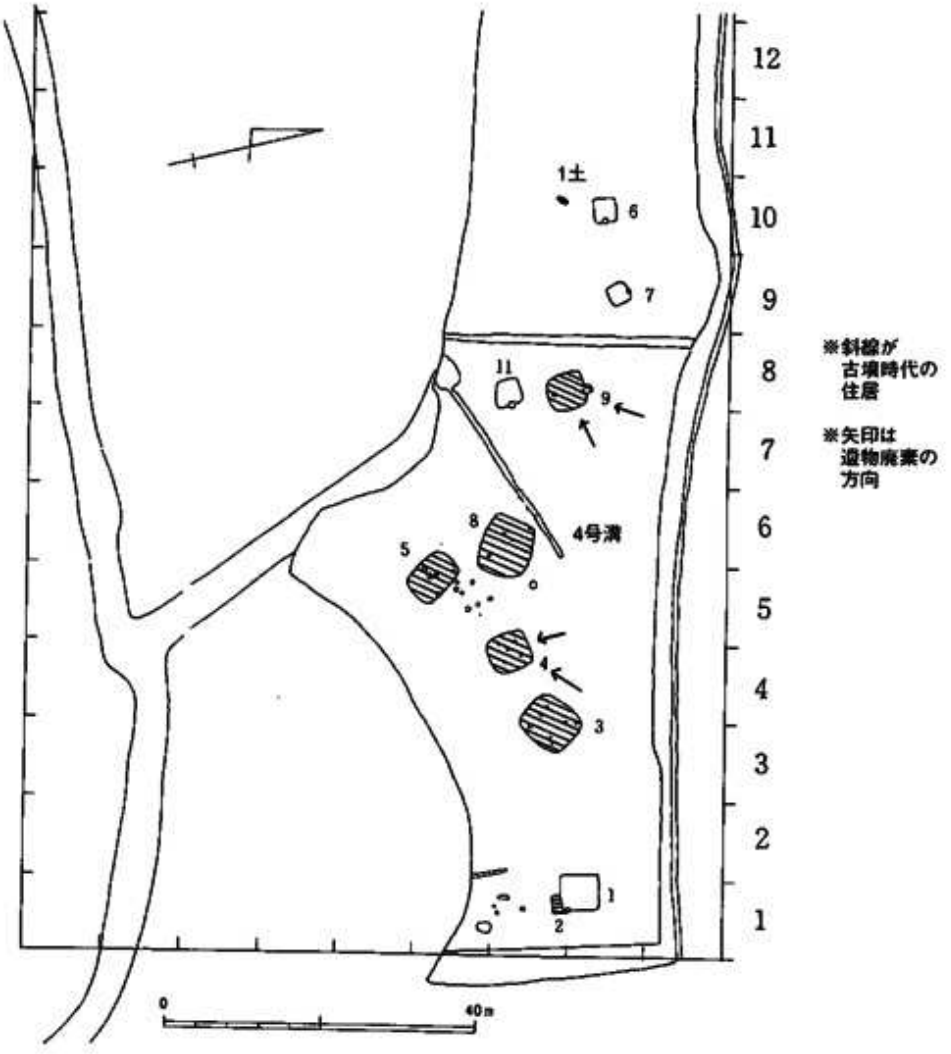
以上の特徴から、本遺跡土器群はS字甕受容期からやや下がった一群のものと考えられ、小林編年の２b期はさらに細分される可能性があり、この意味からも新しい資料を追加したことになる。この段階は壷①②③④・鉢②といった在地系の器種に、壷⑤⑥・高坏①②③・台付甕②③・鉢①それに手焙り形土器を加えた東海地方の影響下のものが加わるという構成にある。遺跡全体における器種構成の量的な比率については、正確さに欠けるものの表１を参考にするとＳ字甕が圧倒的に多く、高坏がそれに次ぎ、以下壷類、鉢、蓋、甑、手焙り形土器となろうか。

なお、器台はまだみられずこの点からも時期的な位置付けが可能である。また、村前東Ａ遺跡（註５）の同時期の遺物を構成する北陸系土器が見られないことは、大塚集落の性格にかかわるものと思われる。

（２）集落の構成（第114図）

本遺跡からは住居跡６軒が確認されたがこれらの時期については前項で検討したように、S字口縁甕分類での古い段階を主体としている。ただし床面から小林編年の３～４段階とみられる有段口縁壷が出土している２号住居址については、他の５軒とは時期が異なるものである。また、遺構の規模が小さく浅いこと、出土土器が非常に少ないことなどから一般の住居とは違った施設かもしれない。しかしこの時期の有段口縁壷が３号住居址覆土上層からも出土している他、８号住居覆土からは口縁外面に刺突をもたないS字甕の破片も少量ながら出土していることから、S字状口縁甕の新しい段階にも小規模ながら集落が形成されていた可能性がある。

それにしても本遺跡の古墳時代の中心をなすのは、S字状口縁甕の古段階にある３号、４号、５号、８号、９号の５軒というこじんまりとした集落ということになる。この軒数については、北および東を中心とした方向から土器を投げ入れたという４号と９号の遺物出土状況から判断すると、北側の削平されてしまった部分にさらに何軒かの住居があった可能性がある。いずれにしても、南北を谷に挟まれたさほど広くない尾根上に営まれた小規模なしかも継続性の低い集落であったと推測できる。住居群以外の施設については付近から柱列址や溝が発見されているが同時性については不明である。２号溝は４号覆土上部を切っていることから明らかに時期は異なる。ただ４号溝については、８号に近接するものの切り合ってはおらず、また溝の走る方向が他の平安期の溝とは異なっていることから古墳時代の可能性は残る。この溝は南側



第114図　古墳時代の住居群(1／1000)

の谷方面から延びて来ているものである。集落全体からみてもこの南側の浅い谷に面していることから、この谷が水場および生産・加工の場として集落の形成に大きな役割を果たしたものと考えられる。なお、住居群からやや離れた場所に位置する1号土坑は墓壙とみられるもので、古墳時代前期の可能性がある。

次に本集落が形成された背景を考えてみると、富士川右岸の扇状地先端部という立地上の意味がありそうである。これまでこの地域での古墳時代前期の集落は、韮崎市七里岩上の坂井遺跡群を中心としていた。特に坂井南遺跡（註6）からは古墳時代前期を中心とした58軒の住居跡と方形周溝墓が発掘されている。この内古段階のS字状口縁甕を出土する住居は2軒であるが、その前後の時期についても集落が営まれている継続性の高い重要地域である。一方弥生時代に始まり古墳前期を経て後期から奈良・平安時代まで集落の続く十五所ー村前東ー新居道下遺跡からなる御勅使川扇状地南端の遺跡群が最近の調査で発見されている。これらの遺跡群

から扇状地先端部をたどって行けば大塚集落に至り、さらに龍岡台地上の久保屋敷遺跡（註7）を経て富士川を渡れば七里岩上の坂井遺跡群に達することができる。このような富士川沿いに展開する集落系列のルートの一つが大塚集落であったととらえられないであろうか。この点に時期的にも限られた小規模集落という本遺跡の性格を窺うことができる。ここに拠点集落である村前東A遺跡とは異なった様相をみることができるのであり、北陸系土器を伴わないという実態もこのような集落の性格に起因するものと思われる。

註

1　加飾広口壺の名称については赤塚次郎「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7　1995　による
2　中山誠二「甲斐弥生土器編年の現状と課題」『研究紀要』9　山梨県考古博物館他　1993、
　小林健二「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993
3　赤塚次郎「伊勢湾地域における古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993
4　小林健二「外来系から在来系へ－甲斐のS字甕の変遷－」『研究紀要』9　山梨県考古博物館他　1993
5　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第112集『村前東A遺跡概報3』山梨県教育委員会他　1996
6　山下孝司『山梨県坂井南遺跡』韮崎市教育委員会　1984、山下孝司『坂井南』韮崎市教育委員会他　1988
7　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第1集『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会　1984

表1　古墳時代前期土器数量一覧表（口縁部、底部、脚部）

住居番号			2号住	3号住	4号住	5号住	8号住	9号住	遺構外	小計	合計
壺	単純口縁	全形			3					3	17
		破片		5	1		6	2		14	
	二重口縁	破片		1	1	1	4	3	1		11
	加飾口縁	全形						1		1	4
		破片		2		1				3	
	有段口縁	破片	1	5							6
	底部	破片		7	7	3	5		2		24
小型壺	口縁部	全形			2					2	9
		破片		3	1		2	1		7	
ひさご形	口縁部	破片		1	5				1		7
S字甕	全形				2						2
	口縁部	破片	1	26	109	19	31	72	19		277
	底部	破片		4	8	12	6	19	11		60
	脚部	破片	1	3	23	21	6	35	1		90
甕	口縁部	破片			3		3				6
高杯	全形				5			2			7
	杯部	破片		14	21	9	13	10			67
	脚部	破片		20	9	8	7	23			67
鉢	全形			1S字				2			3
	破片					1	1	1	1		4
蓋				1	1		1				3
甑				1		1					2
手焙形				1							1
ミニチュア								2			2

第2節　奈良・平安時代

（1）土器の編年的位置付け（付図3）

大塚遺跡にて発掘された奈良・平安時代の住居は33軒あり、これらから土師器や須恵器が出土した。この時期の土器編年については坂本美夫氏を中心とした研究（註1）や最近の甲斐型土器研究グループによる研究（註2）がある。ここではそれらの成果を参考にして、土器群の形態および組み合わせから新旧の段階を想定し、それらの編年的位置付けを検討してみたい。これらの土器類については、坂本美夫氏、山下孝司氏にご教示いただいた。

1段階

土師器の盤状坏、須恵器坏、土師器ロクロ整形甕等から構成される1群で、A12号住居址、B8号住居址、B23号住居址の3軒の資料がある。須恵器坏では12号1の底部は全面ヘラ削りされており体部との境にいくぶん稜をなし、しかも口縁への立ち上がりも直線的であるという特徴は、底部中央に回転糸切り痕を残すB8号1よりも若干古い様相がある。A12号からは、この須恵器坏とともに土師器盤状坏とロクロ整形の小型甕が出土しており、本遺跡では最も古い土器群とすることができよう。

次に23号住居からは、須恵器坏は欠くものの良好なセットが出土している。5は底部が全面ヘラ削りされている浅い坏、6は甲斐型坏につながる緻密な胎土の盤状坏で、内面には暗文状の跡が観察できる。これに高台坏である8が伴うが、この形態は宮の前遺跡1号溝状遺構および164号住居出土の中間形態とも言えるものである（註3）。これらの坏に1、2のようなミニチュアや小型皿、3の蓋、9～12のような甕が伴う。特に甕は長胴型、球胴型、小型を含めロクロ整形を特徴とする。12ではカキ目、たたき目といった技法が観察でき、口縁部はやや角張り肥厚する。

2段階

B9号住居址、B16号住居址の一群を2類とした。9号の資料では土師器甲斐型坏の古い様相を持つ9を特徴とする。底部は丁寧に調整され、体部との接合部分は丸みがある。外面は横方向のヘラ磨き、内面や見込み部には暗文が施されているものである。これに7、8のような須恵器坏、3の土師器蓋、1、2の須恵器蓋、10の小型甕が伴う。特に1の蓋は直径18cmを越す大型のものである。16号では土師器坏が出ておらず明確な対比ができないが、3、4といった須恵器坏は回転糸切り痕の周囲をヘラ削りで仕上げられ、丸みのある器形をなすことからこの1群としたもの。このような技法は近隣では韮崎市中田小学校遺跡19号住居址出土の須恵器坏にみられ（註4）、時期も共通するものとみられる。なおこのB16号－3、4の器壁は薄くて焼成もよく、他に類例が少ない。甕はロクロ整形の長胴型と小型とが伴い、長胴の10の口縁部はまだ肥厚している。

3段階

B20号住居址出土のセットで、いわゆる坏系鉢（5）と須恵器蓋（2、3）、坏（4）それにロクロ整形長胴甕（1）がある。5はこの中巨摩や北巨摩南部での類例は少ないようであり韮崎市藤井平や中巨摩郡〆木遺跡でも出土していない。1の長胴甕はやや肩が張り、口縁は外反するものの肥厚はしない。

なお住居からの出土ではないが、A区8号住居址の覆土上層から須恵器が多く出土したが、この中に本類としたものがある。坏11、12は糸切り痕がそのまま残り、2段階のようなヘラ削りは見られない。この点次の4段階に含めた方が良いかもしれないが、全体に大きめで深目のものがあり、この類に含めておいた。3の高台坏についても次のB区21号住居のものに似るが、全体の丸みや高台の高さに違いがある。A3号上層からは土師器坏と須恵器高台坏が出土しており、この段階の古い部分とした。

4段階

最も類例が多いが、特にB21号、B19号、B13号住居からの出土例を代表とする。

B21号では1の土師器甲斐型坏とともに、須恵器高台坏（5、7）、坏（6、8）、蓋（3、4）、長頸壺（9）がある。ただしこの21号－1の坏は深く丸みがあり、本類でも3段階に近い古手のものであろう。他に甲斐型坏は11号－1、12号－1、2、13号－1、19号－8など多いが、内面に暗文が顕著に残るものが少ない傾向にある。器壁の残存状況にもよるが、比較的少ないものと思われる。これらの甲斐型坏とともに21号では6や8のような口径12cm以下の小型で、底部糸切りのままの須恵器坏が伴っている。このような傾向は13号や19号にも共通する。ことに13号－3や19号－4、7の須恵器坏は浅く、やや広めの底部から直線的に立ち上がる器形である。19号では凸帯四耳壺（9）が共伴する。

13号では甲斐型坏（1）とともに、甲斐型甕（7、8）とロクロ整形甕（9）とが出土している。この段階になるとロクロ整形甕の口縁部はだいぶ薄くなっている。このほかに17号では甕系の鉢（3）と内面黒色坏（1）が出土し、7号では内面に暗文が多い高台坏とみられるものが出土している。またA6号住居址からは須恵器（2）が出土したが、類例に乏しく位置付けについては土師器皿（3）が伴うことから本類に含めた。なおロクロ整形の小型甕については12号－3、および14号－3がある。

以上のように本類については量的にはばらつきがあるものの、土師器甲斐型坏、内面黒色坏、高台坏、皿、甲斐型甕、ロクロ整形の長胴甕・小型甕、須恵器坏、高台坏、蓋、壺等の器種がそろっている。

5段階

A11号住居址とB22号住居址の2軒からの資料が該当する。B22号－1では口縁がやや玉縁となる甲斐型坏が出土している。底径も口径に比較して小型化してくる。この坏とともに甲斐型甕（5、6）がある。A11号では土師器坏はみられないものの、須恵器坏が出土している。

このうち2は口径11cmに対して底径は6cmと小さく糸切りのままであることから本類としたものである。この段階にもロクロ整形甕5が伴っている。

6段階

A1号住居址の資料である。土師質土器のような小型の土器と外面に取手のある釜形の土器である。

以上のように、本遺跡の奈良時代から平安時代の土器類にはいくつかの変遷をみることができた。1段階や4段階ではさらに二時期に分類することが可能であろうが、ここでは大きく6段階ととらえた。次に坂本氏や甲斐型研究グループの行なっている時期区分に当てはめると以下のとおりになろうか。

大塚遺跡	1段階	奈良・平安時代土器編年	Ⅳ～Ⅴ期
	2段階		Ⅴ～Ⅵ期
	3段階		Ⅵ～Ⅶ期
	4段階		Ⅶ期
	5段階		Ⅸ期
	6段階		XⅣ～XⅤ期

年代については、甲斐型土器の平城京での共伴例や、土師器に伴う須恵器、灰釉陶器などを参考にして組み立てられてきているが、それらの実年代のとらえかたによって変化していることも事実であり、他地域編年の同一化が大前提という坂本氏の指摘するとおりである。今後の県内での年代の限定できる寺院や官衙資料に期待するところ大である。ここでは甲斐型研究グループや宮の前遺跡での櫛原氏・平野氏の行なった年代に基づいてみると、大塚遺跡1段階は8世紀中頃を中心とした前半期、2段階が8世紀後半、3段階が9世紀初頭、4段階が9世紀前半、5段階が9世紀中頃から後半、6段階が11世紀後半とすることができようか。

なお、表2に本遺跡出土の土師器、須恵器の口縁部と底部から数えた数量をまとめてみた。これによると、須恵器の量の多さがよくわかる。特に坏や蓋での比率は特徴的である。土師器でも甲斐型甕に比較してロクロ甕が3倍以上も多い傾向が読み取れ、巨摩地域の特徴が確認できる（註5）。周辺地域との比較をする中で、須恵器の供給源や流通、灰釉陶器の流通の時期と範囲、土師器甕の生産、器種構成などの検討が行なわれ、富士川右岸地域の奈良・平安集落の実態が分かってくるものと期待される。今後の課題としたい。

註

1　坂本美夫、末木　健、堀内　真「甲斐地域」『奈良・平安時代土器の諸問題』1983
2　山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ『甲斐型土器ーその編年と年代ー』1992
3　平野修、櫛原功一『宮の前遺跡』韮崎市教育委員会他　1992
4　山下孝司『中田小学校遺跡』韮崎市教育委員会　1985
5　保坂康夫『駒井遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会他　1986

表2　奈良・平安時代土器数量一覧表

住居			A1住	3	6	8	11	12	13	15	他	B1住	2	3	4	5	6	7	8	9	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	3溝	他	小計	合計
土師器	坏	口縁		3				3		1	11	3				1	4	5		1	20	3	19	1		5	12		5	1		23	6	16	17	160	292
		底部		10		9					5	6			1		2	3			5		16	3		5	2				1	5	17	3	19	112	
		全形		1				1									1	1		1	1	2				4			1		1	2	3		1	20	
	蓋	縁															1	1										1					1			4	8
		天井										1																				2			1	4	
	皿				1																															1	1
	鉢																										1			1						2	2
	内黒																										1									1	1
	ミニ																																3			3	3
	土師質		5																																2	7	7
	甲斐型甕	口縁				4					1			1			1	2			1		5		1	1	7	1	2			6		2	2	37	55
		底部			1	1												1					2			3	2	1	1			5			1	18	
	ロクロ甕	口縁		7	1	8	3	3			3	1	1			1	2	3	2	4	1		6	6	1	14	4		3	2	2	7	16	2	14	117	172
		底部		4	2	7			1		1	2		1				2	1	1	1	1	2	4		3	6	1		2	1	2	3	2	4	54	
		全形																												1						1	
	釜形		7																																	7	7
須恵器	坏	口縁		26		34	1				23	3					3	2		18			5	7		15	4	4	9		1	6	5	3	7	176	331
		底部		15		33					10	4			1	1	4	5		10	2	1	5	7		7	1		1				1	2	17	127	
		全形		1		7	2	1				2							1	2			3						4	1	4					28	
	蓋	縁		3		13	1				8					1			1	9					1				2	1		1		1	7	49	82
		天井		10							7													2	1			1	1					2	2	26	
		全形																		2						1			1	1	2					7	
	鉢			1	1	1											1																			4	4
	甕	口縁															1												1		1					3	8
		底部				2											1								1	1										5	
	凸帯壺																									1			1							2	2
	壺					1											2							1					1		1					6	6
	コップ											1																								1	1
灰釉	碗	口縁																						1												1	1

註　個数は大小にかかわらず、口縁部と底部を数えた。
　全形とは、完形あるいは全形が推定復元でき、図示したもの。
　合計欄は、口縁部、底部、全形の数量を合計した数値であり、実際の個体数よりも多いものとみられるが、器種ごとの数量比較の参考になろう。

（2）住居と集落

1　住居の時期と集落としてのまとまり（第115図）

前項で土器の編年を概観したが、ここではそれをもとに住居の時期をまとめてみる。

1段階　A12号、B８号、B23号の３軒がある。これらは広い発掘区の中の、北西と西と南東という離れた位置に点在している。このうちA12号とB８号とは一辺３ｍ以内の小規模な竪穴であるが、B23号は5.7m×4.3mという長方形の整った大型住居であり、この長辺の西壁にカマドが作られている。長辺にカマドが設けられるという点では小型ながらA12号にも共通する。

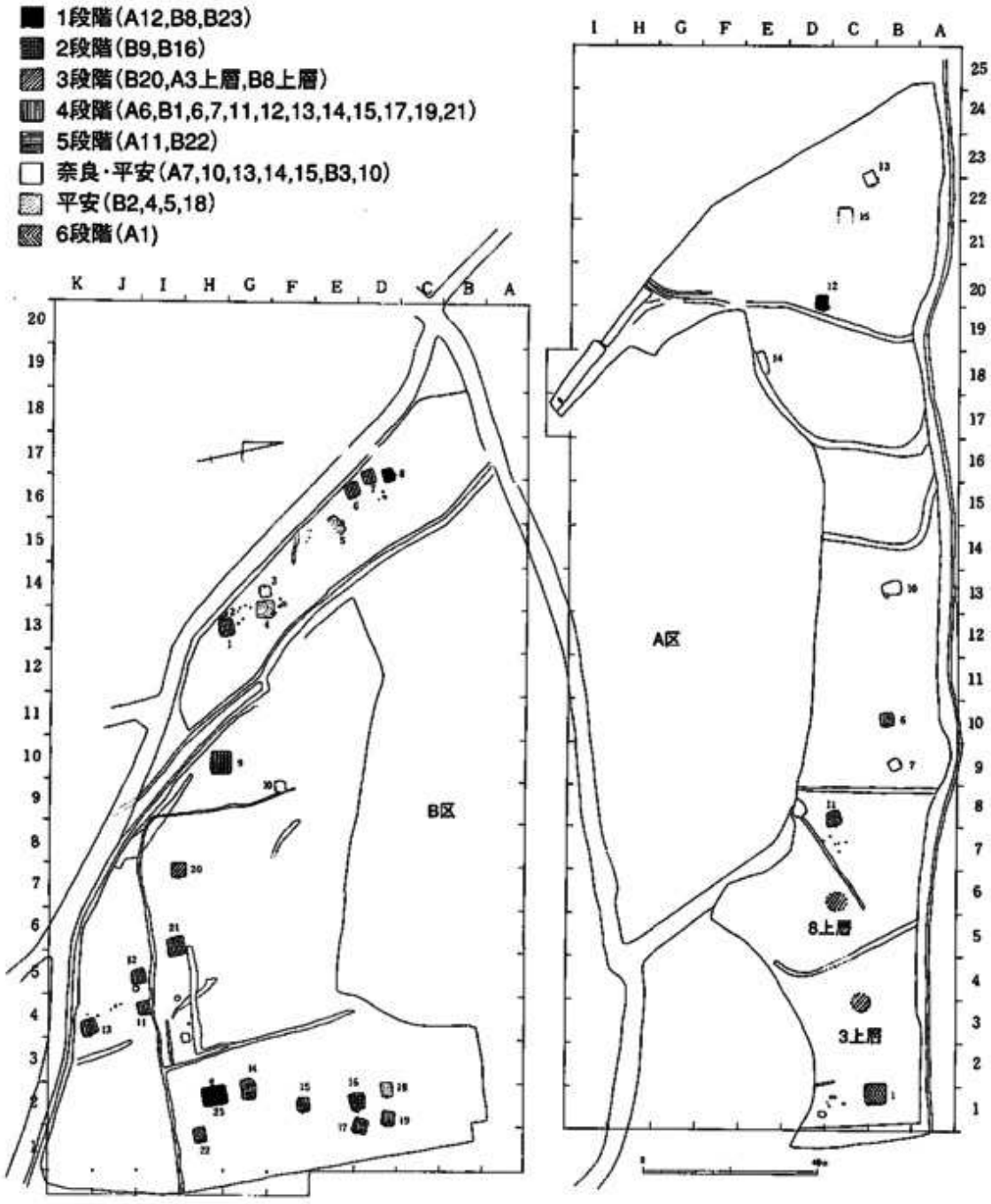
なお、A12号の近くには同じ様な規模の13号と15号とがあるが、ここからはロクロ整形甕の胴破片しか出土しておらず詳しい時期不明の住居である。これらが１段階であった可能性もありうるが、特に長辺にカマドのあるA10号にもその可能性がある。

2段階　B９号とB16号の２軒で、いずれもB地区に位置するもののこの２軒は80mほど離れている。９号は5.4m×4.7mの整った形状の本遺跡では大型の住居である。めずらしく周溝もめぐっている。１段階の23号が長辺にカマドが設けられていたのに対して、この９号は長方形の短辺にカマドがある。方形に近いものの16号でもこの傾向がある。３段階以降平安時代にあっても同様の傾向にあることから、長辺カマドは１段階の特徴とも言える。

なおカマドの位置方向について、奈良時代とみられる１段階および２段階の住居５軒では、北カマド２軒、東カマド２軒、西カマド１軒というように北と西の比率が東と同等に近い。これに対して３段階以降の平安時代では住居21軒のうち東カマド17、北カマド３、西カマド１と圧倒的に東カマドが多い（表２）。八ヶ岳南麓地域の平安時代カマドにあっては東カマド例が多く、冬季の北西風に備えた造りが想定されるところである。この観点からすると、北ないし西カマドは冬の季節風の影響のない時期の供用施設とみることができ、この１段階、２段階の住居に季節性を求めることもできよう。

3段階　B20号住居が１軒該当する。これはB地区の中央、他の住居の少ない所に位置している。加えてA地区の古墳時代住居である３号と８号の埋没途中である窪みから、この時期から次の４段階にかけての須恵器が多く捨てられており、この場にて廃棄にかかわる祭祀が行なわれた可能性がある。

4段階　13軒と多くの住居があり、集落としては最も発達した時期と見られる。A６号、B１号、6号、7号、11号、12号、13号、14号、15号、17号、19号、21号などである。中央の浅い谷を取り囲むかのように、発掘区全体から発見されているが、特にB地区の西側と東側とに集中する傾向がある。ただ前段階までのような大型住居は検出されておらず、３ｍ台の小型住居が２軒ないし３軒単位で配列するような傾向がある。6号と7号、11号と12号ないし13号、14号と15号、17号と19号ないし18号、さらに１号と２～4号のどれかといった組み合



第115図　奈良・平安時代の集落(1／1600)

わせである。このような中で4 mを越す中型住居の21号は西カマドでありしかも火災を受けているという状況がほかと異なっている。集落の中央に近い箇所に位置するという特徴もある。

5段階　A区11号とB区22号の2軒である。この時期を最後に一連の集落は終わる。2軒とも3m台の小型住居でいずれも東カマドである。

6段階　前段階までの住居群とは断絶した11世紀代の住居が1軒発見された。発掘区のもっとも北西端に位置するA区1号住居である。

その他　時期決定できる遺物がない住居が11軒あるが、このうち甲斐型甕破片を出土し平安時代と見られるものにB地区の2号、4号、5号、18号がある。他のA地区7号、10号、13号、14号、15号、B地区3号、10号は奈良～平安時代としておく。

時期	東カマド	西カマド	北カマド	南カマド
1段階		1	2	
2段階	2			
3段階	1			
4段階	12	1	1	
5段階	2			
6段階	1(隅)			
奈良・平安	2	1	1	
平安	1		2	
合計	21	3	6	0

表3　カマドの位置からみた住居軒数

（3）　住居群と水路

今回の調査は、西から東にゆるく傾斜する尾根2本とその間にある浅い谷とが対象となった。古墳時代前期の集落が、中央の浅い谷に面した北側の尾根の一部にまとまっていたのに対して、奈良・平安時代の集落は2本の尾根に亘り、しかも地区外にまで広がっていることは確実である。ただ中央の谷が意識されていたものと思われ、これを取り囲むかのように居住域が展開していたことは、もっとも住居が多い4段階の集落の配置でみるとおりである。この谷の部分は試掘調査により遺構範囲外とされた箇所であるが、本調査の段階でもトレンチにより確認したところ砂利や砂あるいは礫層が広がっていた部分である。後世の氾濫も受けていたがそれでも江戸時代の水田が良好に残っていた部分もあった。古墳時代の集落がこの谷に面していることはその時期この谷が浅いながらも水の影響下にあったものと思われ、また奈良・平安時代にあっても同様のことがあったものとみられる。このことは2本の尾根を横断する水路とみられる溝の流れから分かる。A地区の3号、5号～7号溝は南から北に流れ、B地区の2号および一本の溝と見られる5、9、11号は北から南へ流れている。このことはAB両地区の間の谷に川の流れがあり、この谷から両側の尾根に水路を引き、水を流した可能性が考えられるからである。この谷の水流が南方上流にある前御勅使川からくるのか、北側上流の割羽沢川から引いてきたものかは即断できない（註1）。いずれにしても本遺跡にあっては中央に位置する谷が水源として大きな役割をもっていたとみられるが、調査で発見された水路とみられる溝と住居群との同時性についてははっきりしない。B区2号は区画溝よりも新しいことから、住居群とは時期が異なる。5号・9号・11号のB区住居群を斜めに横切る溝は住居との重複もなく、また区画溝の8号に切られていることや確認面からみて平安時代とみてもよさそうである。またA地区については3号は14号を切ってはいるものの、他に重複関係はなく、また新しい遺物も出土していないことから上限を平安時代に求めることは可能である。ただし平安期の遺構確認面より上部にも砂利が堆積している部分があることから、平安以降も砂利の堆積に

より底面が高くなりつつも、水流があったことが分かる。

このように、中央の谷の小河川、集落を横切る水路、建物群といった構成を、この大塚遺跡から復元することができる。なお今回は土坑は調査できたものの、明確な建物跡は確認できなかった。

註

1　現在遺跡のA地区を流れる水路は、御勅使川を越えた割羽沢川からサイホンの原理で取水しているという。またこの水路に合流してB地区に流れる水路は南西方向の六科地区から流れてくるものと聞く。従って現在の水利権には割羽沢川と徳島堰の両方があることになるが、特に御勅使川の下を通ってまで取水する割羽沢川の水利は古い時代の様相をとどめているものと思われる。大塚遺跡の時代では前御勅使川ないし割羽沢川の分流がこの谷を流れていたものとみられる。

（4）　区画溝について

大塚遺跡を特徴づける遺構としてB地区にて確認された区画の溝がある。1号から3号へと直角に曲がり、そのまま東へ直進し調査区外へ延びるものである。途中北に延びる4号や、それから曲がる8号などがある。溝中からは水流を思わせるものは検出されておらず、また底面も一定の平坦な傾斜を持っていないことも加えると、水路ではなく土地を区画した溝と思われるものである。時期については4段階の住居である11号を切っており、これよりは新しい。3号溝覆土からは須恵器蓋や坏の破片がわずかながら出土しており、この中には4段階とみられるものも含まれている。遺構確認面は平安住居と同じであり、平安時代であることには間違いない。特に12号住居以東にあっては、確認に手間取った22号や23号住居とともに上面を覆っていた土層は同じであった。

溝の規模は、外側をなしている1号及び3号が幅40cm～80cm、深さ30cm～40cmである。ただ幅のせまい1号部分は上部が削平されているものとみられ、本来は12号住居以東や4号溝の規模が正確なものであろう。これによると80cmとやや広く、4号が狭い部分で40～50cm、広い部分で1m～1.4m、8号では狭い箇所で1m、全体には1.5m～1.8mと広い。遺構検出面からの深さは30cm～40cmである。

このような溝が方形状に走っているものであるが、問題はこの溝により区画された範囲ということになる。区画の規模は1号溝の北限および3号溝の東限が確認されていないことから不明であるが、35m×88m以上になろう。1号溝については江戸時代の水路6号溝以北の状況は不明であるが、このあたりから谷への傾斜が始まることから、末端に近いのかも知れない。因みに4号溝は長さ50m以内で終わっている。1号、3号、4号に囲まれた範囲は東西60m、南北47mであり、さらにその内側は8号溝で区画されている。

住居群との関係については、4号と8号溝とに囲まれた区画には住居は全くない。その外側の1号、3号、4号に囲まれた区域には3段階の住居20号と4段階の住居21号の2軒がある。4段階の11号住居を溝が切っていることを考えると、この区画内には住居はなかったことに

なる。21号と８号溝とは近すぎることも、住居と区画とは同時でなかったことを意味しよう。４号溝以東の区画には９軒の住居があるが、これについても同時性のあるのは３段階以降の住居であり、４段階ともなれば22号住居１軒ということになるが、しいて言えば住居群との同時存在は考えにくいと思われる。しかし住居の主軸方向や配列方向には区画の方向は類似しているものもあることから、先にもふれたように両者に大きな時間の隔たりはなく、平安時代の中でおさまるものとみられる。Ａ区１号住居の時期ということも有り得ようか。

では、集落内の区画溝でないとしたらどんな機能の区画と考えたら良いのであろうか。立地条件からは、この区画溝は尾根の中央平坦部から北側の谷に向かった部分にある。この谷面には先にもふれたとおり小河川が流れていた可能性が考えられた。あるいは湿地状を呈していたことも考えられる。こうした場合、北側を川ないし湿地に面した方形区画ということになり、なんらかの生産の場ということが考えられる。

ところでこの地域は古代の巨摩郡に含まれるものと思われる。郷としては余郷あるいは大井郷ということになるが、２章でもふれたように前御勅使川という自然地形を考慮すると現在の甘利地域に続く一帯ということになる。一方、鎌倉時代にあっては八田牧の存在が知られており、これについては現櫛形町から白根町を経て八田村にかかる一帯が比定されている。古代集落の形成された大塚遺跡の場所が、後の八田牧の範囲に含まれるかどうか検討を要するが、御勅使川扇状地の中心部に牧が発達したことは確かであろう。このような牧の前身として、この地域の一画で馬が飼われていたこともありえようし、このような囲い施設の一つとして今回発見された区画を検討する必要もあろう。

これまで牧の施設に関する考古資料はあまり明確ではないが、群馬県中野谷遺跡群では中原遺跡を中心に8ha以上にもおよぶ範囲の区画溝が確認されている。この溝については上幅が3mほどもある幅の広いものであり、しかも土塁状の痕跡や水場としての沼地も伴うという（註１）。また長野県望月町や御代田町などの牧推定地には土塁状の遺構が残っているとされる（註２）。これらとくらべ大塚遺跡の溝は余りにも狭くまた小規模なもので比較にはならないが、それでも区画の内側に柵等を設置すれば囲いにはなろう。ただし柵列の痕跡は発見されていない。ほかの生産の場としての機能も考えつつ今後の課題としたい。

註

註１　大工原豊『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会　1994

註２　高島英之「牧と古代の土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第７集　1996

（5） A区1号住居址出土の鉄滓について

A区1号住居址から鉄滓が2点出土した（第106図6、7）。このうちの1点（同図6）について川鉄テクノリサーチ（株）分析・評価センターに委託し分析を行なった。以下にその成果を記載するが、紙面の都合から参考資料とX線測定結果は省略する。

●八田村大塚遺跡出土鉄滓の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社　分析・評価センター
埋蔵文化財調査研究室
岡原正明
伊藤俊治

1. はじめに

山梨県埋蔵文化財センター殿が発掘調査されました、八田村大塚遺跡より出土した鉄滓について、学術的な記録と今後の調査のための一環として科学成分分析を含む自然科学的観点での調査のご依頼がありました。

調査の観点として、

① 製鉄原料の推定

② 製鉄行程上の位置付け

③ 観察上の特記事項など

を中心に調査しました。

その結果についてご報告いたします。

2. 調査項目および試験・検査方法

(1) 調査項目

資料No.	資料の性格	重量 g	磁着度	MC反応	外観写真	成分分析	組織写真	X線回折
1	椀形鍛冶滓	97.8g	やや弱	なし	○	○	○	○

(2) 重量計測と着磁度調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入してあります。また着磁度調査については、直径30mm・1300ガウス（0.13テスラ）のリング状フェライト磁石を使用し、感応検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査結果の文中に表示しました。

(3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行っております。

(4) 科学成分分析

科学成分分析はＪＩＳの分析法に応じて行いました。分析方法および分析結果は108頁の一覧表に示してありますので、ご参照下さい。

この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産行程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行いました。

鉄滓の分析項目は18成分です。

(5) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上）します。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、溶融状況や介在物（鉱物）の存在状態等から加工状況や材質を判断します。鉄滓の場合にも同様に処理・観察を行い、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。必要に応じ実体顕微鏡による観察も行いました。

(6) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射（回折）されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定するものです。

多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定されます。装置の仕様や測定条件、測定結果は109頁に添付してあります。

3. 調査および考察結果

次に調査および考察結果を述べます。

資料No.1　椀形精錬鍛冶滓

長さ80㎜×幅70㎜×厚さ13㎜の偏平で中央が凹んだ、全体が薄い椀形鍛冶滓状の資料である。表面は水酸化鉄に薄く覆われ、裏部は白灰色の貝殻状微片が付着している。割欠き面はなく完形品で露出部は黒色発泡している。着磁度はやや弱くメタルチェッカーによる感応は認められない。重量は97.8gである。

化学成分分析の結果によると、全鉄（T・Fe）は56.9%とやや高い値であった。酸化第一鉄（ウスタイト：FeO）は46.9%と多く、酸化第二鉄（ヘマタイト：Fe_2O_3）も28.1%と比較的多い。また、金属鉄（M.Fe）が0.76%と僅かながら含まれている。滓中の成分の指標となる所謂造滓成分（Sio_2+Al_2O_3+CaO+MgO）は21.4%とやや少ない。砂鉄に含まれていたと考えられるチタニウム（酸化チタニウムで表示：TiO_2）が0.13%、バナジウム（V）も0.013%存在する。一般に鉱石に含有される成分の一つである銅（Cu）の値は0.007%で、非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。結合水（C.W.）の値が1.61%であることから錆化が進行しており酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄（α

ーFeOOH等）が存在すると推定される。

滓断面を100,400倍で観た顕微鏡組織には（図版48）、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊がやや崩れた形状のファイヤライト（珪素と鉄の酸化化合物：Fe_2SiO_4）の結晶が観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられた。

X線回折チャートから、ウスタイトとファイヤライトの強いピークに加え中程度の四三酸化鉄（マグネタイト：Fe_3O_4）のピークが検出される。また、少量の鉱物質の化合物の存在が認められる。化学成分分析で若干の金属鉄の残存が判ったが、X線回折でも金属鉄の存在を示すピークが検出されている。この他、鉄金属が水分の存在下で酸化した場合に生成するゲーサイトも認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

山梨県埋蔵文化財センター　大塚遺跡出土品の分析結果
鉄滓・鍛冶滓関係

単位：%（m/m）

成分 / 資料No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe_2O_3	C·W	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	TiO_2
No.1	56.9	0.76	46.94	28.1	1.61	17.2	2.27	1.30	0.58	0.13

成分 / 資料No.	MnO	P_2O_5	Cr_2O_3	Na_2O	K_2O	C	V	Cu
No.1	0.06	0.257	0.038	0.20	0.72	0.23	0.013	0.007

【分析方法】　鉄滓等の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

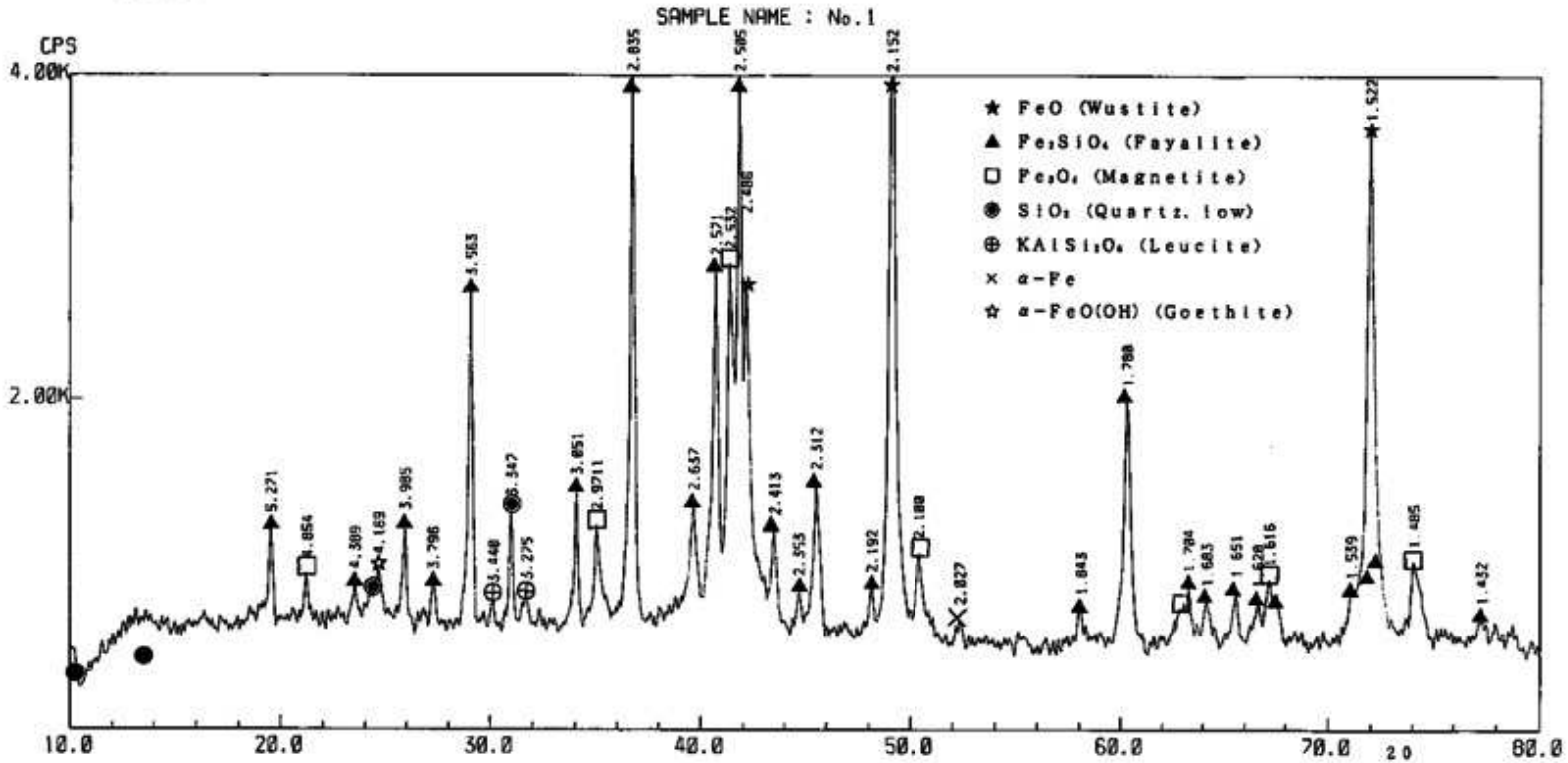
T.Fe ：三塩化チタン還元二クロム酸カリウム滴定法
M.Fe ：臭素メタノール分解EDTA滴定法
FeO ：二クロム酸カリウム滴定法
Fe_2O_3 ：計算
C·W ：カールフィッシャー法
C ：燃焼ー赤外線吸収法

CaO,MgO / MnO,Cr_2O_3 / Na_2O,V,Cu ：ICP発光分光分析法
SiO_2,Al_2O_3,CaO / MgO,TiO_2,MnO / P_2O_5,K_2O ：ガラスビード蛍光X線分析法

※CaO,MgO,MnOは含有率に応じ、ICP法又はX線法で分析してます。

MEASUREMENT DATE : 97. 3.19
FILE NAME : BR60100
TARGET : Co
VOL and CUR: 50KV 35mA
SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
STEP/SAMPL.. .02 DEG
PRESET TIME: 0 SEC
SAMPLE NAME: No.1
SAMPLE MEMO: G13766
OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 03-19-1997
SMOOTHING NO.: 11
THRESH.INTEN.: 589 CPS
2nd DERIV.: 176 CPS/(DEG×DEG)
WIDTH: .09 DEG
B.G.REDUCTION: EXECUTION
OUTPUT FILE :



第2図 X線回折

第3節　大塚遺跡周辺の旧地形

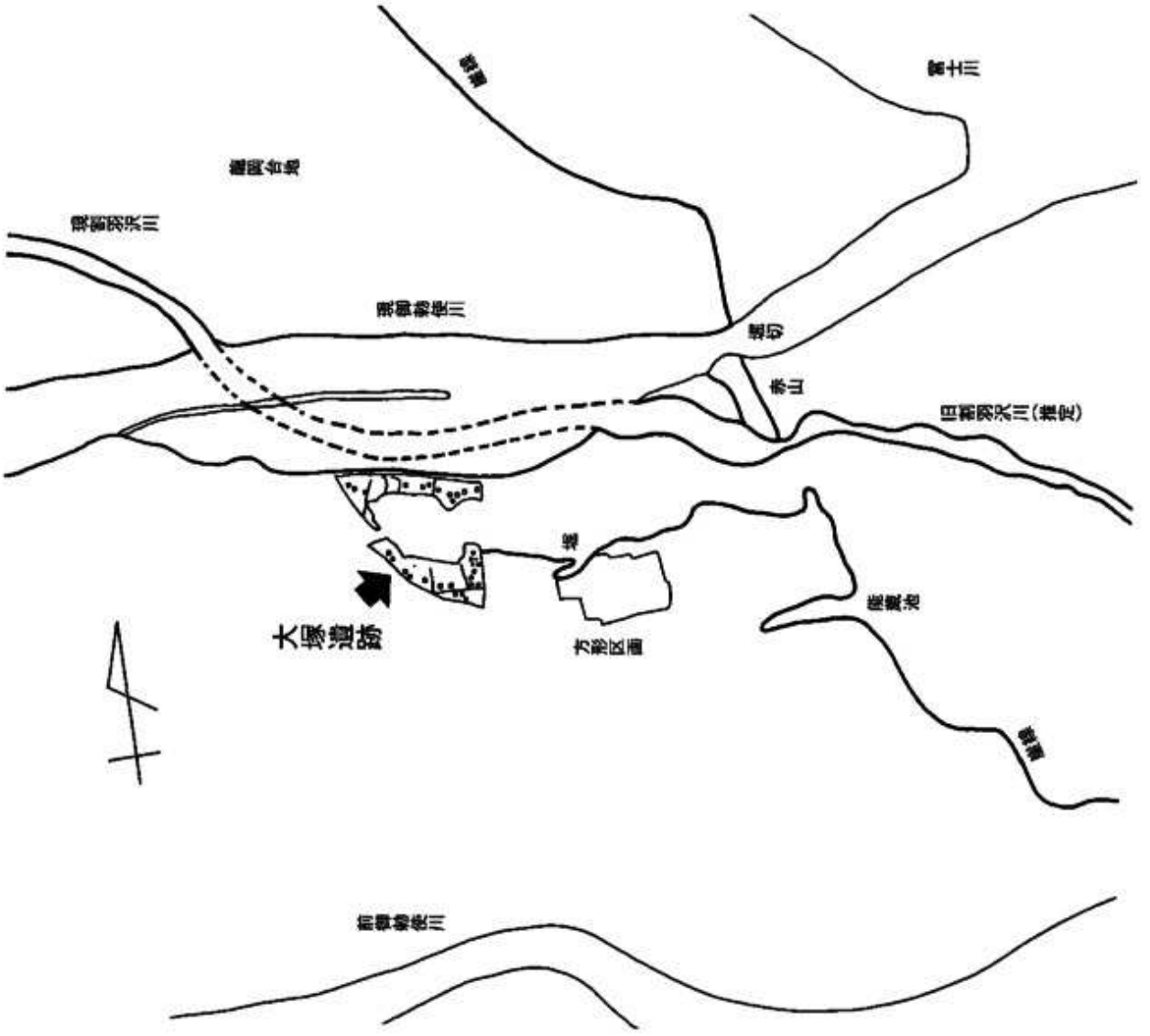
現在本遺跡は御勅使川に面しているが、古墳時代や奈良・平安時代の集落が形成されていた時点では御勅使川はこの場所を流れていなかったという。では何時ごろから現在の水流となったのであろうか。『甲斐国志』山川部「御勅使川」の項目には「是ヲ前御勅使川或ハ南御勅使川ト称ス古ノ水路ナリ」というように、本来御勅使川は本遺跡の南方向を流れていたとされる。明治21年陸地測量部の2万分の1地図では、現在の県道甲府芦安線を中心としたラインと、現在の御勅使川（北御勅使川とも呼ぶ）とが二股になって河川表示されている。遅くとも江戸後期にはこのような2本の流路が形成されていたことになる。

この二股に分流する箇所が白根将棋頭であり、一般には上流の石積出、下流の掘り切り、富士川本流の信玄堤と一体となった治水構想施設としてとらえられている。ただし治水施設についてはその性格上長年の工事の積み重ねにより構成されるものであり、古代以降現在にいたるまで継続していたものと思われ、各施設の同時性を検証することは難しい。しかし永録3年に構築の記載ある信玄堤の年代の確実性や、白根将棋頭をその保護のための構築物とした場合の可能性も指摘されており（註1）、この点に注目すると江戸以前に北御勅使川の流路が形成されたことになる。あわせて清水小太郎氏が指摘する「堀切り」の掘削（註2）が大きな意味を持つ。甲斐国志にもあるこの龍岡台地末端の開削が北御勅使川の流路を決定づけており、大塚遺跡が御勅使川に面したことになるからである。ただし御勅使川の流路が頻繁に変わることによりこのような扇状地が形成されたわけであり、この意味からすると古墳時代や奈良・平安時代での御勅使川の流路は扇状地全体で検討しなければならない（註3）。

いずれにしても、現在の御勅使川が「堀切り」工事の結果、流路となった訳であり、この工事の規模や必要性を考えると、大塚遺跡の古代集落が御勅使川に面していなかったことは確かであろう。

では遺跡の立地はどんな状況であったのだろうか。古墳時代まで遡れるかどうかは疑問であるが、堀切り掘削前の様子は地図や航空写真の観察からある程度推測できる。第116図は1975年撮影の航空写真と明治21年の地図をもとに作成した大塚遺跡周辺の略図である。これによると、現在は御勅使川に合流する割羽沢川が遺跡の北側に迫っており、それがゆるく蛇行しながら東に流下し、龍岡台地の先端の赤山の南を抜け、南東方向に進みやがて富士川本流に合流していたものと考えられる。特に赤山の先端は、能蔵池から続いてくる台地崖線もとぎれており、旧川道であったことがわかる。このとぎれた部分には大塚遺跡A、B両区の中間にある浅い谷も延びてきており、前項で述べた大塚集落の中間を流れていた川がここで割羽沢川と合流していた可能性もある。

ただ割羽沢川と本遺跡の距離は問題である。現況では遺跡A地区の尾根は、北側が崖をなしており河川の解析を受けたものとみられるが、これが旧割羽沢川によるものか、北御勅使川によるものなのかははっきりしない。しかしA地区で発掘された4本の水路（3号、5号～7号）が北に流れ、しかも3号、5号、6号が等高線に沿うかのように北西方向に曲がりか



第116図　大塚遺跡周辺の旧地形（約1／12,000）

かっていることはこの尾根の北斜面に近づいたことを意味し、なおかつ割羽沢川へ水を落としていたことを推測させる。こうしてみると、現在残る崖は北御勅使川により浸食されたものであり、旧割羽沢川は本来は図に示したような、後の世に北御勅使川となる広い河川敷きのやや遺跡よりの箇所を流れていたものと考えられる。

この遺跡北側の崖線は下流から上流にかけて湾曲し、遺跡部分で最も広い河川敷きとなっている。発掘当初、この湾曲が旧割羽沢川により浸食されたものと考えていたが、先にのべた理由により北御勅使川に関わるものとしたものである。さらにこの要因として、「堀切り」との

関係を考えたい。台地を穿つという工事からその幅は18間（33m）（註４）というほどで、前後の今の川幅が100m以上あるのにくらべ極端に狭くなっている。この狭い「堀切り」のすぐ上流部が幅200mを越える広い河川敷きになっていることは、異常増水時における遊水池としての役割を計画したためではなかったろうか。このように考えてみると、堀切開削と遺跡北側の広い河川空間は一体の工事により形成されたものとみられ、その工事の際に大塚遺跡Ａ地区もいくぶん削られ遺跡破壊が行なわれたと思われる。

なお、調査途中付近の分布調査を行なったところ、大塚遺跡の東150mほどの所に、人工的な細長い窪地があるのに気付いた。その南には鍵の手に曲がる道や方形区画の畑が続いており気になっていたところ、中部横断道にかかわる試掘調査がこの区画の一部で行なわれ中世後半とみられる内耳土器破片やかわらけが発見された（註４）。これまで知られていなかった中世遺跡が埋没している可能性があり、北御勅使川とのかかわりも予測でき今後に期待したい。特に第116図に示した崖線には能蔵池なる湧水もあり、この一帯の調査研究が望まれる。

註

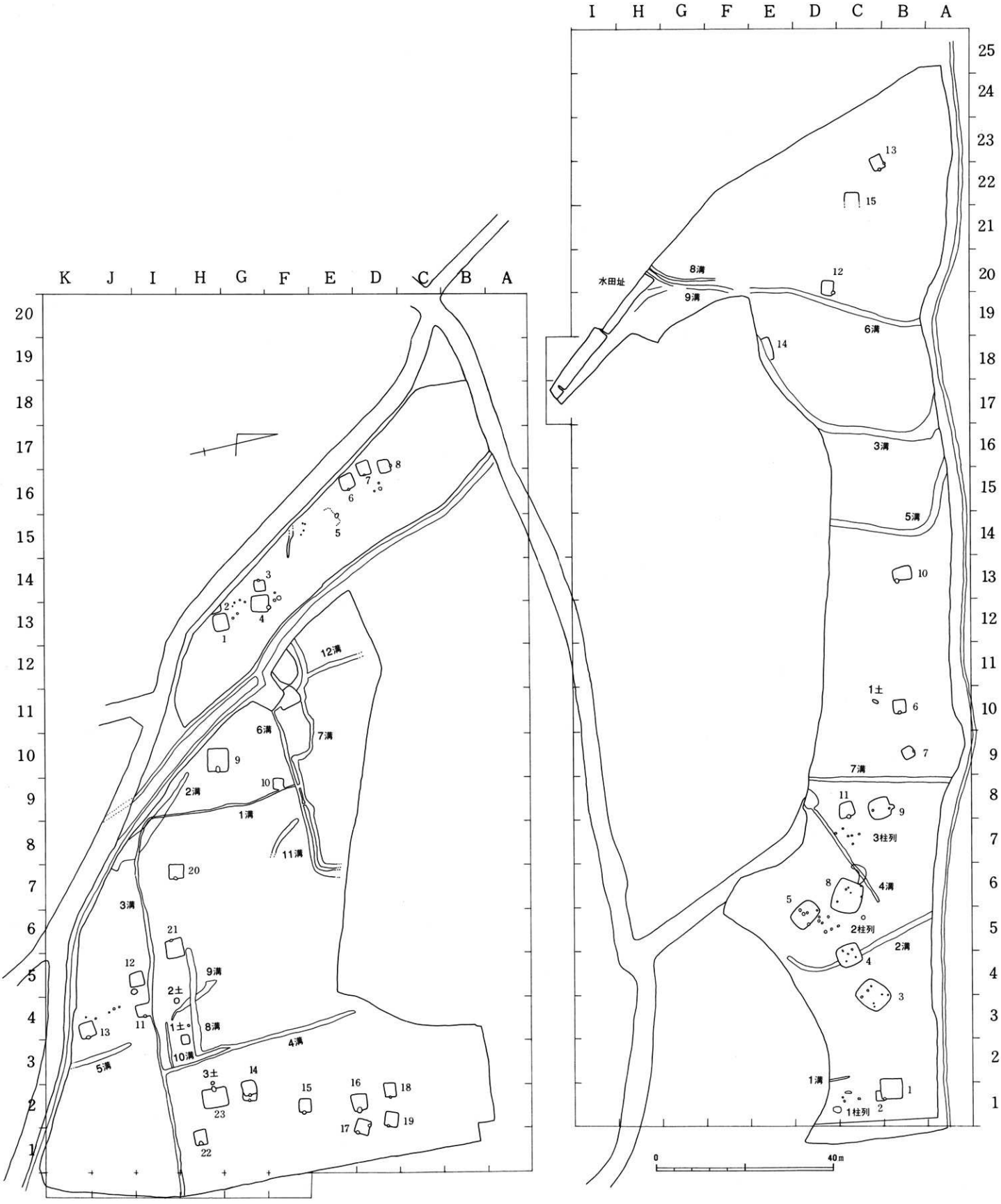
1　宮沢公雄「御勅使川における治水構想について」『将棋頭遺跡、須沢城址』白根町教育委員会　1989

2　清水小太郎「武田治水史（その１）」『将棋頭遺跡、須沢城址』白根町教育委員会　1989

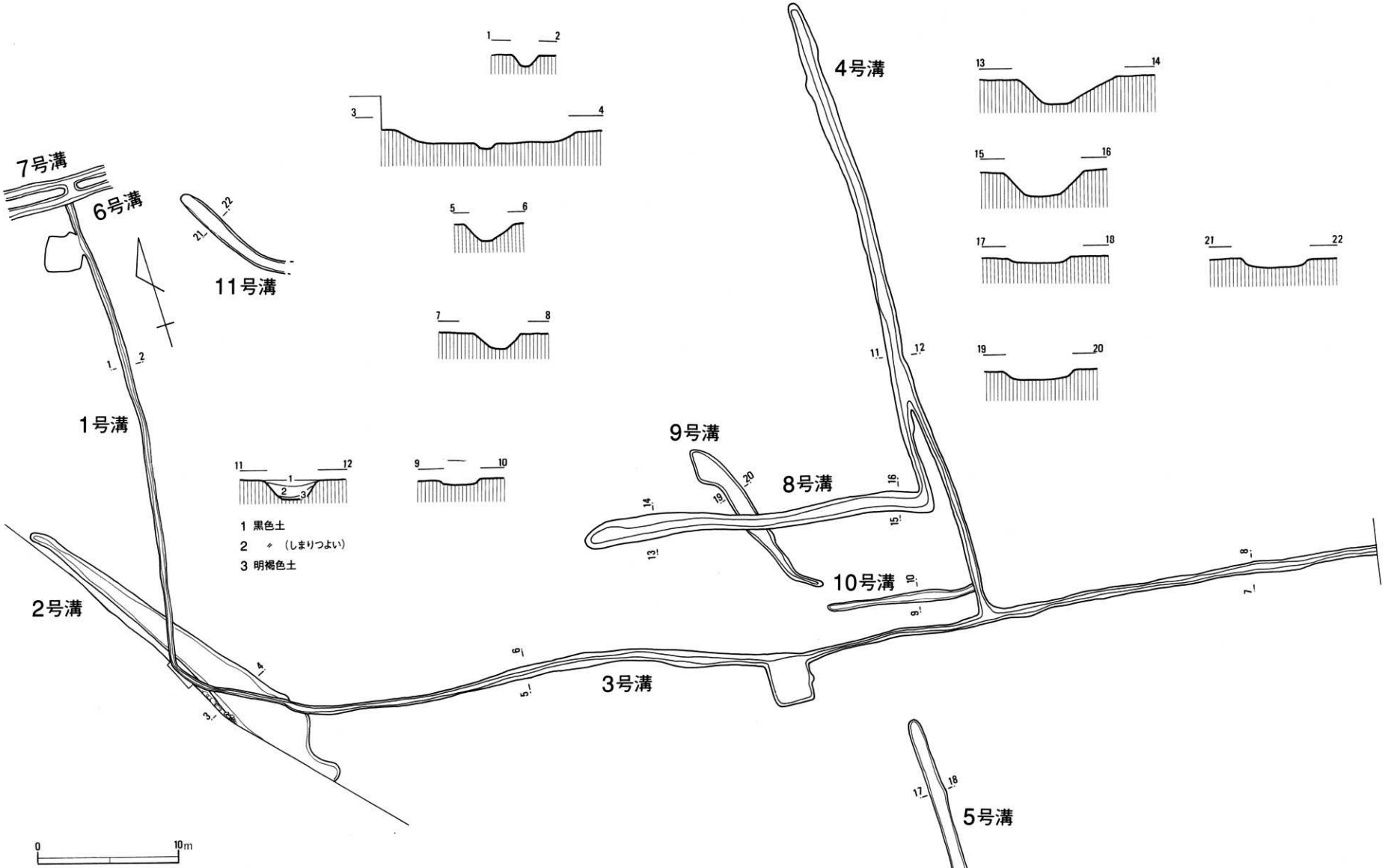
3　大塚遺跡の試掘調査では、対象地域約15haの内、遺跡と確認された範囲が今回の18,800㎡であった。他の地点にあっては砂利や礫が堆積しており、特に上流部では激しかった。今回の調査地区は尾根状のしかも水害を逃れ得た地域であったと思われる。この意味から御勅使川は広く浅く流路を変えながら扇状地上を移動していったものと思われる。

4　註２に同じ

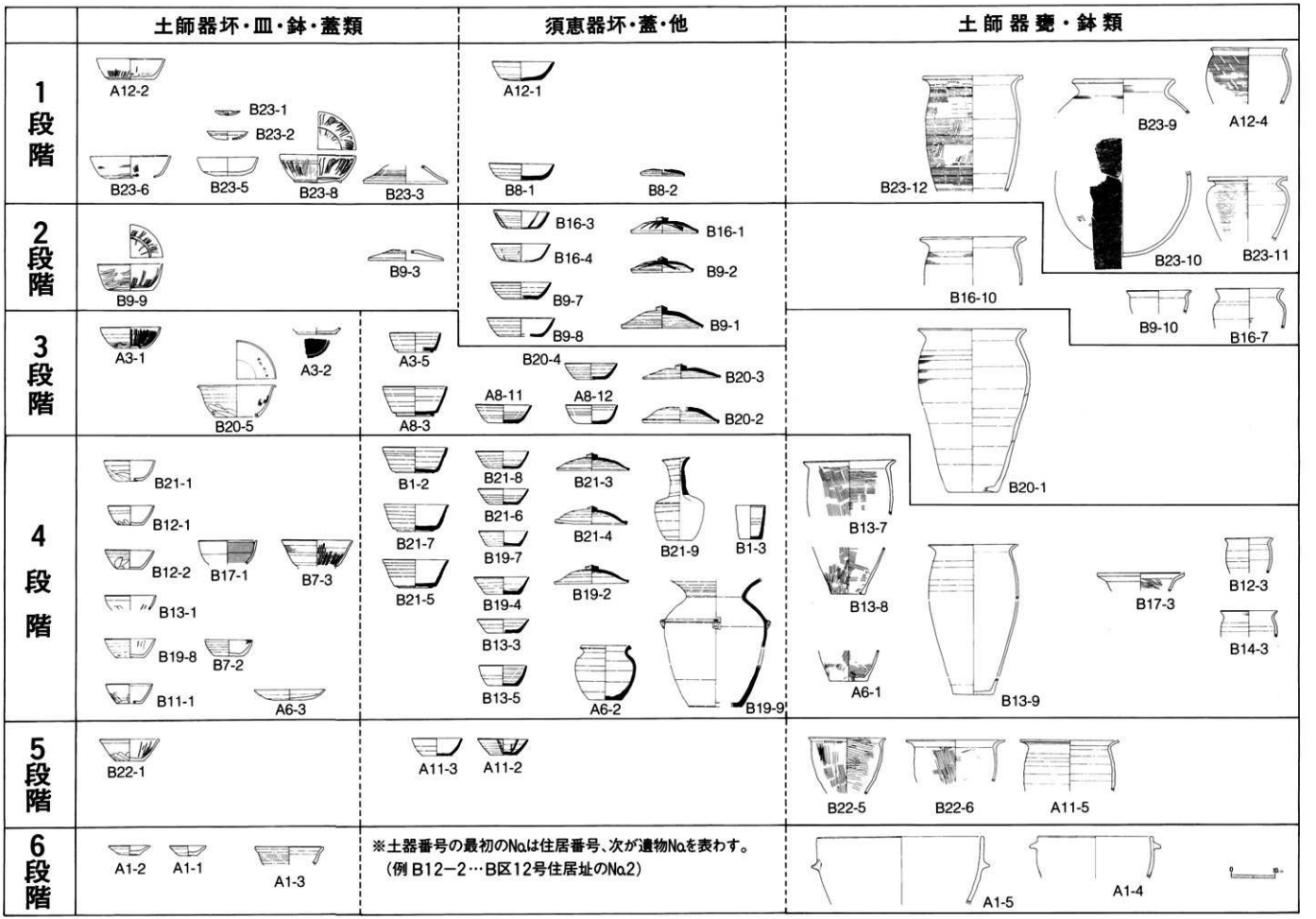
5　この試掘調査は平成９年２月、本報告書作成中に山梨県埋蔵文化財センターにより行なわれた。



付図１　遺構配置図（1/600）



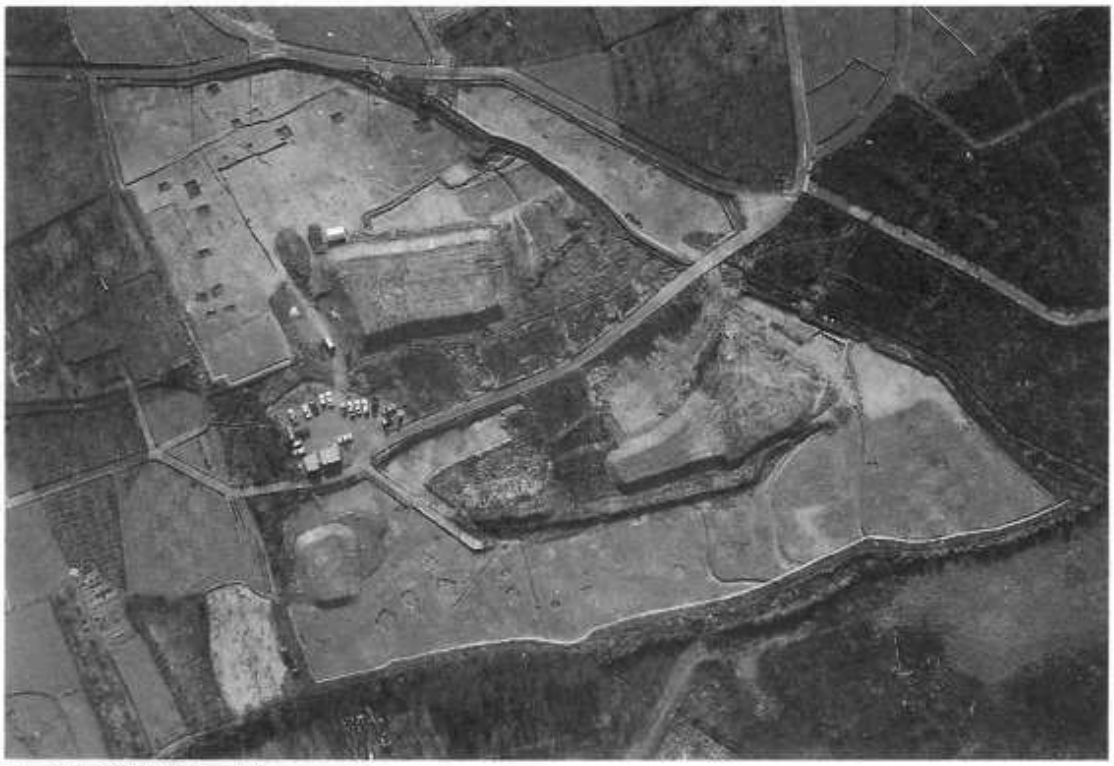
付図2 B区 溝 実測図(平面1/200, 断面1/50)



付図3 奈良・平安時代 土器の分類(1/8)

図　版

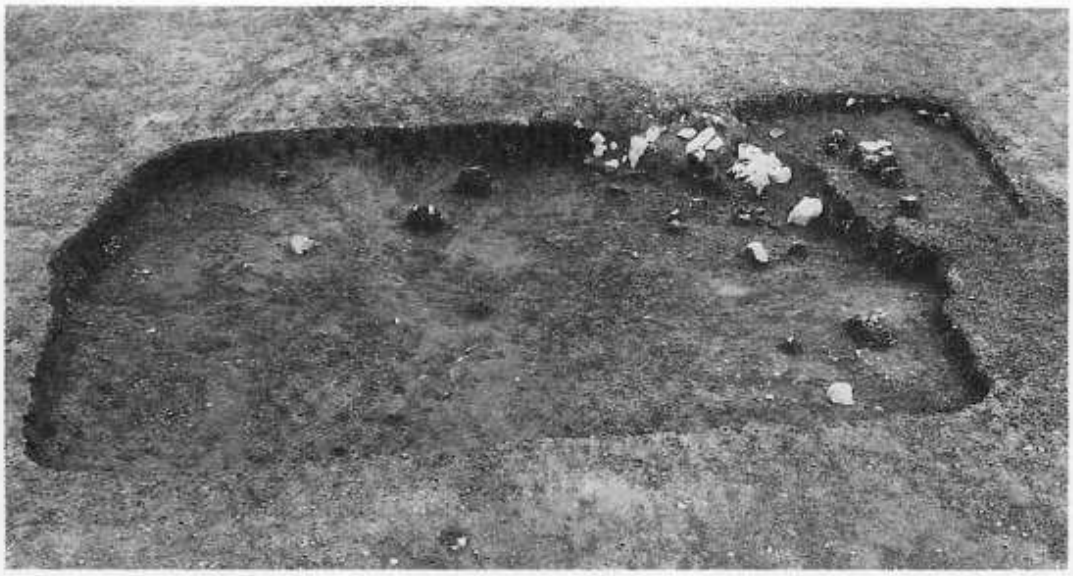
西方上空からの全景



1　遺跡全景（北東上空）

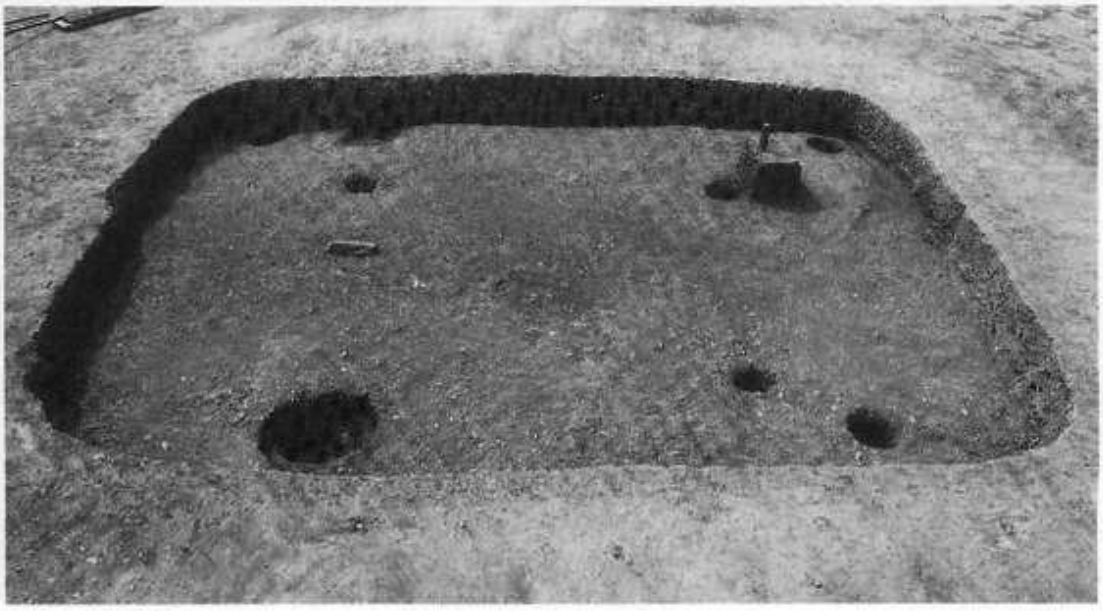
2　B区全景（北東上空）

図版２



1　A区1号・2号住居址

2　A区1号住居址
カマド



3　A区3号住居址

1　A区3号住居址遺物出土状況

2　A区5号住居址

図版 4

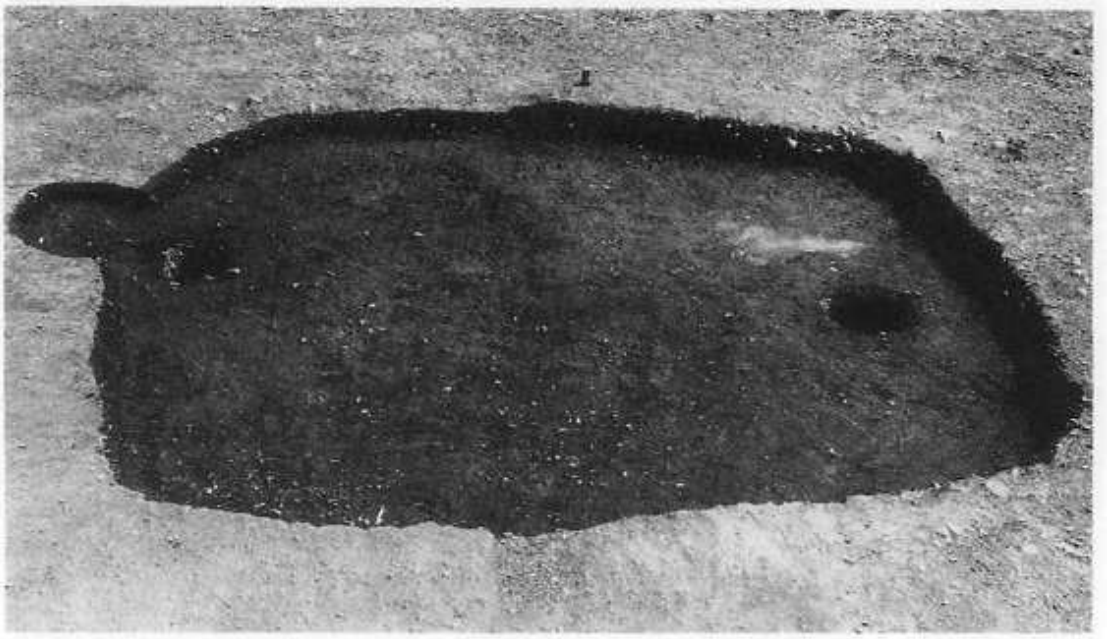
1　A区4号住居址

2　A区4号住居址遺物出土状況

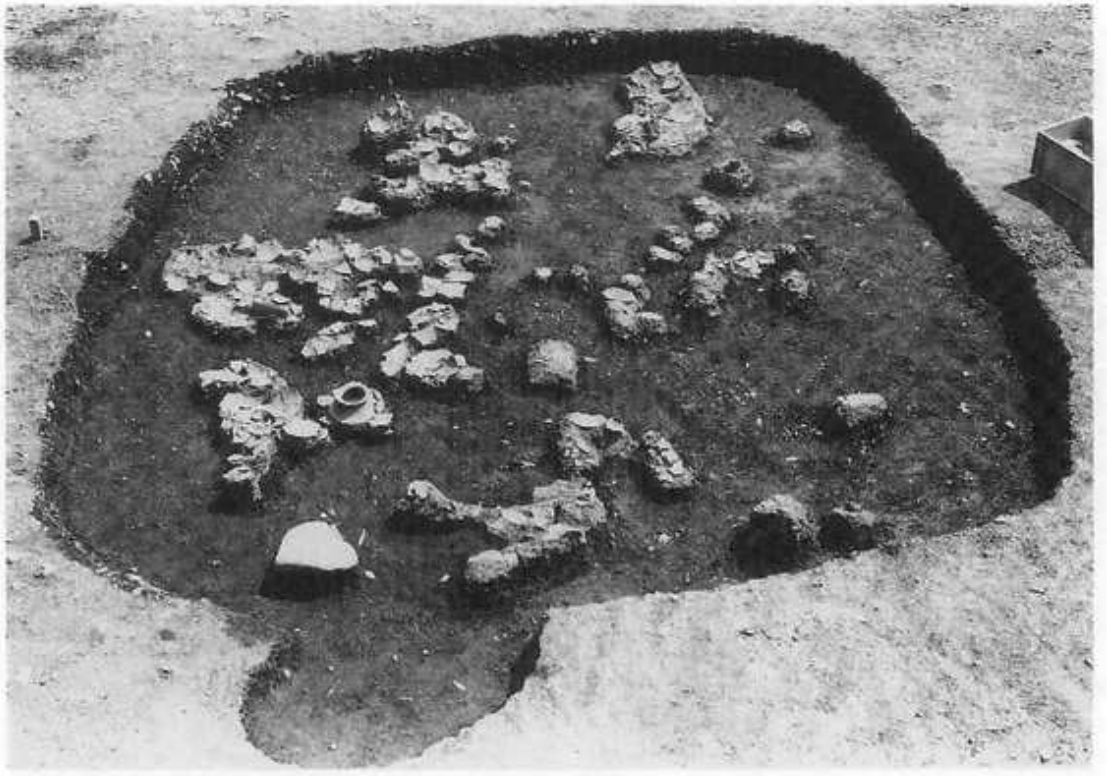
1　A区3号・4号住居址調査風景

2　A区4号住居址遺物出土状況

図版 6

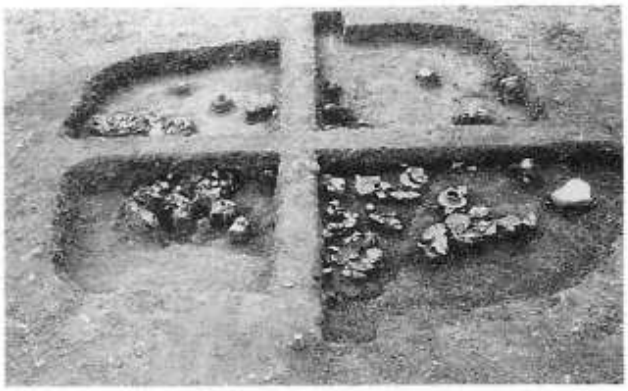


1　A区9号住居址

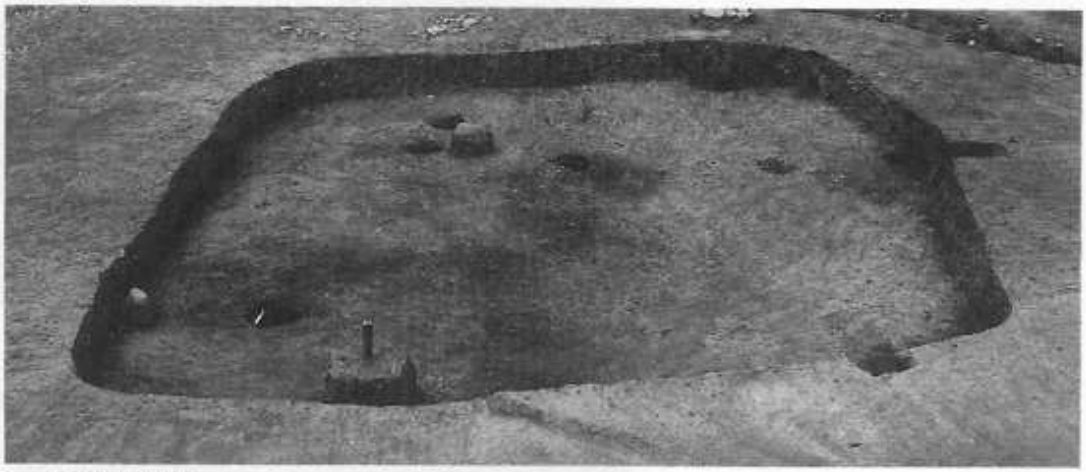


2　A区9号住居址遺物出土状況

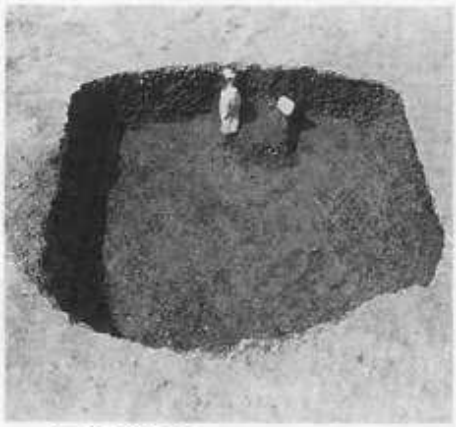
A区9号住居址遺物出土状況



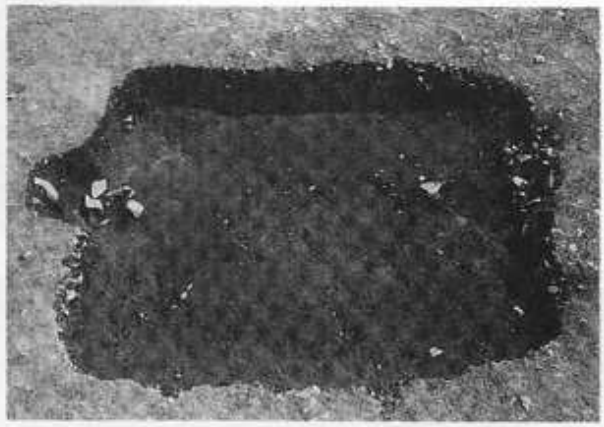
図版 8



1　A区8号住居址

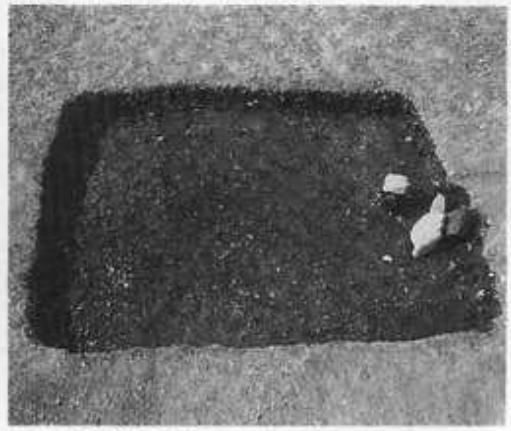


2　A区7号住居址



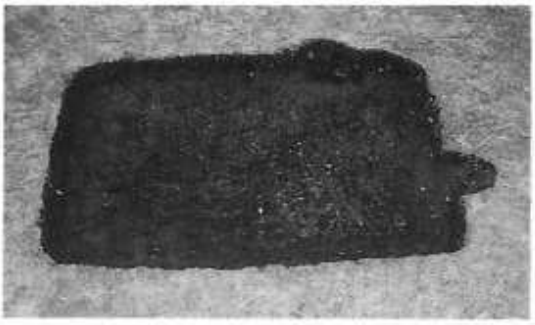
3　A区11号住居址

4　A区10号住居址



5　A区6号住居址

1　A区12号住居址



2　A区13号住居址

3　A区14号住居址

4　A区15号住居址

5　A区水田址と6号・8号・9号溝

図版 10

1　A区1号土坑

2　A区5号溝土層断面

3　A区6号溝

4　A区3号溝の調査

1　B区1号～4号住居址全景

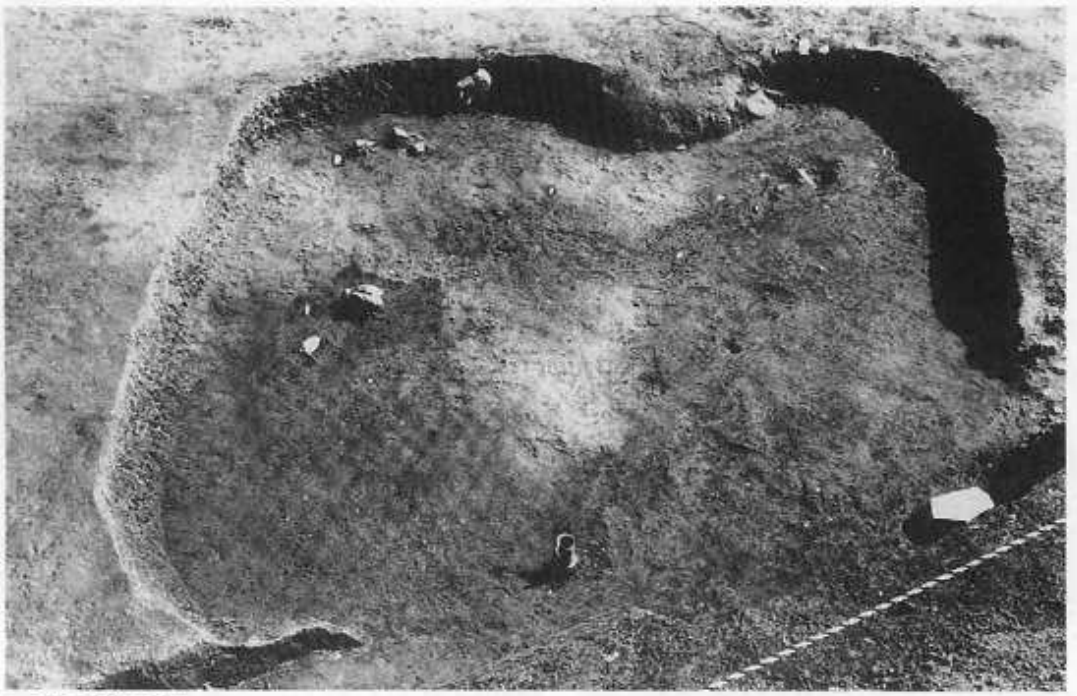
2　B区1号住居址

3　B区1号住居址カマド

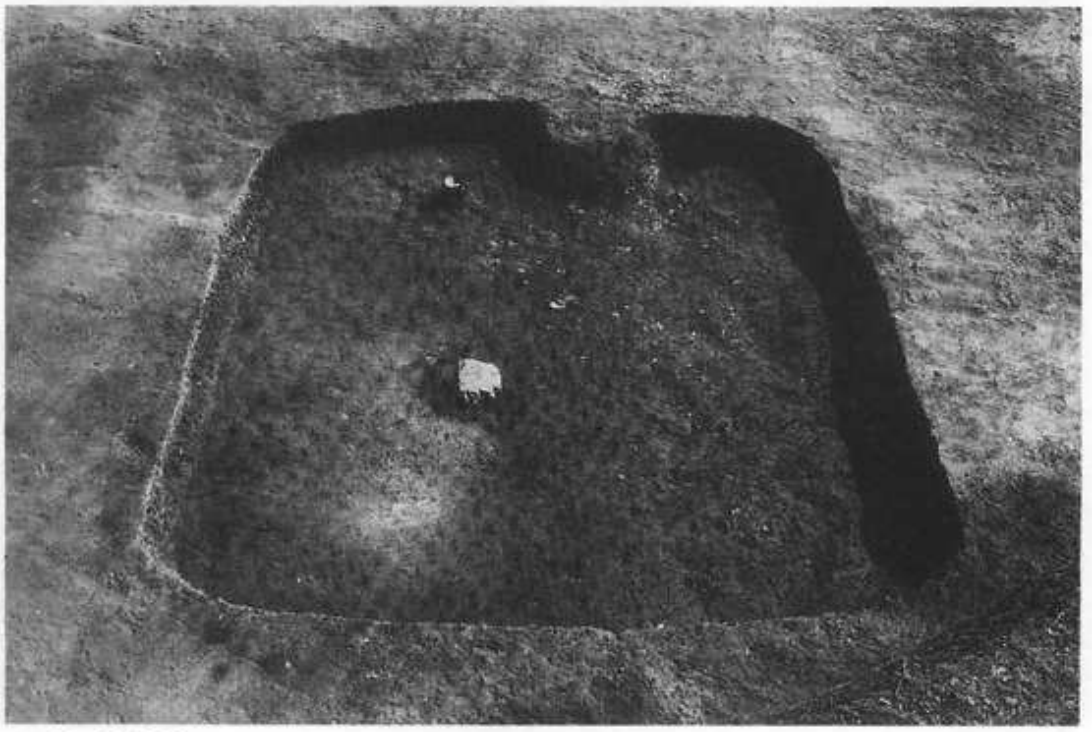
4　B区3号住居址

5　B区4号住居址

図版 12

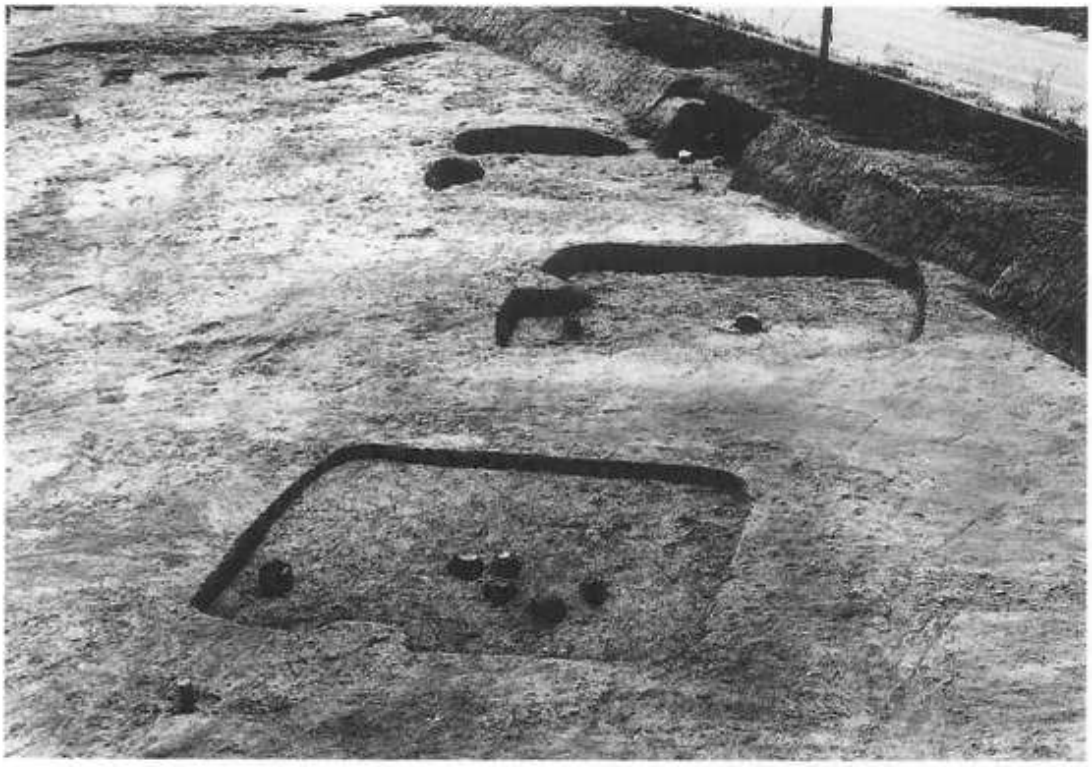


1　B区6号住居址



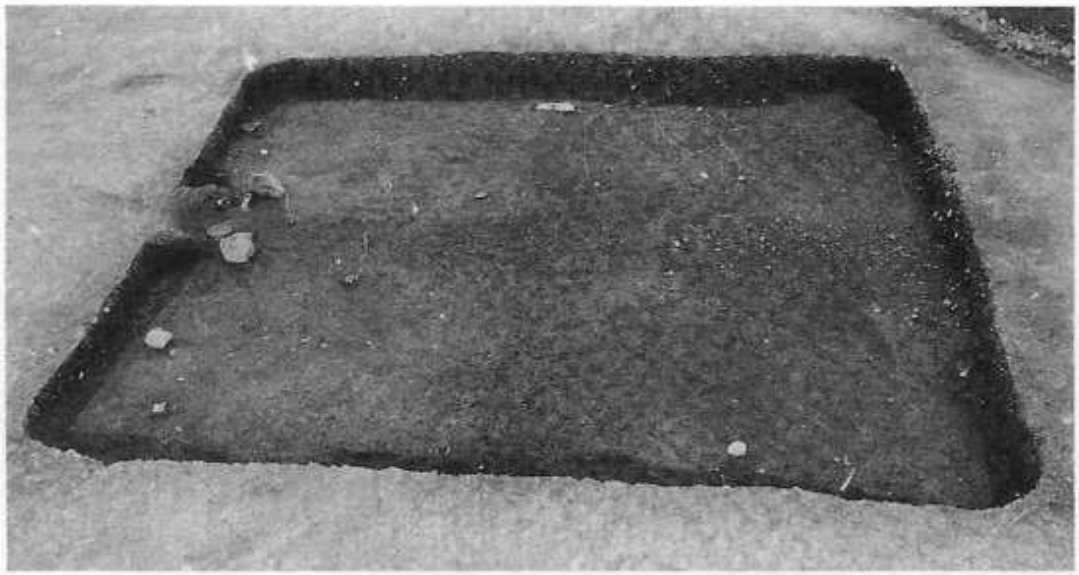
2　B区7号住居址

1　B区8号住居址



2　B区6号～8号住居址全景

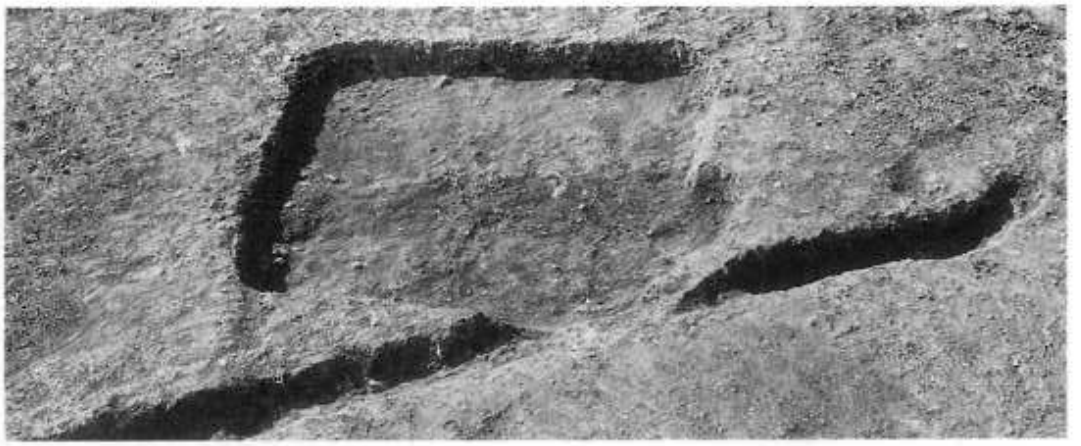
図版 14



1　B区9号住居址

2　同上土器出土状態

3　同上カマド



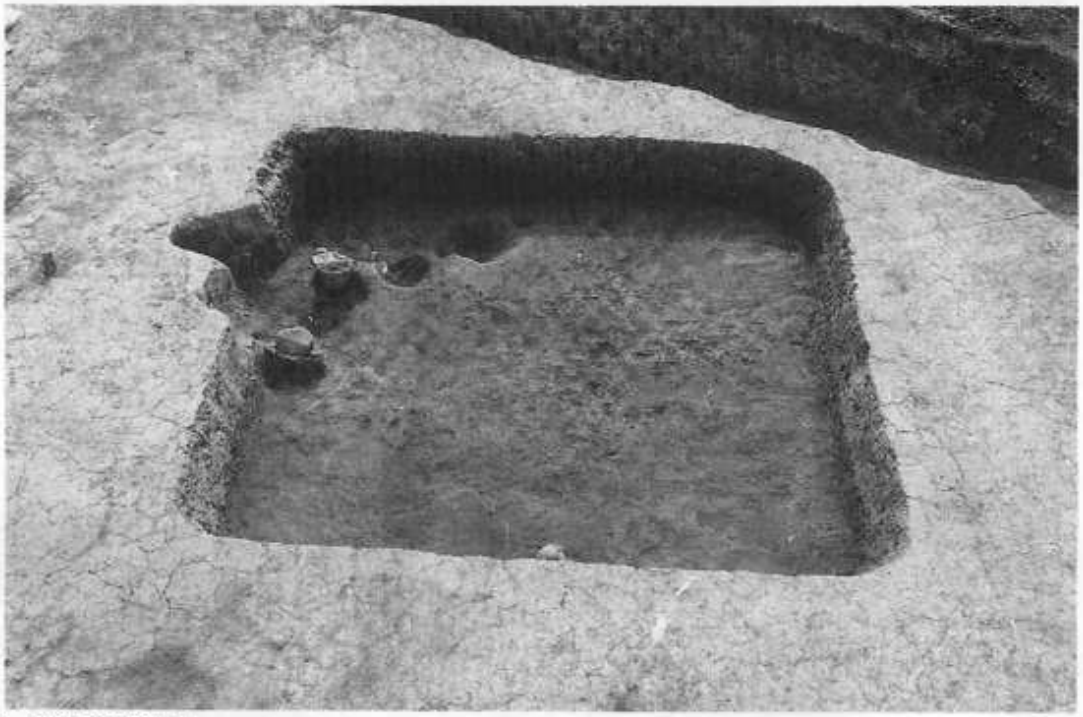
1　B区10号住居址と1号溝

2　B区11号（手前）・12号住居址・3号溝

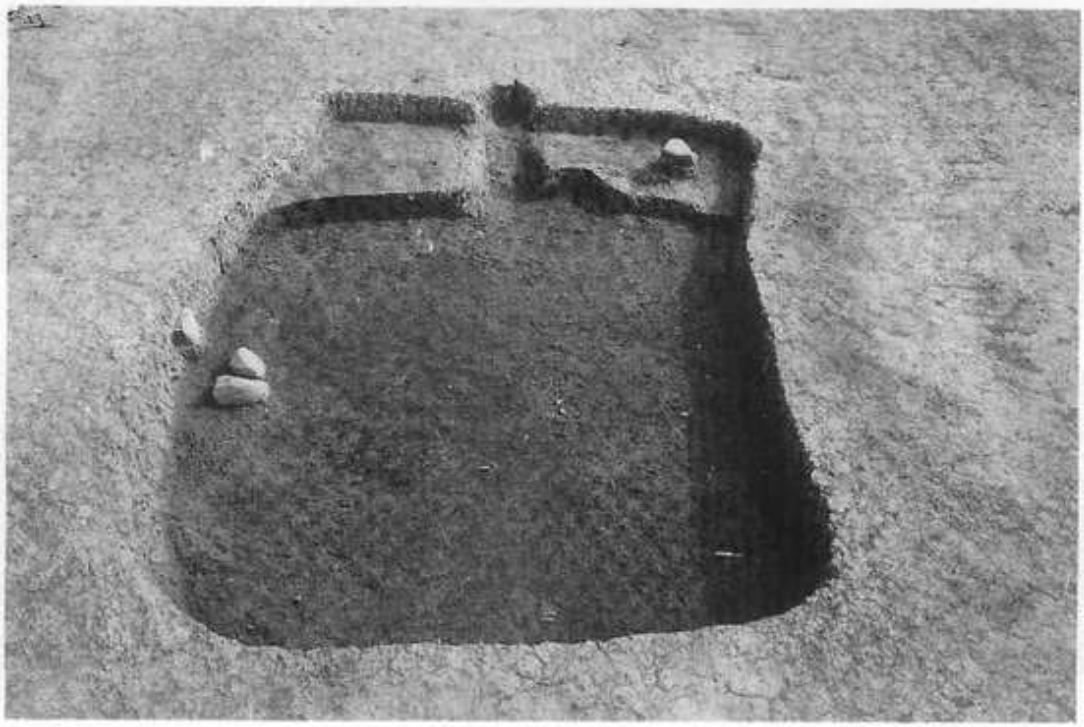
3　B区12号住居址

4　B区11号住居址カマド

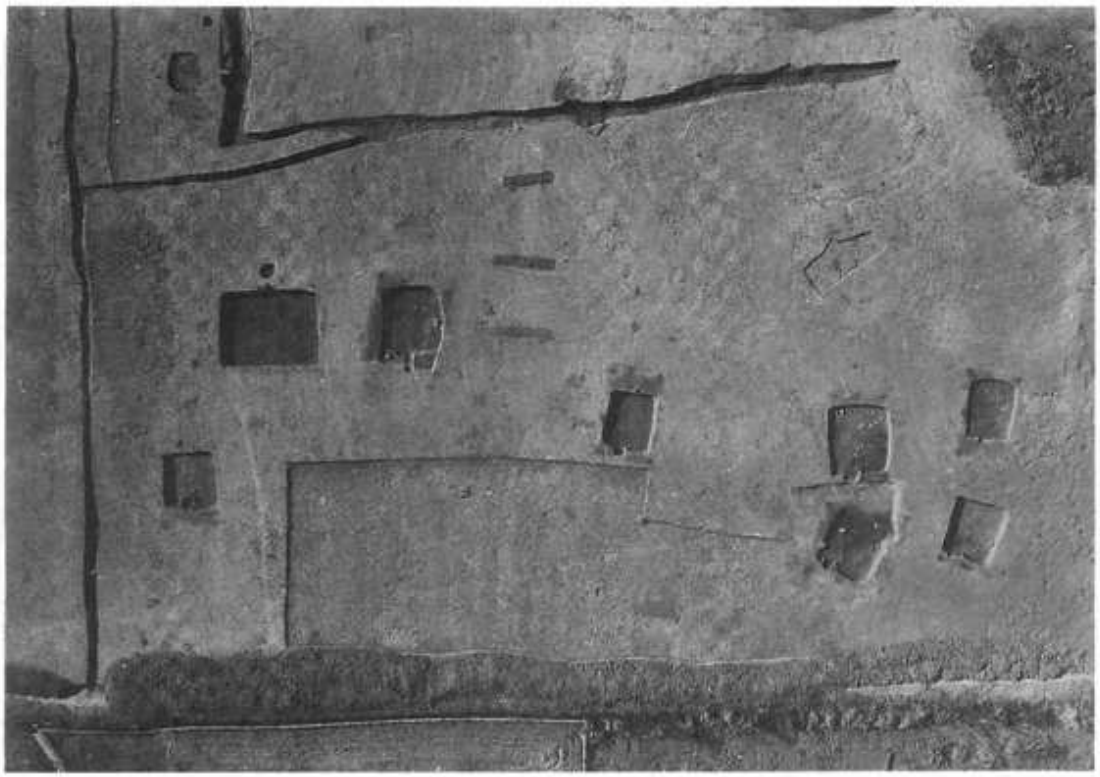
図版 16



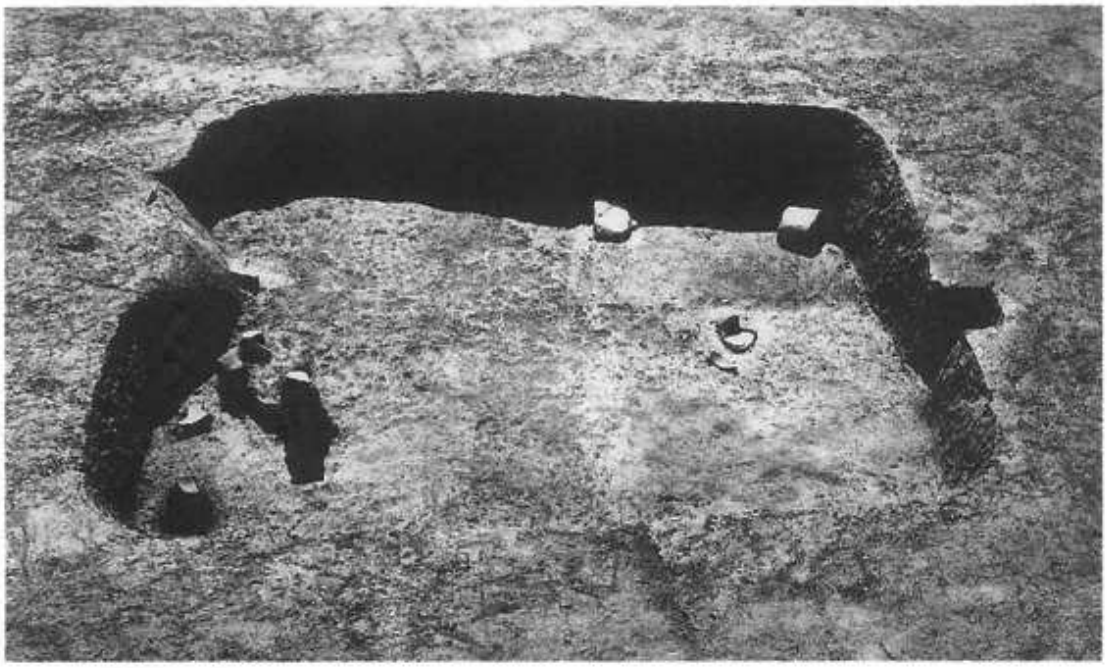
1　B区13号住居址



2　B区14号住居址

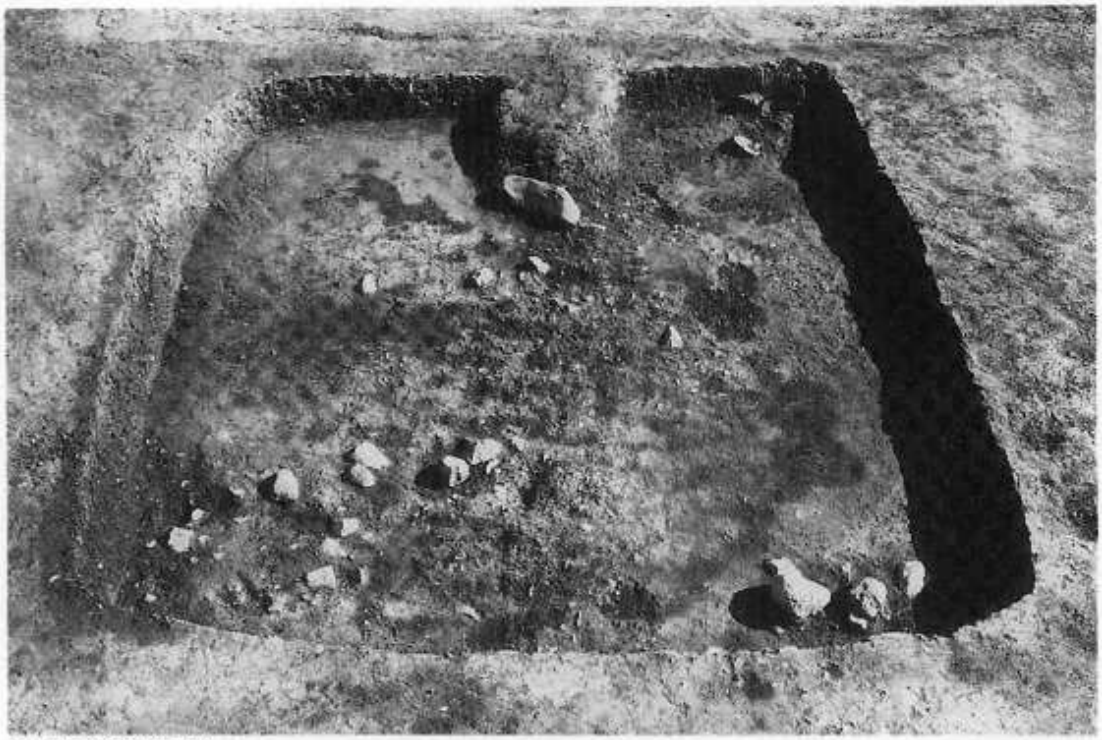


1　B区住居群（14号～23号）と区画溝（3号・4号・8号・10号）

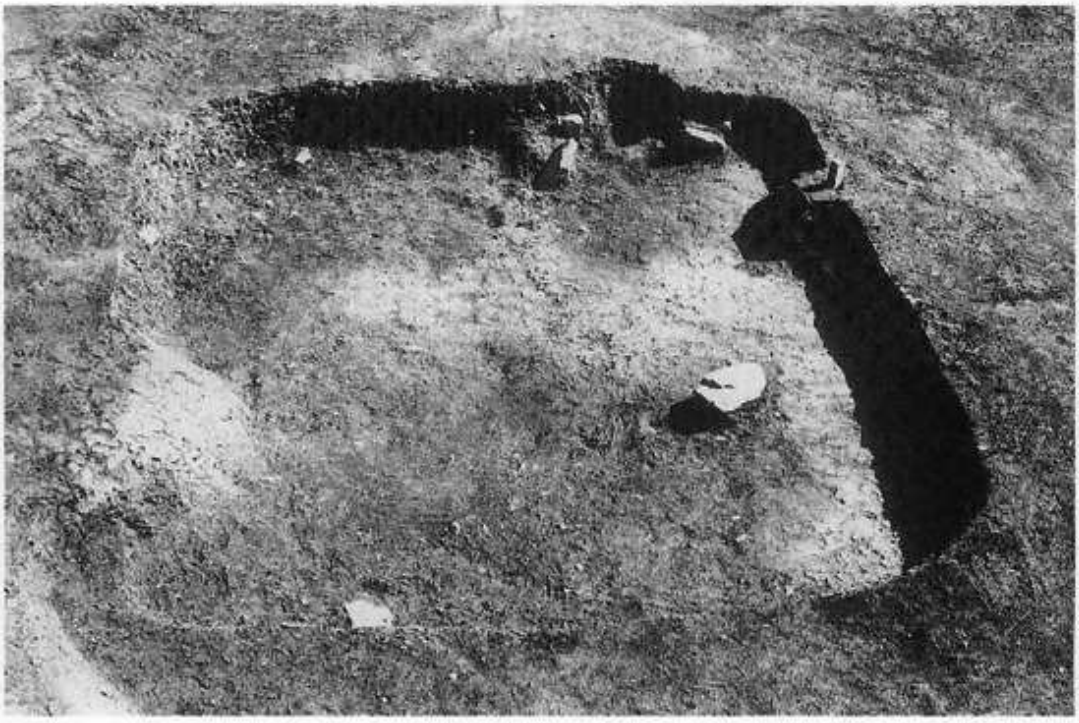


2　B区15号住居址

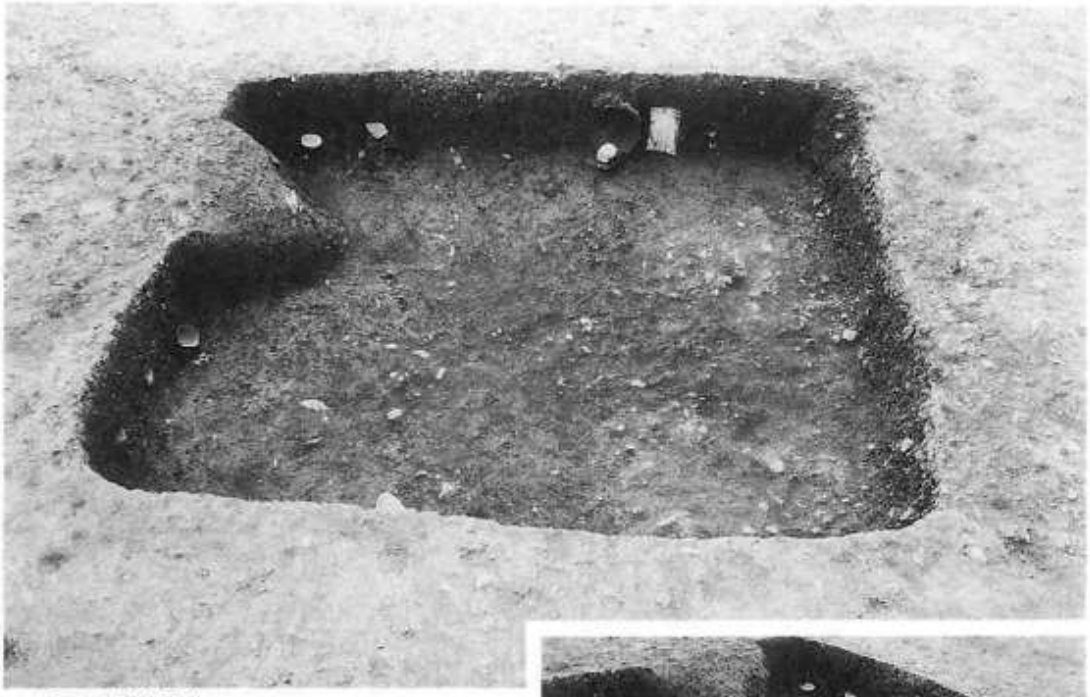
図版 18



1　B区16号住居址

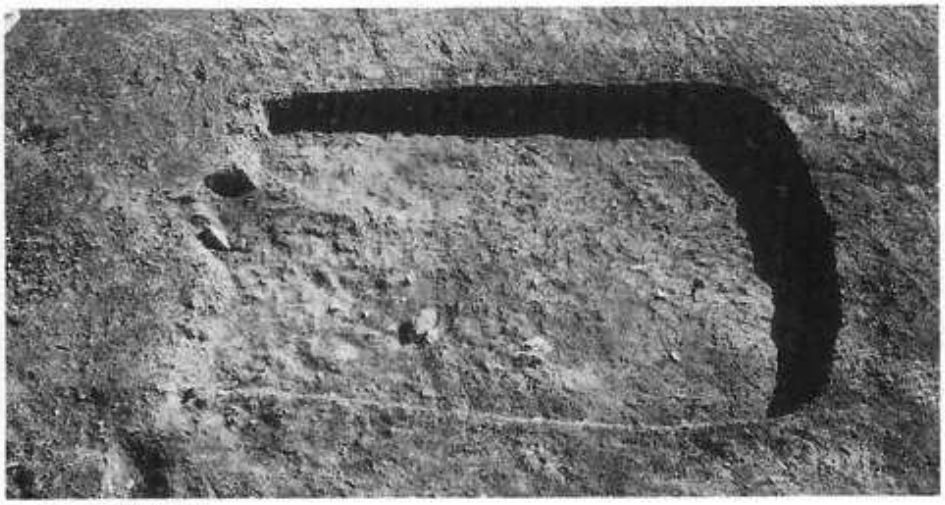


2　B区17号住居址



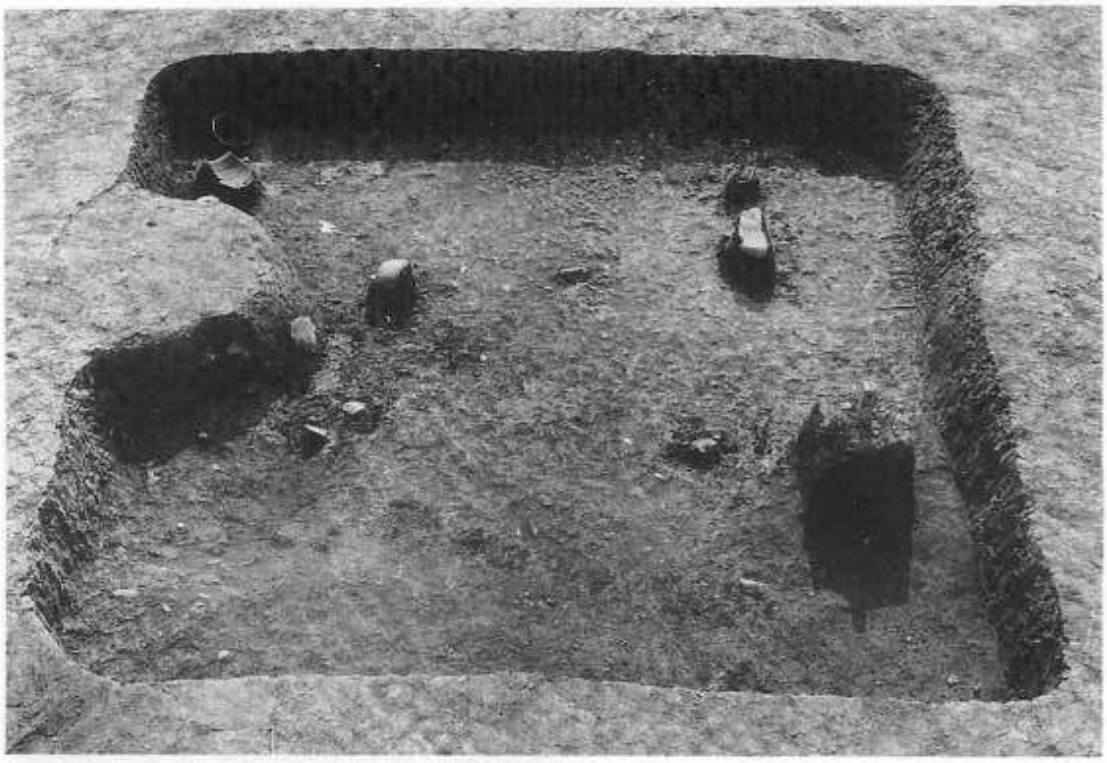
1　B区19号住居址

2　同上カマド周辺

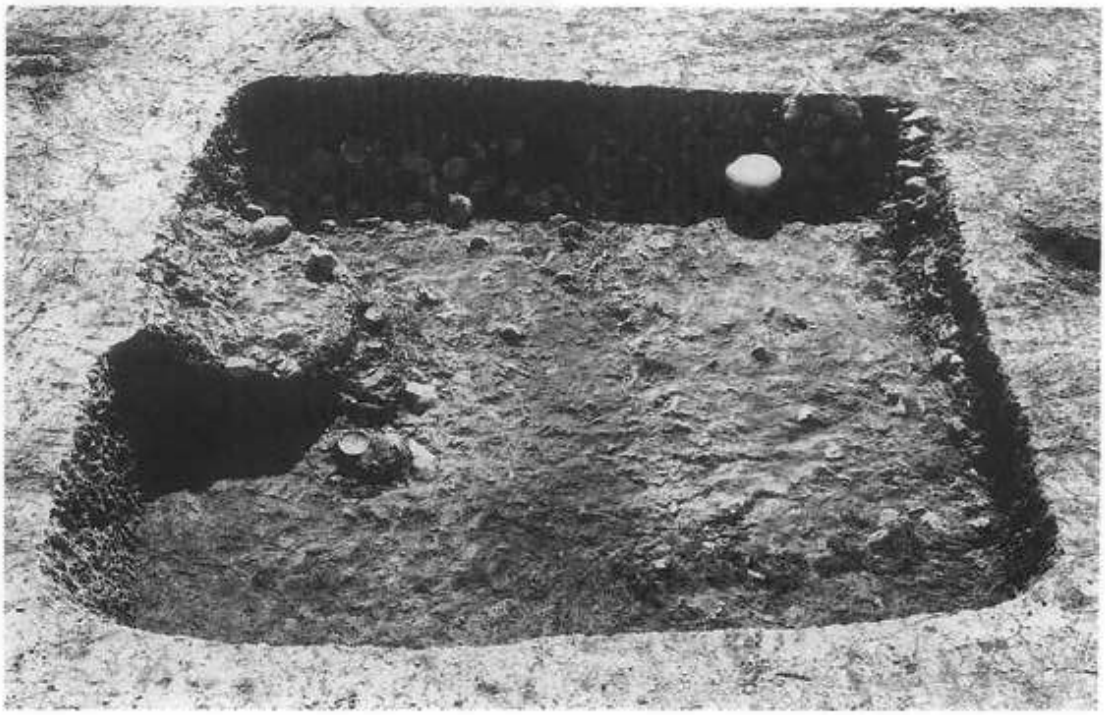


3　B区18号住居址

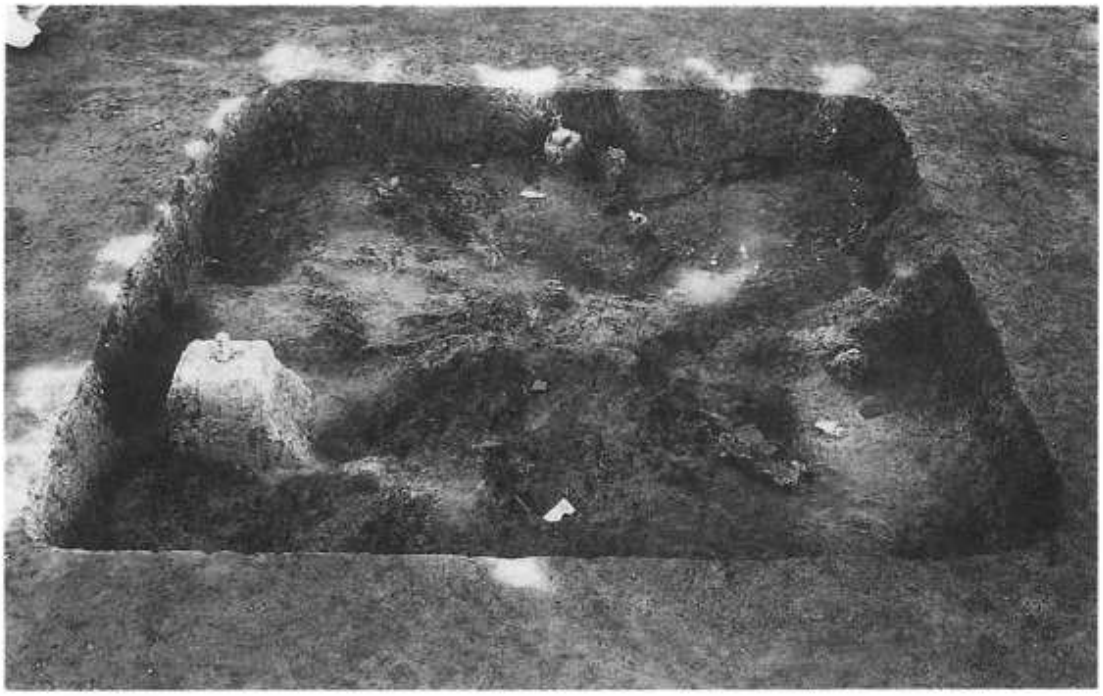
図版 20



1　B区20号住居址



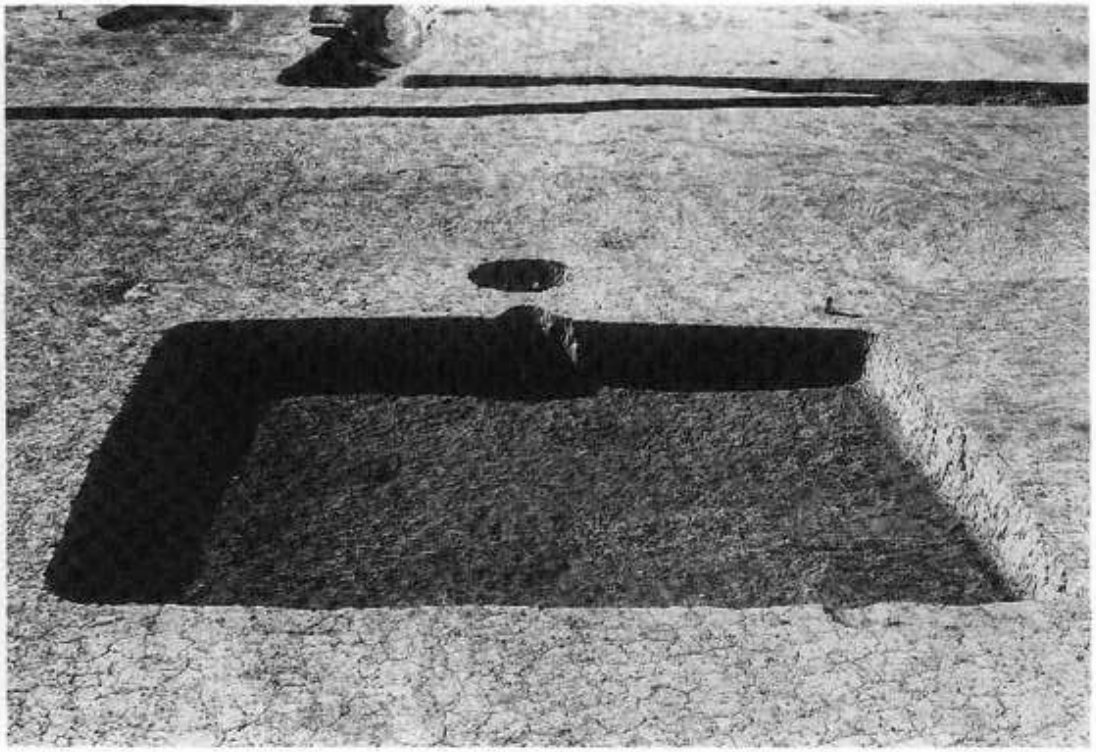
2　B区22号住居址



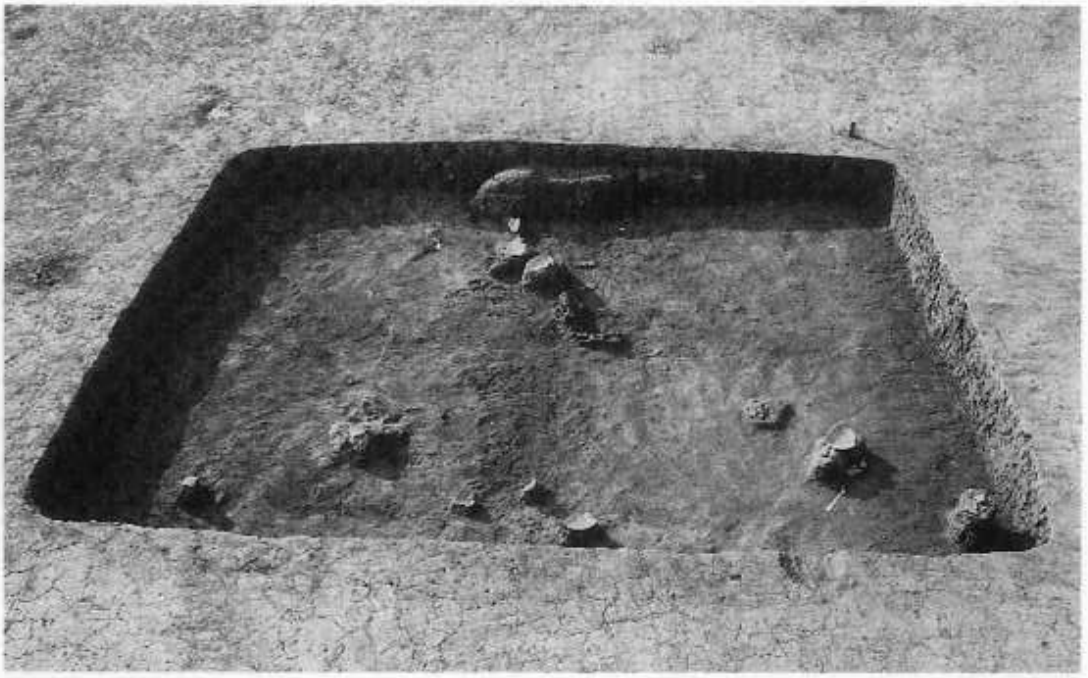
1　B区21号住居址

2　同上遺物出土状況

図版 22



1　B区23号住居址



2　同上遺物出土状況

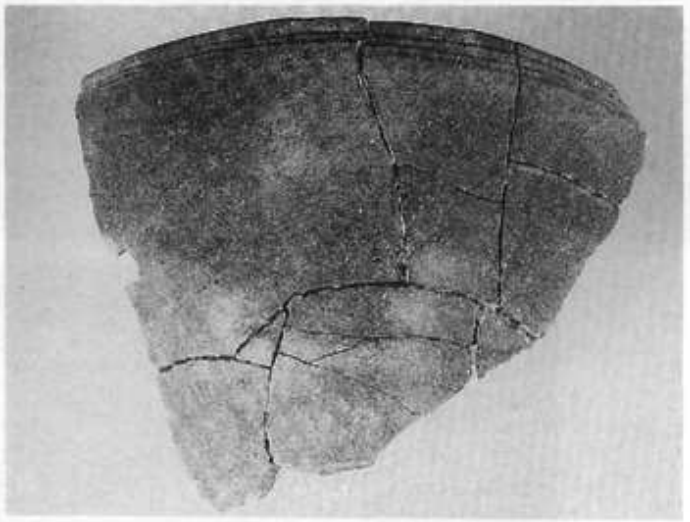
1　区画溝全景

2　区画溝南東端
（3号・4号他）

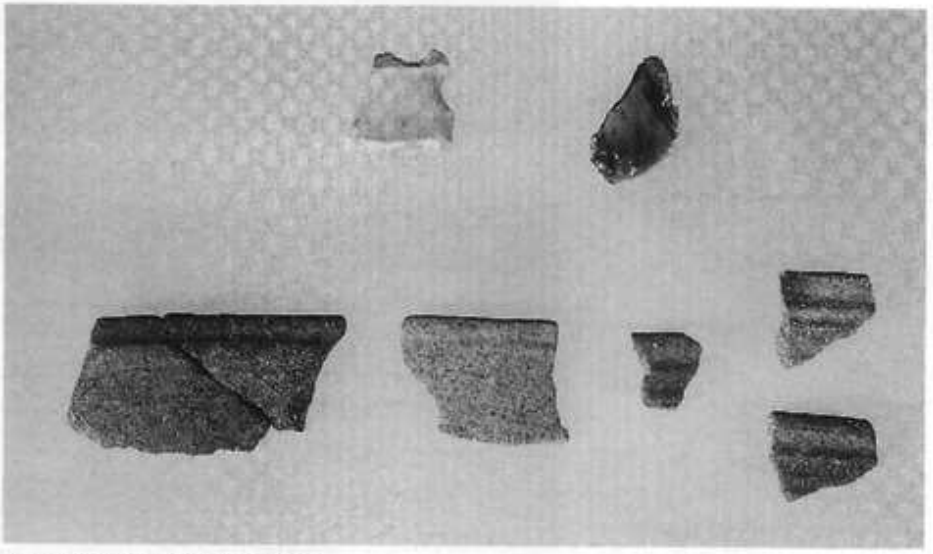
3　区画溝東側
（4号・8号・10号）

図版 24

1　縄文晩期土器出土状況

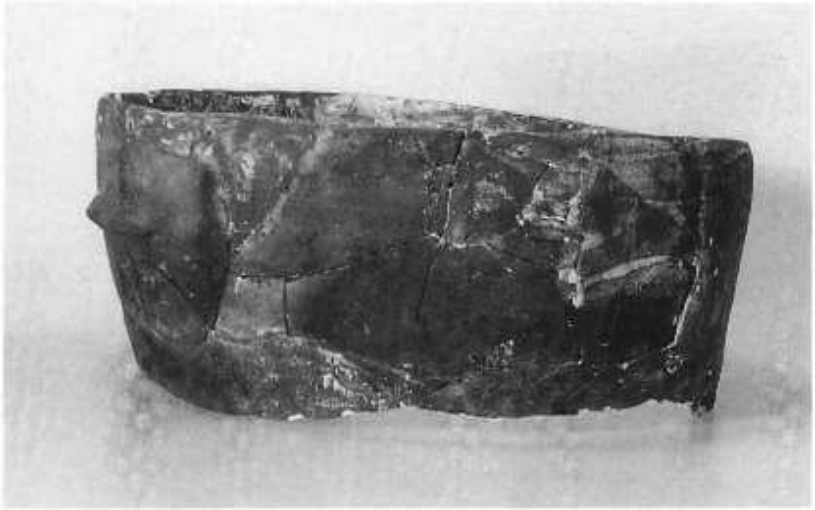


2　同上接合写真

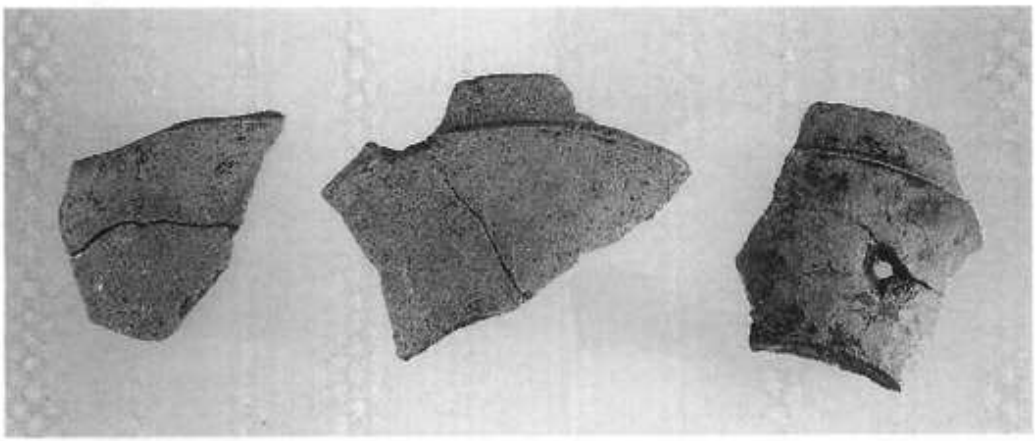


3　縄文晩期土器片、石器等

1　A区1号住居址
出土土師質土器



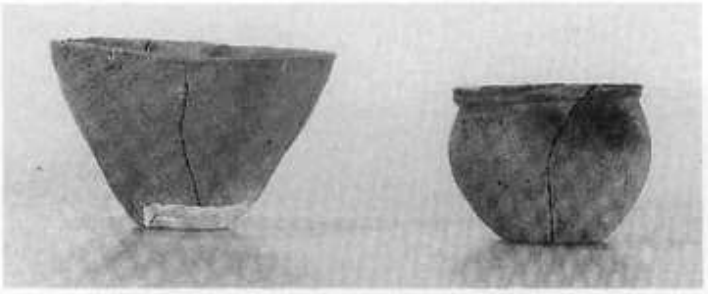
2　A区1号住居址
出土土器



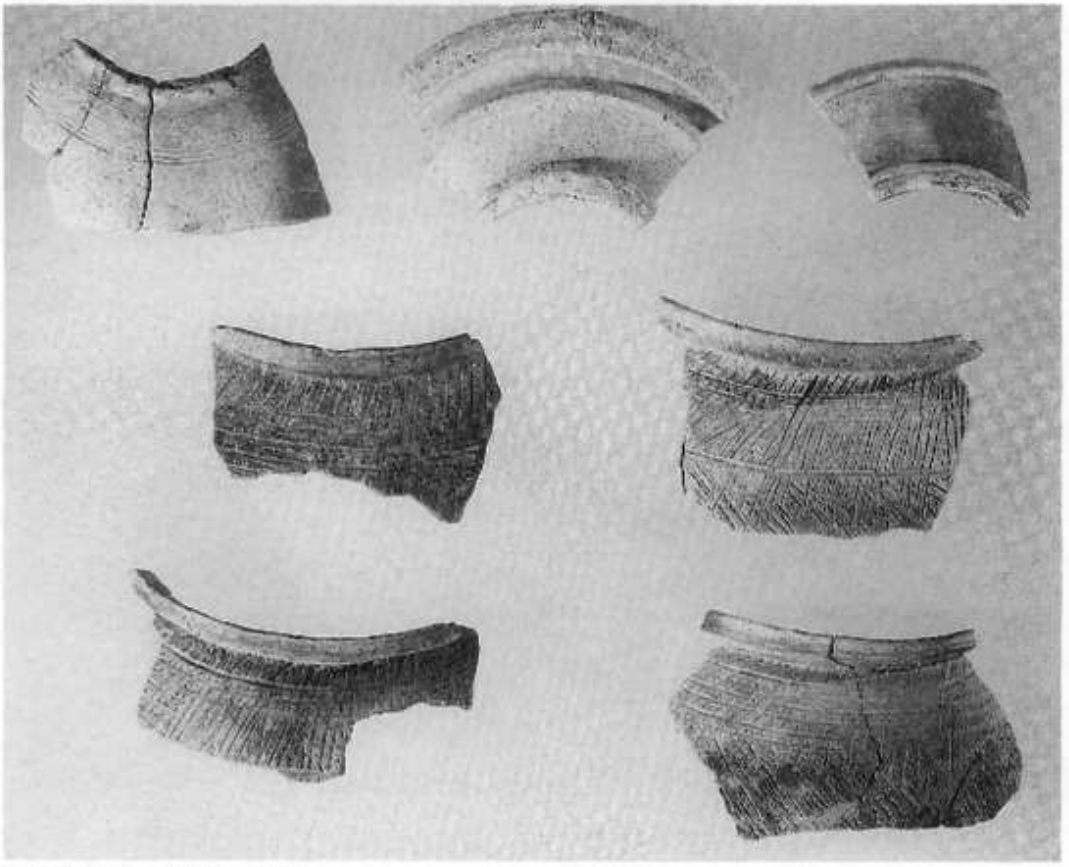
3　A区2号住居址出土壺片

図版 26

1　A区3号住居址出土高坏



2　A区3号住居址出土土器



3　A区3号住居址出土土器片

1　A区3号住居址出土手焙り形土器

2　A区3号住居址出土石器

3　A区3号住居址上層出土土器

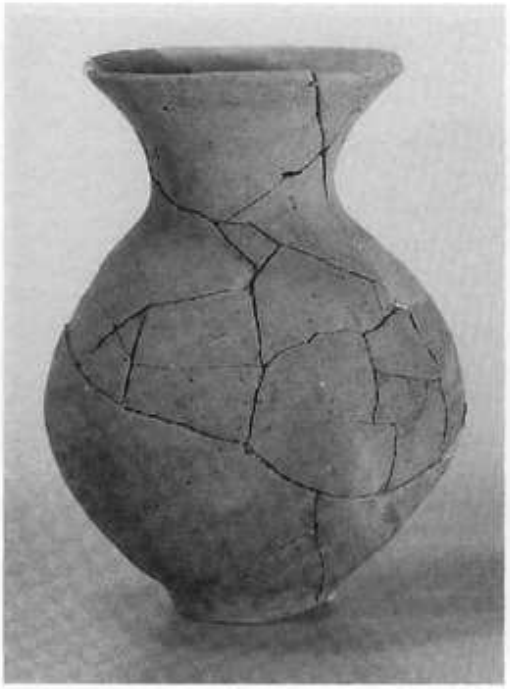
図版 28

3

1

2

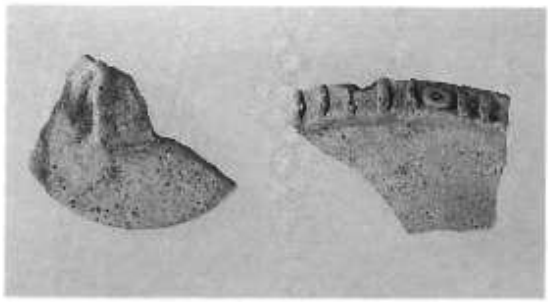
A区4号住居址出土土器①



4

5

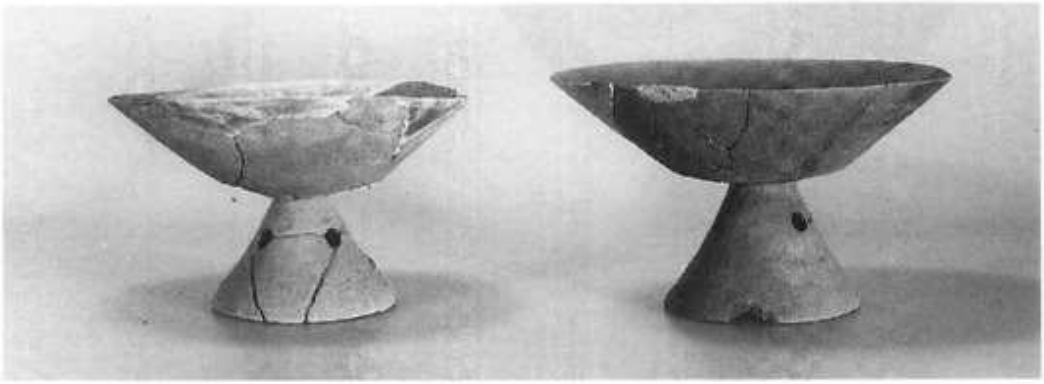
A区4号住居址出土土器②



1

2

3



4

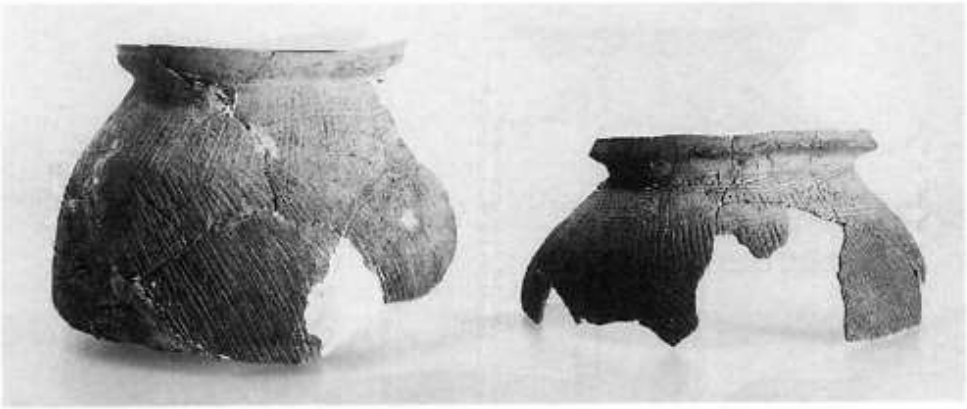
図版 30

A区4号住居址出土土器③

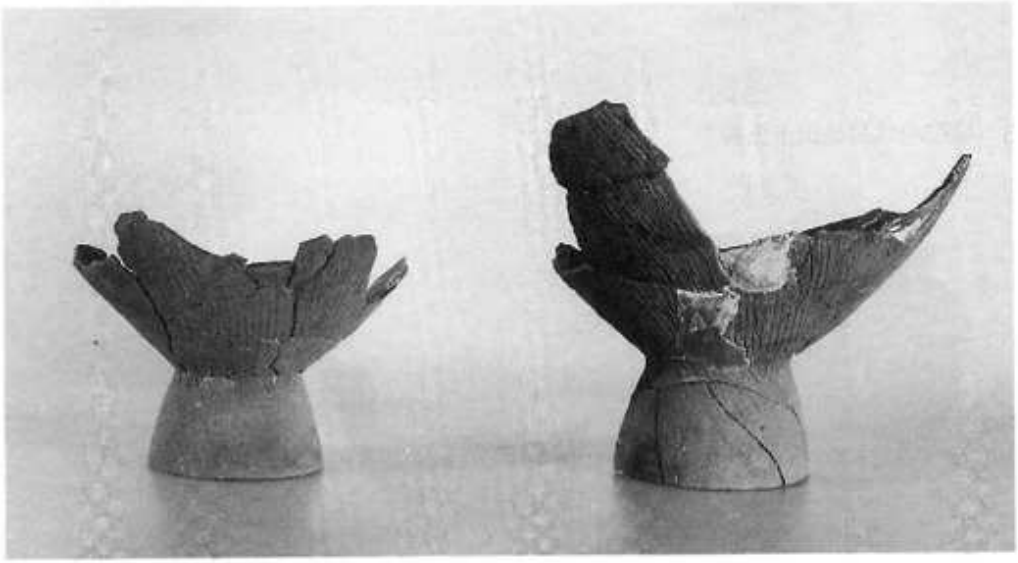
1

2

1



2

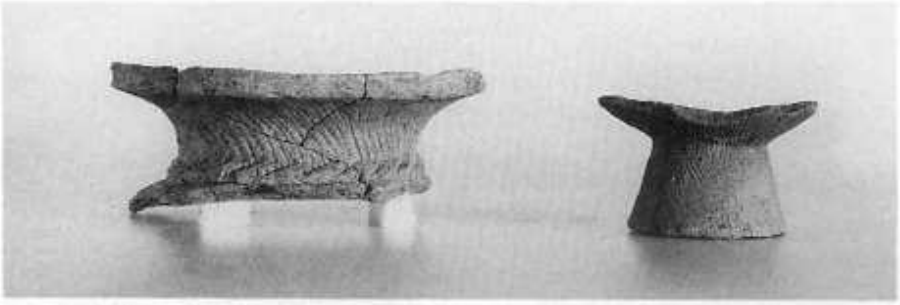


3

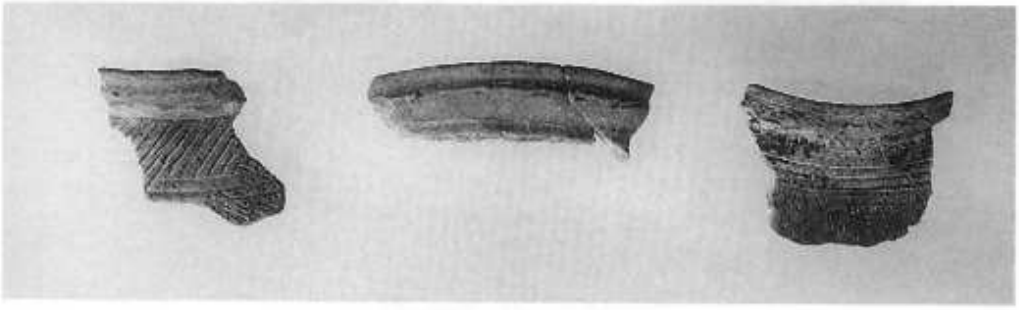
A区4号住居址出土土器④

図版 32

1　A区5号住居址出土土器①



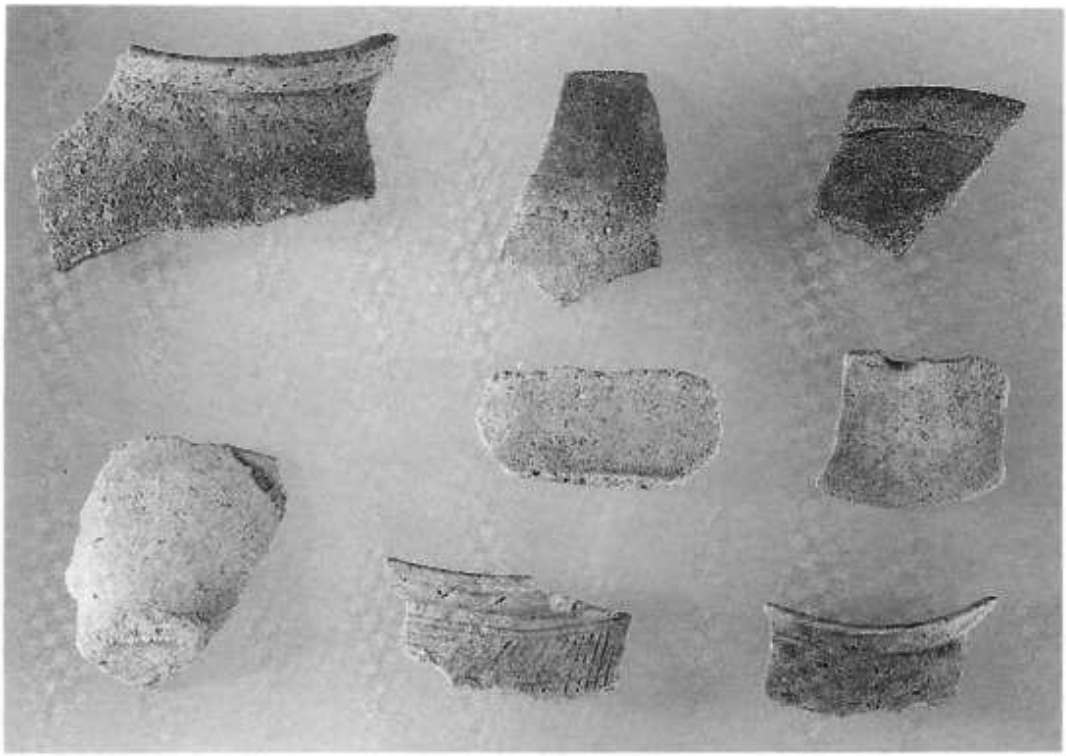
2　A区5号住居址出土土器②



3　A区5号住居址出土土器③

4　A区6号住居址出土土器

1　A区8号住居址上層出土須恵器



2　A区8号住居址出土土器

図版 34

1

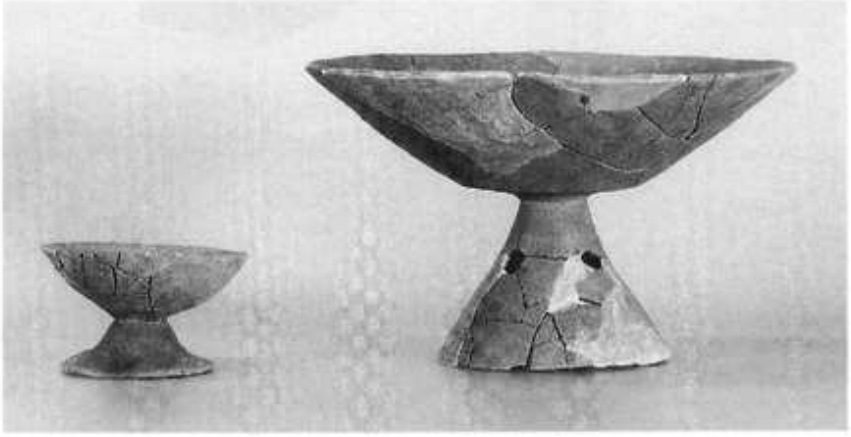
A区9号住居址出土土器①

2

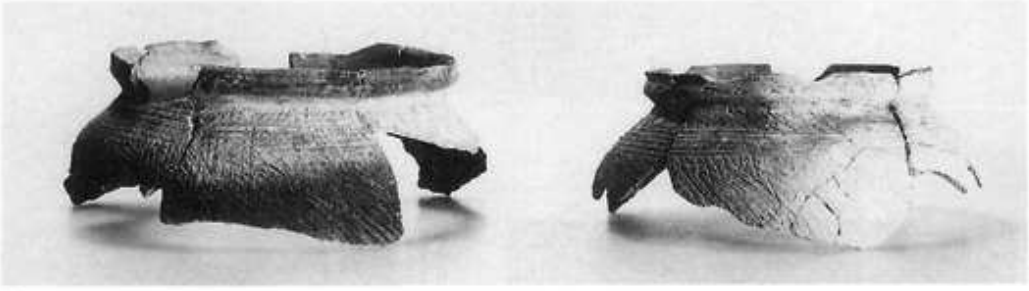
3

A区9号住居址出土土器②

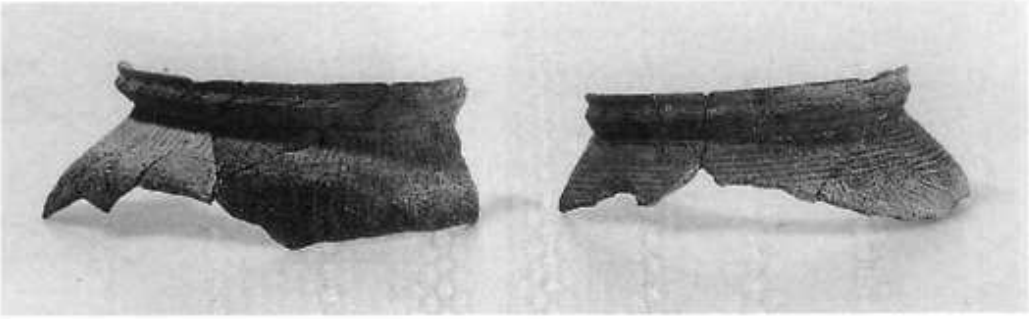
1



2



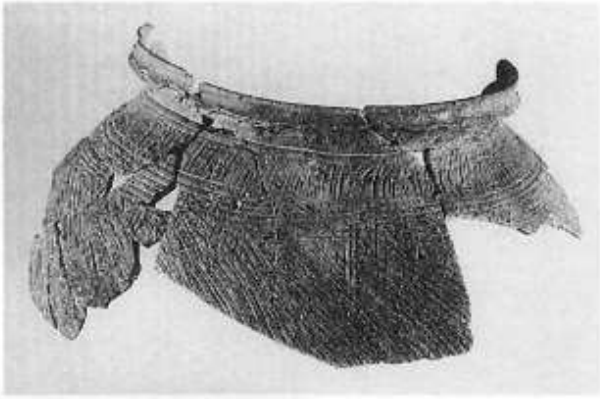
3



4

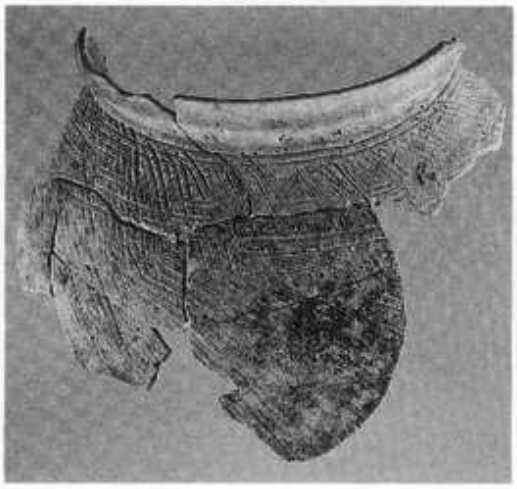
図版 36

A区9号住居址出土土器③

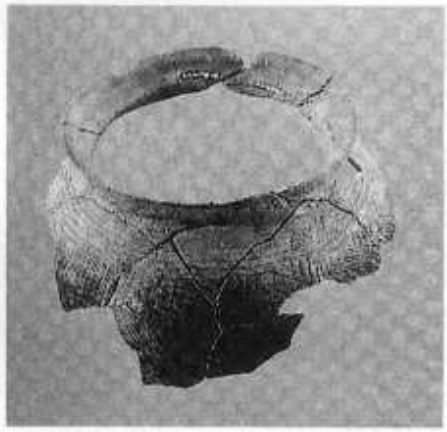


1

2



3



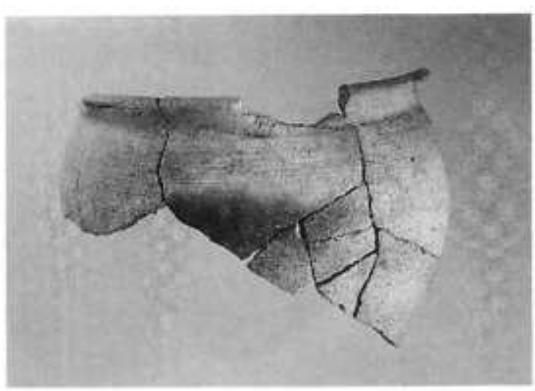
4

1　A区11号
住居址出土
須恵器坏

2　A区11号住居址出土甕

3　A区12号住居址出土坏

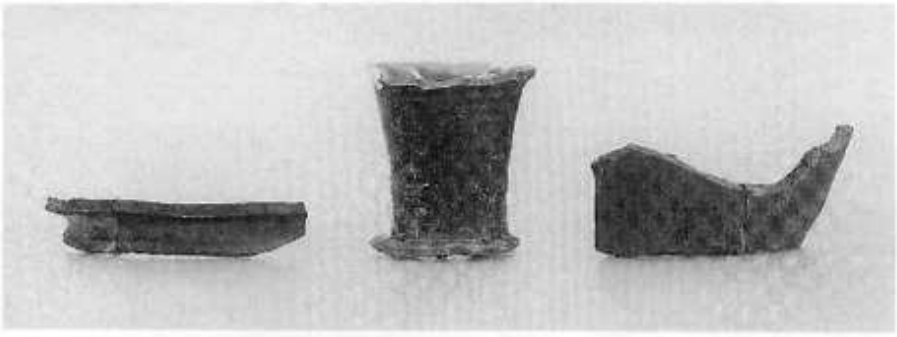
4　A区12号住居址出土甕



図版 38

1　B区1号住居址出土土器

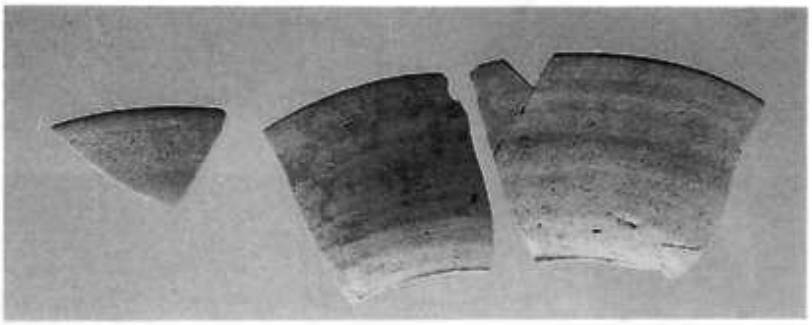
2　B区6号住居址出土土器



3　B区6号住居址出土土器

4　B区5号住居址出土土器

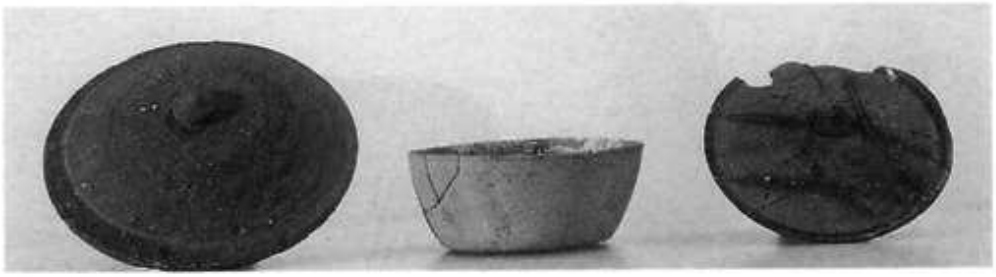
1　B区7号住居址出土土器



2　B区7号住居址出土土器

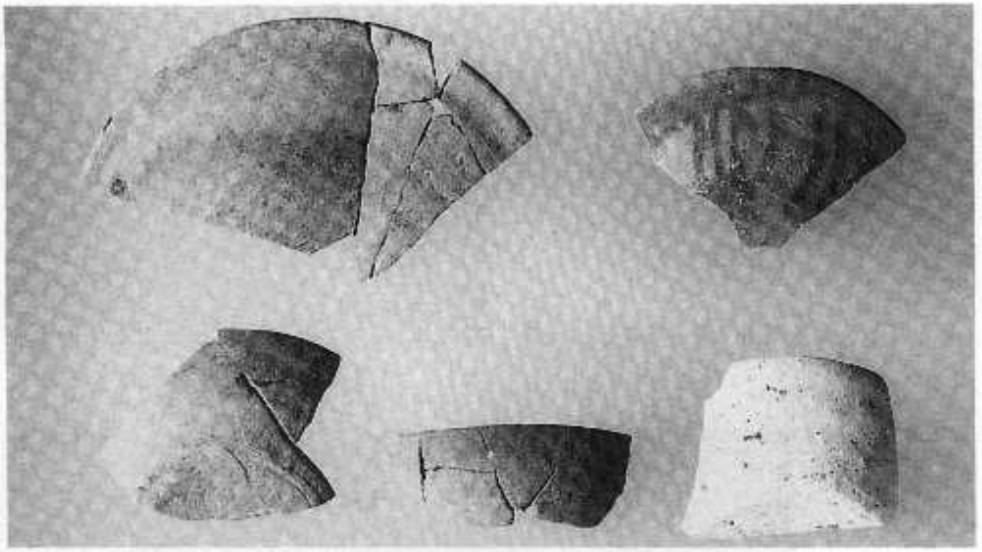
3　B区8号住居址出土土器

4　B区8号住居址出土土器



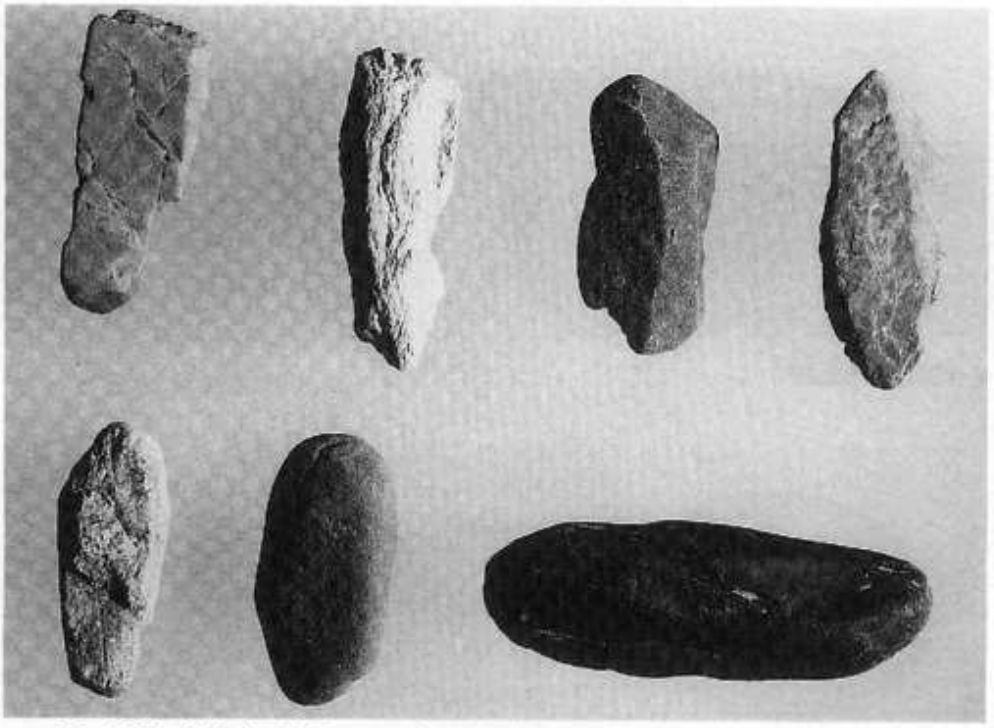
5　B区9号住居址出土土器

図版40



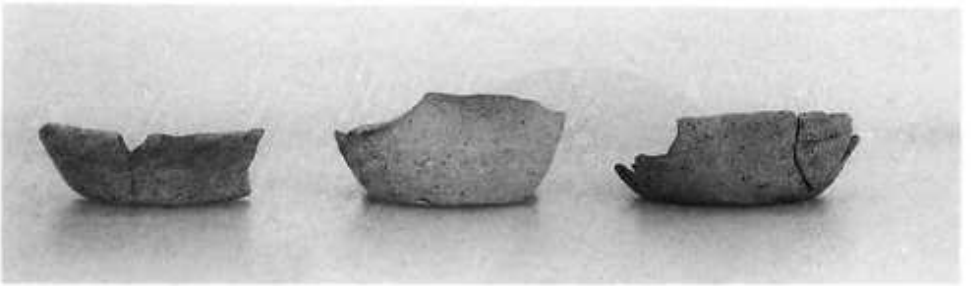
1 B区9号住居址出土土器

2 B区11号住居址出土土器

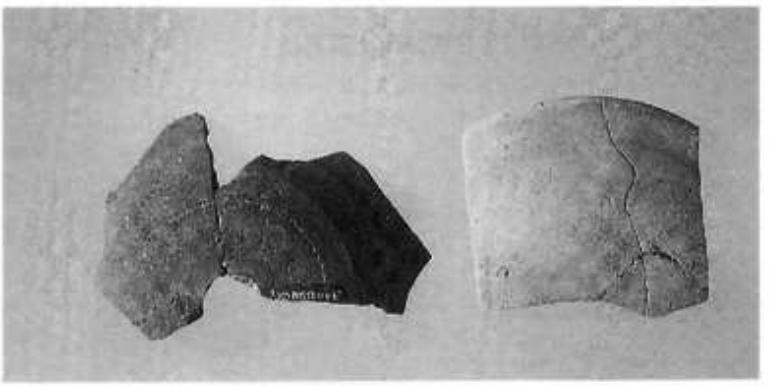


3 B区11号住居址出土石器(右下の1点は現在使用の俵編石錘)

1　B区12号住居址出土土器



2　B区13号住居址出土土器

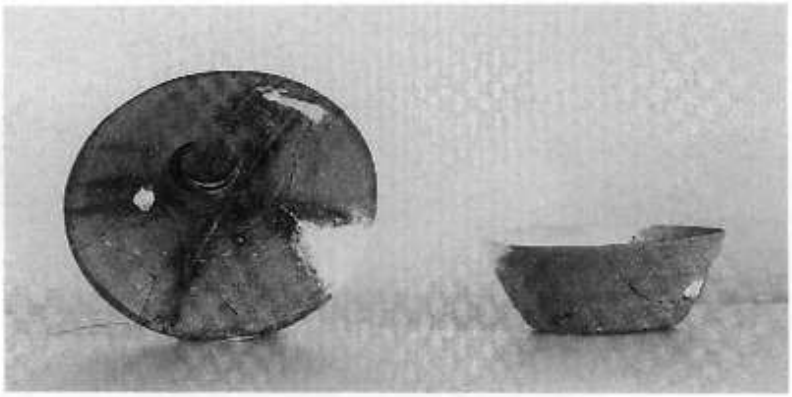


3　B区15号住居址出土土器

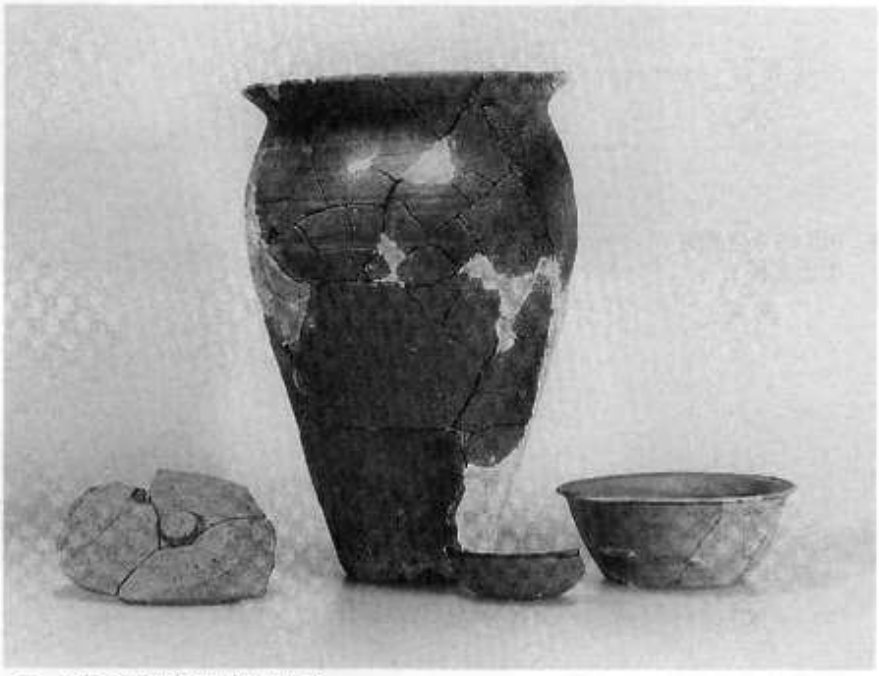
4　B区15号住居址出土土器

図版 42

1　B区16号住居址出土須恵器坏



2　B区16号住居址出土須恵器

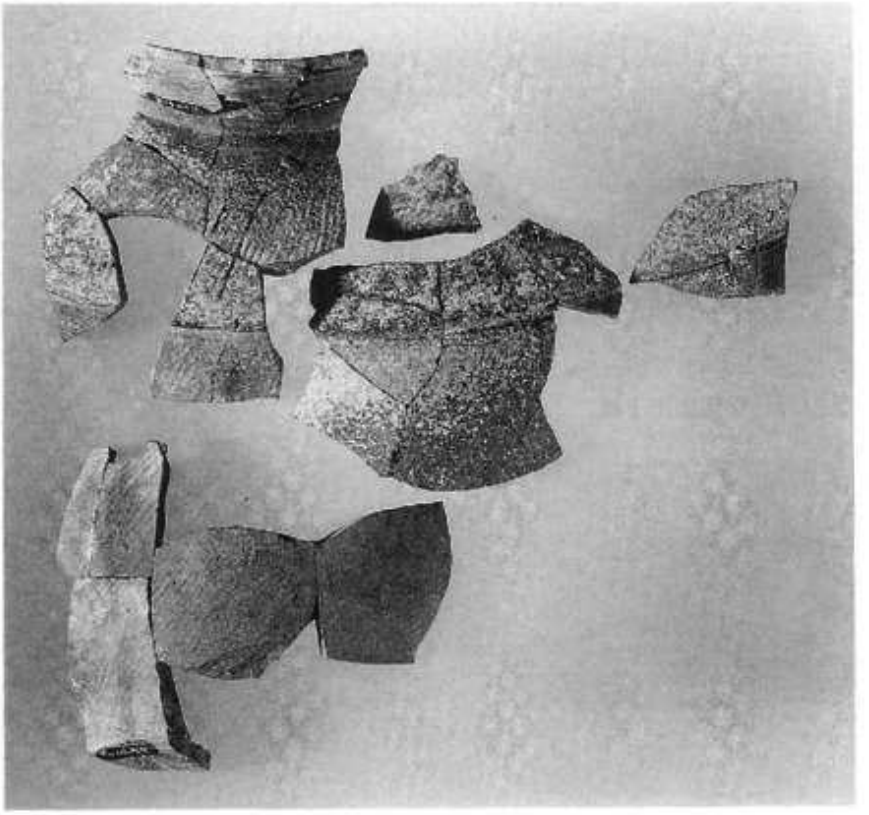


3　B区20号住居址出土土器

B区19号住居址出土土器

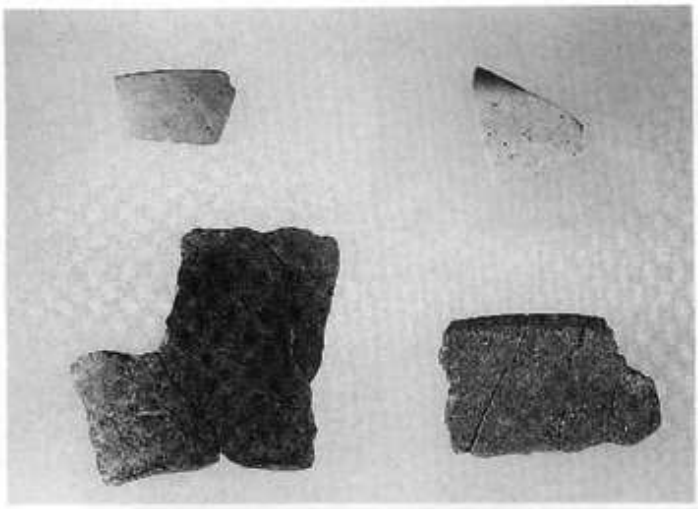
1

2



3

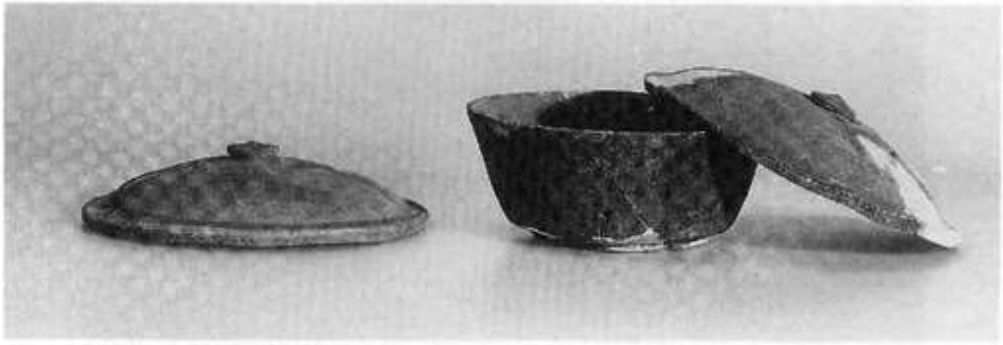
図版 44



1　B区17号住居址出土土器

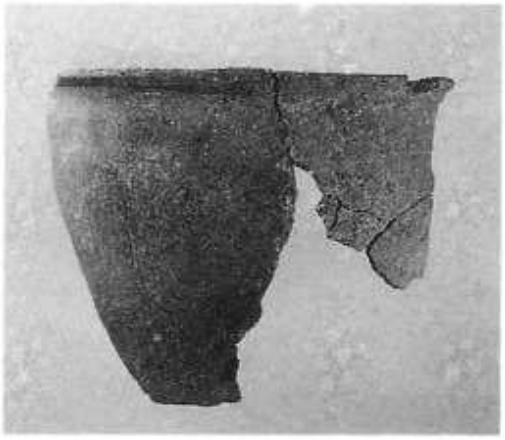
2　B区21号住居址出土須恵器

3　B区21号住居址出土土器



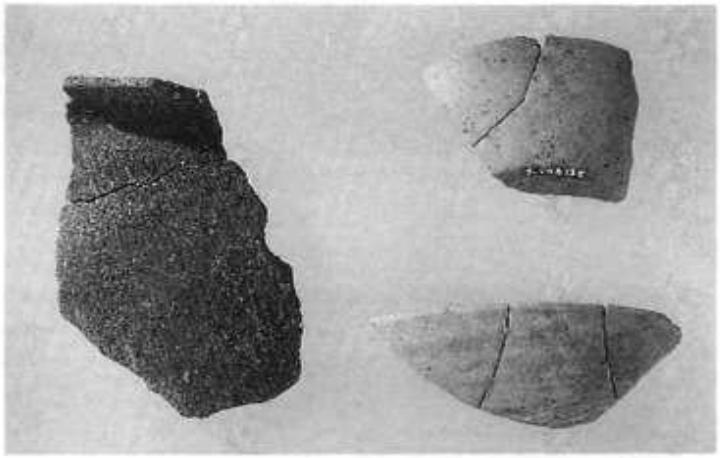
4　B区21号住居址出土須恵器

1



2

B区　22号住居址
出土土器
（1～3）

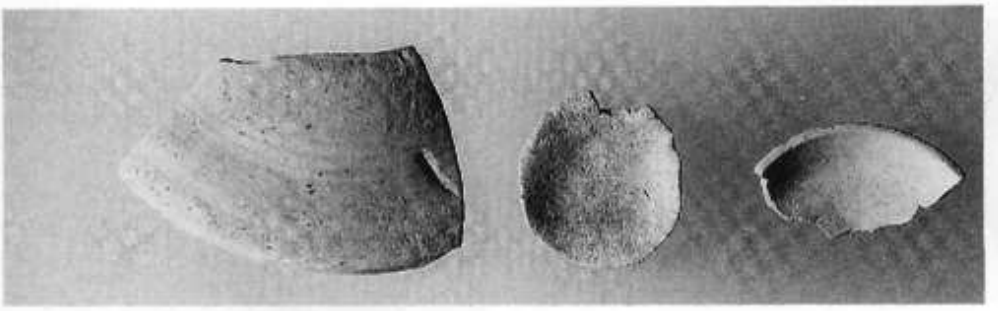


3

4　B区1号土坑出土土器

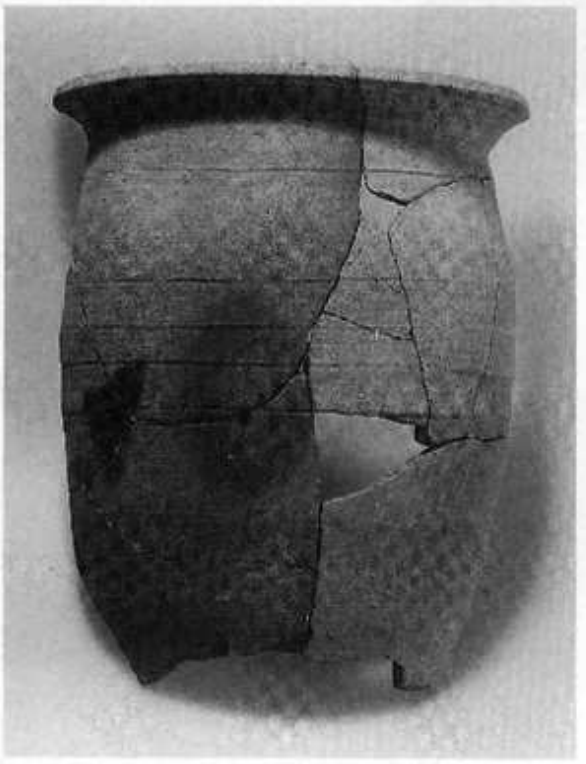
5　A区1号土坑出土土器

図版 46

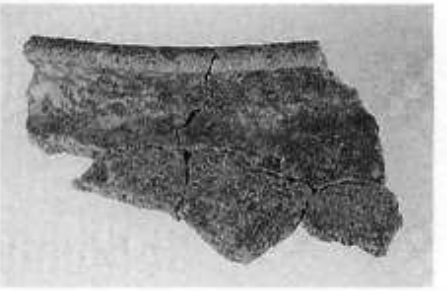


1

2



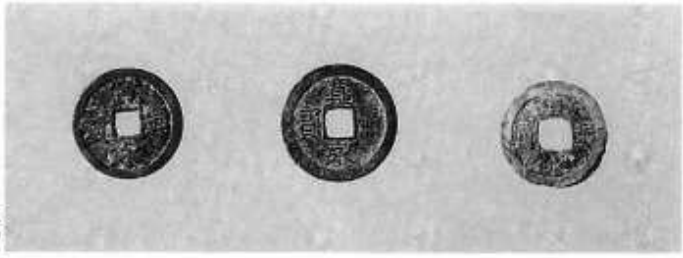
4



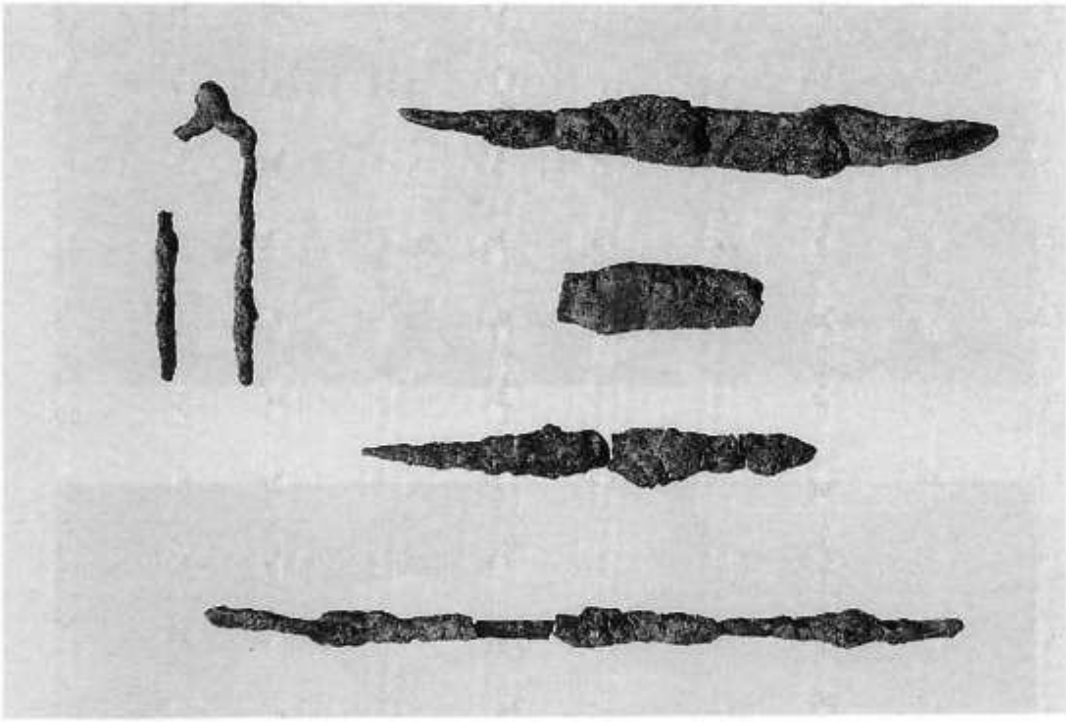
3

5

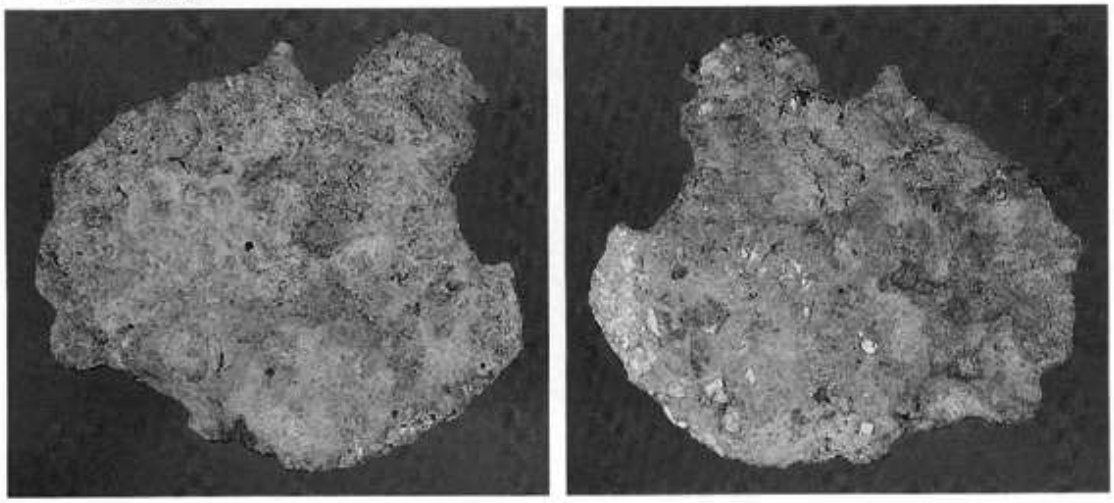
B区23号住居址出土土器



1　A区B区出土
寛永通宝

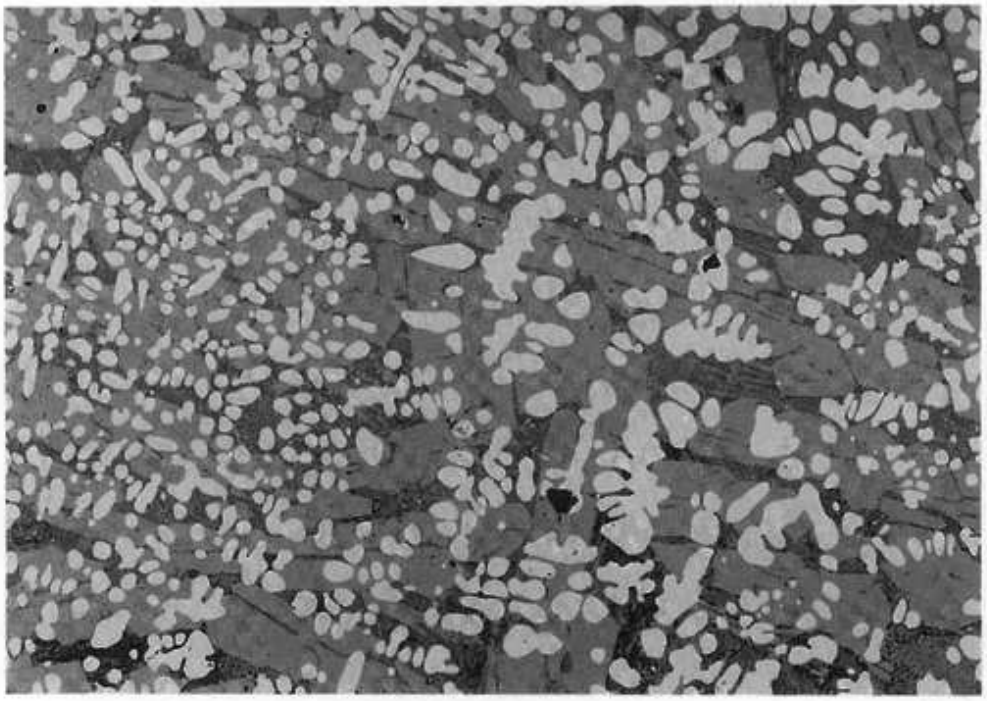


2　B区出土鉄製品

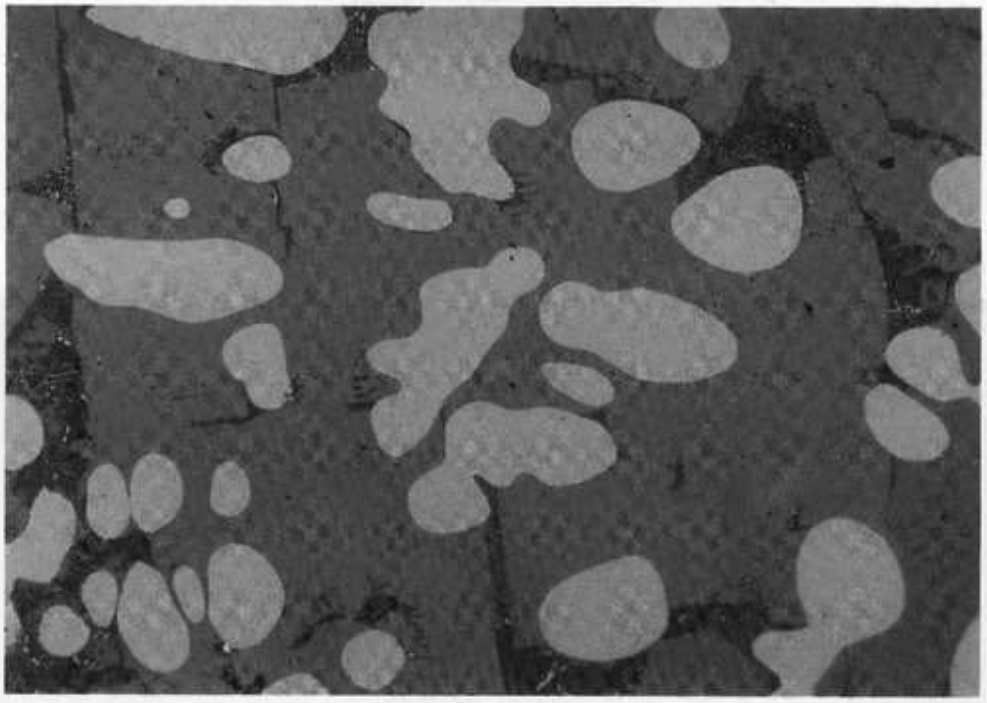


3　A区1号住居址出土鉄滓(左一表、右一裏)

図版 48



×100



×400

鉄滓顕微鏡写真

A区出土古墳時代前期の土器群(3号・4号・9号住居址)

報 告 書 概 要

フリガナ		オオツカイセキ		
書名		大塚遺跡		
副題		八田御勅使南地区拠点工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第137集		
著者名		新津　健		
発行者		山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社		
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話		山梨県東八代郡中道町下曽根923　〒400-15　TEL 0552-66-3881		
印刷所		(株)峡南堂印刷所		
印刷日・発行日		平成9年3月21日・平成9年3月28日		
オオツカイセキ 大塚遺跡		所在地	山梨県中巨摩郡八田村野牛島	
		25,000分の1地図名 ・位置・標高	小笠原	北緯35°40′ 東経138°28′35″ 標高 330m
概要	主な時代	縄文晩期、古墳時代～平安時代		
	主な遺構	住居跡39軒、区画溝、溝、土坑		
	主な遺物	縄文晩期土器、土師器、須恵器		
	特殊遺構	集落の区画溝		
	特殊遺物	鉄滓		
	調査期間	1995年6月1日～12月25日		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第137集

大塚遺跡（オオツカイセキ）

印刷日　1997.3.21
発行日　1997.3.28
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発行所　山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社
印刷所　（株）峡南堂印刷所